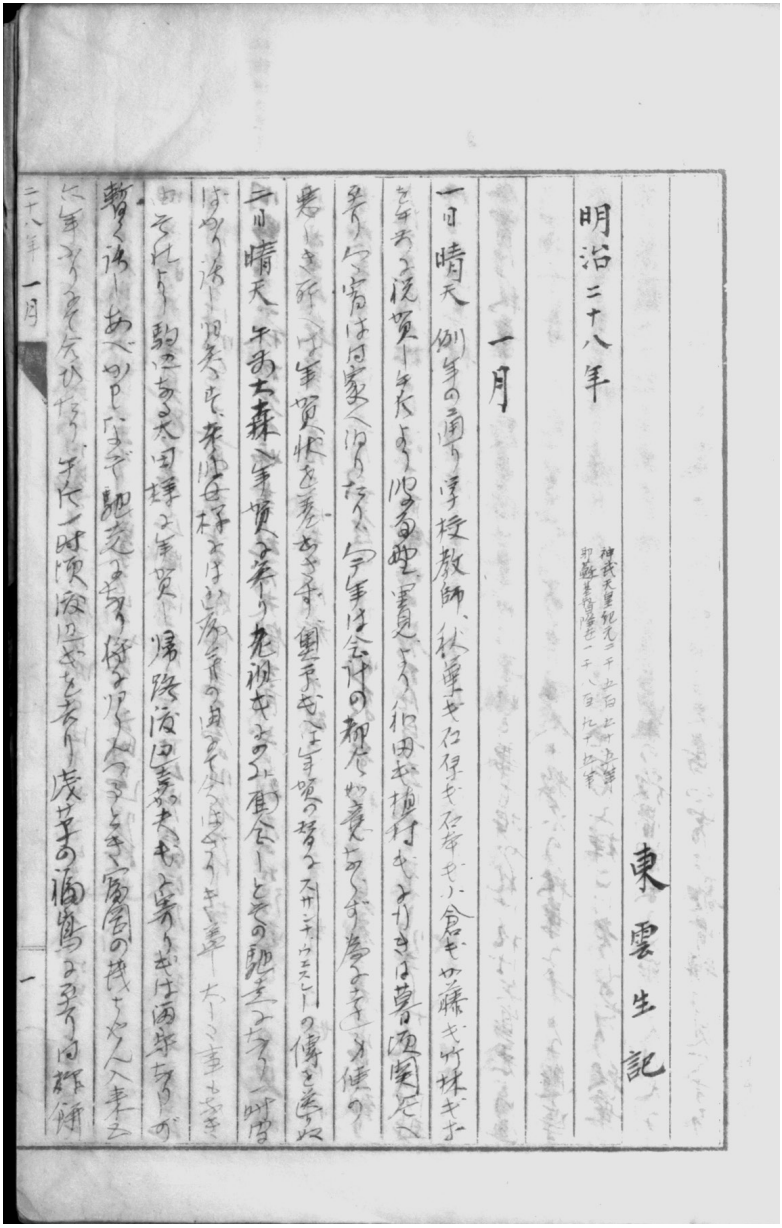
ISSN 2186-8794

明治学院歴史資料館資料集

第17集

山田幸三記「明治二十八年日誌」

明治学院歴史資料館



明治二十八年　東雲生記

一月

一日　晴天　例年の通り学校教師、祝賀を仕候ものゝ為に竹林を切

写真１　「明治二十八年日誌」巻頭部分

山武市歴史民俗資料館所蔵　東京都八王子市　山田家文書

写真2　神学部教師・学生集合写真

1893（明治26）年6月［25日］　芝・田中武写真館撮影　当館所蔵

1893年6月25日に行われた卒業式の記念写真と思われる。
前列右からノックス、フルベッキ、植村正久、井深梶之助、石本三十郎、ワイコフ、ランディス、
第二列右から岩瀬謙之助☆、伊達覚太郎☆、青木澄十郎☆、稲葉昿二☆、有馬純清☆、井上織夫☆、川崎巳之太郎☆、今田強☆、毛利官治☆、吉川逸之助☆、
第三列右から小口久左衛門★、小林格▲、藤村太平★、中島力三郎★、北郷保守☆、佐藤詮蔵☆、村木経造☆、谷口直吉☆、川添万寿得△、山中直行△、
第四列目右から千屋和○、北野高弥○、竹林寅蔵○、浅田宗七○、志場邦雄○、平野荘四郎△、好川二一○、小林道太郎○、赤須広○、
第五列目右から富岡徹、小倉鋭喜◎、笹倉弥吉○、鹿島善二郎△。

学生については、『明治学院神学部一覧　明治二十六年六月改』により、1893年6月当時、神学部4年生（卒業生）に☆、神学部別科生に★、神学部3年生に◎、本科2年生に○、神学部1年生に△、卒業後研修生に▲を付した。

写真３　山田幸三・矢島宇吉・里見純吉・富沢清斎・小島清の記念写真
1895（明治28）年1月25日　芝・田中武写真館撮影　日本キリスト教団九十九里教会所蔵

撮影年月日は、写真裏面の記載による。日記には、この写真の撮影についての記述はない。写真前列右が山田幸三、後列右が矢島宇吉、左が里見純吉。

写真４　「明治二十八年日誌」８月14日条と15日条の間に綴じられている挿図（部分）

山武市歴史民俗資料館所蔵　東京都八王子市　山田家文書

明治学院歴史資料館資料集　第一七集

明治学院歴史資料館

はじめに

このたび『明治学院歴史資料館資料集』第一七集を刊行いたします。

本書では、一六集に引き続き、一八九三（明治二六）年から約四年間、明治学院神学部に在籍した山田幸三（一八七三－一九四〇）が在学中に記した日記のうち、一八九五年一月から一二月までを記した日記一冊を紹介いたします。明治学院神学部は、東京一致神学校を母体として組織されました。神学部は、東京一致神学校創設以来、日本基督一致教会（一八九〇年以降は日本基督教会）の神学校として、伝道者育成の役割を果たしてきました。本資料集には、幸三が夏期休暇中に越後高田（現在の上越市）で行った夏期伝道の様子や、赤坂教会の長老に就任し教会活動に励む様子が記されています。当時の学院の様子や高田でのキリスト教伝道の様子などを知ることのできる貴重な資料といえます。基礎資料として活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたりましては、資料を所蔵される山武市歴史民俗資料館、また同館古文書調査員の加藤時男・川島秀臣の両氏、さらに資料を山武市歴史民俗資料館に寄贈されました山田幸信様、幸三の従弟で明治学院普通学部に在学した里見純吉のご親族にあたられる里見勇様、里見眞様、また幸三・里見純吉らが受洗した日本キリスト教団九十九里教会に大変お世話になりました。心からお礼を申し上げます。

二〇二一年三月

明治学院歴史資料館　館長　長谷川　一

目次

凡例

解題　山田幸三記「明治二十八年日誌」について　石崎康子・松本智子……1頁

一八九五（明治二八）年「明治二十八年日誌」……41頁

註……197頁

凡例

一、本書は、千葉県の山武市歴史民俗資料館が所蔵する山田家文書より、山田幸三が一八九五（明治二八）年に記した日記「明治二十八年日誌」の翻刻である。

一、翻刻は原則として原資料の通りに行ったが、次の事項は例外とした。

・漢字は常用漢字を使用し、俗字や略字等も改めた。

・合成字は、平仮名とした。

例　「ゟ」→より、「と」→こと

・並列する語句の区切りには「・」（中黒）を付した。また、読みやすさを考慮して適宜読点を補った。

一、外国人名・平仮名・カタカナ・濁点・傍線・傍点については、原文のままとした。

一、誤字・脱字・書き間違いと思われるものについては、右傍に〔　〕で案を示すか、〔ママ〕を付した。

一、判読困難な箇所は□で示した。字数が分かる場合は字数を□で示した。なお破損等による場合は、その旨を右傍に〔破損〕と記した。

一、本文中の空白部分には、その字数分を空け〔　〕で示した。

一、原資料の欄外への書き込みについては、当該日の日付・天候を記す行の次行に〔欄外〕と記し、「　」で内容を記載した。複数の記載については、「／」（スラッシュ）を付し続けて記載した。

一、註の記述において、人名の読みが不明の場合は、推定の読みを記し＊を付した。

一、本文中には、現代社会では不適切と思われる差別的表現を含む記述があるが、本学院は、科学的な歴史認識を通じて差別と差別意識の根絶を強く願う立場から、当該期の社会状況を伝える歴史資料として、原則として原文のまま掲載した。ただし人権に配慮し、伏字（□）を用いて掲載を差し控えた部分がある。利用者各位の慎重な配慮を希望する。

一、解題の執筆は、明治学院歴史資料館特任研究員の石崎康子と松本智子が行い、（一）・（三）・（五）・（六）・（七）は石崎が、（二）・（四）は松本が執筆した。

一、翻刻も石崎と松本によるが、翻刻に当たっては、山武市歴史民俗資料館古文書調査員の加藤時男・川島秀臣の両氏が翻刻された筆耕資料を参考にさせていただいた。また資料の閲覧等で山武市歴史民俗資料館には大変お世話になった。記して謝意を表します。

〈資料名の省略について〉

明治学院が編纂した左記の資料については、以下のように記す。なお当館所蔵資料ＩＤが付与された資料については、「ID:」以下にその番号を記す。

『明治学院百年史資料集』→『百年史資料集』
『明治学院歴史資料館資料集』→『資料集』
『明治学院神学部一覧　明治二十六年六月改正』→『神学部一覧　明治二十六年』
『明治学院神学部一覧　明治二十七年六月改正』(ID: 1201611399) →『神学部一覧　明治二十七年』
『明治学院神学部一覧　明治二十八年十月改正』(ID: 1201611400) →『神学部一覧　明治二十八年』
『明治学院神学部一覧　明治二十九年十一月改正』(ID: 1201611401) →『神学部一覧　明治二十九年』
『明治学院神学部一覧　明治三十年十二月改正』(ID: 1201611402) →『神学部一覧　明治三十年』
『明治学院神学部一覧　明治三十四年二月改正』(ID: 1201611404) →『神学部一覧　明治三十四年』
『明治学院神学部一覧　明治三十五年五月改正』(ID: 1201611405) →『神学部一覧　明治三十五年』
『明治学院普通学部一覧　自明治二十五年至明治二十六年』(ID: 1201611382) →『普通学部一覧　明治二十五年』
『明治学院普通学部一覧　明治二十九年三月改正』(ID: 1201611383) →『普通学部一覧　明治二十九年』
「[学籍簿　明治学院神学部]」(ID: 1202000431) →「神学部学籍簿」

解題

山田幸三記「明治二十八年日誌」について

石崎康子
松本智子

（一）山田幸三の日記について

山田幸三が記した日記は、山武市歴史民俗資料館（千葉県山武市殿台）所蔵の「東京都八王子市山田家文書」（以下山田家文書）に収められている。[1] 同館所蔵の山田家文書を二〇二〇（令和二）年夏に調査させていただいた。『資料集』第一六集の解題には、同資料の目録をもとに「山田幸三の日記は、山田家資料のなかに、一八八八年の「日記（第壱号）」（Ⅰ－18）など少なくとも一一冊が残されている」と記した。しかし今回の調査から、山田幸三は、明治二一（一八八八）年の「日記（第壱号）」から「大正一五、昭和二年日誌」（C－2－24）までの日記を残していることが判明した。一部欠けている年があり、また数年の記録を一冊に記している日誌があるものの、全一八冊の日記が残されている。一方幸三の父幸律も、一八六九年の「幸律日誌〈職員録有〉」（Ⅰ－6）から「明治四五年日誌」（C－2－17）まで三五冊の日記を残しており、親子二代にわたり、長く日記を書き残したことになる。

本『資料集』では、第一六集に続き山田幸三が記した日記「明治二十八年日誌」[2]（C－2－5）〔口絵写真1〕を紹介したい。日記には、一八九五年一月から同年一二月までの記事が収録されている。幸三は、一八九三年の「二榎日記」、一八九四年の「今里日記」同様、自らを東雲生と称し日記を記している。幸三の「明治二十九・三十年日誌」（C－2－6）の一八九六年八月一九日条には、「綽名し

て弧月と称す、在来の東雲は産地に関し、此度考出の弧月は理想に関る、東雲の弧月は所謂二十六夜の月に当る」とある。幸三は一八七三年七月二〇日、武射郡松尾村（現在の千葉県山武市松尾町）で生まれたが、松尾の小字に東雲があることから、東雲で生れた者の意で称したのかもしれない。

山田幸三は、一八九三年九月に明治学院神学部予科に入学し、翌年九月には明治学院神学部本科一年に進級した。一八九五年の日記には、本科生一年として寄宿舎で暮らす幸三が、初めて夏期休暇中の地方伝道を経験し、越後の高田[3]（現在の新潟県上越市）で五月末から九月上旬までを過ごしたこと、また九月には神学部本科二年に進級し、一〇月二〇日には赤坂教会の長老に選挙され、一二月八日には「余が為長老就任式の礼」が行われたことなどが記されている。神学部生として夏期伝道や長老として教会活動に励む、幸三の二一歳半ばから二二歳半ばまでの一年間の記録である。

一八八三年、外務卿井上馨により欧化主義政策の一環として建設された鹿鳴館は、欧化主義のシンボルであり、その竣工は、いわゆる鹿鳴館時代の始まりであった。欧化主義政策は、幕末に欧米諸国と結ばれた不平等条約改正を一つの目的にとられた政策であったが、一八八七年に条約改正が失敗し、井上が辞任すると、鹿鳴館時代も終わりを告げた。内閣総理大臣伊藤博文は、井上に代わり大隈重信を外相に任命したが、大隈は一八八八年に成立した黒田清隆内閣でも外相を務め、条約改正交渉を進めた。一八八九年二月、黒田内閣のもとで大日本帝国憲法が発布されたが、大隈の条約改正案が帝国憲法に違反すると批判が起こり、同年一〇月大隈は襲撃され重傷を負って辞任した。大隈のあとを受けた青木周蔵も一八九一年、大津事件のため引責辞任し、交渉は再び中断した。条約改正交渉が一応の決着をみるのは、一八九四年に調印された日英通商航海条約が一八九九年に発効するまで待た

なければならなかった。条約改正を目的とした井上の欧化主義政策から日英通商航海条約締結に至る間に、国内では、大日本帝国憲法の発布、一八九〇年には教育勅語が発布され、日本は国家主義への傾向を強めていった。

一八八九年四月、横浜の指路教会[4]会堂建設のための資金調達を主な目的として、ヘボン夫妻は渡米した。夫妻は同年一二月に横浜に戻るが、その翌年一月、ヘボンは米国長老教会海外伝道局書記のギレスピー博士[5]宛書簡を送り、次のように記している。「こちらの社会情勢は、わたしどもの出発前とは同じではないことにすぐに気がつきました。あの短い間に変化したのです。何だかちぐはぐになっていることに気づきました。どうもわたしどもの周りの事情としっくりしませんし、わたしどもの古い印象と一致しないようです。日本人の強い世論は条約改正の、ある条項に反対の気勢をあげており、条約と現内閣反対の気運は、更に及んで外務大臣暗殺の陰謀となり、内閣の改造と大臣の更迭となり、これとともに、決定的な感情が国民の間に沸き起こってきております。この感情はあらゆる男女におよび、ミッション・スクールの生徒数の減少となり、学者たちや教会の中からも排外的な態度が見受けられるようになってきました[6]」。わずか八ヶ月間、日本を離れていたヘボンにも、その間に日本で起きた変化が感じられ、排外的な感情の高まりがミッション・スクールの生徒数減少という事態を引き起こしていることを記している。

キリスト教は、文明開化、鹿鳴館時代の欧化主義の潮流にものって一八八〇年代初めには、急速に布教活動を展開した。一方仏教・神道側は、キリスト教の社会活動に刺激を受け、また社会へ浸透するキリスト教への警戒感から、キリスト教への批判を強め、『真理金針（しんりきんしん）』（井上円了著、西村七兵衛、

一八八七年）や『仏教活論序論』（井上円了著、哲学書院、一八八七年）、『居士必携破邪金鞭』（鬼頭祖訓編、萩野了隠校、其中堂、一八九二年）など、いわゆる排耶書といわれるキリスト教批判書[7]を相次いで刊行した。さらに維新期以来衰退している仏教勢力は、その挽回をはかろうと、講演会や講談活動を繰り返し開催し、反キリスト教キャンペーンを繰り広げていった。日記が記された時代は、国家主義化が顕著になっただけではなく、仏教・神道側からのキリスト教への強い反発もみられるようになった時期であった。

（二）一八九五（明治二八）年の明治学院

日記が書かれた一八九五年は、井深梶之助が明治学院の第二代総理に就任後四年目を迎えていた。この時期は欧化主義への反動期で、キリスト教界は沈滞し、キリスト教主義の学校も衰潮がその極みに達していた。明治学院の普通学部においても学生の退学や徴兵猶予のある他校への転学等によって学生数は甚だしく減少し、「全体の月謝を以てしても一教授の俸給の支払さへ困難」な状況であった。しかし、それに反して幸三の学ぶ神学部については中々隆盛であったという[8]。

当時、神学部は予科・本科・別科に分かれ、就業年限は予科一年・本科三年・別科二年とされていた[9]。学年が九月下旬始まりであった[10]ため、日記の九月二〇日以前は、幸三は神学部本科の第一年生、それ以降は第二年生ということになる。以下、神学部を中心に当時の明治学院の状況を日記と周辺資料によって確認したい。

①一八九五年当時の神学部の教授陣と開講科目について

日記が書かれた明治二七年度と二八年度の教授陣と担当科目は【表1・2】の通りである。

【表1】明治27年度の教授陣と担当科目　　典拠：『神学部一覧　明治27年』

	教員名	担当科目
教授	井深梶之助	教会歴史、教理史、倫理学
	インブリー（帰国中）	新約釈義、教会政治
	ノックス（帰国中）	系統神学、心理学
	植村正久	弁証論、哲学、基督伝
	石村三十郎（在米国）	英学、史学
	フルベッキ	旧約釈義、新旧約書緒論、説教学
	ランディス	新約釈義、福音史、希臘語
嘱託講師	ワイコッフ	英語
	ハリス	音楽、讃美歌
	柏井園	英学、史学
別科嘱託講師	石原保太郎	旧約歴史
	北山巌	教会歴史

【表2】明治28年度の教授陣と担当科目　　典拠：『神学部一覧　明治28年』

	教員名	担当科目
教授	井深梶之助	教会歴史、教理史、倫理学
	インブリー（帰国中）	新約釈義、教会政治
	植村正久	弁証論、宗教哲学、基督伝
	石本三十郎（在米国）	英学、史学
	アレクサンダー	系統神学、聖書神学、旧約歴史
	ランディス	新約釈義、福音史、希臘語
嘱託講師	ミロル	旧約釈義、旧約史、説教学
	ハリス	音楽、讃美歌
	柏井園	英学、史学
別科嘱託講師	小倉鋭喜	旧約歴史、教会歴史

【表3】山田幸三が1895（明治28）年に受講していた科目

受講科目	典拠となる日記本文
哲学	4/12「植村先生の哲学の時間には今日は十字架の日なるを以て平常の講義は休まれ先生の励めあり」
系統神学	5/8「昨日亜歴山教師神学の試験問題を提出」
教会歴史	5/10「今日井深氏の教会歴史の試験ありき」
基督伝	5/10「植村先生の基督伝も今日にて了りたり」
哲学緒論	5/15「植村先生の哲学緒論の講義は今日限にて畢りぬ」
弁証論	10/16「植村氏の弁証学今日初て授業あり」
旧約釈義	12/16「ミロル氏旧約の注釈の試験ありき」
新約書緒論	12/17「ミロル氏新約書の緒論の試験ありき」
新約釈義・説教学	12/19「ランヂス氏の注釈の試験は午前あり、ミロル氏説教学の試験は午后ありき」

井深梶之助を筆頭に、植村正久・フルベッキ・アレクサンダー・ランディスらが神学部教授として在席、インブリーとノックスは当時帰国中で不在であった。米国留学中の石本三十郎の代わりに、植村正久の推薦で柏井園が一八九三（明治二六）年九月から嘱託講師に、また一八九四年六月に明治学院神学部を卒業した小倉鋭喜が別科嘱託講師に迎えられていた時期でもあった。

日記からは、本科第一年生および第二年生であった幸三が、少なくとも【表3】のような科目を受講していたことを確認できる。「新約書緒論」は、【表1】を見ると明治二七年度はフルベッキの担当科目となっており、【表2】の明治二八年度では「新約書緒論」の科目自体が見られないが、日記によると実際には二八年度も開講され、ミロルが担当していたことが分かる。また、冒頭に「亜歴山教師講述　東雲生筆記」と書かれた「組織神学」の講義ノート三巻二冊が山武市歴史民俗資料館に残っている。[11]「亜歴山」はアレクサンダーのこと、「組織神学」は「系統神学」と同義で、Systematic Theologyの訳語である。幸三が受講していた講義の内容を伝える貴重な資料と言えよう。

②卒業式の時期の変更について

一八九五（明治二八）年、明治学院において卒業式の時期が従来の「六月終リノ水曜日」から「三月下旬」に変更された。[12]幸三の日記を見ると、一八九四年に書かれた「今里日記」では「明治学院第九回卒業式」について六月二七日条に記され（『資料集』第一六集、二六八頁）、今回の日記では「第十回卒業証書授与式」について三月二七日条に記されており、卒業式が六月から三月へと変わっている。

更に【表4】を見てみると、一八九〇年四月上旬に行われた神学部生卒業式を除き、一八九四年の

【表4】明治学院卒業式一覧（1886年－1897年）

西暦（和暦）	月日	開催回	典拠
1886年（明治19）	6月22日	第1回 一致神学校・英和学校合同	『基督教新聞』152号（1886年6月23日）・153号（1886年6月30日）、『明治学院百年史』731頁
1887年（明治20）	6月26～29日	第2回	『基督教新聞』205号（1887年6月29日）・206号（1887年7月6日）、『読売新聞』（1887年6月28日）
1888年（明治21）	6月24～27日	第3回	『基督教新聞』258号（1888年7月4日）
1889年（明治22）	6月22～26日	第4回	『基督教新聞』309号（1889年6月26日）・310号（1889年7月3日）、『東京朝日新聞』（1889年6月23日）
1890年（明治23）	4月3日または4日	第5回① 神学部生	4月3日開催とするのは『基督教新聞』350号（1890年4月11日）、『標準』第5号（1890年4月25日）。4月4日開催とするのは『福音週報』5号（1890年4月11日）・17号（1890年7月4日）
	6月22～25日	第5回② 普通学部生	『福音週報』15号（1890年6月20日）・16号（1890年6月27日）・17号（1890年7月4日）
1891年（明治24）	6月24日	第6回	『福音新報』16号（1891年7月3日）、山田幸三「三光日記」（山武市歴史民俗資料館所蔵）
1892年（明治25）	6月26～29日	第7回	『福音新報』67号（1892年6月24日）・69号（1892年7月8日）
1893年（明治26）	6月25・28日	第8回	『福音新報』119号（1893年6月23日）
1894年（明治27）	6月27日	第9回	山田幸三「今里日記」（『資料集』第16集）、「第9回明治学院卒業証書授与式式次第（1894年）」（ID: 1201810500）、『福音新報』173号（1894年7月6日）
1895年（明治28）	3月27日	第10回	山田幸三「明治二十八年日誌」、『福音新報』212号（1895年4月5日）
1896年（明治29）	3月28日	第11回	山田幸三「明治二十九年三十年日誌」（山武市歴史民俗資料館所蔵）、『福音新報』40号（1896年4月3日）
1897年（明治30）	3月27日	第12回	山田幸三「明治二十九年三十年日誌」（山武市歴史民俗資料館所蔵）、『福音新報』92号（1897年4月2日）

第九回卒業式までは全て六月下旬に卒業式が執り行われており、日記の書かれた一八九五年に初めて三月下旬に卒業式が行われたこと、そしてその後も三月卒業式が継続されることから[13]、一八九五年の三月卒業式が一時的な変更ではなかったことも分かる。

また、一八八七年から一八九三年の卒業式は数日間にわたって行われていることも確認できる[14]。卒業式の様々な行事が数日にわたって行われるのは、特にキリスト教主義の学校であったらしい[15]。一八九二年頃までは卒業証書授与式の三日前の日曜日から卒業説教・懸賞英語演説・体操運動などが各日行われ、水曜日の授与式を以て一連の行事が終わるというのが慣例であったようである。日記によると一八九五年は、従来通り三日前の日曜日、すなわち三月二四日に植村正久による卒業説教が行われているものの、体操運動などは行われず、学生による演説も二七日の卒業式に組み込まれており、この頃から卒業式が一日に集約されていることも注意される。

卒業式の六月から三月への変更は、当時の学部改編に伴う学暦変更のひとつと考えられる。その様子は、以下の理事会記録[16]からうかがうことができる。

○Meiji Gakuin, Jan. 13th, 1894

(omitted.....)

The committee to consider how the Meiji Gakuin may be made more useful made a report concerning the plan presented at the last meeting and committed to them for a further report.

This report included substantially.

Some slight changes in and additions to the present schedule of the academic years. So as to make said schedule confirm to the Jinjo Chu Gakko course of study and it higher course as shown in The.

It was resolved that the whole plan be referred to the committee to determine the financial expense and to refer the same to the cooperating missions, at the same time requesting the necessary financial support.

○ Theological Hall, June 14th, 1894

(omitted.....)

The following communication from the theological faculty was received.

Jan. 6, 1894

The theological faculty at its regular meeting yesterday look action in accordance with a suggestion of the E. P. Mission recommending to the Board be shortened in the theological department. So as to begin the last week in September and end with the month of April in the following year.

T. T. Alexander secty.

It was then resolved that the school year be made to begin the last week in Sept and continue until the middle of May, the senior class to be graduated in the last week of March. Christmas and spring vacations to be shortened each by one week.

The following communication from the academic department was received. Resolved to recommend to the Board of directors that the school year of this department be made to begin with in the first ten days of April and to close in the last week of March. This was approved and ordered by the Board.

一八九四年一月、明治学院では普通学部を尋常中学校の制度に合わせ、従来の本科・予科の制度を改編し、高等学部（二年）、普通学部（五年）とした。これらの過程で学暦にも変更が加えられた（傍線部①）。また従来九月始期が採用されていたが、普通学部では学年度を四月上旬に開始し、三月の最後の週に終了することとし、理事会に勧告することを決議、理事会でも承認された（傍線部③）。

『普通学部一覧　明治二十九年』では「学年ハ四月上旬ニ始リ翌年三月下旬ニ終ル」と明記されている。また東京の学校への進学希望者向けに刊行された『東京遊学案内』（黒川俊隆編、少年園発行、一八九六年）「明治学院」の項でも、「学年は四月上旬に始り、翌年三月下旬に終る」と記されており、対外的にも周知されていたことが知られる。

一方、神学部においては、『神学部一覧』を見ると一九一七（大正六）年頃まで九月始期であることが明記されている。ただし、卒業式については傍線部②にあるように「三月の最終週に最終学年を

卒業すること」が一八九四年一月時点で決議されており、一八九五年の卒業式から採用されたのであった。

これらの改編・変更には、明治二〇年代に入り、四月学年始期制が高等師範学校や尋常師範学校で採用されていたこと、更に一八九二年四月からは全国の小学校においても一律に採用されたことなど[17]、学校制度の改定が少なからず関わっていると思われる。当時、他の諸学校がそうであったように、明治学院においても国の学校制度に対応すべく学内の様々な改編が行われており、日記の書かれた一八九五年は、そうした改編に伴う学暦の移行期にあたっていたと言えよう。

（三）石本三十郎の死去について

一八九五（明治二八）年一一月、明治学院に神学部教授石本三十郎死去の報が届いた。

石本三十郎は、一八六二（文久二）年九月、肥前国大村（現在の長崎県大村市）の金物商山口家に生まれ、雑貨商石本家の養子となり、一一歳より大村藩儒者で熊野雄七の父である熊野与（亨堂）のもとで和漢を学び、小学校へ入学した。一八七五年に熊野与・雄七らとともに横浜に出て日本基督公会（現在の日本キリスト教会横浜海岸教会）の仮牧師、J・H・バラが教えるバラ学校で英学を学んだ。一八七七年にはバラより受洗し、一八八〇年四月築地大学校に入学、一八八二年六月に卒業し、同年九月より同校の助教授、一八八四年からは英和予備校の教員も務め、一八八六年九月東京一致英和学校の英語学・生理学の教授となった。一八八七年一月には、バラ学校の同級生である服部綾雄の妹秋山すぐ（すぐ子）と結婚し、一八九一年に明治学院に神学部が新設されると、そこで英学・万国

史・物理学を教えた。一八九三年米国のプリンストン大学に二年の予定で留学することになり、六月一九日には、帰国するノックスと留学する石本のための送別会が開催された。同月二五日には卒業生を送り出し〔口絵写真2〕、石本は八月に日本を発った。一八九五年六月に二年間の留学を終えたが、その九月、さらに一年間の留学延長が決まった。その矢先に病に罹り、一〇月一一日に入院するも腸チフスにより一一月二日客死し、プリンストン墓地に葬られた。三三歳であった。築地大学校出身で、明治学院創設時より明治学院教授を務めた俊英であった。[18]

日記の一一月二六日条には、郵便で、インブリー[19]より前日夜石本家とバラヘ、陶山（斌二郎）[20]より井深へ連絡があったことが記されている。二九日、学校は休校となり、チャペルで追悼会が開かれた。式典の最後には、「石原（保太郎）[21]氏の祈祷ありしに先生中途にて涙泣にむせばれ絶舌せり、されば満堂の人々誰とて袖をぬらさぬ者はなかりける」とある。石本の米国留学は、学問的な研鑽を積むというだけではなく、井深梶之助が明治学院二代総理就任の条件として米国に留学したのと同様、帰国後の明治学院での飛躍を期待したものでもあった。若き石本の死去は、明治学院にとって大きな損失であった。

（四）明治学院神学部生の夏期伝道について

当時、明治学院で行われていた夏期伝道とは、神学部生および普通学部生が夏期休暇期間に、地方および東京府内の教会に三、四ヶ月間派遣され、実際に説教をしたり、様々な奉仕に従事したりし、伝道者としての日常を学ぶ行事であった。『神学部一覧　明治二十七年』一八頁「休業」の項には「夏

期休暇中ハ神学生各々実地伝道ニ従事スベキモノトス」と書かれており、[22]日記の書かれた一八九五年当時も、神学教育における実習的意味を持つ行事として夏期伝道が行われていた。[23]

六月に卒業式が行われていた一八九四年までは、神学部卒業生が任地に派遣されるのと同時に、夏期休暇が始まる在校生の各地への派遣も行われていたが、先に見たように一八九五年から卒業式が三月末となり、卒業生の派遣とは別に在校生のみの夏期伝道が始まった。[24]

幸三の日記が書かれた前年の一八九四（明治二七）年、日本基督教会では第九回大会が開かれ、その際「伝道局の組織改革が行われ、大会伝道局は全く外国諸ミッションの協力補助に頼らない独立の伝道機関となり」[25]、そのことによって日本基督教会における伝道意識が一層高まった時期と思われる。翌年の一八九五年一月一一日の『福音新報』第二〇〇号冒頭の記事「今年の伝道」の中では、「日本基督教会の伝道局は外国の諸伝道会社と分離独立して、日本人一手にて伝道に着手すること〻はなりぬ。其の事業漸く芽を萌したるに過ぎずといへども、昨年の後半期に於ける伝道の精神に気焔を添へしことは疑ひを容るべきに非ず」と伝えている。また同号に見える恵園子の寄稿「伝道の年」には一八九五年が殊更に「伝道の年」と呼ばれていることが記されている。更に、一月二五日の『福音新報』第二〇二号にも島貫生（島貫兵太夫）による寄稿「今年は伝道の年なり」が掲載された。前年には、井深梶之助による「日本伝道ノ時機」[26]が記され、内村鑑三著『伝道の精神』が刊行されていることも注意される。こうした状況が影響したかは明確でないが、日記の四月一七日条によると、台町教会の祈会に出席した幸三は、「伝道心を振起せよ」という牧師石原保太郎の話や他の参加者の祈りを聴いて「自ら悔悟」し「今迄伝道に熱心ならさりしを悔み」ており、この年、幸三の意識にも

変化が見られた。そして、そのおよそ一ヶ月半後、幸三は夏期伝道のため越後高田へと出発する。

日記に記された高田での幸三の伝道内容とその前後の記事は、神学部生の夏期伝道の詳細を知りうる貴重な資料[27]であり、これについては後述するが、まずは、従来の明治学院の夏期伝道について概観しておく。

管見の限りでは、一八八七年頃からキリスト教系の新聞紙上に夏期伝道に関する記事が掲載されるようになり、誰がどこへ派遣されるかが公表されている。一八八七年から日記が書かれた一八九五年までに区切って、『基督教新聞』・『福音新報』・『福音週報』に記される夏期伝道者と派遣先を【表5】としてまとめた。

夏期伝道を主導していた東京第一第二中会部内（後述）では、伝道地を第一伝道区（神奈川県・静岡県・山梨県）、第二伝道区（千葉県・茨城県）、第三伝道区（埼玉県・栃木県・群馬県・東京近辺）、第四伝道区（長野県・新潟県）と四地区に区分しており[28]、夏期伝道の派遣先もほぼこれを踏襲していると言えよう。ただし、【表5】を見ると九州地方や高知等この四区分以外の伝道地への派遣もあり、何らかの理由で例外的に行われていたようである。

【表5】明治学院夏期伝道一覧

実施年	派遣先（学生・生徒名）	備考（報告会記事など）
一八八七年（明治二〇）	陸前仙台（北山初太郎）、尾州名古屋（鈴木鎗三郎）、越後村上（原沢紀堂）、同高田（森信夫）、信州上田（古沢久治）、同小諸（篠原松造）、野州足利（高岸翠）、上州伊勢崎（藤木元吉）、同下館（江川勝治・武藤健太郎）、常陸水戸（栗原宗治）、武州行田・同鴻巣（尾島真二・大石憲英）、下総千葉（児玉童吉・陶山斌二郎）、同佐倉（中村尚樹）、上総木更津（岡山省三郎）、同九十九里（小川某）、相州金目（秋葉省像）、豆州三島（林竹太郎）、九州地方（青山彦太郎）、土佐高知（島内藤三郎）	
一八八八年（明治二一）	伊豆韮山（塚田福作・水蘆幾次郎・小川豊吉）、同三島（平島吉治）、上総東金（河合亀之助）、同松尾（佐藤詮造）、下総千葉（和知牧太）、同佐倉（鈴木鎗次郎）、同大森（阪口菊次郎）、常陸水戸（大石憲英）、下野宇都宮（前川太郎・加藤民雄）、同足利（今井健三郎）、上州伊勢崎（高岸翠）、行田鴻巣（山下善之・渡辺精一）、信州諏訪（多田素・藤木元吉）、信州春日臼田（貴山幸次郎・佐久間貞次郎）、土佐高知（大石保）、豊後臼杵（首藤新三）、越後高田（陶山斌二郎・外山頼寛）、東京桜田（佐藤六郎）、大坂（石橋重則）	九月二九日、明治学院共励会において夏期伝道の報告あり。当日の報告者は、佐藤銓蔵・加藤民雄・塚田福三・小川豊吉・河合亀輔・橡谷喜三郎・多田素・藤木元吉であった（『基督教新聞』二七三号・一八八八年一〇月一七日）
一八八九年（明治二二）	（関連記事見当たらず）	
一八九〇年（明治二三）	浦賀（今田）、春日（和知）、臼田（多田）、九十九里（小川）、小埃（荻野）、高田（藤木）、館林（武藤）、浦和（菊池）、志木宿（加藤）、鹿沼（宮地）、水戸（中嶋）、金目村（吉田）、千葉（徳岡）、諏訪（森田）、古河（岡田）、玉村（大石）、行田（大西）、下妻（井上）、東京（石川・米村・戸田・山口・長谷川・片岡等）	
一八九一年（明治二四）	（関連記事見当たらず）	一〇月九日、明治学院神学校（ママ）親睦会において夏期伝道報告あり（『福音新報』三一号・一八九一年一〇月一六日）

実施年	派遣先（学生・生徒名）	備考（報告会記事など）
一八九二年（明治二五）	信州松本（小川豊吉、同坂下（入江祝衛）、同北佐久（毛利官治）、越後高田（好川二一）、直江津（小林道太郎）、同長岡（川崎巳之太郎）、伊豆地方（中村鉄太郎）、銚子（浅田宗七）、千葉県北条（高橋祐太郎）、九十九里（小倉鋭喜）、千葉（大谷虞）、八王子（千屋和）、野州鹿沼（吉川逸之助）、梁田館林（谷口直吉）、熊谷（岩淵謙之助）、浦和（北野高弥）	九月二六日、明治学院神学生徒夏期伝道報告会あり、当日の報告者は入江、井上、谷口、北野、大谷、河崎、鈴木、大石（『福音新報』八二号・一八九二年一〇月九日）。
一八九三年（明治二六）	伊豆地方（鹿島英治郎）、信州（竹林寅蔵）、諏訪（千屋和）、直江津（好川二一）、村上（赤須）、上州玉村（志場邦雄）茨城（小林道太郎）、横浜（北野高弥）、名古屋（笹倉弥吉）、大阪（鈴木直丸）、高知（小林鋭喜・川田繁太郎・国沢篤実・山中直行）、石川（平沢荘四郎・松原茂雄）、東京（川添萬寿得）	九月二九日、明治学院神学部教授歓迎会及親睦会において夏期伝道中の所感を述べる者あり（『福音新報』一三四号・一八九三年一〇月六日）
一八九四年（明治二七）	東京府（小林鋭喜・松原茂雄・笹倉弥吉・白井胤録・島田正七・和田三郎・川田繁太郎・赤須広・鈴木直丸・竹林寅造・池幸雄・山田幸三（以上神学本科）・上野竜・八田金太郎・鵜野市太郎（以上別科）、高知（好川二一・松永文雄）、高田（国沢篤実）、信州松本（千屋和）、神奈川県横須賀（白石喜之助）、愛知県下（山中直行）、柿木（山野友一郎）、長野（千磐武雄）、千葉（矢島宇吉）、水戸（長山萬二）、宇都宮（浜田珍重・川添萬寿得）、九十九里（長谷川峰吉）、武州志木（鹿嶋秀二郎）、佐倉（清水久次郎・四方田慶治）、春日（河野政喜）、軽井沢（馬場茂作）	
一八九五年（明治二八）		◎明治学院神学部諸氏の夏期伝道／同神学校去ぬる十五日を以て夏期休業の時期に入りぬ、修学中の諸氏四十余名は之より三四ヶ月の間府下と地方とに分れて伝道に従事せらる、其の功蓋し僅少に非るべし、教会及び伝道地の其の利益に与かるもの多からん、明治学院神学部別科の卒業生白土弥之助氏は長老ミッションの依頼を受けて上州桐生に赴任せり。

典拠：『基督教新聞』二〇七号（一八八七年七月一三日）・二六二号（一八八八年八月一日）、『福音週報』一五号（一八九〇年六月二〇日）・六八号（一八九二年七月一日）・一二〇号（一八九三年六月三〇日）・一七二号（一八九四年六月二九日）・二一九号（一八九五年五月二四日）

明治学院の神学部生および普通学部生の夏期伝道に関しては、第一東京中会および第二東京中会の伝道局の伝道委員会[29]において動議・決定・報道（報告）等が行われていた。日記が書かれた時期より少し前のものにはなるが、一八八八年の伝道委員会の記録[30]を見てみたい。

○一八八八年五月二六日開催　伝道委員会記録

（前略）

（田村氏動）夏期休暇中、神学生派出伝道中ノ俸給及費用其他派遣地旅費等ヲ調査スル為、委員五名内外国人二名内国人三名ヲ挙ケ、来ル六月ノ定会ニ報告セラル、ヨウナシタシ（井深氏賛）

可決

投票シテ委員ヲ挙ルコト左ノ如シ

井深氏　田村氏　石原氏　アメルマン氏　インブリー氏

（後略）

○一八八八年六月二三日開催　伝道委員会記録

（前略）

（井深氏報）委員等ハ夏季休業中神学生派遣地及其費用等ヲ調査スルコト左ノ如シ

一、千葉　伝道局[①]ノ伝道地ニ遣ハス所ノ神学生ハ　和知牧太

一、水戸　大石憲英
一、足利　今井健次郎
一、伊勢崎　津久井新三郎
一、行田ト鴻ノ巣　山下善之　渡辺精一　陶山斌次郎　外山頼寛
一、高田ト直江津　河合亀之助
一、東金　多田素　藤木元吉
一、諏訪
「ミ②シヨン」の伝道地ニ遣ハス生徒ハ
一、カシワ久保　尾嶋直治
一、御厨　平嶋吉治
一、上田　乗松雅休
一、春日ト野沢　貴山幸二郎　佐久間安二郎
一、保田　武藤健太郎
一、宇都宮　前川太郎
一、志木宿ト蕨　寺本弥太郎
一、大森　坂口菊三郎
一、佐倉　鈴木鎌次郎
一、桜田　佐藤六郎

神学生夏期派遣伝道中ノ俸給及旅費

一、二年生　独身者　八円
　　帯妻者　十円
一、三年生　独身者　十円
　　帯妻者　十二円
一、人力車賃一里ニ付　八銭
　余ハ正規ノ如シ

（服部氏動〔動議〕）此報告ヲ受ケ逐条討議セラレンコトヲ乞（石原氏賛成）可決
（大儀見氏動〔動議〕）神学生配置ノ義ハ原案ノ通リニナシタシ（タムソン氏賛〔賛成〕）可決
（後略）

この資料は、一八八八年の夏期伝道に関する協議を示すもので、傍線部①「伝道局」とは第一東京中会および第二東京中会の伝道局のことである。[31] 傍線部②「ミシヨン」とは、明治学院を設立し、以後、伝道局にも援助を行っていたリフォームド・ミッション（アメリカ改革派教会外国伝道局）並びにプレスビテリアン・ミッション（アメリカ長老教会伝道局）のことである。[32] つまり伝道地への派遣は当初「伝道局」と「ミッション」の双方によって行われていたのである。ただし、幸三が夏期伝道を行った一八九五年には、先に掲げた『福音新報』第二〇〇号冒頭の記事にあるように、日本基督教会の伝道局は外国の伝道会社と分離独立していることから、ミッションは既に夏期伝道からも手

を引いていたものと思われる。

資料の後半部分「神学生夏期派遣伝道中ノ俸給及旅費」からは、夏期伝道を行った神学部生への俸給と旅費の具体的な金額が分かる。二年生の独身者には八円、帯妻者には十円、三年生の独身者には十円、帯妻者には十二円がそれぞれ支給された。また、人力車賃として一里に付き八銭の支給となっている。なお俸給額については、委員会当日、二年生と三年生の区別をなくして同額とし、独身者に一〇円、帯妻者に一二円を与えることが服部氏から提案され可決された。

夏期伝道の後には報告会が開かれることもあった。毎年必ず行われていたかは不明であり、幸三の日記にも報告会に関する記述は見当たらないが、『基督教新聞』や『福音新報』などの記事（【表5】「備考」参照）によると、少なくとも、一八八八年は九月二九日の共励会[33]において、[34]一八九一は一〇月九日の神学部親睦会において夏期伝道の報告が行われ、[35]一八九二年は九月二六日に「明治学院神学生徒夏期伝道報告会」として単独の報告会が開かれていた。[36]

このような従来の夏期伝道の様相を引き継ぎながら、幸三の高田への夏期伝道は行われたものと思われる。

（五）越後高田・直江津への夏期伝道

明治学院神学部は、東京一致神学校を母体として組織された。一八八七（明治二〇）年の明治学院開設当初、邦語神学科と英語神学部に分かれていた二学部は、一八九一年一二月に明治学院憲法が制定された際、神学部に一本化された。神学部は、東京一致神学校以来、日本基督一致教会（一八九〇

年一二月以降は日本基督教会）の神学校として、伝道者育成の役割を果たしていた。一八九七年当時、日本基督教会所属の伝道者の三分の二以上は、明治学院出身者であったという。そして夏期休暇中には、神学部のみならず普通学部の在校生たちも、卒業生と同様に夏期伝道に派遣された。

『神学部一覧　明治二十七年』によると、学年は九月下旬に始まり翌年五月半ばに終るが、卒業式は三月に行われること、学年は、前後期二学期制で、前期は九月下旬より一二月下旬まで、後期は一月上旬より五月半ばまでと定められていた。冬期休暇はクリスマスから翌年一月七日まで、春期休暇は四月第一週の一週間、夏期休暇は五月一六日から九月二〇日までと記されている。

日記によると、夏期休暇中の伝道先は春頃から決まり始め、日記の四月二九日条には、同級生の矢島宇吉[37]〔口絵写真3〕が、松尾村の九十九里教会に行くことになったことが記されている。五月五日条には、一学年下の神学部生である渡辺顕が部屋を訪れ、高田で伝道している白石（白石喜之助）[38]から、矢島か幸三のいずれかを高田へ派遣してほしいという依頼の書簡が渡辺とマクネア[39]に届いたことを幸三に告げた。すでに矢島の松尾行きが決まっていたことから、幸三の越後高田行きが決定した。

幸三の越後高田・直江津[40]への「初めての大旅行」は、鉄道を使っての旅であった。ここで東京と越後直江津を結ぶ、鉄道の敷設について記しておきたい。

明治政府は一八七二年、新橋・横浜間に鉄道路線を開業した。当時の日本は貿易赤字を解消するため外貨獲得を目的とした殖産興業政策として、生糸や絹織物等の製品の輸出を推進しており、養蚕業と製糸業の盛んな群馬県から、貿易港である横浜港まで運ぶ手段が必要とされていた。しかし財政難

から国営での鉄道敷設は難しく、民間資金を導入した株式会社日本鉄道が設立され、日本鉄道最初の路線として、また日本初の民営鉄道として、一八八三年に上野・熊谷間が開業した。翌年の一八八四年には高崎・前橋まで延長され、全線が開通した。そして日本鉄道が一八八五年に開通させた前橋－赤羽－品川のルート（のちの高崎線・赤羽線・山手線）は、官営鉄道（品川・横浜間）と合わせて、当時の主要輸出商品であった生糸や絹織物の産地と輸出港を結ぶ路線となった。なお高崎線の名称は、一九〇六年、日本鉄道が鉄道国有法により買収・国有化され、上野・高崎間の路線も官設鉄道に編入され、一九〇九年、大宮・高崎間が高崎線と定められるのを待たなければならない。

資金難で鉄道建設に二の足を踏んでいた政府も、日本鉄道による鉄道の敷設に影響を受け幹線の整備に向けて動き出すこととなった。一八八三年、明治政府は東京から京都の東西両京を結ぶ幹線として中山道鉄道の敷設を計画し、一八八五年に高崎から横川間が、翌年には直江津から関山（現在の新潟県妙高市）間の約三〇キロが開通した。一八八八年に直江津から軽井沢間が開通し、一八九三年には碓氷峠の横川から軽井沢間がアプト式鉄道で結ばれて、高崎から横川、横川から軽井沢、軽井沢から直江津間が全通した。関東地方北部と日本海側とを結ぶ本州横断鉄道の完成であった。しかしこの路線が信越線という路線名になったのは一八九五年一二月であり、幸三が高田から東京へ戻って約四ヶ月後のことであった。

江戸時代、高田藩は参勤交代の際、中山道追分宿（長野県軽井沢町）から別れて関川（新潟県妙高市）から高田・出雲崎を結ぶ北国街道を通常の旅路としていた。高田と江戸の間は、参勤交代の場合、参府は七泊八日、帰封の際は八泊九日を費やし、旅人は通常でも五泊六日程度、急いでも三泊四

日を要する旅程であった。[41]

高崎から直江津までの路線は、『全国鉄道汽車便覧』[42]によれば一日三便あり、片道一円七二銭、高崎から直江津の一つ前の駅である高田までは一円六八銭であった。江戸時代、江戸から高田まで片道八日をかけて移動していたことを考えると、鉄道の敷設が果たした移動の迅速化は目を見張るものがあった。幸三が夏期伝道に費やした日数は全一〇六日、移動に要した日数は、往路が二日、復路が長野・上田等に立ち寄ったこともあり五日、計七日であった。

幸三は、二年前に開通した鉄道を使い、一八九五年五月、越後高田・直江津への夏期伝道に出かけることとなった。同月二二日に翌月分の月給と旅費三円三六銭を学院から受け取り、二八日朝、品川を発った。当時品川から東北地方・北陸地方への汽車の旅は、一八八五年三月に開通した品川線で赤羽まで進み、そこから高崎線で高崎に到る経路のみで、幸三も品川を発ち、赤羽を経由して高崎に到り、さらに軽井沢まで移動した。幸三は軽井沢でマクネアに再会し、彼に勧められた油屋に一泊し、翌日、軽井沢から上田・長野を経て、その日の夕方高田に到着している。

高田におけるキリスト教伝道の歴史を見ておきたい。

高田における日本基督教会の伝道の歴史は、一八八三年三月一〇日、富山県高岡で北陸七州自由党懇親会が開催され、散会の後、帰国の途中の頸城（くびき）自由党員三七名が検挙される「高田事件」を契機とするという。[43] この三七名のなかに、以後キリスト教と深く関わる加藤勝弥と、ミッション・スクール高田女学校の校長となる森山信一[44]がいた。加藤は、一八五四（安政元）年に新潟県岩船郡八幡村大字板谷沢の大庄屋の長男として生まれ、当時は県会議員であり、自由民権運動のリーダーとして活

躍していた。加藤は検挙され五ヶ月間投獄されたが、獄中で母の俊子が差し入れた聖書によりキリスト教に触れ、出獄後デイビス[45]から受洗した人物であった。

一八八六年、加藤勝弥は「高田の地に於ける教会の進出を提言[46]」し、同年十一月から一致教会伝道局が派遣した田中貫一が伝道を始め[47]、一八九〇年四月一三日、教会設立式が行われ[48]、高田一致教会が発足したという。一八八九月年一一月二三日には献堂式を行っている。一方、一致教会の高田進出から五年後の一八九一年、日本メソジスト教会は、金沢部長サンビー[49]の管理のもと、金沢敬二郎[50]を金沢から派遣して高田両替町（現在の上越市仲町二丁目）に講義所を設け進出した。その後高田への伝道は、長野部長である橋本睦之[51]の管理のもと、松本常が上越地方の伝道に当たったという[52]。田中貫一の後を継いだ伝道師の陶山斌二郎が、メソジスト教会高田教会の初集会に招かれ、説教を行っていること、直江津において共同の集会を開催していることなどから、日本基督高田教会とメソジスト高田教会は協調的な関係があったといわれているが[53]、そのことは幸三が高田でメソジストの信者大森隆碩[54]の家を訪れるなど、親しく交流していることからもうかがえる。

新潟は、越後に流された親鸞や佐渡に流された日蓮の影響もあり、仏教の極めて盛んな地である。『福音週報』第八号（一八九〇年五月二日）には、一八八〇年に東京一致神学校を卒業し、一致教会の長岡進出に尽力した巡回教師石原保太郎が、伝道委員会で北越地方の状況を、「此地は仏徒の勢力盛んなる為め、基督教の講義所となすべき家屋を借り入るゝことも実に容易ならず」と、その伝道の困難な事情を報告している。幸三が訪れた高田でも、『福音新報』第四号（一八九五年七月二六日）の「越後高田通信」には「当地の教勢は、一盛一衰、容易に大勢を卜知すること能はず」と記されて

おり、キリスト教の普及・浸透は難しいものがあった。

一八八八年五月、東京の桜井女学校[55]の分校である高田女学校[56]が、高田四ノ辻に開校した。同校は、後にメソジスト高田教会員となり高田盲学校の設立者となる大森隆碩、高田事件に加藤勝弥と共に連座した森山信一ら地方有志が創設した、キリスト教主義による教育施設であった。森山信一・白石行信[57]らが校長を務め、一八九〇年には舎監兼伝道師として大関和[58]が、一八九三年には安田磐子[59]が教師として赴任している。

幸三が高田に赴いた際、高田女学校には離任直前の安田磐子がおり、安田の教会での活動やその佇まいは、幸三に感化を与えている。また大関知は知命堂病院[60]に看護婦長として在任し活躍しており、幸三は彼らとの知己を得、高田滞在は実り多いものであったと思われる。

しかし高田女学校に対抗し、浄土真宗が設立した高陽女学校[61]が、授業料を無料とし、学科も高田女学校にならったため、授業料を徴取していたと思われる高田女学校の生徒数は激減し、経営難のため幸三が高田を去ってから一年半後の一八九七年四月に廃校となっている。また高田女学校の閉校を期に、学校と一体となって活動した教師や宣教師も高田を退いた。高田におけるキリスト教の布教活動は一気に消沈してしまうこととなった。なお日本基督高田教会の正式な撤退時期は不明であるが、メソジスト高田教会の一九〇七年の記録に「元高田日本基督教会所有品の内テーブル一個・椅子二個・コップ一個、その他雑誌数冊を当教会へ寄付する旨日本基督教会代表者より送付ありたり」との記録があることから、日本基督高田教会の撤退は、一九〇七年以前であると推定されている。[62]

幸三の高田での生活を見ておきたい。

幸三は五月二九日、高田に着くと、秋葉省像[63]の紹介状を持ち四ノ辻の宮崎八太の下宿に至り、二階の部屋に逗留することとなった。秋葉省像と宮崎八太の関係は不明であるが、宮崎の娘ヤス子が女子独立学校[64]でトゥルー[65]の下にあったことによるのかもしれない（八月二日条）。宮崎は六〇歳位の老人で、宿は中学校[66]へ通う男子学生五人と、入学予備生が一人居る下宿であった。七月一八日、中学の試験が終了し、その後学生たちは順次帰省した。幸三が高田に滞在した間、七月中旬以降は、宮崎家には、幸三と八太、そして、八月一日より二三日まで滞在していた八太の娘ヤス子の三人での暮らしであった。なお毎月の生活費は、バラより「給金八円」（七月一三日条）が為替で送られてきた（また八月一九日にも為替が届いている）。幸三は、その春から高田で伝道師を務める白石喜之助の力を借りながら、夏期伝道を行った。教会での伝道だけではなく、訪問伝道にも力を注ぎ、商家や農家の人々など市井の人々とも触れ合った。直江津にも五回に渡り伝道に出かけている。また伝道の合間には、高田の春日城址や直江津の各地を観て回り、生まれて初めての北陸での生活を楽しんでいる。

幸三が高田を発ち帰路に着く数日前の八月三一日、高田に安田磐子死去の報が伝えられた。日記には、高田女学校校長の白石行信より借用した磐子の父親安田退三からの書簡が転記されている（九月二日条）。九月三日、幸三は高田を発つにあたっての暇乞いをしつつ、高田女学校で開催された安田磐子の追悼会に出席し、その後教会関係者が開催した白石家での幸三の送別会に出席している。

幸三は約三ヶ月間滞在した高田を九月四日に発って、関川に一泊、翌日関川から長野に至り同級の千磐[67]に会い二泊した。七日に上田に着き上田教会の小林格[68]氏宅に二泊し、九日に上田を発って軽井沢で一泊し、翌朝軽井沢を発ち、九月一〇日の夕方目黒に着いている。

幸三の高田伝道については、『福音新報』第四号（一八九五年七月二六日）の「越後高田通信」に「白石、山田両氏は相変らず熱心に尽力せられ」と着任早々、伝道に励む様子が記されている。また同じく第一一号（同年九月一三日）の「越後高田日本基督教会通信」には、「夏期伝道のため尽力せられし、明治学院神学生山田幸三氏の為め、去る三日の夜、白石喜之助氏の宅にて、送別会を開く、会するもの十八名、近頃愉快なる集会なりき、同氏は四日帰校せられぬ」と幸三の送別会の様子が記されている。

（六）矢島宇吉と九十九里教会

一方同級の矢島宇吉は、四月二九日に夏期伝道で松尾の九十九里教会に行くことになった。九十九里教会は、幸三が受洗した教会である。矢島は、幸三の高田行を見送り、後日松尾に向け出発した。当時九十九里教会は、永井直治[69]の後を受けて一八九三年七月に就任した佐久間吉太郎[70]が一八九五年五月に辞任し、伝道師不在の状態であった。矢島は、帰省中の秋葉省像と共に伝道に精を出したようで、『九十九里教会九十年史　里見長老と共に』[71]には、「佐久間吉太郎氏退職后は神学生矢島宇吉、神学校より派遣せられ、専ら伝道の任務を担任せられ、僥倖に秋葉肖像[省]氏亦帰省中にて、矢島氏の伝道業務を補翼して、各村落を巡回し、斯道宣伝に努められたり。氏の任期は甚だ短く、同年秋には解任して帰校せらる。灼熱灼くが如き夏期に於て東奔西走せられたる効果を見るを得ざりしは惜しき事なり」とある。また『福音新報』第一二号（一八九五年九月二〇日）の「上総九十九里通信」には「嚮（さき）に佐久間君伝道の職を辞せられし以来後任者未定なりしが、幸に矢島宇吉氏神学校より夏期休暇

中伝道の為当地に来られ、目下帰郷中の秋葉省像氏と共に伝道に従事せられ、屋形・寺崎・大蔵の各所に演説会を開きまた教会員を悉く訪問するなど為に好都合なり、会員は一般に伝道の精神に富み居れば主任伝道者を一日も早く得たきものと一同切望し居れり、矢島・秋葉の両氏も近日の中に此地を去らるゝよし」と記されており、伝道者の来松を喜ぶ様子が記されている。

矢島は九月下旬、東京に戻り、幸三は九月二四日の夜、ヘボン館で松尾より戻った矢島と再会した。その翌々日の二六日、幸三は、同級の長山[72]・矢島と連れ立って弁当持参で植村正久宅を訪ねた。用件は、九十九里教会の専任伝道者の人選であったと思われる。日記の同日条には、矢島が、九十九里教会員の「主任伝道者を一日も早く得た」いという意向を反映してか、伝道者に柳沢、柳沢が難しければ青木[73]を招きたい旨を語ったところ、植村は、「九十九里の為にも柳沢位にては仕方かあるまい、一体九十九里の人は所望の程の底〔低〕いものかな、更に柳沢氏に到るとは至て要求が少し、思ふに九十九里の人は豆腐よりも唐〔殻〕を好まるゝものと見ゆ、柳沢氏にして都合悪くば青木氏を望むとは又誤れり、彼は親睦会の茶番には長法〔重宝〕なれど伝道者としては不向なり、氏は宿屋のガイダーに適当なり、尚柳沢氏も同氏の為あまり伝ずる事は不為ならん」と語ったとある。結局九十九里教会に赴任する適任者は得られなかったようで、伝道師の派遣は、幸三が高田からの帰路上田を訪れた際、上田教会の伝道師を務めていた小林格が、一八九六年七月に九十九里教会に赴任するまで、待たなければならなかった。

（七）日記の意義

最後に幸三の記した日記の意義について記しておきたい。日記には、明治学院神学部の学生である山田幸三の学院生活が記され、ヘボン館での生活や幸三が受講した授業科目、学校の行事などが記されている。一八九〇年代に明治学院の神学部生が記した日記は他に知られていないことからも、本日記は、神学部生の学院生活を知ることのできる貴重な資料である。

また幸三は、初めて夏期地方伝道を経験し、越後高田へ赴き、約三ヶ月間を過ごしたが、夏期伝道については、出発に際し見送った人々についての記述や、荷物の搬送、旅費や旅程、高田での暮らしと日々の伝道の様子が詳細に記されている。夏期伝道の具体的な内容を知ることのできる貴重な資料である。さらに日記には、「高田教会員及在留信徒、並びに求道者（一）」（六月一日条）、「高田教会員及在留信徒並びに求道者（一）」（七月八日条）、「高田教会員及在留信徒並びに求道者―有望者（三）」（八月二日条）の記載があり、幸三の高田での交友関係とともに高田教会員や信徒らの氏名が判明する。高田教会については、『日本基督教団高田教会百周年記念誌　高田教会百年のあゆみ』[74]があるが、一八九〇年代の信徒名などは記されていない。高田の一八九五年当時のキリスト教伝道の様子、および高田教会の状況を知ることの出来る貴重な資料であろう。また伝道の帰路、長野に立ち寄った際の記事に、「長野講義所の信徒並に求道者」（九月五日条）が記されており、上田に立ち寄った際の記事（九月八日条）には、上田教会（現在の日本キリスト教会上田教会）の当時の長老四名の氏名、茂田井講義所の信者の名が書き上げられている。ともに長野講義所（現在の日本基督教団長野教会）および上田教会の一八九〇年台半ばの資料として貴重であろう。

なお日記には、幸三が高田からの帰路、長野で橋本睦之を尋ねた際、橋本が宣教の困難な状況について「何処も同じ秋の夕暮」等と語ったと記されている（九月六日条）。また上田でも、幸三の湯屋での失策を、小林格が「ヤー失配（失敗）したな」と言ったという記述（九月七日条）、前述した幸三が矢島・長山と植村宅を訪れた際、植村が語った辛らつな人物評（九月二六日条）など、幸三が接した人々の語り口が生き生きと記されており、人柄を彷彿とさせる。本資料は、当時活躍した著名な伝道師の人柄を伝えるという意味でも、良質の資料であるといえる。

註

（1）山武市歴史民俗資料館所蔵山田家文書及びその目録ついては、『資料集』第一六集の解題を参照されたい。また山田家文書目録番号の表記についても、『資料集』第一六集にならい記した。

（2）日記の資料名は、山田家文書の目録『掛川藩から松尾藩へ（補遺）―追加目録―　山武市郷土史料集二三』（山武市教育委員会編刊、二〇一七年）によった。

（3）高田

現在の新潟県上越市の一部。江戸時代初期に、徳川家康の六男松平忠輝が高田城を築城して以来、一時期を除き高田藩の城下町であった。町づくりには、直江津の福島城下の寺社・町人を移したという。一八八九（明治二二）年の町村制施行に伴い旧高田城下の町人町等を合併し、中頸城郡高田町が発足した。一九一一年に市制施行により高田市となり、一九七一（昭和四六）年、直江津市と合併して、上越市となった。

（4）指路教会

現在の日本キリスト教団横浜指路教会。横浜居留地三九番にあったヘボンの自宅でアメリカ長老教会の宣教師ヘンリー・ルーミスを初代牧師として設立された教会。その後現在地（横浜市中区尾上町）に移り、さらに太田町・

住吉町を経て、一八九二（明治二五）年、現在地に教会堂が建てられた。教会名はヘボンの母教会の名“Shiloh Church”による。

（5）ギレスピー博士 → ジョン・ギレスピー（Gillespie, John. 生没年不詳）
一八八六年三月までアメリカ長老教会海外伝道局の日本担当であったジョン・ラウリーの後任を務めた。

（6）『ヘボン在日書簡全集』岡部一興編、高谷道男・有地美子訳、教文館、二〇〇九年。

（7）『排耶論の研究』同志社大学人運科学研究叢書二〇　同志社大学人文科学研究所編、教文館、一九八九年。

（8）『明治学院五十年史』（一九二七年）二七八頁、『明治学院八十年史』（一九五七年）六七頁、『明治学院百年史』（一九七七年）一七一頁参照。

（9）『神学部一覧　明治二十七年』および『同　明治二十八年』による。

（10）『神学部一覧　明治二十七年』および『同　明治二十八年』に「学年ハ九月下旬ニ始リ翌年五月半バニ終ル」とある。

（11）山田家文書「組織神学　巻の一、二　亜歴山教師講義」（目録番号D－4－1）および「組織神学　巻の参　亜歴山教師講述」（目録番号D－4－2）。

（12）『神学部一覧　明治二十六年』一三頁及び『同　明治二十七年』一二頁。

（13）『神学部一覧』によると、一八九七（明治三〇）年以降も三月に卒業式が執り行われている。

（14）その数日間は「卒業週」として認識されており、『福音新報』第六九号（一八九二年七月八日）では明治二五年の卒業式について、その見出しを「明治学院卒業週記事」とし、その冒頭に「明治学院卒業週は例年の如く六月終末の日曜日即二十六日を以て始まりたり」と記している。

（15）『卒業式の歴史学』（有本真紀著、講談社、二〇一三年）四六頁では、「キリスト教系学校では三日なし四日をかけて卒業式を行うケースも見られた」と指摘し、明治学院第二回卒業式のほか東京英和学校（現在の青山学院大学）の例を挙げている。

（16）当館所蔵「Minutes of Meetings of the Board of Directors of the Meiji Gakuin/ Feburary 18th, 1893 to November

11th, 1903」(ID: 1201910068)。

(17) 九月学年始期が四月学年始期へと統一される過程については佐藤秀夫「学年始期の統一化過程―学校接続条件の史的考察」(『国立教育研究所紀要』一一七、一九九〇年)に詳しい。

(18) 石本三十郎の履歴は、『福音新報』第二三号(一八九五年一二月六日)所収の水蘆幾次郎筆「故石本三十郎氏の小伝」(『百年史資料集』第三集 一九七六年)、および一八八七年に東京府に提出された明治学院「私立学校設置願」に収録されている教員履歴(『百年史資料集』第一集 一九七五年)を参照した。なお石本の没年月日については、一八九六(明治二九)年一〇月一一日とするものがある(『日本キリスト教歴史大事典』(日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、教文館、一九八八年)、『日本キリスト教歴史人名事典』(日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、教文館、二〇二〇年)など)。

また石本は、幼い女児と二人の男児を残して逝ったが、長女石本しづは、山田幸三の従弟にあたる里見純吉と一九一一年に結婚した(『店友 里見取締役会長特別追悼号』、[大丸]、[一九五二年])、里見勇氏所蔵)。純吉は、一九一二年明治学院理事に就任しており、明治学院歴史資料館は、里見しづ氏より寄贈された写真資料を所蔵している。

(19) インブリー → ウィリアム・インブリー(Imbrie, William. 一八四五―一九二八)

アメリカ長老教会宣教師。一八七五(明治八)年の初来日より、数度の一時帰国を経て、一九二二(大正一一)年に帰国するまで、四〇年以上にわたり日本でのキリスト教宣教に尽力した。一八八七年に明治学院が設置されて以来、教授を務めた。石本の死は、インブリーが一八九三年四月から一八九七年六月まで二度目の帰米をしていた際のことであった。

(20) 陶山斌二郎(すやま ひんじろう 不詳―一九二四)

『神学部一覧 明治二十七年』には、一八八九(明治二二)年に明治学院神学部を卒業し、一八九四年六月当時は米国留学中とある。『福音週報』第七号(一八九〇年四月二五日)には、田中貫一に代わり陶山の高田赴任が決まったことを伝える記事があり、卒業後、高田で布教活動を行っている。留学しプリンストン大学を卒業し、帰国

後は愛媛県立松山商業学校長、公立実業学校（現在の東京都立第一商業高等学校）初代校長等を務めた。

(21) 石原保太郎（いしはら　やすたろう　一八五八－一九一九）

『資料集』第一六集、註26－31参照。また経歴については、『百年史資料集』第一集、一〇七頁を参照した。

(22) 現在確認できる『神学部一覧』のうち「明治二十六年」版には「夏期休暇中ハ神学生各々実地伝道ニ従事スベキモノトス」の記述はない。「明治二十七年」版以降「明治三十六年」版までは同じ内容が記されるが、「明治三十七年」版ではこの一文が削除され、『神学部一覧』から夏期伝道の記述はなくなった。

(23) 夏期伝道は他の神学部や神学校でも広く行われていたもので、神学部生が学校生活のなかで重視していた行事のひとつであった。例えば、『青山学院五十年史』（青山学院五十年史編纂委員会編、青山学院、一九三二年）三三～三四頁には「（明治）二十四年二月、松浦、田中、別所、外数名の学生によって、神学部内に学術的な研究団体を結び、毎土曜に各人の研究発表会を開いた。漸く神学論に傾倒する者も多くなったが、優れた牧師として伝道の野に奮闘しようとする志は一般に甚だ強く、夏期休暇中の夏期伝道の如きは、学生の最も重大視したものの一であった。」の記述からもうかがえる。

(24) 一八八九年頃から「夏期伝道」という呼称がほぼ定着しているが、「暑中伝道」（『福音新報』第六九号、一八九二年七月八日）との呼称も見られる。

(25) 『井深梶之助宛書簡集』（秋山繁雄編、明治学院、一九九七年）一三三頁。

(26) 井深梶之助の説教講話「日本伝道ノ時機」（一八九四（明治二七）年一〇月二〇日、ID: 120161024 9）。

(27) 越後高田やその周辺地域における伝道の記録としては、幸三の日記のほか井深梶之助の「伝道地巡回日記」（『井深梶之助とその時代　第一巻』所収）がある。

(28) 「日本基督一致教会　第一第二東京中会　聯合伝道委員会記録二」。

(29) 伝道委員会は、日本人および外国人宣教師一五名ほどの伝道委員で構成されていた。因みに、一八八八年五月二六日の委員会に出席した委員は、「日本基督一致教会　第一第二東京中会　聯合伝道委員会記録二」（前掲）によると、フルベッキ・アメルマン・井深梶之助・山本秀煌・タムソン・小川義綏・大儀見元一郎・ワデル・インブ

リー・田村直臣・石原量・デビッドソン・服部綾雄などであった。また「第二中会伝道局委員会記録」には、一八九四年例会の出席者として小川義綏・石原量・タムソン・フルベッキ・アレクサンダー・マコーレーらの名が見える。

(30) 前掲註(28)参照。

(31) 幸三が夏期伝道を行った一八九五年当時は、「第一東京中会記録　自明治二十七年至明治二十九年」所収の一八八五年四月二日開催記録によると井深梶之助が第一中会伝道局長を務めていた。

(32) 「第一東京中会記録　自明治二十七年至明治二十九年」所収の「第一中会伝道局会計報告　明治二十七年十月ヨリ同二十八年三月ニ至ル」によると、当時の収入三八四円二七銭のうち、その大半である三一七円九一銭がリフォームドならびにプレスビテリアン両ミッションより支給されていた。

(33) 学内のキリスト者学生によって組織された自主的団体。毎月第二土曜日に例会として共励会を開き、毎週水曜日夜に祈祷会を開催していた(『明治学院百年史』一四〇頁)。

(34) 『基督教新聞』第二三七号(一八八八年一〇月一七日)。

(35) 『福音新報』第三一号(一八九一年一〇月一六日)。

(36) 『福音新報』第八二号(一八九二年一〇月九日)。

(37) 矢島宇吉 → 『資料集』第一六集、註26－65参照。

(38) 白石喜之助 → 三月二七日条、註28－30参照。

(39) マクネア → 『資料集』第一六集　註26－41参照。

(40) 直江津

現在の新潟県上越市の一部。古くから日本海に面する湊の一つとして発展し、江戸時代には高田藩の外港として栄えた。一八八九(明治二二)年、町村制施行に伴い中頸城郡直江津町と塩谷新田村などが合併し、直江津町が発足した。一九五四(昭和二九)年には中頸城郡八千浦村などを編入し直江津市となるが、一九七一年、高田市と合併し上越市となった。

(41)『上越市史』通史編四・近世二、上越市史編さん委員会編、上越市、二〇〇四年。
(42)『全国鉄道汽車便覧　明治三五年版』松尾印刷、大学図書（発売）、二〇一〇年。
(43)『新潟県キリスト教史』上巻　新潟県プロテスタント史研究会編、新潟日報事業社、一九九三年。
(44)森山信一　↓　五月三一日条、註28－88参照。
(45)デイビス　↓　ロバート・H・デイビス（Davis, Robert Henry. 一八四四－一八九九）
新潟県で活躍したアメリカン・ボードの宣教師。同志社英学校（現在の同志社大学）を創設したジェローム・D・デイビスの甥にあたる。アマースト大学で修士号を取得し、バンガー神学校で学び牧師となり、一八七八（明治一一）年にアメリカン・ボードの宣教師として来日した。神戸で一八八三年まで伝道に従事し、その後スコットランド一致長老教会宣教師パームの後任として宣教師のギューリック夫妻と共に新潟地方の伝道を始めた。一八八四年に新潟第一基督教会（現在の日本基督教団新潟教会）を設立して、成瀬仁蔵を初代牧師に迎えた。翌一八八五年に帰国した。
(46)前掲註（43）による。
(47)『福音週報』第二号（一八九〇年三月二一日）、「〇越後高田の概況」の項に「高田は去明治十九年十一月以来一致教会伝道局より派遣せられたる田中貫一氏伝道せらる」とある。
(48)『福音週報』第七号（一八九〇年四月二五日）、「〇越後高田一致教会通信」の項に「今度中会の許可を得て教会を新設することとなり、去る十三日午后二時より教会設立式を挙行せり」とある。
(49)サンビー　↓　J・W・サンビー（Saunby, John William. 一八五八－一九二五）
カナダ・メソジスト教会宣教師。カナダで生まれ一八八六（明治一九）年来日し、山梨についで金沢で開拓伝道を行った。一八九三年に健康上の理由で帰国したが、一九一〇年再来日し、一九二一年に帰国した。
(50)金沢敬二郎（かなざわ　けいじろう　生没年不詳）
メソジスト教会の伝道師。金沢英学院で英語を学び、一九〇五年に沼津教会（のちの日本メソジスト教会沼津教会）の第一二代牧師となる。一九〇八年五月に渡米し伝道を行い、一九三二年から一九三六年まで、東京下根岸の

根岸教会の伝道師を務めた。

(51) 橋本睦之（はしもと　むつゆき　一八五五－一九一六）
牧師。江戸牛込に生まれる。同人社に学び、一八七六（明治九）年コクランより受洗した。カナダ・メソジスト教会監督マクドナルドより按手礼を受け牧師となり、沼津・浜松などの教会を経て、一八九三年長野教会（現在の日本基督教団長野県町教会）に転任、長野部長を務めた。その後上田教会（現在の日本基督教団上田新参町教会）に転じた。なお幸三は、高田からの帰路、長野で橋本を訪れ面談し、「さすが信越の部長殿丈哉」と日記に記している（九月六日条）。

(52) 『上越市史』通史編五・近代　上越市史編さん委員会編、上越市、二〇〇四年。

(53) 『日本基督教団高田教会百周年記念誌　高田教会百年のあゆみ』日本基督教団高田教会編、日本キリスト教団高田教会、一九九一年

(54) 大森隆碩（おおもり　りゅうせき　一八四六－一九〇三）
幕末から明治時代の医師で教育者。高田藩医の長男として生まれ、江戸で医学を学び、高田で眼科医を開業した。英語を学ぶため大学南校（現在の東京大学の前身の一つ）に入学し、さらに宣教医ヘボンにも師事した。高田へ戻った隆碩は自らも失明の危機を経験したことから、一八九一（明治二四）年、日本で三番目の盲学校である私立高田訓蒙学校を設立し、校長に就任した。また隆碩は中頸城郡立産婆養成所の設立にも貢献し、その所長も務めている。一九〇三年、東京で死去。私立高田訓蒙学校は、一九一五（大正四）年に高田盲学校、一九四九（昭和二四）年には新潟県立高田盲学校と改称され、二〇〇六（平成一八）年、新潟県立新潟盲学校に統合された。

(55) 桜井女学校
一八七六（明治九）年に桜井ちかが、東京府麹町中六番町に設立したキリスト教主義女学校。一八七七年にちかが辞任すると、矢嶋楫子が就任し、学校はアメリカ長老教会の経営となった。経営にあたった女性宣教師トゥルーは、一八七九年に高等小学科、一八八〇年には日本で最初の私立幼稚園を設立した。また一八八四年にはキリスト教幼稚園の保母育成のために幼稚保育科を設立し、一八八六年に看護婦学校を設置した。一八九〇年に新栄女学校

と合併して女子学院になった。同校を母体として開校した学校に、新潟の高田女学校・宇都宮女学校がある。

(56) 高田女学校

高田女学校は、一八八八（明治二一）年五月、高田四ノ辻に東京の桜井女学校の分校として開校した。のちにメソジスト高田教会員となり高田盲学校の設立者となる大森隆碩、高田事件に加藤勝弥と共に連座した森山信一ら地方有志が創設した、キリスト教主義による教育施設であった。森山信一・白石行信らが校長を務め、一八九〇年には舎監兼伝道師として大関和が、一八九三年には安田磐子が教師として赴任している。しかし浄土真宗が設立した高陽女学校が、授業料を無料とし、学科も高田女学校にならったため、高田女学校の生徒数が激減し、経営難のため一八九七年四月に廃校となった。

(57) 白石行信 ↓ 五月三一日条、註28－87参照。

(58) 大関和 ↓ 六月一日条、註28－94参照。

(59) 安田磐子 ↓ 五月三一日条、註28－86参照。

(60) 知命堂病院 ↓ 五月三一日条、註28－91参照。

(61) 高陽女学校

新潟は仏教の盛んな地であるが、一八八八（明治二一）年に基督教主義の高田女学校が開校すると、キリスト教の影響と拡大に危機感を抱いた仏教徒は、同年、馬出町の龍源寺境内に高陽女学会を創立し、一八九一年、県より許可を得て高陽女学校と改称した。しかし高田女学校に対抗するため授業料を無料にしたことが資金難を招き、また一九〇〇年には中頸城郡高田女学校（現在の新潟県立高田北城高等学校）が設立されると、生徒数も減少し、一九〇八年廃校となった。

(62) 前掲註（53）の一一八頁。なお『日本基督教会統計年鑑』（井深梶之助・星野光多編、警醒社、一九〇四年）の「教会及講義所　〇東京中会」の項に「高田講義所　新潟県高田町」とあることから、日本基督高田教会は、一九〇四年当時、講義所として存在していたと思われる。

(63) 秋葉省像 ↓『資料集』第一六集、註26－7参照。

(64) 女子独立学校
通称は独立女学校。一八八八（明治二一）年にアメリカ長老教会の婦人宣教師トゥルーらにより桜井女学校に設けられた「貧女教育職業学校」・「職業女学校」とも呼ばれた施設が、一八八九年一一月、加藤敏子を校長として「女子独立学校」と名称を変え四谷に創設された学校。一八九〇年に新宿角筈村に移転した。キリスト教主義の教育を行い、かつ寄宿しながら婦人の職業教育を行う学校であった。

(65) トゥルー → 八月二日条、註28－131参照。

(66) 中学校
一八九三（明治二六）年に町村立高田中学校から中頸城總町村組合立中頸城尋常中学校と改称した学校（現在の新潟県立高田高等学校）のことか。同校は、一八六六年に、高田藩の藩士子弟教育のために設立された藩校（後の「脩道館」）を改め、公立新潟学校第四分校として創始された。

(67) 千磐 → 千磐武雄、『資料集』第一六集、註26－69参照。

(68) 小林格（こばやし　のぼる＊　一八六一－一九四五）
牧師。浅草に生まれ、東京一致神学校を一八八一（明治一四）年に卒業した。「神学部学籍簿」には、「明治二十五年九月再入学」とあり、『神学部一覧　明治二十六年』には「卒業後研修生」としてただ一人、氏名が記されている。〔口絵写真2〕に写っていることから、一八九三年六月、課程を修了したのかもしれない。さらに『神学部一覧　明治二十八年』によると、一八九五年当時、小林は伝道者として信州上田に赴任しており、『福音新報』第二一四号（一八九五年四月一九日）には、小林が「信州上田鷹匠町六百〇二番地」に転居した旨の通知が掲載されている。九十九里教会の『宣教百周年』（日本キリスト教団九十九里教会編刊、一九八一年）によると、一八九九年八月六日、小林は上田教会より転入し、一九〇二年六月まで、九十九里教会の教師を務め、桐生教会に転任したとある。なお『宣教百周年』三四頁には、小林が一九〇〇年に辞任したとあり、また日本基督教団桐生教会の『教会百年史』（石黒悦雄編著、同教会〔編〕、日本基督教団桐生教会、一九七八年）には、小林が九十九里教会から佐倉教会に赴任し、その後桐生教会に赴いたと記されている。しかし佐倉教会の記録（『日本キリスト教団佐倉教会

創立八十周年記念誌』日本基督教団佐倉教会編刊、一九八四年、『日本キリスト教団佐倉教会　百周年記念誌』日本基督教団佐倉教会、二〇〇五年）では、小林の佐倉教会への赴任を確認することはできない。『神学部一覧　明治三十四年』には「伝道者　上総九十九里　小林格」、『神学部一覧　明治三十五年』には「伝道者　上野桐生　小林格」とあり、また九十九里教会には、一九〇二年、小林の送別会の際に撮影された写真が残されている。なお桐生教会の『教会百年史』には、小林の略歴が記されており、「きわめて快活善良な人柄であった。（中略）先輩の植村正久とは特に親密な間柄にあった」とある。『植村正久と其の時代』（一巻～五巻・補巻・索引、佐波亘編、教文館、一九三七－一九四一年）には、「小林格談」としていくつかの談話が収録されている。

（69）永井直治 → 柳沢直治、『資料集』第一六集、註26－15参照。

（70）佐久間吉太郎 →『資料集』第一六集、註26－59参照。

（71）『九十九里教会九十年史　里見長老と共に』日本基督教団九十九里教会編刊、［一九六八年］。

（72）長山 → 長山万次、『資料集』第一六集、註26－72参照。

（73）青木 → 青木澄十郎、『資料集』第一六集、註26－6参照。

（74）前掲註（53）参照。

東雲生記

明治二十八年　　神武天皇紀元二千五百五十五年
　　耶蘇基督降世一千八百九十五年

一月

一日　晴天

例年の通り学校教師、秋葉氏・石原氏・石本氏・小倉氏・加藤氏・竹林氏等を午前に祝賀し、午后より波多野・里見より和田氏・植村氏に行き、日暮頃関谷へ至り今宵は同家へ泊りたり、今年は会計の都合如意ならず為に遠方便の悪しき所へは年賀状を差出さず、奥平氏へは年賀の替にスサンナ、ウエスレーの伝[28-1]を送りぬ

二日　晴天

午前大森へ年賀に参り老祖氏にのみ面会し、とその馳走になり、一時間ばかり話し帰参す、老婆様には御病気の由にて会はざりき、蓋し大した事もなき由、それより駒込なる太田様に年賀し、帰路渡辺嘉夫氏に寄り、氏は留守なりしが暫く話し、あべかわなぞ馳走になり将に帰らんつるとき富岡の茂ちゃん入来、五六年ふりにて会ひたり、午后一時頃渡辺氏を去り浅草の福島に至り同様餅の馳走になり三時頃同家を去り、蠣殻町の田中氏を年賀し同家には上らず直に秋山氏の方に来り、同家を年賀し五時過帰校せり、

四日　晴天

〔欄外〕「小林鉞姉出京す」

里見純吉君と今関儀一郎君には今宵六時頃帰京、秋葉氏へ着されたり、同氏等は昨年十二月の末に冬期休業の為め帰省されしなり。間野事小林おゑつ姉事此度夫鶴太郎氏と別居の相談整ひ二人の小児を携れて出京、今秋葉氏に居り、同氏の周施〔旋〕にて能き口を探索中なり、同姉には一昨二日の夜着京、当夜は品川の加藤氏へ泊り昨朝二本榎の里見貫一君の寓に到りしに、御老婆様には沾でお鉞姉の顔たに見玉はず草々帰さしたれば、お越〔鉞〕姉も不得止秋葉氏の許に来りしなりと、今宵は秋葉にて歌骨牌会あれば来れと兼て招かれければ矢島君と同道六時頃参上せしに、思ひきや門前にて婦人十数名の秋葉に来るに邂逅す、則ち聖書学館の連中と知られたり、余思ふ様こは考ものなり、秋葉氏の懇招には謝すへきなれど今宵当家の歌骨牌会に入籍せんは大に心もとなく感じ、矢島君に打向「如何に矢島今宵は歌骨牌は見合す方宜しからずや、謂ゆる梨〔李〕下の冠瓜田の履とは此事なめり」といへば同氏も暫躊躇の后「如何にも左様なり、然と雖も秋葉氏に音なはづは失礼の嫌あれば一寸妻君にでも面会し謝礼を陳べ然して帰るべし」と、余則ち裏手より矢島君に先ち入込ぬ、恰もよし細君来る、「余今宵は歌骨牌は見合さん……」と語尾訥に申出しに、同姉も変に思れし様なりしが軈て悟りし風情にて……「左様に候か、さるにてもせめて茶菓はかりも召し玉ひ」とて茶の間に誘る、純吉・儀一郎・源三郎・矢島の諸氏と共に茶菓の馳走に与り八時頃帰る、歌骨牌の席上には宮川・鵜野・渡辺氏等は男子なりしも他は皆婦人らしく聞へたり、純吉君余と寝ぬ、

九日　晴天

今日より学校授業始まりたり、万国連合祈祷会は七日の夜より十二日の夜まであり、余は其中三日赤坂教会に行き其他は台町教会に出席したり、当時所感多端逐一確信の域に達せずして転意又転意、時に或は釈然解悟以て確信し得たる事あるもさそ之を実行する処に到り、再びいすかの嘴とくいちかい常にもの足らぬ心地のみせりき、八日出にて陸奥の国八の戸〔八戸〕番町奥田定七方上野静氏より同地へ伝道の為移りし由はかき来りぬ、余返書出〔ママ〕ざす、

二十七日　曇天　安息日

午后四時頃長監〔長塩〕の妻君来り、波多野よりの金二円渡す、其砌り余は綿入羽織と胴着とを施与したり、時に雨降り来りぬ、余之より前三時頃秋葉氏へ至り貫一氏及秋葉氏の談話中、お鉞姉こと間野氏と別れ出京、昨今築地のヤングメン姉の啓蒙学校へ入らんと談般〔談判〕中の所、何か言葉の間違よりして校長吉田氏と鉞姉の間不穏の由に承り、余は今宵お鉞姉に注意する所あらんと決心して帰校しき、

二月

一日　雨天

〔欄外〕「豊田尚一君／馬込定雄君」

矢島君の賓客として紳士二人入来、最初思へらく之れ矢島君の郷里の客人ならんと、然るに矢島氏との話の際初て知りたり、両氏の千葉の方なるを、此に於て余は矢島氏の照会〔紹介〕により膝を進め

談話の列に加り互に姓名を名乗合ひたり、髭髪森々たるは五体少しく小なりと雖も世間に馴たる貌を有し名をば豊田尚一氏と申と、今一人は躯体豊肥にして愛興(愛嬌)挙動に隘(益)れ一見「クリスチアン」風の男にして馬込定雄氏と申なりと、同氏は千葉県庁農商務課の属吏にして早川叔父とは好く知れりと、尚ほ余か親父の事なぞ能く知り居り、余の親父にソックリなる事を語られたり、斯て余は千葉の様子を承り大に愉快を覚へたり、両氏今度出京の用向は会堂建築の件に就きミシヨンへ交渉談般(談判)の為めなりしとぞ、一時間程話(ママ)れ一時少し過去らる。

四日　晴天

一昨日より二十日間東京市内に同志会の大演説会催され、今夜は台町にあり

八日　晴天

今日は金曜日なれば赤坂教会の祈祷会に出掛く、会するもの余と新島君のみ、会了り余は新島君の寓に携れられ九時頃より十一時頃まで話したり、氏は語るに信仰上の実験或は其の理想・慈善事業中殊に貧民救済策・教会振興策・安息日学校教授法等を以てせられ、余益する所少からず

十八日　晴天

〔欄外〕「波多野承五郎氏関西巡廻ニ行ク」(28—2)

一昨日波多野承五郎氏より来状、曰く同氏今度九州地方へ巡廻に行く事となり、就ては留守宅寥しき故宿泊を願度と、余は直に承諾の返事差出し今夜参上す、時に風すさまじく塵の口中に入らんかと心遣たり、豊田氏・里見氏等来談、承五郎氏には今朝八時の汽車にて新橋を発せられしと、送人には三井銀行(28—3)員二名程に豊田氏なりし由、又随行員一人行たりと、勿論巡廻の要は三

井銀行の事なり

二十一日　晴天

豊田氏事愈々郵船会社[28-4]に入社する事となりしと、同氏自身にて申来り、皆様の喜鋭[喜悦カ]斜ならず、御伯母様の如きは此も神様の御助なりとて嬉び玉[給]ふも其筈なり、豊田氏の周施[旋]は中上川氏の為す所なりしなり、其本は承五郎氏也

二十六日　曇天　強風

豊田氏事朝鮮国釜山へ出張を命せられたり、

二十七日　晴天

菅子様・峰子様、高田様へ出掛られ午后帰参さる、午后六時頃関谷叔父入来、一杯傾け十時頃去らる、それより十一時頃豊田氏入来、暫く話され入浴后帰去さる、右は高田様にて豊田氏妻君御預りの事に就き関谷奔走さるゝ事にありき、

二十八日　晴天

〔欄外〕「承五郎氏の妙案」

菅子様の日記を左に記す、「二十八日　晴天　午前に帰り候処、少々わからぬ事有之候故午后まで居り、三時半におさくさんが関谷さんへ上り申候故留守を致しおれと申候故、留守を致し八時半に帰り候処、母上様が大層の御立腹にて誠に困りきり候」と、右はおさく様事豊田氏の妻君を高田様にて預らん事は承五郎氏へ対し且つ高田氏へ対しても遠慮の嫌あればとて関谷に到り、如何してか他家に預け呉れ度と申来りしが、関谷は直に其の不道理なるを云含め敢て取合ざりし

と、此より前おさく氏は之を鑄吉氏に話し鑄吉氏は之を母様に告げしなり、鑄吉氏の憤憂は又母様の悲哭する所となり昨夜は大騒なりき、然し関谷の尽力により右騒ぎも治まりたり、鑄吉氏は実に勤勉にして其の事務を為す時は人の事業までをも採る流儀なりとは自分も話し人も斯く認る処なり、然るに昨日一杯気元〔機嫌〕にて話さるゝ様、余は成丈仕事を多く引受くるを以て快とす、此度朝鮮に行ても岐度〔乞度カ〕人の仕事を取て見せるから見玉へ云々と、然して言るゝ様此の事は余学校にある頃兄君が教場にて語らるゝを覚へて其の如く為す事なるか実際然るべき事なり、則ち「人に抜でんと欲せば成丈多くの仕事を一身に引受て之を所理〔処理〕すべし、然らば他人の心付かぬ事を能く訳前〔弁え〕るを以て勢力の帰するは自然の数〔ママ〕なり」と、実に名言といふべし

三月

一日　大雪

豊田氏の為め大こりを同氏の寓居新富町に持行き、帰路三井銀行にて金子四拾円受取一時頃帰宅す、行掛は挽〔腕〕車にて少しく寒を感せしも帰路は歩きし為め大に暖かなりき、家内一同と共に承五郎氏へ書信認む、

二日　雨天

今宵は明治学院に同盟文学会執行さるべき筈にて余も切符五枚四拾銭にて求め、波多野の方々へ遣さんとせしも、天気悪しき為見合らるゝに就二枚を純吉氏に与へ一枚は山野氏へ送りしも無駄となりき、尚二枚は前に秋葉氏へ呈したり、此日芳郎氏を見舞しにランプ掃除最中にて多忙様に

てありき

三日　晴天　安息日

〔欄外〕「三月の節句」

東京にては節句にて雛人形の陳列及其の馳走は当家にても盛なりき、午后里見貫一君入来、続て高田母子入来、里見君と囲碁二番す、夜分歌骨牌会あり、すか子・みね子・さく子・千代・まつ・貫一君と余入更五六番戦ひ、余と貫一君は重(主)に負組にありき、

四日　晴天

豊田氏暇乞に来り、九時頃去らる

五日　晴天

〔欄外〕「豊田鑄吉氏朝鮮に行る」

豊田氏午后四時十分の新橋発汽車に投じ朝鮮釜山行の途に就かる、波多野にても皆様送に行れたり、尚高田様・亀右衛門・益太郎氏等も送られし由、余少し后て行き新橋へ着するや已に汽車は黒烟を吐き送人尚車側に往来せしも行き得ざりき。豊田氏妻君は高田様にて預る事となり、家具其他后の始末は関谷万端世話されし由なり、今夜承五郎氏へ書信認む、

十二日　晴天

〔欄外〕「豊田氏朝鮮国元山津に行く」

今暁人声するよと耳を傾くるや老婆様の声にて誰か来たりといふ程に、門外にて叩く音聞へたり、則ち婆やあさん起行きけり、此時余は直に電報なるべし、はてな承五郎氏に異変起りしか或

は豊田氏に何か変ありしや、豊田氏は已に釜山に着きたる頃なり、同氏にはあるまじ、如何にも心もとなく早く婆やあの持来るを待ちたる程に、奥様の声にて豊田様からにて……余は尚床中にありて后の声に耳を清し居たり…釜山から元山の方へ行く事となりし由申来りしなりと、余は漸く案しを晴したり、又敢て床を出てず其侭寝より聞きしを以て安堵し眠に就きたり、偖て夜明て電文を見るに、昨十一日午后四時釜山発電にて「イマツイタケンサンエユク」とありき、直に承五郎氏を初め高田・関谷・海老原の諸氏へはがきにて知せたり、

十五日　晴天

〔欄外〕「矢島君帰国す」

矢島君国許の義妹の病状宜しからず、当人事切りに矢島君の帰省を懇望する旨の書信来り、直に国へ帰りたり、時に余は已に波多野へ行きたる后の事なりし

十八日　晴天

矢島帰国の事は今日長山氏より聞きたれば夜分見舞状認む、又豊田氏より十三日元山津出の書信着、当地発后元山津着までの模様及び着后の様子等細く通知し越されたり、先づ安着の由、彼地は物貨〔物価〕余騰き由に申越さる、家内方の好便に托し承五郎氏へ寸紙認む、

十九日　雨天

栗田亀右衛門事最早老年に及び時事新報の小使は堪へざるべけれは引取れとは兼てより承五郎氏の申状にてありしも、替のもの見当らぬより今日まで延引せしが、同氏も愈々今日退社する事を得たり、又今迄の労を賞すとて賞与金壱円を受たりと、尚ほ同氏退社は下より上に到まで社員中

誰とて惜まぬものはなかりしとぞ、其苦なり、彼も元は一個の武士なりしなり、

二十一日　晴天

亀右衛門帰りたれば余は最早波多野に居の必要なく昨日去らんとせしも、亀右衛門も昨日は一日睡倒せし為め昨夜は波多野に泊り、今日午后家人の牛込より九段分捕品見物[28-5]の為め出掛と同時に暇乞しぬ、荷物多き故間近き挽[腕]車を頼み一時少前帰校し賃十銭遣す、今日午后一時より湯屋高輪亭に神学部卒業生送別会の催あるより川田繁太郎君を誘ひ同行す、先来の諸氏多く直に入湯、二時過開会渡辺君司会にて北野君の送別の辞あり、次で白石君の答辞あり、前后に讃美あり、最后に井深氏の祝祈にて了、此処にて菓子出で小河内君の自作の送別の詩を吟するあり、又同氏の滑稽演説及び鹿島君の滑稽演説あり、最后に柴山君の皿芸は見事なりき、興了るや夕飯出づ、なかなか盛なりき、之より前福引あり、其の札と賞品との間「なそ[なぞカ]」にて仕組まれしは妙なりき、余は捕獲軍艦てふ札を引き新のり一占を貰ひたり、斯て五時頃一同退去す、帰路杉本氏の寓に寄り長谷川・松村と話し六時去り、又秋葉氏へ寄り九時過まで話し……おかつ姉少し風邪の気味にて着床しければ其側にて話数刻、又奥平姉よりのはがきを見せ同姉の祖母君病重しと知せ来りしと告られき、其内に長谷川氏入来、帰には同氏と去る、奥平姉へ見舞状認め十一時過着床す、

二十二日　晴天

〔欄外〕「春季休業始ル」

学校授業も今日限にて明日より来月七日まで休暇となる、今朝六時に起き七時半頃より長山同道三田にて此帳面を求め一月一日此方怠り居りし日記を書初んものと思ひ以上は記臆[記憶]のまゝに書き

記しぬ、今日聞くに昨日送別会の費用は一人前十七銭なりと、但し出行は金曜会費と后は学校よりの分なり

二十三日　晴天

泉弥六氏兼て風邪にて加字木氏に係り居しに、今日にて六日なるも薬石其功見へす且つ見舞方怠るに就き品川の齊藤先生に係りたりと、余氏の為品川へ薬取に行きたり、時に伊藤恒太郎君薬局に在り、余と知り直に薬を整へ客室に招かれ暫く相談じたり、氏は去月の初旬脳病の気味に托し自営館(ママ)り其后又〳〵当家に来り薬局の掛となり居るなり、希くは今秋頃は明治学院へ再び入学する積にて、又行〳〵は神学部へ入学せん心組なりと、余其の志を称し帰参す、泉氏に来るや夫人のすゝめに従ひ泉氏の寝間に入り暫時休憩し帰退す、泉氏令妹来り在き

二十四日　晴天　安息日

〔欄外〕「中野かね子受洗す」

午前数寄屋橋教会に到り田村氏の説教拝聴す、中村氏に托して弁償金二円五拾銭、昨年十一・十二月分と今年一・二・三月分を峰尾氏へ送りぬ、波多野にて弁当を使ひ、一時半頃里見君を訪ふに貫一君気管の具合悪しとて休み居き、暫時話す中に伯母様材木町の講義所より帰参、中野の伯母様（かね子）も今日愈々洗礼を受けられし由、目出度事にこそ、今宵明治学院チャペルに植村先生の卒業生への説教ありき、主意は卒業生尚謙遜と崇敬の念を忘るべからずといふにありて馬太伝三章の十四節を詞に採り、ヨハネの謙遜を説き、シラエマーヘル（シュライアマハー）の「人は常に青年にてあれ」てふ語を引て結ばれたりき

二十五日　晴天

〔欄外〕「李鴻章(28—8)負傷」

午后少し風出づ、昨日午后四時三十分李湖(湖)章、談判所より旅館へ帰参の途路、群馬県人小山六之助二十六なるもの拳鉋にて李の面部を狙撃し鼻頂を傷けたり、但し極微傷なりと今朝の号外、若林芳郎君来校、兼て純吉君・長谷川君より当学院にてサッポート授与の学生募集の話を聞きしかば其の事に就き商議に来りしなり、午后三人にて散歩し夕飯后芳郎氏と同道、同氏は帰宅、余は波多野へと別る、今日は大に暖にして午后一重物を脱す、則ちシャツ・綿入・羽織となる、柔術の先生不参、峰子様試験点明(分)り九十六点なりと、今宵波多野へ宿る、波多野の下女篠崎千代に新約聖書を遺したり、千代は白金二本榎の人にて父は猿町(28—9)の屠牛場に出るものなり、蓋しその人は后父にて真の父は失ゐたるなりと、千代の性質は大に頼母敷ものあり

二十六日　曇天

朝来小雨午后少く晴る。九時波多野を出で十一時半関谷へ着し午飯馳走、四時過同家を去り、浅草福島に到り今宵初て同家に泊りぬ、今朝奥平姉より波多野へ向けばがき(はがき)にて祖母様の病状快方なりと報じ来り、且つ余が厚意を謝せられたり、

二十七日　曇天

〔欄外〕「明治学院卒業式(28—10)／大鳥圭介(28—11)氏／眼鏡の椽を替ゆ」

朝程小雨午后晴る、今日学校の卒業式なれば三造氏を誘ひ来る、

明治学院第十回卒業証書授与式

明治二八年三月

明治二十八年三月二十七日午後二時、明治学院講堂に於て

奏楽

一、聖書朗読

一、祈祷

奏楽

一、演説　批評（英語）　普通学部　末松多美彦（28-12）

一、演説　通有的観念（英語）　旧普通学部　政田辰治（28-13）

一、演説　歴史上に於るカルビンの地位　神学部　松永文雄（28-14）

奏楽

一、演説　卒業生諸氏に対する祝詞並注意　枢密院顧問従三位　大鳥圭介

奏楽

一、卒業証書授与　総理　井深梶之助

一、卒業生総代謝辞　普通学部　川井運吉（28-15）

一、同　神学部　好川二一（28-16）

一、賞牌授与

奏楽

一、祝祷　バラ教師

式后別室に於て茶菓を呈す、

今日来賓非常に多く殊に西洋人多かりし、三百人以上中五十名位は西洋人なりし、奏楽はピヤノ・バイヲリンの合奏にて妙齢の洋人之を為す、万事行届き先づ盛大なる卒業式なりき、末松氏の演中頃少し支へしも先づ無事、后二人普通、殊に松永君の演説は意味に於ては奇抜の事もなけれど同氏得意の弁舌は人々をして舌を捲かせたるが如し、大鳥氏の演説は大鳥氏に似合しき話にて先づ卒業后が肝心故、此后も未迄〔今迄〕の如く否今迄より一層の強勉と忍耐を用す、今日卒業するは舟の進水式を行ふが如し、此后は浪風暴き世渡を為す事故能々用心すべし云々と、卒業生姓名左の如し

普通学部普通科

樺島樸(28—17)・熊野春江(28—18)・篠原耐(28—19)・末松多美彦、

旧普通学部

秋葉鑑次郎(28—20)・浅見好太郎(28—21)・平野円(28—22)・川井運吉・政田辰治・中沢貞蔵(28—23)・八木篤造(28—24)

神学部

赤須広(28—25)・千屋和(28—26)・河田繁太郎(28—27)・松永文雄・笹倉弥吉(28—28)・白井胤録(胤侵)(28—29)・白石喜之助(28—30)・鈴木直丸(28—31)・竹林寅蔵(28—32)・好川二一

同別科

白土弥之助(28—33)・竹内平八(28—34)・鵜野市太郎(28—35)

懸賞文は和文にて浅見君之が授賞者たり、尚今日は福田錠二(28—36)君、朝鮮の学生二人高義駿・姜璟熙(28—37)を携れ来り、人々の注目する所となりき、式后別室にて茶果(ママ)の馳走あるとき余等も共に居合、し

明治二八年三月

んみり容貌を見たるに両人とも日本人に髣髴にて中々美男子なり、服装は矢張彼国風のものなりき、后に聞けば両氏は朝鮮にては日本語学校を三年にて卒業せしものにて日本語も達者なりと。一二三屋[28-38]より「基督教と学術道徳[28-39]」を取寄す、此日福島氏と二度秋葉氏へ行き同氏は八時頃帰らる、余札の辻まで送りぬ、昨日本郷警察の前にて眼鏡のわくを三十二銭にて替へたり

二十八日　曇天

〔欄外〕「三月の節句」

明方より唐風吹き夜分将に着床するまで止まず、エリー氏の社会学の定義を写す、今日は旧の三月の節句なり、田舎にては賑わしきことならん。長山君泊りに来る、氏語るに此后事業を為さんとせば宜く其の為めに身を捧べし、余は西郷の伝を読み大に感ぜり、勝伯西郷を評して彼は弟子の為に彼等としゆん死〔殉死〕せり云々と、大に所感を分たれ余も今更の如くに感する所少からず、長山君亦曰く、我侪今や他日社会に為さん為用意最中なりと雖も何が為に学ふが〔ママ〕何の必要ありて他日社会に事業を為さんとするか、之れ最も留心すべきなり、之に就き最も肝要なるは時勢の趨勢に感じ身を国家（詰り神の国）の為に犠牲に供するの覚悟なかるべからさる事なりと、又曰く読書は注釈の如きものなれば本文たる我侪各自の思想を錬養涵條せん事こそ肝要なり云々

二十九日　雨天

午后泉君の病を見舞、品川齊藤に行き診察の為来らんことを促し、帰路再寄りしに、妹君已に品川へ行けりと。柔術の教師に今月分謝礼金五円と先月分の滞金五拾銭を差上たり、学校チャペルに台町教会の親睦会並に好川・鵜野君の送別会ありき。今日は昨日に打て替り少し寒し、

三十日　晴天

午前三田製本屋に到りスケッチブック及び倫理書を頼みたり、午后純吉君と麻布へ行き先づ若林君を訪ふに、同氏明治学院入学の件に就き国元へ懸合たるに、祖父様よりの返書昨日着したるに到底月謝・舎料までは国元より差送り兼る旨申来りし由にて、余も其の手紙を拝見したり、それより里見へ行き茶菓馳走になり、三時頃波多野へ到るに家人は汐乾に行きたりとぞ、暫く休憩し純吉氏の草間様へ行けば同道如何といふより同伴し、草間様丁度在宅にて数刻話し四時頃帰去す、草間氏の話に日清講和談般（談判カ）の大要は李氏未だ負傷せざる中にほゞ纏り居りしものにて、内々の話を聞くに盛京省□方に台湾と償金二億五千万テールにて講和整ひたりとの事なり、但し調印及び土地分割の規約未だ画然（俄然）相定まらぬ故公報なきなりと、又里見老母の話にお鋭（鉞カ）姉事又〳〵破談となり、近日引取るべき様先方よりの申越なり云々と、余等草間様より帰路波多野へ寄りしにお鋭（鉞カ）姉已に居りき、蓋し余は遭はず、三田にて本立を十八銭にて求む

三十一日　晴天　安息日

午前八時半頃より長谷川・村松の両君と赤坂教会に到る、村松君説教さる、弁当を波多野にて食し一時半より家内一同北郷氏の講義所（28-40）へ行き説教を拝聴す、会するもの十名ばかり、三時散会、帰路一寸中野へ寄り暫くして去り、若林芳郎氏を訪ひ其より帰校す、お鉞姉昨日波多野へ来り、今日も講議所へ来られき、今日国元親父よりの来状に芳郎氏明治学院入学の件に就き初は祖父も頑然否拒されしも、親父・里見叔父の勧より漸許容するに至りたりと、

四月

一日　晴天

〔欄外〕「波多野承五郎氏帰京／桃花」

朝九時頃波多野へ行き、承五郎氏を初め家人猶朝飯前なるは昨夜承五郎氏の帰宅遅かりしが故ならん、承五郎氏より西国土産話縷々拝聴す、十一時頃お鋭(鉞カ)姉入来、承五郎氏に何か話されたり、余一時頃退き本郷関谷へ行き今宵一泊す、今朝理吉の所へはかきにて通知せし為彼も七時頃入来、余は懇々諭して九時頃帰しぬ、余の歯根此頃に至り益々盛に磨滅する事なるが、理吉も此頃は少々快くなき由にて、余は他日薬を関谷まで届置由にて話したり、力に三銭五厘(ママ)マの手帳を呉れて遣しぬ、桃花盛なり、野寺の念仏断切すべし。

二日　晴天

〔欄外〕「第一東京中会春期例会／宮川巳作(28-41)君病に罹る」

第一東京中会を芝教会堂に開かる、余九時頃本郷を出でたれば井深氏の説教(28-42)の間に不合、入口より赤須君と帰校す、同氏より聞くに井深氏説教の主意は、兇漢小山の如きものゝ出る様にても我国は文明国なりとは揚言難ければ実に基教の必要益々切なり云々と、伝道の務急なるを説かれしなりと、十一時半帰校、純吉君に合(会)ひ、宮川君昨夜より肺黴症(28-43)に懸り昨夜は四十一度の熱にて諸氏殆ど不眠にて看護せりと、昨夜高山といふ医師に掛り、氏は今日二度見舞に来たり、今朝三十九度少強、正午四十度、午后一時半三十九度強、夜六時三十九度強、同八時半三十八度半の熱度ありき、今宵秋葉夫婦・長谷川・竹内・早川・其他諸氏来訪、余談数時間、病人の為めには

如何かと思れたり、九時半頃マクネヤ氏小使中村姉より薬を持来り十一時過飲ませ、余もそれより着床しぬ、食事は牛乳五勺と玉子、夕には重湯一杯、今宵初て蛙声を聞く、先日関谷へ地袢〔襦袢カ〕を注文し置き今日貰ひたり、費用四十銭馬鹿にならず。

三日　曇天　神武天皇祭

六時半頃中村姉来訪、余此時起床、其前病人自ら熱を量りしに三十七度半なりしと、八時半医師来熱を量る、矢張三十七度半、併し今迄は右側のみ悪かりしも今度は左側の方も少々かぶれ気味なれば用心すべし、今日中三十八度以上の熱出ざれは安心なりと、余十時頃薬を取に行き一寸秋葉氏へ寄り数刻話し来りぬ、午后一時量温三十七度七部〔分〕、余も三十七度五部〔分〕程ありき、病人食事は朝重湯一杯に玉子二つ、午食には玉子一つに重湯半杯、尚朝は牛乳五勺入る、午后三時中村姉来訪、此時量温三十七度八分、四時半医師来量温三十七度九分、同十一時過試むに三十七度九分。石田平三郎(28-44)君か会に来る、一昨一日の夜は関谷にて叔母・叔父初め祖母様の前にて始て公然教を説き聞せたり、今更公然と説き聞せたりとは実に慨然たらさるを得ず、然し叔父は頻りに祖母様の教に入らん事を望むものゝ如し、又一体基督教には賛成を表せり

四日　晴天

〔欄外〕「好川二一君西京へ行く」

朝六時頃病人自ら温を試む、則ち三十八度、八時医師来同様、余九時頃より秋葉氏と同道教会の中会に行き、二階にて純吉氏及び竹内氏と弁当を使ひ十一時過神田に到り、余は兼て注文し置きたりし名刺を受取り、純吉氏の万国史を一円三十銭にて求め四時頃帰校す、食后秋葉氏へ行き石

田君と談じ種々郷地の模様を聞きたり、かつ・さく姉を初め石田・純吉氏等八時頃より三田の縁日に行かる、余九時頃帰校す、今日石田氏の談話に波多野老母事昨夜病気少し重かりし様子なりと、好川二一君今午前十一時五十分の汽車にて西京に出発せり、氏は今朝余に写真一枚を贈らる、午后大石君来校面会暫し話しぬ、第一中会も今日限りにて了りぬ、宮川君の温度十二時頃三十七度七分なりしが夜分尚変なし、夜長谷川来談十時去る、

五日　曇天

〔欄外〕「桜花」

謂ゆる花曇かしら、今朝は五時半起床、御殿山の近くに散歩し雨模様なりければ帰りぬ、桜花追々盛ならんとす、芝山内・品川御殿山、今日は将に四分通の咲花なりと、宮川温度朝三十八度、正后頃三十八度一部〔分〕、時に余已に麻布へ行き留守なりければ早川氏医師を向〔迎〕に行き医師来る、則ち三十八度一分、夜分秋葉夫婦見舞に来る、江田氏昨夜は秋葉へ宿泊、今日麻布の方へ行けり、余純吉君と同道波多野の老母様の病を見舞ふ、其砌り里見・若林等を訪ひ四時頃帰校す、矢島君四時半頃帰校す、

六日　晴天

午前は謂ゆる花曇、五時半起床、六時より御殿山へ桜見物と出掛け七時過帰校す、宮川氏の病大部宜しく今朝は温度三十七度六分なりき、一時頃三十七度七分、長谷川君の祖父君病気なりとの電報昨夜着、長谷川君の母堂は今午前十一時の汽車にて出発、余と純吉氏送りす、此際長谷川氏の用意周到実に感すべきものあり、氏は大森まで伴乗送り行れたり、秋葉せい子氏試験上出来に

て一番となりし由大喜に渡らせられき。今日は頌栄学校の卒業式にて坂崎姉は今年首尾能く卒業したりといふ、宮川君昨日頃よりせき増加す、宮川君の友人にて東洋英和学校に在る島津岬氏訪問す、夕方三十七度七分、夜分三十八度一分、五時頃宮川君の兄君入来す、則ち宮川氏の病状見舞の為なりと、名を辰作といふ、宮川君の側に寝ぬ、余小倉氏の母堂の病を見舞ふ、

七日　曇天　安息日

八時半までに赤坂教会に到り井田氏の子供等の組の聖書の講義を為し、一先日曜学校の閉会を為し、郡山君説教する〻〔ママ〕に付き余司会す、波多野へ寄りしに老母様尚ほ不快にて御様子を伺ふに、全く胃弱より起りしものにて今日頃は単に胃のみの為め食事意の如くをさまらぬ由、妻君北郷氏の講義所に行かれぬ、宮川氏温度は朝三十七度五分、正午三十七度七分、夕三十七度五分

八日　雨天

宮川氏温度三十七度三分は朝の事、今日より牛乳を飲む（余）

九日　晴天

宮川君起床す、但し学校は尚此週間は休ます積なり、余好川君の遺物品を郵送す、馬場茂策(28—45)君昨夜四十度程の熱出で今日尚三十八九度なりと、

十日　晴天

津久井氏昨夜は秋葉氏へ宿泊、今朝早く上野より帰国の途に就きたりと、午后具合悪しきを以て着床、純吉氏して秋葉氏よりキニイネ(28—46)を貰はせ服要〔服用〕就寝す、時は六時頃なりし、純吉氏の寝ねしも現つゝ覚なりき、今日長谷川氏余に贈るに改正英訳の聖書(28—47)を以てす

十一日　晴天

午前七時起床、洗顔尚ほ熱気有さうなれは再び就床粥を取寄す、十一時起床、午后の稽古に出席す、但し一日気重なりし

十二日　晴天

〔欄外〕「断間食」

植村先生の哲学の時間には今日は十字架の日[28-48]なるを以て平常の講義は休まれ先生の励めあり開散〔解散〕せり、尚ほ午后の稽古も休となり一時より祈会ありき、休業の事は植村先生の発意と知らる、長谷川君来り、同氏の祖父君は遂に永眠せられたる由、又奥平姉の祖母君も兼て病気の処之またみまかりたる由語らる、さる程に正午頃波多野より手紙参り不敢取封を切りしに奥平姉のはかき一葉あるのみ、則ち拝見す、果するかな祖母君永眠の報知なりき、午后十時過奥平姉の為見舞状認む、種々申上べきことありさうなりしも心穏かならずして得かけず、御祖母君のみまかりし后にもあり、旁々復活祭の時節なれば聖書を読み或は祈を為す事に時を費すやふ申上たり、午后長山・矢島の両氏と三田に散歩し、せい子のためそろばんを買ひ其足にて同子に遣す、余は今月の一日より間食を断たんと決したれば今日せい子の誕生の祝食も避けぬ

十三日　晴天

〔欄外〕「実験的超自然の感応」

宮川君の兄君七時半頃帰国に就かる、午前八時散歩旁竹林君を訪ひ長谷川裕[28-49]君に久しぶりにて面会す、夫より小倉氏方へ行き母堂の病気を見舞ふ、大に疲労され特に咳喘甚しく見て居るも気

の毒なりき、時に野村氏あり喘息にはへちまの水こそよけれ愚妻も之にて大に助かりし事ありと語らる、余則ち和久井薬店にて弁じ直に間に合し上けたり、小壜ごと六銭なりき、実験的超自然の感応余近頃引続て不思議なる感応に接したり、其由念の為め記し置かん

一、去る五日の午后四時半頃夕食を済したれば例の如く椽端に出でやふぐをつかひつゝ長山・石井・手島・鈴木其他の輩と戯れつゝ耳語きける程に、石井君余の前に来り余か左手を取り「君！矢島君は何時帰ります？」と、余は兼て今明日頃は帰校すべしとは信ぜしが、余は石井君の問と同時に直に同氏の顔を守りつゝ右手もて芝生の運動場に指差し（其時尚ほ余が目は石井氏の面にありしなり）「矢島は彼処へ帰り来りたり」と語れば側なる長山氏は「うゝ、矢島君…帰た」と、余は其時運動場を見送りたり、其うちに衆皆な「矢島君帰れり」と叫びぬ、其時余は二人の此方に歩み来るものを見留むと同時に衆の叫声の如何にも真底より出るが如く、只だ余が石井君に戯れたるに応言せしなと思ふ余裕もなく両人の近くを守りしに、右方の一人は鑵を携へたれば田島氏と先づ知り、それより少し近て左方なる人の手荷を揺りつゝ歩む恰好さも矢島君に似たりき……愈々間近なりて初て矢島君と明りたり、嗚呼何等の奇事ぞ—余は此事を以て世に謂ゆる「噂をすれば影がさす」といふ事を以て無頓着に捨置き難きなり、

一、同じ日の事なりけり、余は昨日伊志田氏より波多野の老母事、去る三日晩突然病気に罹り氏の波多野へ行きし時なぞは大騒ぎにてありき云々聞き、余は其翌日即ち五日の午后純吉君と波多野へ見舞に行きたりし、病気は兼て胃弱の上に時候に中てられ風邪を引き一昨夜は逆恙

明治二八年四月

したるものゝ如し、則ち余は其の様態小倉氏の母堂の持病に大に似たる処あるに心付き、それより帰路小倉氏の母堂の事誠に心掛りて、或は今日頃は持病発生せしやも不知と心に浮びし其の感覚の何と常ならず、今明日中には見舞ふなと思ひき、斯て帰校宮川氏の枕頭に看護するうちに、夜の八時半頃秋葉夫婦宮川君の見舞の為入来す、其砌り夫人申らく「私は今橋本の奥さんに邂逅せしが、小倉様の母君は昨夜大きに発熱され三十九度程の様子に承りぬ」と、余は此を聞き昼間（晩景）の矢島君に関しての出来事と思合せて何とも不思議千万と思ひたり、

十四日　雨天　安息日

〔欄外〕「基督復活日」

昨日午后よりの唐風今朝も尚甚たしく道路の塵烟を吹上る様実に閉口の外なかりし、余教会に至るに行掛は右風塵に閉口し帰路には十一時頃より篠衝(ママ)く雨となりしかは、時后なば尚道も悪しくならんと、即ち暴雨を犯して帰校す、説教は杉本君之を為さる、里見にて聞ば波多野の老母様快愈して昨日は教会へ行と、今日はキリスト復活の当日なり、余近頃該事件に就き研究最中なり、幾分の甲斐あれど未だ纏らず、

十五日　晴天

〔欄外〕「クラスミーチング」

国元へはかき出し神学生入用なら早く催促すべき旨注意す、尚ほ衣物の相談をも為し送りぬ、午后波多野へ行き西洋いちごを植換へやり間もなく帰校す、花咲き居りき、今宵七時より山野君の

室にてクラスミーチング開かれ、初に矢島君司会となりて祈会を為す、千磐君は感話を為して曰く「吾等入校已に二年となり今に及び如何なる事を学びしや、教理上の事に就ても順序を正して組織的に人に証明するの力なし、学力といゝ思想と云ひ信仰と云ひ誠に得る所少きが如し、実にこんな事にては仕方なし、之れ余の今に於て惜む所なり、いで諸君互に心して神の前に日々怠なく精神的修養を勉めん」と、和田氏の報告に池君父君の病にて帰宅せしが同氏より「父病よし」の電報れりとぞ、余其の感謝の為祈りす、其の数名のもの祈りて祈会を閉づ、それより茶菓出で続て「トランプ」の勝負あり、后に腕角力・脛押・首引・枕引・額押等の勝負あり、歓を尽して散ぜしは十一時頃なりき、今日の委員は矢島君と群(郡カ)山君なり、会するもの池・河野君を欠くのみ、バラ氏帰校す、

十六日　雨天

長谷川君余を岐阜の奥平氏に照介(紹介)し彼地の伝道の為、此夏出張の依頼に応ずべき旨推挙せりと告げらる。

十七日　晴天

〔欄外〕「千代の実家／ミスペレー姉／警語／実験」

竹林寅蔵君今度高知県に伝道の為出張することゝなり今朝八時の汽車にて出発せり、余等送る、午后ベースボールを為す、久しぶりなれば意の如くならず、今宵波多野の下女千代女の実家岩崎といふを見る、門外に小屋をひかへ先づ田舎の小農風なる景光にて庭内に苗場あり、側に梓弓の老翁彷徨せるは農事の小仕事なりしならん、彼は余が入りし時一寸変に思し様なりしも、余は本

家の主婦の前に至りし故翁は何も挨拶せず外に出行きぬ、余は主婦に向て先づ当家の千代女の実家なるやを聞き、余は波多野にて彼女に世話になりしを告げ、其縁故より今見舞し子細を話しぬ、然るに主婦は初の程波多野の事は更に知らざる様子なりし、之れ千代女のよく知せざるによりしと見ゆ、故に余は波多野の番地を知せたり、余は余り多く話さず重(主)に主婦の談話を聞きたり、彼は千代の事を初め家内の事情を少し語られたり、小供も三四人徘徊せるを見ぬ、余は小児の為リーフレット十枚程を与へたり、主婦を初め小供の嬉一方ならぬ様子なりき、斯て再来を約して去る、主婦は其時仕事を為し居りしが余の為め茶も出さで帰すを謝れき、主婦は千代に似て律儀ものと知られたり、……千代女は今の父なるもの義父なるの故を以て実家に居るを忌むものゝ如し、之れ千代女の直話と母親の話より知りぬ、それより秋葉氏へ行き長谷川君に会ひ、また氏の寓に行き同道台町教会の祈会に列す、会するもの二十四五名、石原先生(28-50)司会、先生の励の主意は「伝道心を振起せよ」といふにありて、築地三一教会(28-51)のミス・ペレー姉の働きを照介(紹介)して吾人も宜しく彼婦人に效ふ所あるべしと、蓋し彼女は今より八年前に来朝爾来熱心以て伝道に従事せり、姉は元と身分善きを以て自給の運動を為し、自ら学生男女二十名程を雇ひ、専ら京橋区に布教し特に佃島の如きは元と貧民・未開の凡夫の群居地にて、かふるに本願寺の檀(檀家)下に属するもの多ければ、従て教には耳を傾るもの稀有なりしが、今日にては彼の佃島より三一神学校の教会に通ふもの毎安息日に五十人の上に出ずと、而して姉は今数年を過きば佃島全島を主に導くの望ありと、今姉の運動の方法の一例を聞くに、姉は或る機会を得て未信者と接する事を得は直に其姓名を控の手帳に記し、其人の為り祈(ママ)り若し其の祈に由り神の容れ玉(給)ふ如き徴あらば直に

他の欄に其人の名を記し以て記念とする由、今宵五六名の者祈り且つ励めしが何れも簡単にて真卒なりき、余は牧師の勤めを初め兄弟等の祈る処を聞き大に自ら悔悟する所あり、感慨交〳〵迫り胸凝りて自を失する事数刻――、余は今迄伝道に熱心ならさりしを悔ゐ、左の警語を思出しぬ、

一、伝道の精神は個人的の心意に同情を表し、或る個人の品位に敬畏と親愛を以て接するにあり

一、悪を為すは固より罪なり、然りと雖も善を為すべき機会を得なから尚ほ之を実行せざるは罪なり、

一、明日ありといふ勿れ、今こそ吾か事業を為す時なりと知るを要す、

実験

一、今や世の人道を伝ふるに其人を撰ふの傾あり、則ち貴人富人と見ば之に道を伝ふるの機を伺ふも、貧且つ賤なる下等社会の人々に向てはさまて心を用ゐざるか如、而しては日本国民とか下等社会なぞといふ大なる形容付の要求とならば、之が為か全力を尽して其の救助策を講するなり、されどある一人の市民、貧民を救助せさるべからざる機会に際会する時に於ては往悖々之が尽力を惜むもの〻如し、嗚呼何等の事ぞ、事の順序を誤り人情の真想に悖るの甚しきものならすや、余之を憂ふる事久し、之れ畢竟個人の品位を重んせざる跡に職因するものか、然るに余は頃日或る一人の青年に対する待遇に就き深く悟る所ありたり、則ち二本榎の一理髪店の青年主人は余が日頃の得意者なりき故に余は度々彼処に行くなり、而して一日彼に向ゐ教の話を試みんと思ゐ先づ彼の嗜好の何にあるやを問ふたり、則ち小説を好むや寄

明治二八年四月

席を好むや酒を好むや云々と……然るに此時余の心を突き且つ悔悟せし事は余は此時初て彼に向て「アナタ……デスカ……ワタクシ」といふ言葉を出せし事之なり、余は其より以前は彼に命令語の外は皆な極く目下に対する口調にて語りしなり、此事は余をして一度は可笑しく感しさせ、再び驚と恐れを感せさするに至りたり、則ち余は悟りたり、余は今迄で彼に教を伝ふるの心なき時は下等なる言語を使用し、今や教を伝んかとの心を以て語るときは右の如き華語を使用するに至りしが、此処に最も寒心〔ママ〕すべきは、余は今迄で彼に対し幾分も伝道の心を持たざりし事及び其他の謂ゆる余より目下の人々に対し道を伝ふるの心を持たさりし事なり、而して余は疑ひを起したり、吾人は上下貴賤の別なく何人にも機あらば道を伝ふるの責あるを知と同時に、道を伝ふるときには言語の使用もなるべく同等温和なる口調を撰ふは人情と知らば、謂ゆる下等社会に対する日々の言葉つかひは如何様にすべき乎、依然目下に対する口調を採るべきか余は断然之に堪ゆること能はず

十八日　晴天

〔欄外〕「身体の重量」

朝霧深く夏模様の景色なりき、昨夜長谷川君の寓に行きしとき、氏は余の忠実に且つ熱心なる人物故、貴下に照〔紹〕介すと申送れりと聞き、其時余は身振〔匁〕したり、昨日品川にて身体の目方を量りしに余は十三貫百目〔匁〕ありき、尚矢島君は十三貫五百目〔匁〕なりき、今日午后田中にてクラス全体の写真を取〔撮〕りたり〔28—52〕、但し池君独り洩る

十九日　晴天

〔欄外〕「若林君入宿」

朝食前に三田へ散歩す、其時第五リーダー及改正英訳の聖書の聖本(製カ)を注文し来る、若林君は去月明治学院入学に就き家父に止めらしが再び許され今日寄宿に来る、

二十日　晴天

〔欄外〕「大学青年会の演説会」

矢島・長山の両氏と十時頃より神田青年会開館(ママ)へ行き、途中宮城前の小丘にて午食の弁当を使用し、十二時頃会館へ着し、三人共昨日貰ひ置きたる切符を置忘れしかば、同館前の小店にて貰ひ入場するや早四五拾名の先来居たり、左る程に続々入来、軈て一時頃に至りては入口の戸は閉鎖するの止むを得ざることとなりしに、四方八方の窓より流水関の間隙より送り実に制限なきが如き有様なりき、一時少し后松本又太郎氏(28—53)司会者となり納所氏の奏楽あり、次に原田助氏(28—54)の祈祷あり再び音楽あり、其次に松本氏の開会の主意を延(述)べられると、其后第一番に和田垣謙三氏(28—55)の「青年論」てふ愉快なる演説あり、第二番目に大鳥圭介氏の日清文明の比較(28—56)てふ題にて極実着なる演説あり、最后に板垣退助氏の「青年処世の法及国に対する本分」(28—57)といふ主意にて滔々懇々歴史的考証を利用して遺憾なき演説を為されたり、余等六時半頃帰校す、会館を出てんせ(ママ)し時は四時少過にてありき、会館満人立錐の席なかりき、尚今日の演説会は帝国大学の青年会員の催に係るものにて尚此后暫々かゝる集会を催すべしとぞ、午后七時頃秋葉氏方へ行き暫く話し居る中に、佐久間吉太郎(28—58)氏長谷川・泉の両氏と入来す、佐久間氏は此度九十九里教会を辞職すとの旨

申されたり、余九時頃長谷川君の寓に到り互に身上話に時を遷し、十一時頃愈々同氏と相寝するや同氏は尚新島氏の事業語り出で、軈て全く睡みしは一時過きなりき、

二十一日　晴天　安息日

〔欄外〕「河合亀輔(28—59)君赤坂教会に働かる」

今朝八時起床、長谷川君同道賄の所に来り朝食を為し、八時半頃出発赤坂教会に至る、フルベッキ氏の説教あり、尚晩餐式ありき、数日前来れりとて河合氏夫婦の入来するに会ひき、教会員も追々出席者多く二十五名程と見へたり、河合氏は則ち今日より当教会の為働かるゝ事となりしなり、余十一時過より本郷関谷へ行き弁当を食し、叔母様に教理の話を一時間程御聞せ申したるに大に悟られたる風情なりき、関谷を四時半頃出で直前にてボーラクス半「パウジト(パウンド)」十二銭五厘にて求め、直行波多野に来るや老祖様尚床にあり、脳の具合宜からずと、夕飯馳走后七時半頃退き教会に至り河合氏の説教を聞き、九時頃新島君と同道同氏の寓に来るや長谷川君腫物をとかめて歩行兼はず、則ち着床するを見舞、十時頃退き十時半帰校直に臥床す、今宵の集十二三名なりし。今日教会費（修膳(繕)費のこと）六十銭、則ち一月より今月分を払ふ、

二十二日　晴天

二十三日　雨天

朝飯前長谷川君を見舞ふ、同氏は昨日新島君と帰宅せしにて腫物は蔭部に出来たるにて医師の診断には一週間を経ば快愈すべしといへしとぞ、午后また長谷川君を見舞、新島君の書生児同所仕事を働に来り居りき、余は天父の御祐助により本年中に左の諸兄姉をキリストイエスに導ん為に

労働し、且つ之が為祈らん事を盟約す、蓋し之を以て第一部とす、関谷鉄子・岩崎千代子・若林種房・関谷〔　　〕・波多野菅子、又境遇の危険なる位地に在り或は病気等の煩あるものに祝福あらんことを求むる者左の如し、豊田鐺吉・鳥羽権三郎・山田理吉・小林鉞子・矢島氏の妹・波多野の老叔・里見貫一

二十四日　晴天

長谷川君の寓に至り病を見舞ふ、今日田中より余等同級生十二人連撮の写真持来る、三枚壱円にて一人前二十銭なり、

二十五日　晴天

今日久しぶりにて柔術を為す、蓋し先生病気にて欠席さる、午后矢島・長山の両氏と三田に散歩し、余は兼て注文し置なる整本を持来る、やふぐ新調す、

二十六日　晴天

〔欄外〕「金曜会」

金曜会あり、余弁士に当り「羅馬教会の迫害に就て」といふ題にて談、迫害は基督教と羅馬帝国政府と衝突したること、詳言せば羅馬の国家主義と基督教の個人主義の衝突せし事を話したり、是より前席に矢島君は「日清戦争と基督教徒といふ」〔ママ〕といふ〔ママ〕題にて教徒の戦争中の事業を述られ、最后に山野君は哥林多前書二章の句を引き伝道者は宜しく証人となるべしと簡単に説明せられたり、長山・国沢両君の適評あり、九時半閉会す、会するもの十二名程にて司会者は郡山君なりき、

明治二八年四月

明治二八年四月

……御心〔親〕切にも品川まで御送り被下万々厚ふ御礼申上候……御別れ申上てより四人にて赤羽まで参り渡辺姉に同所にて別れ申候、其后三名にて小諸まで参り中村姉と相別れ申、夫より上田に一泊し明朝車にて出立、途中誠に困難なししも外一人の車屋の為め余程助けられ、あやうくも車輪はづれかゝり、なげをとさるゝ場合の処を后より気を付けられ、なんなくあやうきものがれ、午后五時当地に安着致し候、只今は無事に働き居り候間、乍憚様御安心被下度御願上申候……当年は昨年よりも余程困難なる様に覚へ申候、併し未だ十分様子も知れ申さず、救〔求〕道者にては喜びくれ候へども内部に少々困難御座候間、実に私の力にて其のちょうわに困り申候、願くは暑中だけにてもよき伝道師を送りて戴き度と一人しあん致し居候、御存の通り飯島氏はおとなし過ぎ、妻君はあの様なる人故色々なる不足もきくやふに見へ、誠に困入り申候、何とぞ九月迄十分堪忍を為し、神の御名をけかす事なきやふに御熱心なる愛姉の御祈あらんことをねかい上候、何卒おひまもなかりしならんなれども種々御教諭被下度御願申上候、末なから先生初おせい様へも宜敷願上候、色々申上度事山々なれども后便に申上候、かしこ

四月二十一日　　とし

愛する

秋葉おかつ様

かへす〳〵も時下折角〔折柄カ〕御用心の程願上候、写真御送り申上候間かわりを御願申上候……云々

右手簡は余が頃日秋葉氏より拝借して通読せる教会歴史〔28—60〕中に挿みありしものにて、としとある

は阿知波姉の事ならん、中に松本なる伝道者の様子なぞあり、吾人の参考となるべきことと思ひ念の為記し置く、但し四月二十一日は明治二十七年の事なるべし

二十七日　晴天

〔欄外〕「聖書の友の大会」

今日は大久保躑躅園[28—61]に聖書の友親睦会開会さるゝを以て弁当持にて長山・矢島の両氏と十時頃より出発、麻布六本木の竹内君の寓にて休憩、弁当を使ひ青山を経て大久保村に着せば一時過ぎなりき、園中固より大屋なかりければ衆皆な野天に晒れつゝ、先づ二時頃津田仙氏の会司〔ママ〕[28—62]の下に祈祷会を一時間余り開き数名の感話及び祈祷あり、了て菓子の配布あり、余等三時半頃帰途に就き、新宿より汽車に投じ目黒に下り大崎の田中整皮所を見物し五時帰着校す、今日集るもの百二三十名と知らる、今年は聖書の友の社会〔ママ〕に新参もの多く為に開会の順費〔準備カ〕十分整はざるの嫌ありしは遺感〔遺憾〕なりき、会費金五銭也、されば今日は全体として余り盛大なる集会には非りしも、余又益せし事少からず、

一、今日津田氏会を始めんとして先づ新撰讃美歌[28—63]の中より歌を出されしに、会衆の多くは聖書はいふまでもなく讃美さへ用意し来らざるもの十人が内九人まで、然るものから大に差支たり、特に会衆中新撰讃美歌を使用せざりし美々〔美以〕教会員の多き為め新撰讃美歌を暗唱するもの至て少く実に不都合極めたり……、是より前余は昨年十一月三日小林格[28—64]氏の送別会を麻布の共楽館に開かれし際、途中にて純吉君の聖書・讃美を左手に控へつゝ来るに会ひ、余は純吉氏に向ひ「今日は何の集りありて然かく聖書と讃美を持参せしや？」と語りしに、氏答

明治二八年四月

て曰く「別に集りとてあるにあらねど若し入る様なる時の用心に持来たり」と、余則ち軽授して分る、斯て共楽館階上将に田中太郎君の司会に依り開会され讃美を出されしに、折しも十六七名の会衆中讃美を用心し来りしものは唯だ二三名に過ぎず、此時余は先刻純吉氏の讃美及び聖書を携へ行かれしに思付き、彼が心用〔ママ〕にひきかへ己が不注意に驚き、唯た〳〵不覚を悔むの外なかりき、隣席に笹倉弥吉君座すに氏も又余と同感大に悟りたる処ありしが如し、余は斯く昔日の事など思出しそゞろに猛省の念禁じ難かりき、

一、又笛木某氏励を為して曰く、九州のさる処にて頑母其子の高音にて唱ふる祈祷及び聖書朗読に感じて改悔せし事あり云々と

一、津田仙氏曰く余高崎市に行きしとき実に喜ばしき事ありき、則ち当地の会堂へ行きしに宛〔恰〕も星野氏説教を為さんとする処なりしが、余が入るや間もなく津田氏の見へれば同氏に一場の説話を依頼すと告げながら講壇より余の許に来り頼まれたり、此より少し前入場するや余は是非共も当祈励め度事ありける程に、斯く星野氏よりの依頼に接し実に何とも…神様の御示しと外思れずして、それより特意に所感を述べし事ありけり、又聴衆も余が話により是非に感せし様に受取られたり云々と

今日帰校するや父よりはがき来り居り、曰く昨日早川より電報に接し二時松尾を出で、昨夜早川へ宿り今朝関谷へ早川同道来りぬ、今宵は関谷へ宿る（安部井事件にてなり）と

二十八日　晴天　安息日

〔欄外〕「父、早川叔〔ママ〕と上京す／安部井家の変」

矢島君と同道七時出発九時本郷へ着、同氏と別れ関谷に到る、則ち早川・父在り、父より安部井事件を物語らるに一寸驚入たり、則ち安部井家族はる十四日早川叔採賓にて東京へ移転したるに、当夜主人尚氏は児某氏（十四才）を堀中に陥れたるも、児は幸ひ匍匐して登りしが軈て警官の知る処となり、それより尚氏の処業も公なる事となり、尚氏は今や預審にありて不日判決すべきが或は謀殺未遂罪に定るやも知れざる有様にて、父等の上京は之が為其の后始末に来りしなりと、尚委細は小新聞に出でたりといふ、正午には両人及び順・松下の息子春太郎氏等と池の端蓮玉麺麦店に登り中食し、上野の博物館を見物し再び関谷へ来り、夕飯后六時半頃親父同道麹町の安部井に到るや間もなく友野氏及び奥山三郎氏入来、安部井遺族の親戚分配に就き熟議の上父及び須貝・早川にて大叔父様一人を引受る事となりたり、奥山氏には始て面会したり、氏も又才士なり、安部井を九時半出で父は波多野へ余は帰校す、早川叔は四時の汽車にて帰葉されたり、

二十九日　晴天

午后矢島君と同道秋葉氏へ到る、則ち父居りき、其うちに純吉・芳郎・長谷川等来り九時過まで話し祈て別る、今宵矢島君は愈々自身は九十九里へ夏期伝道として行る様諾さる

三十日　曇天

親父井深氏に矢島君を送られんことを請求し諾されし由、今日最后の時間を休み祈祷会あり、井深氏司会たり、此集は毎月一回開かるゝ事なり

五月

一日　晴天

〔欄外〕「父帰国す」

父は昨日午后秋葉氏を去られ、愈々今日安部井の大祖父を召携れ帰国す筈なり、さる程に今朝九時関谷より発の父のはかき到来す、左の如し

彼の事件豈に計らんや、一昨夕無罪放免に相成大慶に存候、依て老人召連の儀は取消方談示及候処、奥山等は先約を履行せしめ度云々なれども、小生断然破約し其替に小生・早川両人にて五六ヶ月間右老人米位を補助する事に致し昨夜終結に及、本日帰葉と存候処、関谷にて留められ候間、明日午后千葉まで参る積に候、先は右件の次第御安心有之度候、不一

二日　晴天

昨日午前には河合君来宿、午食后帰らる、其砌大森より同氏の携れ来りし鈴木寿氏に面会す、氏は今度明院〔明治学院〕普通学部へ入学、今日ヘボン館へ入宿さる、奥平浩氏が去月二十二日付にて長谷川君に与へたる書簡、祖母様永眠に就ての所感を陳らる

一、望なき人々の将に死せんとする時の心の煩悶は如何ならんか

二、仲保者なき人々の安心は何に拠て得らるか

三、行くものも止るものも互の愛情は分秒毎に冷かなる時に当り、若し再会の望なくば其悲みは

如何に深からんか、若し此時に当りて望みなきものゝ愁み深からさるは薄情漢といはさるべからさる也

四、右等の秘密なる、且つ厳格なる人生の一問題を理解して安慰を平和とを与ふるものは独り我が教にあることを実際に味ひ感謝したる事

三日　曇天

午后長谷川氏の寓を伺ふに藤本総三郎氏の出門せんとするに会ひたり、是より前余長谷川君と秋葉にあり同道同氏の寓に行けりしなり、藤本氏出京の要は当時神戸なる原きん子と松原茂雄君との間に縁談の交渉ありて為に藤本氏は長谷川君に委細の相談に来られしなりと、六時頃長谷川と同道麹町の方へ行かる

四日　雨天

五日　晴天　安息日

朝渡辺顕(28—65)君入室、曰く「君もし意あらば此夏越后(越後)の高田へ行れまじきや」「実は昨日白石君より来状、君と矢島君の中何れかに来田を望む、就てはマクネヤ氏の方へも両氏の中何れか一人遣らされ度旨通知し置たり」と、余直に承知す、蓋し長谷川氏により岐阜への先渉あれどはき〳〵せざれば高田行に決す、今日泉(和泉)弥六氏宅に安産あり女なりと、又国(国元)本より若林君へ衣物来り余も合せ一枚送らる

八日　晴天

〔欄外〕「試験」

明治二八年五月

昨日亜歴山教師神学の試験問題を提出し、今日三時より執行、多く草稿を朗読したり、余は奇跡論に就き一寸記したるものを読みたり、秋葉姉余に贈るに帯を以てす、

九日　晴天

愈々高田行に決したる旨伝道委員の報告を受く、夕三田に散歩し朝顔日記(28—66)を求む、

十日　晴天

朝白石君より来状、来田を懇請すと、序にビーチヨルの説教集を持来られよと、今日井深氏の教会歴史の試験ありき、蓋し先生は来る十五日に高知の当地教会十年紀に出席するを以て昨夜出発されしを以て、水蘆氏試験掛となりき、植村先生の基督伝も今日にて了りたり

十一日　晴天

朝程より宮川氏と同道秋葉氏へ到り、庭木の植替を手伝ひ正午までに了り、午飯にしるこ・すしの馳走になり間もなく帰校す、是より前八時頃聖書学館の荒木姉を訪ひ高田の様子を聞き、人の名なぞ承りたり、午後三時より芝巴町(28—67)の鈴木へ行き壱円程ばかり雑書を求む

十二日　晴天

〔欄外〕「小倉鋭喜君気管視(支)を病む」

朝八時頃より鈴木寿君と同道赤坂教会に到り、礼拝式后余は本郷関谷へ行き衣服の改製を依頼し羽織の染直し等をも頼みぬ、帰路浅草福島へ行きに(ママ)三造氏留守にて、叔父様には此間中より気管視(気管支)カタールにて余りせき出で声かれ一時血さへ出でたりし云々と、少しありて帰る、是より前小倉鋭喜君事此間中より病めりと聞きつれば如何と玉子二十銭五厘程（廿五）求め、見舞とし

て遣しぬ、余の行きしとき氏は甫団〔蒲団〕の上に座せりしが病性は全く気管視〔気管支〕の重かりしにて最早大に快方、明日頃は白金の方へ帰宅の筈なり云々と、御姉苓〔令姉カ〕様看護し居られき、

十五日　晴天

〔欄外〕「閉校式／長谷川其他の出発／関谷転職」

植村先生の哲学緒論の講義は今日限にて畢りぬ、今日午后二時より閉校式あり、アレキサンドル氏司会にて最初祈祷会あり、后植村先生の適切なる説教あり、同三時半散会せり、午后六時半頃長谷川君の寓に到り同氏と八時半頃別る、氏今宵十時の汽車にて出発、明日はみのゝ国竹か鼻〔竹ケ鼻〕の奥平様へ立寄る由にて、余は敏子に基督信徒のなくさめに手紙〔28―69〕へ添〔ママ〕をて托し遣りたり、昨夜関谷より明日小石川へ移転する故手伝われ度とのはかき来りしを以て長谷川氏を送らずして別れしは無念なりき、尚村松・郡山の両氏は今晩八時の汽車にて広島へ出発、渡辺顕君は長谷川氏同車にて大坂へ出発さる、尚明日は第一番にて千磐君は長野へ、清水君は高松へと出発する由、尚今日河野君は浦和へ出発せられたり、余九時頃出発十二時頃本郷関谷へ着しぬ、但し長谷川君の話に麻布に教理歴史〔28―70〕ありと聞き其店に寄りし為一層遅れしなり、教理歴史は六十五銭にて求めたり、関谷の叔父様には今度小石川警察署詰の警部に転任したり、但し給料は今迄と同様なりと。

十六日　晴天

〔欄外〕「関谷移転す」〔「関谷の家」図あり、省略〕

何れも五時起床、七時頃より大八車四丁にて二回運び、午后五時には大概方着〔片付〕きたり、昨日より荷個〔造カ〕り居りし為め大に早手廻なりき、今度移りし処は小石川区表町〔28―71〕六十二番地にて小屋なれど

間取便利なるが如し、然し台所の手狭なると井戸の遠くして且つ深きにはおさん大に疲るべく、最も大なる不都合は東北隣にやすり製造場の大煙突ある為め煙塵の遠慮なく吹き下ること是なり、関谷にて移転に付手伝に来りしもの左の如し、清水の親子三人・いものしの伯母さん・元の役署の某・飯田町より来りし某・吉の妻及び余とす、尚酒井は工事上大に働かれたり、又同地消防組夫三人程来りき。

十七日　雨天

〔欄外〕「ベースボールマッチ（正則予備校に対）」

午后一時関谷を出発二時半頃里見へ着、時に雨降出し来る、波多野の叔母様先来暫時話され、軈て小子に向ひ、小子は何尺の着物を着る乎と、余は面白き事問はるものなると思ひつゝ不知と答へぬ、叔母様曰く昨日越后〔越後〕屋へ参り小子の為め一重地を求め来りし故チャント仕立てゝ差上、日頃の御世話に酬ひんと思へばこそ聞きたるなれ、何れ再び来れかし云々と申されたり、五時頃帰校す、今日学校と正則予備校とベースブール〔ママ〕のマッチあり、五回のうち先方一回ノーインにて五つ入り此方は三度共ノーインなりし由、重〔主〕に此方のピッチャー其人を得ざる為なりと、先方はピッチャー上図〔上手〕なるも打手なき由、然し玉の取り投げは落付〔着〕きって居る由、其処たけは感心なるも大して恐るに足らぬ由、今日雨にて中止せしも尚十二回の残りは近日再び仕合ふべきが其節は今日はピッチヤ篠原君なりしも下村氏に代へる由

十八日　晴天

〔欄外〕「河合亀輔を歓迎す、並に赤坂教会親睦会／明治学院第十一回文学年会／井田道秀君・同

平君」

午后二時より麻布三河台町の共楽館にて河合亀輔氏の歓迎会並に教会の親睦〔親睦〕会の催あり、先づ田中君司会となり讃美（友のまじはり）・祈祷（新島君）・田中氏の開会の主意、次に余は河合氏に向ひ教会を代表して歓迎の辞を陳ぶ、尋て河合氏の答辞あり、讃美・祈祷（余）を以て歓迎式丈は先づ終り、それよりぼんまはし・田中氏の落語・其他二三の芸なぞあり、歓を尽して散会せしは五時頃なりき、会するもの十五名程にて大田といふ田舎より三人来りき、会費五銭、今宵学校に第十一回文会〔文学会〕あり、田中氏のデクラメーション・尾島氏の演説・篠原氏の英文朗読・田島氏の演演〔演説カ〕・熊野氏の英語演説・森田氏の和文朗読あり、后ビワ其他茶番等あり、茶菓出で十時頃開散〔解散〕せり、今宵秋葉氏へ一葉、井田の兄弟に二葉チケットを贈ぬ、蓋し井田氏兄弟は麻布より直に携れ来り、彼等帰掛け中台氏と帰られたり、井田氏の長子は道秀と云ひ十七才なり、弟を平といゝ十五才なり、両人共も愛らしき小供なり、尚一人の妹と一人の弟ありといふ、

十九日　晴天　安息日

赤坂教会に到り礼拝式を済し波多野へ行きしに純吉君来り、其うちに承五郎氏帰宅され夕飯の馳走になり、十一時頃まで花合を遊び帰校、着床せしは十二時頃、貫一君も来り遊れき、今日教会出席者は十五人と見へたり、

二十日　晴天

〔欄外〕「秋葉家にての送別的祈祷会」

午后七時より秋葉氏へ矢島君と同道、今宵は聖書学館の吉田・小菅・大岡・中村の諸姉も同家に

て晩飯の馳走に招かれ九時頃より祈祷会の催あり、秋葉氏司会にて或は祈り或は励めて三十分程して閉会、尚屡(暫カ)く談話し十時半頃帰校す、宮川も偕なりき、

二十一日　晴天

〔欄外〕「ベースボールマッチ（正則予備校対）」

午前波多野の伯母様より頼まれて鑄吉氏へ送る聖書を求め遣りたり、午后三時より正則予備校と去る十七日の続のベースボールマッチを為し、又〳〵八回のうち三インにて、先方は九インにて都合十一の負となりたり、但し我校の役員は下村（ピチヤー〔ピッチャー〕）・手島（キアチヤー〔キャッチャー〕）・フアースト田中・セカンド森田・サード小口・ライト篠原・ショルト〔ショート〕矢島・レフト熊野、午后五時より小倉鋭喜の病を見舞ふ、氏は帰宅后二三回吐血せしも今日にて六日間止まりたれば大に好容なりと、見受る所至て色つやよかりき、

二十二日　晴天

〔欄外〕「長山・宮川等出発」

昨夜長山君余等の室に泊り、今朝余は東方白みたりしかば長山君を起したるに、氏は直に起て面洗に出掛く、其時時計は四時二十分前なりき、余昨日ベースボール〔ボール〕にて倒れ負傷せし為今朝尚歩行に心地悪しければ品川までの長山・宮川の見送もなさゞりき、蓋し諸氏は五時二十五分の出車にて出発せられたり、秋葉氏より借居たる書籍を帰〔返〕し、教会史講演〔28—72〕のみ借り置く、又ランヂス氏より加拉太書注釈、哥羅西書注釈を貰ひ、尚ほ同氏よりロボルトソンの哥林多書の注釈及其他の説教てふ本を借り来りぬ、午前波多野へ行き鑄さんに本二冊送らす、今日バラ氏より来月分月給

八円と旅費三円三十六銭を受取りぬ、

二十三日　晴天

去る二十日より腹部と脛に疚(灸)をすへ初め腹部は昨日にて止めたり、福音新報の代二十八銭を百十七号ー百二十九号分として払ひたり。

二十四日　晴天

高田教会員加藤喜蔵(喜造)氏(28—73)小田君の招により余に会に来りぬ。

二十五日　晴天

今日慶応義塾に春期運動会(28—74)あり、学院より若林・篠原チャンピヲンとして行けり

二十六日　曇天　安息日

関谷より教会・波多野・中野・里見を経て帰校す、峰子様病にて臥りき

二十七日　雨天

午后白石君より頼まれたる八犬伝を尋ねて銀座に行き雨に合ひ閉口す、八犬伝なく余の分として甲越軍記(28—75)を求む、本庄一己氏より長谷川氏へ送りし為替金五円受取、

越後高田の伝道

二十八日　晴天

〔欄外〕「越后(越後)高田の伝道／初ての大旅行／軽井沢／宿屋油屋／小林繇氏」

同窓諸君とハリス館の椽にて別れ、矢島・中村・小田・里見・若林・川島の諸氏に送られつゝ荷

物のみ車に乗せ（品川まで八銭）品川停車場に到り、今日は赤羽より先の出車は不定なりとて高田までの切附〔切符〕を求め得ず、赤羽までの切符を十二銭にて求め、荷物六十六斤の中三十六斤の代として十八銭取られ八時二十五分出発せり、九時少し前赤羽に着し、同所にて暫く待ち、十一時出車に高崎行の列車に乗りたり、即ち六十八銭の汽車賃と荷物代三十六銭を取られたり、斯て先づ熊谷辺にて上州の諸山脈の妙景を見つゝ二時頃高崎へ着き、同停車場内にてマクネヤ氏に面会し、片語にて只今高田へ行く事を語り、今宵は当市へ宿泊する旨語り別る、其后再び会ひしとき電文の綴書を頼まれしまゝ「アシタ六ジニユク」と書き、軽井沢のミセスの許に送る様認め遣りたり、一体なら余之を電信局へ差出て遣すべきなりしも、余は未だ当市の様子も知らず、加ふるに其少し前聞く所によれば軽井沢行の汽軍出ると、されば其手筈を為す等種々気忙しかりし為、厚意を表すこと出来ざりき、斯て荷物の出替を為さんとせしに駅夫曰く、個利〔行李カ〕一箇を手下に為さばふるしきづゝみ〔ふろしき〕の方は后にて送るべしと、余大に然りと思ひ本の個利を携へて投車するこゝしたり、三時半軽井沢行の汽車に投ず、但し軽井沢までの汽車賃三十五銭なりき、マクネヤ氏も同列車へ乗られたり、偖て今日頃より出軍の兵子〔兵士〕帰郷すると、天皇陛下の御帰京等に依りて此線路の列車は多く東海道辻へ廻されたり、故に通常列車の替りに荷物或は馬匹の箱に投ずるの止を得ざることゝなり大に閉口したり、同伴人々の惜つも無理ならず、かゝれば余は寄木につかまりつゝ仃立のまゝ諸方を眺〔眺〕めつゝ横川駅〔28-76〕に来り、横川は妙義山の麓にして此所にて碓氷〔碓氷〕峠登上の順備〔準備〕を為し彼是一時間の后出発、二十六のトンネルを経少し下りしは軽井沢駅にして、此処にて汽車は泊まりとなり余も不能止止ることゝしたり、此処に再びマクネヤ氏に面会したれば余は余

の宿泊すべき適当なる宿屋を訪[問]ひしに、丁度停車場前なる油屋こそよけれ、又別に宿屋はなしと申されし故右油屋へ登りぬ、時に赤羽辺より同伴となりし年若の紳士風の男と相宿せんことを約し楼上東南隅の一室三丈程の間に案内されたり、同宿の男は宮川氏の兄君によく似たる人相にて、処は信州（長野県）埴科郡森村[28—77]にて名を小林繇といゝ、先づ相応に暮す農家の息子殿と知られ、今度十日程前家宅を無断にて東京見物に出掛、序に江ノ島・鎌倉・横須賀等を見物して今帰省するなりと、年は少く余と同年にして初めて会ひしときは立派な紳士殿と見掛けしも、追々容子[様子]を窺ふに先方にても大に角を取り顛真に物語られたり、彼は両親と一人の妹あり、既に他に嫁したるものなり、又十四才の弟ありと、女来り入浴をすゝむ、余見合す、則ち小林氏に入らす、氏行く、間もなく番頭「只今は難有」とて二十銭の茶代の受取を持来りぬ、余思らく是は小林氏の払ひしなりと、則ち平気にて取置く、軈て小林氏登る、余其受取を見せ君茶代を払ひしと見へ受取を持来れたりといふに、氏は曰く知らず、必定人間違ならん、手を打ちしも人来らざれは、いーやうちやて置け僕等が出したと思ているけとて其侭に為したり、思ふに全く人間違なりしなら人には気の毒なりしも、或は計略を巡らして余等に少くも二十銭位な茶代を置かざるを得ざるの事情に迫らしたるものやも不知、后者ならんには悪みても余あり。下女膳を持来り給仕す、膳部にはわかめの汁・豆腐と玉子を寄たるものとあぶらげ[あぶらあげ]にしいたけの露[汁]・やまゝいの煮き魚なりき、米は相応に甘かりし、或は空腹の勢かも不知、是に小林氏の酒を取りし為鯉の汁出で此は最も厚味と思ひたり、鯉は信州の名物と聞きたりしがさすが名物だけありき、然し右やまゝいは余初て箸を一箸着けしとき腐廃[腐敗]せしかの様に感ぜしが然らずして川魚と思ひたり、則ちどろ

明治二八年五月

くさかりしなり、后にて問へば果して軽井沢近辺の川にて取れる魚なりき、小林氏は中々飲家と見へ一本の酒をまたゝく間にほしたり、茶菓子にはらくがんの小きを二銭ぶん位鉢に入て出されたり、余は寝掛に足をふきて休まんとて浴室に至や男女同室とは軽井沢の宿屋と知られたり、尚小林氏の話を聞くに氏は長野に二年程学生の生勝〔生活〕を送られしものゝ如し、然し今は郷里にて遊び居るものと見へ、談話中西洋人も日本人の様に頭髪を刈るものにや、横浜にて多くの西洋人を見るに此頃は皆な西洋人まで頭を刈り居る云々と、思ふに彼は絵草子或は昔の本に数世紀前の西洋人が蓄髪せるを見て西洋人は男子も尚ほ髪を長くするものなりと思ひ、我々が彼等より学びしを知らざるものゝ如し、其他続々奇話あり、そゝろに可笑しき事と思ひたり、九時過着床、今宵当屋へ泊りたる人々は五六十人もありしか、尚八時頃長野より来りし来客は皆言張〔断〕られし様子なりき、今日横川辺より大に寒くなり羽織を着け来りしを幸と思ひしが、軽井沢は一層冷気なりき、夕飯后間もなく番頭書付を持来り、明日早けれは今晩御願申とて二人にて六十六銭五厘と書出す、中六銭五厘は酒一本なりしなり

二十九日　晴天

〔欄外〕「上田／長野」

余は四時二十分頃起床、大に寒かりき、昨夜は三四度一時間ごとにひやうしぎを打ちて楼下楼上を徘徊せられき、五時頃朝飯を出さる、膳部にはしる・豆腐と玉子の寄たるものと出でたり、食事了るや番頭汽車のチケットを持来る、即ち一円十四銭にて高田までの分を取りぬ、六時半礼〔例〕の箱―荷物列車―へ投ず、油屋の楼上より間近き山々見渡すに東南に当り如何にも掬すべき小丘あ

り、満山草茂るはしかも芝草なり、思ふに此辺にて牧畜を為さば便利ならん—蓋し寒気の為叶わぬものかしら、同楼の西北に間近くかなりの山丘あり、それを越て烟々天にたなひける山丘は近きが如く遠きが如く見へ、人に問へば浅間山なりと、一見小底なるか如きも軽井沢より高田に至まで何処にても此山の見へぬはなきを以て此の高きこと知られたり、軽井沢より伴客となりし者に横浜・東京下の連中多く何れも猥褻極まりたる談話を為すものゝみなりき、小林なるものは絶て談らざりき—彼は実に田舎の息子殿丸出也、彼は上田にて落車せり、別るゝとき余に特別なる言葉なし、彼尚帯を堅く占め居りしものゝ如し、余は進で今迄の厚意を謝て彼を送り出しぬ、上田は山丘の麓にあり四方小丘にて目を断てり、一寸窺ふに余り大なる町とも思われざりき、又奇麗とも見へず、只築後川のみはさすか石川だけに心地よかりき、長野へ九時半頃着しぬ、礼〔例〕の重き本及び手荷物は扇屋てふ角の茶屋へ預け、車屋に一銭の運賃を遣りぬ—余初め屋主に言葉を掛しに車屋后より来りて運びしなり、停車場より十丁余も登りて先づ基督教会堂〔28—78〕を見付けたれば、其の構内の戸を扣〔叩カ〕き千磐君在るやと問へと彼異様なる風情にて千磐氏となんは不知と、余帳然呆れたり—則ち言葉重なる及び当教会の正公会〔聖公会〕なるを知りそこ〳〵に去りぬ、面会せしは同教会の伝道者と知られしが、彼は日本基督教会なら是より云々と、先づ懇ろに教へ呉れたり、それより少し進むや果して日本基督教長野講義所〔28—79〕を見出したり、先づ千磐氏在るやと問ふ、恰もよし氏は在りき、取次の入ると共に千磐君は二階より下り来ぬ、余は曠野に迷ふて知人に邂逅するの感を覚へたり、彼は余を十二丈半の大広間則ち彼の寓室に案内されたり、室の隅にコリ〔行李カ〕・カバンあり、諸所に和漢洋の書籍散布せり、火鉢に茶道具を見せり、椅子はありしも机は見ざりき、別后

明治二八年五月

差して長きに非れば長き物語もなかりしが何となく安堵して談笑したり、氏曰く昨日白井君来り、氏の伝道地モタイ(28—80)は養蚕の為め目下思ふまゝの伝道も出来ざれば一先づ東京へ帰ることゝなり、序に白石君の許に遊に行くなりとて今日朝九時半に出発せられたりと、蓋し余か軽井沢より乗りし列車なりしならん、又長山君は安着せし由はかきあり見たり、同氏も千磐氏の所へ一泊し行きしとなん、十一時頃より千磐君と同道片山寛君の寓居を訪ふ、氏の父君に門の所にて会ひ—部服〔服部〕綾雄(28—81)氏に似たる人柄—母君・祖母君にも面会せり、氏の弟五つばかりなるは丈夫様なりき、当家にて横浜の稲垣先生(28—82)に面会す—初対面—先生は三四日前より当町に来り尚一週間は滞在すべしと、床の間に弓二張立掛けありき、十二時頃稲垣氏と同道帰参す、稲垣氏は平和・温厚なる人にて牧会は上図〔上手〕さうなり、立派な牧師なり、千磐氏の所にて午飯の馳走になり、そのうちに片山氏来り暫く話し去らる、余千磐君に氏の教会歴史を持来り、又氏兼望み居りし故はみかきの瓶入を進呈し遣しぬ、二時少し過き去り扇屋に来り暫時休み、茶菓として桜もちを二個出せし故一個食ひ茶代三銭置き、三時頃礼〔例〕の重荷を負ふて停車場に来り、三時五十分頃又々礼〔例〕の荷物列車に投じ六時半頃高田へ着し、車屋を雇ひ四ノ辻の宮崎八太氏の宿に来る—車賃七銭遣りたり、先づ秋葉氏の手紙を示すや六十路の老人出で向へ懇ろに承諾され、種々方〔片〕付けて余の室を二階に具へられたり、則ち左の如き房を与へられたり〔図あり、省略〕。当家に中学校へ通ふ学生五人及び入学予備生一人居る、左の諸氏大滝尭蔵・大滝舜治（以上両人は兄弟にて兄は二十、弟は十八、父亡—母は里へ行き本家の世話になり居る由）・山本正勝・尾崎喜平・布施鉄雄・金子〔　〕の諸氏なり、大滝兄弟は替々来談せり、両人共有為の人物と知られたり、七時過夕飯出

づ、膳部には大ぎれかまぼこ二つに蓮の煮付けの皿と外に煮魚を出されたり、八時過大滝舜治氏に案内されて白石君の寓居に到る、則ち今宵は祈会にて不在なりき、同居の石川氏の家婦曰く今に帰るべしと、余大滝氏に話し再来を約させて帰参の途に就くや途にて白石君婦夫と白井君の帰るに会ひたり、則ち好偶なりとて再び白石君の寓に到り暫く談じ十時過帰宅す、白石の婦人とは勿論初対面なり、姉は藤木の細君に似て気質も如斯き様子に知られたり、則ち温和にして可愛らしき婦人なり―台町教会の加藤繁氏の細君の若きときのごと知られたりし、白石君細君を呼ぶに君・あなた等の言葉を使用せり、寝掛にはかきを書んとして睡気に堪へず祈祷すら得為し得ずして眠りぬ、

三十日　晴天

〔欄外〕「散髪／洗湯／教会員訪問」

六時頃起床す、昨夜着床のまゝ夢は愚ねかへりもせで眠りしと思と直に起る頃となりき、朝食にはしると香こうなり、松尾・秋葉・矢島・波多野・関谷及び中村・小田・手島の三氏へ連名にて都合六枚のはかきを認め出したり、何れも安着の報知なり、九時頃白石君の許に至り、三人にて東京で謂へば御殿山とか山内の丸山とでも謂つべき高田の金谷山[28―83]てふ小丘―古城跡なり―に登り頂上の休茶屋に憩ひ、どんぶりに雪を取りしに和白を軽少かけて持来りき、昨夜は白石君の所にてかたくりを馳走になりしに矢張和白を用ゐられたり、高田には太白なるものかしら、雪の外にゑんどう豆・鉄砲玉を取り茶代五銭白井君出し、落山本町を経買物を為して帰宅す、余半紙一占買はんとして価を問ふに四銭と三銭五厘とありと、余は其の高値に驚きたり、蓋しよく〳〵聞

けば一占は四十葉にてありき、午食にはあぶらげ二枚を出されたり、午后四時本町にて散髪し五銭を払ひ直に入浴し五厘を払ひ六時頃帰宿す、夕飯には鯛のさしみに鯛のうしほを出されたり、それより七時頃より白石君に携れられ長谷川文太郎―不在、長野国彦―不在、荒木信宝・清水源三氏等を訪問し、清水氏にて暫く話したり、清水氏は三十位な人にて大谷虞[28―84]氏に生写しなり、又荒木様にては丁度出産ある所にて取込居たりき、今日は東京六月末の気候なりき

三十一日　晴天

〔欄外〕「旅費総計／万事始てなり」

朝より蛙鳴蝉喧[噪]の五月蠅き事驚くべき様なり、八時頃白石君の所に至り彼是せし内に老人なる長野国秀氏入来せり、氏は士族丸出なり、然し農業を盛に為し千采の育養法に精しき所は若林の祖父に似たり、特に生瓜を沢山造り売物に為すと聞き、いよ〳〵祖父の様子に似たりと知られたり、氏は信仰上の経験を農作に比較して経験談を為すに暫々聖書の句を引かれしが、其辺は下の家の老人に似たやに知られたり、暫く話して去らる、十時頃より白石君に安内[案内]されて女学校[28―85]に行き、安田いは[28―86]姉、白石行信[28―87]の両人に面会し、尚加藤〔　〕敬氏の宅に至り息子喜蔵氏よりの手紙を届けたり、主人留守にて娘に渡したり、尚森山信一[28―88]氏方へ寄りたり、かなり立派に暮せり、氏は自由党員にて此辺にても□々たる人物なりと、氏は旧約書を読み居と見へ衣のライ病云々[28―89]なぞの事質問せられたり、談話は重[主]に時事問題の事にて氏は大に憤場の渡らせたるか如し、終に曰く妙高山の彼方へ銅山を見出し、日ならずして採掘すべければ甘く行けば利金は重[主]に慈善事業に消費する覚語[覚悟]なり云々と、十二時少し過ぎ帰宿す、午后六時頃より白石君の寓に到る、蓋

し白石君の招きによりてしるこの馳走にならんとてなり、行けば則ち既に食し居り、大釜に一杯整へありしには驚きたり、新処帯〔所帯〕もちはちかつたものと知られたり、余は十分三杯と汁のみ一杯を傾けたり、味上等なりき、先客近藤氏〔28-90〕あり、初て面会しぬ、氏は知命堂病院〔28-91〕の薬局に出づ〔ママ〕も者也、談話の権〔件〕は重〔主〕に白井君一寸有にてしかも同志社の話なりき、其他放言たら〳〵にて在に興を尽して九時頃退きぬ、近藤氏は少し早く去られたり、帰しな雨ふり来たり、宮崎氏は余の為に白石氏より机を借り来られたり、長山君と奥平姉にはがき出しぬ、十時過就寝す。東京品川より赤羽間の汽車賃十二銭、荷物賃十八銭、赤羽－高崎六十八銭、荷物三十六銭、高崎－軽井沢汽車賃三十五銭（是より荷物賃無し、重き個利〔行李〕を手下としたればなり）、寝泊料三十銭、軽井沢－高田一円十四銭、長野にて茶代・車代三銭と一銭、旅費合計金三円十七銭、尚学校より品川への車代八銭と高田停車場より宮崎氏までの車代七銭、総計三円三十二銭なり、余今度高田へ来るに就ては凡ての事初てなり、先づ遠国旅行・長距離の汽車乗・大山剣丘・宿泊・地方実地伝道・他郷寓居・孤独の寂寥・独旅の無慰、

六月

一日　晴天

〔欄外〕「高田教会員及在留信徒並びに求道者（一）／戸口人数／仏教」

六時起床、今日は落着て祈る事を得たり、常に斯ふあれかし。高田教会信徒並に在高田信徒及び求道者姓名

明治二八年六月

水道掛員長　清水源三　女学校教師　女学校卒業生　横倉ひで
女学校々長　白石行信　独立女学校（28—92）卒業生　瀬上せつ
　　長野国彦　女学校教師　女子学院（28—93）卒業生　安田いは
自由党員　森山信一　看病婦長　大関和（28—94）
　　宮崎八太　看病婦　渡辺梅
裁判所勤務　長谷川文太郎　看病婦　女学校卒業生　野口敏
薬局掛員　近藤虎馬　看病婦　丸山〔　〕
町役場員　荒木信宝　看病婦　花井ふみ
高田の人　明治三年生　看病助手　二十八年六月十一日死去　矢島ふじ（28—95）　女学校卒業生　赤井トラ（28—96）
信一君妻　森山信規　小出チカ
行信君妻　白石〔　〕　八木原ぎん
水産学校　加藤喜蔵（喜造）　質屋商人　中村一良次
直江津郵便局在　小川修次　中学校生徒　大瀧舜次
小学授業生　園田貞吉　高橋多次郎
中学卒業生　田中貞治　郡役所勤務　梶原〔　〕

午后二時過中村茂策氏の実家中村氏を訪ふ、中村氏は年の頃四十四五の男にして身の丈大ならずと雖も骨格宜しき方にて、茶色のフラネル（フランネル）の一重物に三尺をしめられ、五麻色（胡麻カ）の口髭を蓄へ一見除才（如才）なき方に見へたり、氏は大に余を好偶（厚遇）し居間に案内され種々物語り、遂に宗教談となり、氏

は切りに仏教も基督教も大異なしと言へり、故に余は仏教にも真理なきにあらぬが、仏教も又基督を希望せしものにて其の望に応すべき基督を尋ね得ざりしのみといふに、氏は神と仏のアミダを同様と見、基督と釈迦を同様に見、断固として余が言を容れず、幾分か仏教には通し居るものゝ如し、氏との問答中基督と神の関係の事に及び遂に三位一体の奥義を話さゞるを得ざる事となりき、然し余り精くも語らざりき、要するに中々道には遠き人にして氏は余より数倍も多く説法され、余は重〔主〕に受身となりたり、一時間程語り三時過退参せり、尚細君則ち茂策氏の母君にも会ひたり、面美にして様子も温厚なる方なり、小女・小児も見へしが何れも奇麗なる方々なりき、帰路入浴す、中村氏の話に（余問ふたればなり）高田の戸数は大凡七千戸、旧藩士八百戸ばかりは多く高城村に住せりと、されば高田の人口は三万人以上にて長野と相比適〔匹敵〕すべし、仏教盛（外形上）にして寺院百以上あり、特に真宗多きを占むといふ、尚日蓮宗・浄土宗・其他の仏教もありと、又仏教の学校〔28-97〕ありといふ、

二日　晴天　安息日

〔欄外〕「第一安息日／日曜学校／礼拝式／教堂に於る夜の説教会」

白石君等四人にて教会に行く、教堂は明治二十二年頃の建設に関するものにて九十九里教会の広袤にして四間間口に六間半の奥行位にて、裏に控室・番人室ありて便利なり、九時より日曜学校開会、清水氏校長にて司会し初め三十分間讃美の稽古あり、后三十分間聖書研究及話等あり、組は白石君の組四人、安田姉の組三名、赤井姉の組三名、白石姉の組三名、余は十二三の小童三人を受持ちキリスト十二才の時拝殿の事を話したり、終に余祈祷す、ヲルガンは安田姉の持なり、

十時より礼拝式初まり白井君説教せり、使徒行伝パウロ、アレヲ山に於る説教の要旨に、神は吾人と近くある云々を題詞として説明せられたり、大関和姉に面会せり、姉は知命堂院〔知命堂病院〕の看護婦取締にして植村先生の愛顧する人にて小倉苓姉も一寸知れりといふ人なり、加藤喜造氏の弟は余か組に在りき。午后二時半頃近藤虎馬氏来談、四時半頃去らる、氏は岡山市を離る二十丁の所の人にて岡山医学校（高等中学）卒業生にて、二十五年に当地へ来られ知命堂医院〔病院〕の薬剤掛を務めらるゝ由、午后八時半頃より説教会開会、白石君司会、余「基督教の中心」てふ事に就て四十分程話したり、尚白石君も十五分間程話されたり、閉会せしは十時過なりき、会するもの十名、内未信者六名程なりき。

三日　晴天

曇りかちにて風出てたり、白石の細君登楼暫時話されたり。

四日　雨天

〔欄外〕「宮崎八太氏／寄宿生／高田の昼寝／北海の見初め／直江津港の説教会（其一）」

今朝宮崎氏の乞により今月分の寄宿料一日十二銭の割合にて金三円六十銭を払ひたり、宮崎氏の寄宿生に対する様は祖父の孫子に対するか如く厳且つ愛を以て処せり、而して諸氏の宮崎氏に対する又実に子孫の祖父に事ふるが如きものあり、相互の様子実に掬すべきものあり、故に平常の言葉遣も相互に入り安きが如し、仮令ば翁食事の順備〔準備〕はるや諸氏を呼で「サーイーゼ」といふ、諸氏「へー」と応ず、不知此辺の宿舎皆かくの如きか、恐くは然らさるべし、蓋し此の老翁はさすが武士なり、而して諸氏又田舎の質朴なる性情を有せり、此処に於て互に面遠〔面倒〕臭も堅苦くも感

ぜぬものと見ゆ、嗚呼是れ余が常に理想せる宿舎にして此の家庭的なる宿舎は麗しき哉、我ヘボンホール・ハリスホールの諸氏に見せたきものにこそ、宮崎氏は三度の食事の順備〔準備〕及其の治整の相間には、或は宿生の為漢籍を講じ或は自ら机に椅りて学び（漢書・聖書）或は新聞紙を見らる、宮崎氏は堅き処は若林の祖父に似、豆〔忠実〕なる処は栗田亀右衛門氏に似、容貌は堀内の老人（波多野の先妻の親）に彷彿たり、寄宿諸氏は皆能く勉強せり、夕方に至ると或は軍歌を唱し或は詩句を吟じ或は撃剣の真似を為すが如し、彼等は平常私服にて登校す、正則の洋服もある如し、下駄は多く薩麻〔薩摩〕下駄〔28—98〕のしかも最も高きもの流行す、又洋服にて下駄を穿つものよく見当るなり、今日下の室を見しに三人の青年同様に机の前に寝倒べり、毎日三時頃より四時過まで昼寝を為すものゝ如し、道理で余も当地に来りてより午后は非常に睡気を催すが之れ気候の勢なべし、余此間中村氏へ行んとせしに白石君曰く今行ば昼寝を為し居ならんと、余至るや主人には或は寝て居られしものか不知と雖も兎に角直に取次れたれど、妻君と二十位の男（中村茂策氏の弟かしら）は別室に横臥せるを見たり、今より斯の如ければ三地の暑中には朝から夕まで寝暮さるゝことならん、気候の勢とはいへあまりの事なり、必至的然らば造物主の摂理銓なき乎、高田の衰微する亦偶然ならず、否此の昼寝は越前も大暑には高田の通なりと、今日午后七時の汽車にて白石・白井の両氏と共に直江津に至る、則ち今宵同地にて説〔ママ〕会を開かん積なり、実は二時半頃の汽車に乗らんとせしも此頃は汽車の時間不定にて遂に七時となりしなり、併し其替り下等の切符にて中等へ乗ることを得たり、七時二十分直江津へ着、一寸講義所〔28—99〕へ寄り直に北海の見初に出掛く、頃しも日既に暮て海上水平線たに見へずなりしも、水平線后の夕陽尚水平線上の雲に影したる様宛

明治二八年六月

然黄金色の一直線を為し一種の美観を呈したり、眼を転し西南の方を見るに海岸に沿へる小丘尚薄黒く透けたるなぞ一寸の光景なりき、今日は浪も穏なる事と見へ五尺程の浪打寄せ来たり、三人にて先づ北海の塩を味ふとて手掌もて掌めたり、十五分程佇立、追々暮行く程に天上を見渡は、清空南方妙高山辺より北方北海の水平線に到るまで満布内に諸形の雲棚引き、宵の明星の独り巨光を輝せる様を見、先づ北海の見初を為したり。偖て講義所は娼妓店の真前に在り、八時少し過先づ讃美歌二三番を歌ふや追々ちらほら小供を初めとして集り来りぬ、三四名の真面目なる聴者は座に着き后は腰掛に腰み掛るあり或は佇立せるありき、白石氏は軈て機を窺ひ白井君を照介〔紹介〕す、白井君則ち登壇、先づ時勢を説て基督教の必要を述べらる、氏は能弁滔々聴者の心を釣るが如き勢ありき、氏は三十分程話したり、其次に余は「宗教の必要」といふ題にて、先づ身体に食物の必要なる如く霊魂にも霊の食物即ち宗教の必要なることを二十五分程陳述し、最后に白石君は基督教の必要を述ふる積なりしならんか、重〔主〕に宗教否基督教を一度も味ずして非難するの不可を唱、一其例に肉類を食ずして肉類を悪様にいふは宗教を食ずして悪くいふ如し、或は昔はちよんまげなりしが今は散髪なり、昔は歩行せしか今は車特に汽車出来たり、故に基督教を味へ見よ云々と、滔々陳べしはよかりしも聴衆に中にちよんまげ連中少からざりしより、彼等の或者は大に憤怒され「宗教―基督教の功用〔効用〕を聞かれ度、肉類や汽車のことは知れ切て居る云々」と、白石君一寸答弁せんとして白井君に注意され見合せ、后に呼ばんとせしも酒にゑひたる者と知りしかば敢て招きもせず、畢て小冊子を散布せしに何も競て貰ひ行き欠乏を感じたり、今宵聴衆は五六十名もありしならん、因に記す当講義を借るに一夜五十銭つゝなりと、而して開会の日は

一ヶ月に二回なりと、九時過帰途に着き帰宿、着床せし時は丁度十二時頃なりし、余今日昼の間より頭痛し直江津より帰路尚痛み着床するも尚止まず少々苦みたり

五日　晴天

今朝尚頭痛止まず閉口す、朝程早川友三君[28—100]に手紙を認め白井君に托す、九時頃より白石氏へ行き畑を世話し午飯の馳走になる、十二時半白井君愈々帰京に就かるゝを以て停車場に送る、発車は一時なりと、則ち休憩所に待つ、白石君当地の名物飴を買来る、則ち其の蓋を割り箸となして食う、名物丈あり美味なりき、聞く百〆[匁]五銭なりと、白井君二百〆[匁]入か曲物五ツ程を土産として持行かる、軈て一時となる、汽車来る、白井君乗る、則ち中等の箱にて兼て望みし所、則ち昨日直江津へ行し時投ぜしにて其の味を知り、今日も是に与らんと心組て居りしなりき、帰路町にて筆を二銭て求め新茶五銭を求む、余己の料として茶を求む、今日こそ生て初てなり、再び白石君の宅に行きじやが芋を植へ生瓜に肥を与へ遣り、白石君と同道入浴し五時過帰宿す、夜水曜の祈会に行く、集るもの病院の婦人二人・赤井婦及白石夫妻と余にて何も熱心に且つ質朴なる祈を献げられ九時閉会、但し白石君司会

六日　晴天

今日は幾分か頭の具合よし、併し尚常ならず、里見純吉氏へ東京より高田へ来りし道中記を書送る、又国沢・福島の両氏へはがきを出す、午后清水源三氏来談一時間余、午后六時頃より旧城跡[28—101]を見舞ひ、尚長野氏を尋ねて見当らず八時頃帰宿す、昨日長山君よりはかき来る、

七日　晴天

〔欄外〕「婦人祈祷会／大関和姉」

今朝は五時起床、加藤喜造氏へはかき出す、七時半頃より長谷川氏へ行んとして尋ね得ず、白石〔喜之助〕喜・中村氏を訪問し八時半頃帰宿す、午后三時より白石君の寓に至る、少し畑をいぢり四時頃より当家に婦人祈祷会開かれ余亦列す、閉会せしは五時なりき、会するもの四名都合七人の集なりしも何れ熱心に祈られたり、諸姉は女学校の人にて安田・赤井・瀬上・横倉の四姉なりき、該会は毎月二回開かるゝなりと、夜分再び白石氏へ行く、則ち病院の近藤氏在り、雑談十時に及び帰路近藤氏の招に応じ病院に寓せる同氏の室に到り十二時頃まで話す、大関姉又出で会釈せらる、姉曰く今夜は某危篤なれば多分夜明を為さゝるを得ざるべし、併し二三月前より逆上の勢か頭部痛み如何とも苦しきよ、今按摩を頼みたり云々、されば今より失礼―と申居て去らる。近藤氏大関氏の履歴を話し聞かさる、実に感すべき婦人と覚へたり、姉の教に入りしは植村氏の北堂[28-102]より導れしものにて、今植村氏の愛顧するも一はかゝる関係ある故にや、大関姉の長子十八なるは当町の歯科医に在りせは国にありと、大関姉は多情多感の人なり、故に其の天職に従事するや将しく基督教徒の本色を持ち、病者の苦を意遣る事尚己が身の上の事の如く思惟すと、是を以て遂に薬石其功なくして身まかりしものあるや、其遺族は大関姉の親切斯の如きを思ふてそゝろに諦めの心を強むとかや。大関姉は近藤氏に命じ余に美菓を進む、近藤氏の写真を拝見し御両親及び御令妹を拝見す、令妹は既に婚し特に挙児さへあり、昨日来りしとの嬰児と妹君と母君の写真を見たり、妹君は母君に似、近藤氏は父君に似たるか如し、余初め室に導れしとき独乙の原書机上

に開きありき。

八日　雨天

〔欄外〕「蚊帳釣り初む／当地士族の根情（根性）一班／女僧／女僧出家の動気（動機）如何？／矢島ふじ子姉病、危篤／白石喜之助氏矢島ふじ子姉に洗礼を施す」

今朝は常に比し大に暖かなり、曇天の勢かしら、昨夜より蚊帳を釣り初む、昨日宮崎氏町より借り呉る、則ち一夏三十銭の賃に持運賃共三十二銭払ひぬ、宮崎氏曰く実に斯様なるもの町内より借るにも様程（余程）面遠（面倒）にて若し此の屋敷うちのものゝ行きしにては到底貸与し呉るゝことなし、蓋し若し屋敷に貸与せば或は借賃を払はざるか甚しきは蚊帳を取ることあり云々、此一事にて町人と今の士族の間尚斯く隔離あるを知るべし、亦士族の根性知られたりといふべし、今やモニーイヅパワーの時代に於て尚ほパワーイヅモニーを気取る彼等の心情哀とも何とも気の毒千万なり、彼等士族は武士は食ねど高楊枝といふ度を越して僻目根情（根性）を懐けり、去る二十八九日に於る道中記補誌数件、余二十九日の午后千磐氏の寓を去り停車場に来る、北行の乗客場内に満つ一隅に人衆群居して談笑特（殊）更に聞ゆ、則ち近（近づき）て之を見れば今度支那より帰営せる下卒三名腰掛に寄り得意然と戦争談を為せり、其の周囲は山の如き人を為し二三有志者らしき輩平身して戦景の話を促す様、昔の百姓其の村長に言申せし様はあの如き乎とそゝろに可笑しく思たり、兵隊は田舎なまりに漢語口調を交へたれば実に何とも抱腹に堪ざりし、況や彼等が万事皆己の実験談の如くに語るに於てをや、茲に亦中等室の控所あり、偶（たまたま）ま々数名の田舎の一族及び其の供輩と思しき群、二人の僧と一人の女僧を先駆走して入る、満場の衆目皆な此の群に注視す、余又目送す、則ち彼の群

明治二八年六月

衆中に一人の女僧こそ満場の目を引きたるものなりき、余則ち歩を進め眼鏡を斜に見送るに皓たる白鶴の群鳥に超絶せるか如し、年歯二十三四許、尤より盛粧濃香の飾なしと雖も冷艶全く雪を欺き、眉は遠山の如く翠を画きて鳳鬢の黒緑たると、秋波情を凝せずと雖も緑髪惜し気もなく擦落し、満頭晴空よりも緑に炯烟人を射て暗に威儀を備へ、紅頬咲を含て皓歯微に露はれ、繊繊たる細腰に軽々綺の長裾を曳き、妍妍たる蓮歩に練繍の軽履を践み、余香人を襲ひ徐歩室内を徘徊す、実に天上の美人降して人間に在かと思はしむ、世豈に美人なからんや、特に信越の地何ぞ美人の珍しき事あらん、然ば群衆の視線何の故に彼女に集りしや、蓋し故あり、彼女の長裾は紫色なり、之に加ふるに彼女の右腕に数珠の懸りたる風姿は綽約として宛も神仙の如きものありき、衆人の凝視し耳語して驚駭の色を顕したるも之が為なりしなり、今の世尼を見る事稀有となりぬ、況や妙齢の婦人に於てをや、亦況〔況んや〕やん無雙の美人に於てをや、衆人の驚駭する亦無理ならず、彼等は此の女僧に対し軽薄なる批評を為さず、況や笑至奇事と為すか如きに於てをや、何も敬畏感泣の情を表したるか如し、実に彼等の此女僧に対する情は世上最も敬畏恭を寄せらるべしと思わるゝ富老崇厳なる大僧も三舎を避けたるか如し、況や此時従縦せし二人の生臭坊主を思ふの比にならさるに於てをや、凡衆既に斯の如き感を呈したり、況や同じく宗教家の身特に進で布教の任を負ひ、今や任所に趣くの余、何ぞ彼女の為め一片の同情を惜み得べき。彼女は実に普通の仏教家といふべからず、彼女は立派なる女僧なり、彼輩の入僧は決して余輩の教職に身を投ずるか如き栄誉あるに非るべし、否吾人の如く随喜の沙汰にはあらざるべし、思ふに彼女は何の故を以て出家せしや、彼が入僧の発心は如何なる動気〔動機〕に依るものにや、是れ余が疑て□〔掛カ〕かる所なり

き、余は衆人の前にて特に今や満場の疑人となり居る、然も美人の前に罷出でゝ其の因縁を談るの勇なかりき、余以為く美人伉儷願と違ひ世を恨て隠棲するに非んば情人を亡ひ皇天の無情を悲み、さては出家以て貞操を幽境に守らんとする人古今少からず、此の婦人亦此の比にあらさるなき乎と、余は彼の女の迷信を憐憫に思ふと同時に信仰の点に於て感歎して措く能はざるを覚へたり……然し彼の女の発心の動気〔動機〕如何は偖置き、彼が単に無情に感傷して利己的に隠棲せしにも非さる乎の事情も有之か如し、則ち彼女は積極的の出家なるか如し……既に発車せんとするや彼女と同伴せし二僧余か列車に入り来りぬ、よきしほり哉と思ひ彼の女の因縁を問はんとしたり、然し汽車の音囂々として談話に堪ず、只時々停車せし時を窺ひ問はんとせしに、僧只彼女の越后〔越後〕の産なると彼女の達識中々愚僧輩の及ぶ所に非る事を話さる、是れ是れ〔ママ〕より前彼女に関係あるらしく推察せられたる三十路程の田舎紳々〔ママ〕の同僧等に別語を遺せしを聞くに「我国仏教今や衰微の姿あるときに青年特に婦人の発心して出家するものなきは遺憾至極なるに今や某の如き出たり、実に喜ばしき事なれは宜しく万事御依頼申す云々」と漢語句調にて語りしを傍聴せしか、彼此思ひぶるに明〔分〕らぬ所あれど、尚二僧に精しき事聞残せしは今に至り残念なり、偖て余は彼の女僧の事により大に確信を得たり、則ち余を初め衆人の彼女に就て驚駭し敬畏尊栄の念を惹起せしめられしば何ぞ他なし、彼女妙齢の一婦人にして尚ほ斯く断然世を絶て出家したり、其の至誠の情に感激したればなり、実に彼女の至誠は白髪富鬢の威厳あたりを張ふ高僧等をして三舎を避けしむるの力ありたればなり、然るに余常に思ふやふ余今や身を教職に投じ追々教職の実務に当る事なるが、此の青書生の容姿よく講演上の威厳を保ち得るや否や、又牧会上よく人心を服信以会

明治二八年六月

し得るや否や、恐くは其の不可能なるなからんやと、今や余は彼女僧に感じ、其動気〔動機〕の至誠より出で特に此の至誠の彼の如き妙齢の身に顕出せしに感じたり、然ば余今年尚若き時に当り至誠以て職に当るに何ぞ過慮を用せんや、余が若年は偶ま以て人心の衷情を動かし得べし、彼の仮教の迷信に駈れたる女僧尚斯く人心を動し得ば、何ぞ我真の神の御手に導るゝ余等の行挙の只だ軽視軽想を蒙るを以て必至的と謂ふべけんや、嗚呼思ふまじ「余年若し故に任職上肩身狭まし」と、聖書にも「曹爾年若きを以て人にあなとらるゝ勿れ」とあり、(28—103) 旁々以て大に学ふことを得たり、因に記す、六月四日の夜白石・白井の三人にて直江津に行くや、説教后余帰途に就かんとして座を立つや、大間の方にて耳語するを聞くに「皆な若いものだ」と、余二十七日雨を冒して銀座に行き食パん一斤を求め来る、則ち翌日汽車中の弁当に当ん積なりき、而して帰校するや里見・手島の別れを惜みて訪ひ来ぬ、又望月君も在りき、余即ち賄よりジヤミ〔ジャムカ〕を貰ひ来り以て右のパんを諸氏と食す……、翌日品川より出発軽井沢に着するまで朝の八時二十分より六時半まで断食す、之れ余故意に計ひしものに非りしも事偶然にも斯くなりしを思ふて、そゝろに聖経史上の事ども思合せられて吉兆にやあらんなんど托つけるもおかし、』今日午后白石君と白石信行を訪ふ積にて先づ白石君の許に至るや、細君曰く只今近藤氏より手紙来り、兼て求道者たりし矢島ふじ子姉には一昨夜より急に病就き、今や篤危〔ママ〕の容体なればすぐ来れとの事にて白石は今行けりと、余又后を追て病院に至る、先づ不敢取矢島姉の室に入る、則ち姉は室の中央に横臥し姉の母と隣人あり、尚看疾姉三名居り、余容子〔様子〕如何と問ひしに病人は只目にて挨拶されたり、余は此時初て矢島姉の姿を拝したり、余は近藤氏の招に応じ間もなく去り同氏の室に至る、則ち白石君在り、

授洗式・葬式等の協議を為す、午后四時過白石君は病人・其母・大関姉等の願により矢島姉に洗礼を授けたり、則ち祈祷・聖書（馬可伝最后の章の終）朗読・祈祷・洗身式・祈祷の順序にて簡〔簡単〕短に済しぬ、式を為す前には病人苦痛の為め唸叫の声絶へざりしが、軈て式を始むるや彼女は静然として苦痛を及び〔忍びカ〕式了るや如何にも安らかに溜息を放ち、侍床の友人等の御目出度！と謂ふを合図に彼女は顕にてうなづき、重き唇を開き退気なる舌を動かし傍なる渡辺姉といふに謂て曰く「渡辺さんも早く洗礼を御授けなさい云々」と、渡辺姉は顔を蓋ふて泣きつゝうなづきたり、尚ほ其他の友人も皆な感涙に咽びたり、蓋し渡辺姉は矢島と同じく求道者たりしなり。再び近藤氏の室に至り大関姉の病院今迄の施術の模様を話さるゝを聞き、尚ほ終に外科治術に関係ある帳本物を拝鑑したり、大関姉は達談能弁なり、彼女は二時間洗礼を授けし時の外は余等に対し始終話続にて、余等姉の前にあっては只答辞の合図を為すの外一言の裕余を与へざりき、昨夜余近藤氏の室に在るや隣室（応待室）にて医師あるものに告て曰く彼は最早迚も助かるまじ、然し彼女は一体昨年の春既に危篤に迫りしものにて今迄生延たりしは実に賭けものなり、故に此処先づ諦よめ〔ママ〕、との言渡を洩聞きたり、今日思へば右は矢島姉の母君に申聞せたるなりと知られたり、尚是より前五日の宵の祈祷会に第一番に教会に来り暗室の中に孤座して余等の来るを待つ婦人あり、后にて聞けば彼女は此の矢島姉なりしと、彼の時姉は熱心に祈られたる一人なりき（室の灯火薄かりしと余の近眼の名残、余は彼女の姿を覚へざりき）、以て同姉の信仰の一班を知るに足るべし、此夜再び白石君の寓に到り、偶ま近藤氏も来り九時過迄話し十時着床す

明治二八年六月

九日　曇天　安息日

欄外「第二安息日」

八時半先づ病院に行き矢島姉を見ふ〔ママ〕、病人余を覚へ傍人見別〔分か〕るやと問へば、病人曰く「山田さん」と、余は簡短〔簡単〕なる祈を為して長座を慮て去る、余尚在るとき病人苦む、則ち大関姉等来り、胸部に注射術を為す、（二寸程の細き管を半ば肉に挿し二回灑薬す、管を抜て按むや初て痛がりしが又間もなく安ぎたり）、九時過日曜学校開会、余の組は染葉美和とて十三才程の小児独りにて基督宮拝の処を話したり、終頃加藤勉三・白石実氏の二人来りき、十時過白石君説教す、今日日曜学校の集は教師を入て十五名、礼拝式に十名なりき、夜は余「神の存在」を話す、聴衆は近藤氏と白石婦夫のみ、大に話しにくかりき。明日（晩）白石君の寓にて小原氏といふ二十前后の青年に会す、氏今郡役所に奉職し居ると、有望なる求道者なりと知らる。今晩国沢君よりはがき来る

十日　晴天

〔欄外〕「福音新報の禁止」

八時頃矢島姉を見舞、母子の外に親戚方の二人在り、看護婦二人も着〔付〕けり、一婦曰く山田先生来れり明るや、病人曰く明ると、余は余り病者の姿を見ず其の足下に座せり、看護婦曰く昨日までは種々物語りたれど今日は退気と見へ黙せり、又昨日までは土瓶を持ち得しも今朝は之を持ち得ず、大に衰へ来りぬと、余は簡短〔簡単〕に祈り母子に摂養を注意し去る、此処洗濯屋なきより自分にてシヤツ・足袋・下帯等を洗ひぬ、昨日福音新報社よりはかき来、曰く同新報は二百二十号の記事

出版法二条外なるを以て禁止さると、午后近藤氏来話す、余入浴す、夜白石君の宅に至り話す、矢島氏よりはかき来る、同氏は去る七日着松せりといふ、

十一日　晴天

〔欄外〕「梅雨／春日町講義所[28—104]の説教会（其一）／矢島ふじ子永眠す」

国沢・小倉へはかき一つゝと里見純吉君と秋葉□氏へ同封にて秋葉氏へ手紙差出す。今日より梅雨の候となる、長野国彦氏の周施[周旋]により春日町に講義所を設け月に二廻開会のことゝし今宵初会を催したり、余等遅て八時半頃至り余は「伝道の精神」といふ題にて二十分程語り、次て白石君基督教の善きものなりとのことを極平易に述らる、白石君の時になり聴衆中喧くもの出てたり、多くは小供なりき、但し小供多かりしも無慮二十五名或三十名の集にて大人の多くは謹聴されたり、因に記す、当家の席料は一度二十五銭づゝなりと。十時白石君の室に着帰、則ち近藤氏より矢島ふじ子姉儀今宵八時半安眠せるとの報在り直に行く、遺骸室の中央に平臥し、傍に友人五六名添ひ何れも焦然[悄然カ]たる姿にて侍き居たり、白石君実母及隣友に向ひ弔辞を為し、天命なれは詮なし、殊に此の良医の手に掛りて斯くなりしものなれば決して無念に思ひ給ひぞ[ママ]と、間もなく去り近藤氏の室にて時余話し、大関姉とも数語交ゆ、姉は余り語らず大に憔悴の姿なるも道理、況や姉に於てをや、

十二日　晴天

〔欄外〕「矢島姉の葬式及野送／火葬場」

午前八時白石君入来、今日四時矢島姉の葬式を執行すと、則ち共に会堂を掃除し、余は白石君の

手紙を以て長野・清水・荒木の三氏に報知す、偖て午后四時棺は医院不常門より会堂へ移され、矢島姉の母君初め親属〔親族〕・知人等五六名と其他信徒等無慮二十名程会す、折しも隣近所の小女小児は勿論婦女等の集りたる事山の如く、或は入口に或は窓に顔を出して見物し居たり、柩は講壇の前数歩の正面に長く横へ黒ビロードの蓋を為し上に鑠薬〔芍薬〕の花を置きたり、軈〔軈て〕余は司会となって登壇し讃美（百九十七）・聖書朗読（伝道書十二章）・祈祷（清水君）・讃美（二百三番）・履暦〔履歴〕口述（近藤君）・讃美（二百八）・説教（白石君）・祈祷（白石君）・讃美（二百六十六）の順序を以て五時半会を散ず、是より半里程ある田舎の火葬場に柩は運ばる、則ち白石・近藤・大関・白石姉・安田及余と矢島姉の母君・弟君及二三の親属〔親族〕輩も又野送す、軈て火葬場に来るや白石君一片の祈祷を捧げ余等帰参す、火葬の模様は先づ九尺二間位なる小屋の周囲を壁にて塗り天棟に煙突あり、其の土間の中央に長棺丈の穴を穿ち内に薪木を置き其の周囲に藁を積重ね其の上に柩を安置し然して放火するなり、全く焼け了るまでには三四時間を用す〔要〕と

十三日　晴天

〔欄外〕「苗植」

「基督教の死観」を考ふ、午后二時尾崎・布施氏の為に英書を講す、是より大概毎日教ふることに引受く、又明〔ママ〕よりは金子氏にも教ゆる積なり、午后三時より矢島姉の遺族を見舞ふ、母子と弟あり、叔父の住所に同居せらる、余暫く教の事に就て語る、皆な謂ゆるやりてなり、道に遠ふさうなるぞ気の毒なり、夜分白石君と近藤君来る、白石君近藤氏より遅く来て早く帰る、近藤氏十一時過帰らる、氏は余に取り唯一の慰手なり。思ふに白石君に於る亦然らん、今宵はパん・菓

子テンを取り茶を進む、余為に寝苦しかりし謂ゆる（ママ）、若林・奥平姉より音信あり、昨日長谷川君よりも有之、直に返信す。今日頃諸所にて苗植を見る、

十四日　晴天

清水又次郎君にはかき出す、午后三時頃白石君来訪、散歩如何と、則ち城跡を見舞ひいちこを狩らんとして先鞭者の為其の意をはたさず、夜分降雨

十五日　晴天

〔欄外〕「余か一重物の丈」

折々雨降り午后六時より本降となる、心地大によし清々せり。過日波多野にて拝領せし一重物は紺のかすりなれと左の如く仕立呉れたり―丈三尺四寸、後巾八寸、前巾六寸五分、袖付一尺一寸、つま下一尺五寸、おくみ下り五寸、袖丈三寸五分也、尚袖口は七寸三分なり。「基督教の死観」稿成る。午后入浴す、帰路命日木及玉子を求む

十六日　雨天

〔欄外〕「第三安息日／蚕子上簇」

梅雨のことゝて時々晴れ又々降雨烈しきに至ること交々なり、余遅て教会に到る、然し余の組の子供一人も来らず、日曜学校小児女子五名、余等共廿名、礼拝式に三人、余説教す、則ち昨日稿成りし「基督信徒の死観」を述ぶ。此辺の蚕今日頃上簇せり。夜分は小女四名程来りしも大人来らぬ故説教は見合せ讃美を歌ふて散し、帰路病院に話す。

十七日　晴天

午前時々驟雨降りしも午后晴れたり、国沢君へ手紙出す、二時頃より清水源三君の病を見舞ふ、則ちヂ病なりと、尚五分一(28—105)辺を彷徨し何処様を尋得ず帰る。

十八日　晴天

〔欄外〕「茄子植」

午后白石君の為に茄子苗を植て遣す、近藤氏来り雀五羽捕ふ、

十九日　雨天

マクネヤ氏に七日分の給料の催促を認む、午后八時より水曜日の祈会に行く、則ち白石君婦夫・野口・渡辺・神谷姉等の諸氏出席、白石君司会され九時過閉会し、帰路白石君等と病院へ寄り十時過まで話しぬ。

二十日　晴天

〔欄外〕「直江津港の説教会（其二）」

午后六時より挽車(腕車)にて白石君と共に直江津港の説教会に到る、余司会となり祈祷・聖書朗読、続て「人の重(主)なる目的」といふ題にて三十分程話す、語句渋滞・順序不整、聴者はさぞかし理解し得ざりしことゝ認る、弁舌修養の必要を感ずる事切なり。白石后に「基督教の必要」を説かる、八時廿分開会九時半閉会、会するもの三十名程にて小川・荒木（荒木姉の兄君）の両氏も見ゆ、帰路高田を離る半里程の高見橋の辺にて高帽一個を拾ひ則ち関町(28—106)の交番に届く。直江津より高田まで路程らうそく一本を要す。今日国沢等より手紙到来す。

二十一日　晴天

〔欄外〕「ベースボールマッチ[28—107]（慶応義塾対）」

午后六時頃近藤君入来八時頃まで話さる、尚同氏よりヨジムチンキ一瓶を貰ぬ。九時頃里見純吉君より消息あり、曰く明治学院ベースボール会益々盛大になり、去る十二日には慶応義塾へマッチ申込み、学院グラウンドにて仕合せしに学院十二イン、慶応五インにて七点の勝となり、其翌日慶応より申込まれ彼等は新手に代へたること故迚に叶ふまじと思われしが、中途にして降雨の為め停止せしが、当日は六点の負となりしも、尚全く終りまで仕合たるに非さればとて又々学院より申込み、第三回の決戦を為し遂に相方九イン〔ゞ〕にて勝敗なくして了りたりと、学院と慶応同盟の上第一高等中学[28—108]と開戦する事となり、来る土曜日本郷向ヶ岡の運動場[28—109]にて仕合積にて、学院よりは下村・手島・篠原・田中の四人を撰出すと。嗚呼進歩したる哉我同窓諸氏、尚承五郎氏は北海道へ巡廻に行れし由、白幡のよし子様には女子を分娩され母子共無事なりと。清水君よりはかき来る、

二十二日　曇天

昨日荒木姉へ手紙差出す、同封にて秋葉姉・純吉君へも一寸音つれぬ。

二十三日　晴天　安息日

〔欄外〕「第四安息日」

朝程一寸雨降りしも間もなく霽れぬ。九時より日曜学校開会、十時より礼拝式開会、余司会、白石君説教さる。日曜学校出席総計二十名、礼拝式に十二名、尚夜分には礼[例]の如く八時より開会、

余は「宗教の必要」、白石君は「基督教の必要」を述へたり、会するもの十二名なりき、昨日秋葉氏より書簡到来、今日矢島・河野の両氏よりも来る。今日は頃日に珍らしき寒さにして重衣に裏の羽織と下にシヤツを重ね尚冷気を感したり。今日森山信一氏の病気を見舞ふ、時に息子君にも面会暫時話したり、森山氏の病は大した事に非ず、一寸応接したり、蓋し妻君教会に来り、氏徴恙ありと聞て行きしなり、布施鉄雄君夜の集に来られき。

二十四日　晴天

午前河野君へ手紙出す。尚午后は父と母へも消息を認む。午后白石君の宅に話し、赤井・野口姉等の入来するに会ひ、間もなく去り入浴しぬ、其時白石君より金二拾銭拝借す。夜また白石君の寓に談じ、帰路病院にて既に寝たる近藤氏と少時話し十時過帰宿、

二十五日　晴天

午后白石行信君の宅と加藤喜蔵〔喜造〕君の宅へ訪問す、加藤様にては戸口にて妻君と暫く語り御主人には面会せず、蓋し在宿には相違なかりしならん。今日バラ氏よりはがき来り、余の給料は来月早々送るべしと

二十六日　晴天

〔欄外〕「野口姉の祈祷／人の祈祷を聞く事」

午后九時頃より降雨、朝程矢島君への手紙を認む。午后「信仰の進歩と其の危機」を考ふ、夜分教会の祈会に余司会となり右の主意を話しぬ、会するもの七名清水長老も見へたり。野口姉の祈祷の切実にして質朴なる実に歎感の外なし、如斯祈祷は当座の人心を活動せしむるに足る、況し

てや神の喜で聞入れ玉〔給〕ふ事疑なし。回顧するに東京なる新島善直〔28—110〕氏の祈祷も亦野口姉と同調なり。余はよく遇ふ事なるが祈祷の言気に限り平話より流暢に且つ華美なる語調を整へるものあり、余は斯る人の祈祷に同情を表することなけれど。是は彼の心意の実想を知らずして邪推するの嫌あるべき乎、若し彼の口調天然に然かる流暢なるを故意と思ふは全く邪推ならんには、余は其人と神の前に大なる罪人なるべし…。否な余が毎度人の祈祷に向ひ、今彼はあの言葉を真心より発語しつゝあるや否やと批評するの癖あり。神と人に対する無礼之に過るものなかるべし。今宵教会の為藁雑履〔草履〕十足求む、

二十七日　雨天

〔欄外〕「福島叔父余り宜しからずと／春日町講義所説会教〔説教会〕（其二）」

中村君と小田君へ同封にて手紙差出す、尚来信には関谷叔母・親父・福島三造君・荒木とみ子の諸氏より来る、福島の叔父君には病宜しからぬ由、蓋し余出立前一寸立寄りし時已に気管〔気管支〕視カタールに罹られ居しが、其節余思ふに中々容体宜しからざれは大事に至らねばよしと、果して今日三造氏の申越るゝ如く不快なりとは実に気の毒千万なり……、余亦乍蔭心配することあり。午后八時より春日町に説教会あり、大人五名程・小人十五六名程来聴、余開会前小児の為話し、尚大人の為「人の重〔主〕なる目的」を述ぶ、開会せしは一時半にて九時半頃閉す、蓋し雨天なりければ人集悪しかりしなり。

二十八日　晴天

午后白石君の為に畑を耕作す。夜分近藤氏を病院に訪ひ大関姉にも面会、間もなく近藤氏の春日

町の洋服屋に行に随行、帰路白石君の宅に話し十時過帰宿

二十九日　晴天

明晩の説教「天国」脱稿す、午后散髪し入浴、白石君より又々二十銭拝借す、夜分白石行信氏を見舞ふ、即ち明日は教会に於て小会を開けば万障繰合て出席されべき旨申延〔述〕ぶ、氏の返答曖昧なりき、帰路一寸白石君へ寄り窓にて近藤氏を音〔訪〕ひ帰宿、

三十日　曇天　安息日

〔欄外〕「第五安息日／閉口なるもの／永野氏の家族」

余日曜学校司会す、集るもの二十名程、礼拝式は白石君説教す、九名集る、夜分白石君説教亦九名集りありき、帰路医院へ寄り近藤氏の室にて十一時過まて談じ大関姉より始より終まで話さる、重〔主〕に女学校の成立及び歴史と教会の履歴等得意の流弁を以て説示したり、余聞て大に学ぶ、或人「高田の教会員は再び洗礼を受直すべし」と言〔語カ〕りしと聞きしが実に然らん。一言せんに高田教会員の信仰は社会的・方便的に基いせるものなりしか如し。今日昼間矢島ふじ子の母りい姉礼拝式に見へたり。白石・長谷川の両氏も小生来高后初て会さる、蓋し日曜学校の間小会ありしなり。長谷川君と同郵にて加藤喜蔵〔喜造〕君より手紙来る。曰く近日房総の海岸を漫遊したければ御知己へ照介〔紹介〕を依頼すと。当地の人余等を称して先生〳〵といふよし。されどまた大谷・国沢・井深・陶山なぞと呼ぶを聞く、閉口なるもの、のみ・蚊・飯の菜の毎日〳〵同品・鬱陶敷さ・寂寥・教会員の不熱心（自分も矢張然り）、永野八郎・同男平四郎・同次男平作・八郎氏妻君ふゆ・平四郎氏妻君てふ・長女つね・三男萬策男・平四郎氏長男みさを・長女うめ子、右は九月三

日暇乞に行き、つね子より打聞のまゝに記す。

七月

一日　晴天

〔欄外〕「渡辺六郎氏」

「基督の試惑」に就き起稿す。午后白石君を訪ひ金二十銭借り其足にて会堂に至り演説の稽古を一時間程為したり、夜分長野氏・中村氏・白石氏（喜之助）を訪問し、最后に病院に寄り近藤氏の室にて暫く話す、則ち田舎より貰ひたりといふ餅米を熊笹に三角様に包み之を蒸したるものを馳走になりたり、何とかいゝき。今宵初て大関姉の令息渡辺六郎君に面会したり、氏は当町の歯科医江川[28—11]方に斯道の研究を為し居る由、年齢十八才なりと。大関姉は来る四日より三四日間近在へ衛生演説に招聘せられたれば、今宵は其起稿最中なりき。

二日　曇天

加藤喜造君の為早川・松尾への照介〔紹介〕状を認め送りぬ、尚秋葉氏へも加藤氏のため照介〔紹介〕状を持せ遣る様申遣す。三時半頃近藤君雀捕銃を携へ来り、同道北郊の田舎に徘徊し雀六羽を打ち六時帰宿す。近藤氏曰く是丈なら笑れぬと、意気揚々帰院す。

三日　曇天

今宵水曜日にて会堂に至り十時頃帰宿す、会するもの五名。長山君より書信来り、氏は下痢病に罹り屡らく弱り医師にさへかゝりしといふ、

四日　晴天

〔欄外〕「パノラマ(28—112)／直江津港の説教会（其三）」

午前十一時五十分出の汽車にて（中等）白石姉及赤井姉同道直江津港に至る、則ち「パノラマ」を見んとてなり、汽車を下り直にパノラマ館に歩を運び一人前四銭の見料を払ひ凡そ三十分間程見物す、先づかなり上図〔上手〕に出来居たり、蓋し余未だ東京のパノラマを見ざれは如何とも比較し難し、館員絵説を為す、則ち九月十二日平壌総攻撃の写真なりき。館を出で一寸講義所へ寄り直に直江津海瀕〔海浜〕に散歩すること一時間余、三時過帰り講義所に小憩、婦人共は車にて帰高さる、則ち白石君送る、十一銭つゝなりと。其間余は当家の二階に休憩す、白石君帰り曰く夕飯の替に菓子を食わんと、余曰く然りと、則ち蒸菓子を尋ねて直江津港中に駆る、何処にもなし。則ち時過きし、かしはもちとパんを求む、午後八時説教会開会、余は「人の霊魂の価値」を説き、白石君は「人の重〔主〕なる目的」を説かる。聴衆無慮三十名、今宵は常より掛声多くノー・ヒヤ・御尤もてふ声絶ざりき。九時頃出発十一時頃着高、理吉・加藤喜造の両人よりはかき来り居りき。

五日　晴天

〔欄外〕「安田姉の送別並に女学校及び教会の親睦会」

午后二時半の定なりしか四時頃より高田女学校にて安田姉の送別会並に女学校及ひ教会の親睦会開会、清水君司会にて白石両君及長谷川君の送辞及び安田姉の答辞並に生徒への遺訓あり、后茶菓の馳走あり、女生徒・諸姉は種々遊興を尽されたり、六時半頃散会す、今日大森氏(28—113)に初て面会す、氏は医師にてメソデスト講義所(28—114)に附属せる由、尚荒木信宝氏にも今日しみ〳〵面会せり。

会集無慮三十名、会費金三銭、玄間〔玄関〕の正面の机に会費金三銭と行々〔仰々〕敷下札のありしには一寸抱腹の外なかりき。帰路白石君に招かれ近藤氏と同道牛肉の馳走になり一時医院に来り十時過迄話したり。白石君事今宵より一週間に二日つゝ当院学生の為英語を教授することゝなりたり。渡辺六郎氏と暫く話す。大に暑かりし。

六日　晴天

午前七時半頃より女学校の安田姉を尋ね九時過迄話し手島君への手紙を托しぬ。安田姉の話に□癩質なりと。姉にシヤボン箱を遣る。

七日　晴天　安息日

〔欄外〕「第一安息日／安田いは子」

安息日学校二十名、礼拝式に十一名、余説教す、「基督の誘惑」、午后安田姉の為荷を個り国沢・深尾の手紙を托す、尚夜分も罷行き七時頃より九時過迄話したり。安田姉は明治四年生にて元は熊本生にて今は熊本県下阿蘇山の麓阿蘇郡宮地[28-15]に住せる由、然し不動産は名古屋にあれば永久の住所は同所なりといふ。姉は安田家の一人娘にて両親尚ほ健かにて父君は官吏なる由。元は余程門閥家と見ゆ。姉の談話に依り推し得たり、否姉自身宛然大家の処女と謂つべき容姿なり。姉は充分奥平姉の対なり。品性は更にも言はず容貌に於て大に似たるものあり、眼光人を射、口端〆り、容色白からず、何れかと言は黒き方にて脊の高き所宛然奥平姉に彷彿たり。余は安田姉により学ふこと少からず、

八日　曇天

〔欄外〕「祇園祭／安田姉帰国／瀬上せつ子／高田教会員及在留信徒並に求道者（二）／祈祷の感」

昨日は高田町祇園祭[28—116]にて尚ほ来る十四日迄でを祇園祭日といゝ昨日と十四日は最も賑かなる日なりと。昨夜は安田姉の許に話し教会へ行ず、蓋し朝の散談〔算段〕を為し且つ疲れ居れば御面〔御免〕を蒙りたり。聞けば十名程集りたる由、今日は矢島りい姉見へたり。大関姉事去る五日菅原村[28—117]へ衛生演説に行き昨夜帰りたりと。今朝四時半宮崎老に起され洗顔直に女学校に行く、人影見ねば未だ早きことゝ思ひ玄関〔玄関〕前に打立す、其中に瀬の上姉来る、姉と初て会す。姉老人を呼び安田姉まだ立たずやと、老人曰く已に立りと、則ち瀬の上姉と同道停車場に行く、五時半なりき。女学校の生徒・教員及び白石兄姉等来り、六時半汽笛一声、列車は安田姉を乗て東上せり。長山君へ手紙出す。瀬上せつ子は昨年東京独立女学校を卒業せられ今日は高田に帰り居る由、但し此間中は養蚕見習の為上州へ行き居りしが一昨夜帰省せりと。今日午后快晴暑威甚し。

高田教会員及び在留徒信〔信徒〕並に求道者

ふじ子の実母	矢島リイ	女子学院生徒	長野つね
女学校生徒	秋山みと		瀧口正治
大関姉の息子	渡辺六郎	中学校卒業生	小田新次郎
高田教会長老	長野八郎	電信郵便学校[28—118]生徒	中村幹治

美々〔美以〕教会講義所伝道者　松本常　看護婦助手　神谷さつ
裁判所勤務、美々〔美以〕教会員　佐藤才一郎　看護婦　松ノ山
美々〔美以〕教会々員　医師　大森隆碩　小田君の姉　富永わか
女子学院生徒　同　みき　小杉シヅ

今日午后三時より清水氏を訪ふ、留守、長野氏へ寄る、則ち畑にあり、生瓜を取り居らる、生瓜も半過なりと、軈て休息せられ暫く話す、又余は重に受身にて彼よく話したり、帰路白石君を一寸訪帰宿す。午后六時過旧城跡の芝生、老松臥龍の如く生茂れる堤丘に囲まれつゝ門跡なる台石に腰打掛て妙高・黒姫の遠景を詠〔眺〕めつゝ将に没陽暗黒に時を譲らんとして西天紅なるを見留つゝ、雙手を前頭髪部と額部に当て落々と天父に祈祷を捧げたり。事柄は重〔主〕に自身の信仰の確固と其の発達を祈り、高田教会の為め、殊に求道者某々の為、又安田姉の為め、其他余の心中に慝起〔惹起〕せし事一分不残求めたり。余は此度高田に来りしより生れて以来全き祈祷を捧げ得しを感謝す、殊に今夕の如きは今夕を以て初てとす、真心より出せし祈祷は心すがく〳〵しくなるものなり。余は心付きたり、余の最も願わしき事は真正なる祈祷の出来得ん事なり。但し余は今夕二回に祈りたり、則ち最初は重〔主〕に請願のみに偏したり、故に再び御耳を傾けんことを願ひ既往の罪悪を謝し、尚其の如何に御前に罪せしときも余の為常に恩寵を垂れ玉〔給〕ひしを感謝したり、余はまた婦人との交際上キリストに依れる愛の交の外に出ざらんことを祈りぬ。

明治二八年七月

九日　晴天

〔欄外〕「秋葉一行帰国」

今朝自営館へわらべの全巻を催促の為はかき出す、波多野へ手紙出す。午后美々〔美以〕講義所伝道者松本氏を伺問す、夜分田中氏来訪さる、秋葉氏より手紙来り、内に井上フサ子の手紙も入来る、秋葉氏一行は一日の五時立三時着郷せりと。福音新報一号来る、今夕も六時過旧城跡の門跡の石に腰打掛て捧祈祷す。

十日　晴天

〔欄外〕「日本基督教会第十回大会／森山氏のホーム」

日本基督教会第十回大会は今日より十五日まで名古屋に於て開会さるゝ由。午前十時頃より森山氏を訪問す、則ち主人信一氏は四五日前新潟の方へ行けりと、妻君と新婦と在り。妻君会釈さる。姉性穏厚〔温厚〕篤実、言葉少くして情操濃く品高潔にして宛然貴人の備相あり。軈て新婦は茶を出さる、其の挙止日本流の礼儀を守る事間然なし、思ふに姑媳の間ルツのナホミに於るか如きも(28—119)のあるに似たり。新婦亦道に遠からざるべし。知らず、誰か彼の姉を導て教に帰せしむるものぞ。余一時の願求に女性にてあれかしと思ひたり。余は一時間程語り終に祈祷を為して去る。尚ほ窺ふに下男・下女見へず、新婦亦台所仕事を為すものゝ如し、姉は「怠の糧を食はざる」(28—120)婦人と見ゆ。午后入浴す、城跡にて祈る。水曜日なれば会堂に祈会に行く、集るもの五名。安田姉無事着京の旨教会当にて来信。

十一日　晴天

〔欄外〕「小田厚太郎君・中村茂策君等帰高せり」

唐風吹く、九時頃小田厚太郎君来訪、氏は昨日帰国せりと、又中村茂策氏も同伴帰高したりといふ。十時小田君を携て白石君の宅に到り十一時帰宿す。午后二時より春日町の講義所に至り今宵の説教会を明夜に延す様談般（談判）し、其足にて長野氏へも一寸知せ、帰路中村氏へ寄り茂策氏に面会少し話し同道白石君の宅に至る、軈て尾島氏来訪、五時過まで話したり。午后六時より城跡に散歩堤上にて神に祷を捧げ黄昏に及び帰宿、又々新職人町（28―121）の矢島氏を訪問す、蓋し留守にて一寸今一人の老婆に面会、少し腰掛話を為し、帰路病院へ寄り近藤氏の室に九時過まで話す、大関姉も来談。家翁に金促を食ひ大に閉口す。

十二日　晴天

〔欄外〕春日町講義所説教会（其三）

二時頃中村・白石君等来り小田君の所へ行かん乎と、則ち同道、瓦町の富田氏といふ小田氏の姉君の許へ訪ふ、田中氏会合二時間程談笑、五時頃去る。午后八時より春日町に開会の説教会に行く、即ち小田氏の一行（氏の知己及び弟君）五六名来る、余「人の重（主）なる目的」の辛苅（殿カ）を為す、白石君また余と似たる説教為す、聴衆十名程なりき。帰路小田君と白石へ一寸寄り十時過帰宿す。今日波多野承五郎氏より手紙到来、尚バラ氏より為替送らる。

十三日　曇天

長野氏の令嬢事昨夜帰省せし由、午后三時頃大関和子入来二時間程話さる、姉は自身々上の事ど

も明かされたり。夜分矢島リイ子を訪問せしも留守なりき、帰路白石君に遇ひ同道高田町を散歩し十時頃帰宿す。今日バラ氏より送られし七月分給料金八円為替受取る、則ち白石君へ壱円返金、宮崎老人へ今月分の宿料三円六十銭払ふ。

十四日　晴天

〔欄外〕「第二安息日」

小田君誘ふ、則ち八時頃より出掛け会堂尚一人の来るなし。屡くして婦人衆集る、軈て九時少し過日曜学校開会、余司会たり、小女三人・小児二人集る、総数十五名程なりき、礼拝式には中村茂策君説教、十八九名の集会なりき。午后八時より小田・白石君の説教あり、聴衆十名程ありたり。午后三時頃小田新次郎君来談す。

十五日　晴天

〔欄外〕「愛の風／春日山」

午前八時中村・田中・小田・白石君等と愛の風(28—122)及び春日山(28—123)散歩の催整ひ、先づ中村君の宅に集り彼処より中村君先導にて愛の風に至り、茶屋瀬尾といふへ登り九時半に着し十二時近まで或は囲碁・将戯(将棋)・放吟思ひ〳〵に放談し、十一時半頃何も用意の弁当を使用し、十二時少前再びわらじ着け春日山へと歩を転ぢ一里程なれば難なく着山、先づ頂上に登り越后(越後)中頸城全部と之を周囲せる日本海及び信越の諸山を眺望し底なし井戸(28—124)を見舞、上杉謙信の神社春日神社(28—125)を見舞下山、二三村落を経際町を過ぎ五分一に出で帰宿せしは午后四時なりき、入浴后白石君に招かれしこの馳走に与りぬ、来客は書面の諸氏なりき、余今日下駄及び足袋を求む、愛の風にては生瓜の新

漬二本ぶり程取寄、茶代二十銭置きしに大に満足の体に見へたり。尚際町にて棒飴を一銭つゝ食ひたり。遊費五銭。

十六日　晴天

〔欄外〕「下小町(28—126)の夜市」

昨日親父よりのはかきと自営館よりわらべ言張のはかき来ぬ。午前小田君来談、氏は午后帰省す、余午后中村君の宅へ行き暫く話し、雨に逢ひ傘を借り帰る、夕白石君来談、今日大に蒸暑くぢり〳〵汗出。夜分関谷と長谷川へ手紙認む。小田君に仏教管見(28—127)を貸与す。下小の夜市始まる。

十七日　雨天

長谷川君へ金六十銭為替差出す。夜分長野八郎氏の宅に祈祷会あり、会するもの十一名、蓋し東京下りの学生多を占む、瀧口正治・中村幹治氏に初て面会す、白石君司会たりき。宿翁に五十銭貸与す。

十八日　雨天

奥平姉より来信、直に返書出す。中学校の試験今日にて畢れりと。

十九日　雨天

午前加藤喜造君来訪、午后清水氏来訪さる、余四時頃より白石行信氏を訪ふ、則ち加藤と森山様の次男在り、暫く話し五時退き帰路菓子・カタクリ等を求め知命堂医院(病院)前にて近藤氏に呼れ則ち入る、同氏に夕飯の馳走になり大関姉病なりと聞き姉の室に至り見舞ふ、曰く時候当りならんと、九時過迄話す、又大関姉多く話す、席上人なき時息子様の事に談及す、余又同情の念に堪

ず、此程より息子様家主より其の新聞及雑誌・小説等に耽り本業歯科の方怠り勝なるを譴責し断全〔断然〕雑書の見読を差留たるにぞ、息子様是を肯とせず母君に訴しと見ゆ、是に於て大関姉も親心の子に引かされたるにや一図〔一途〕に江川氏の過酷を思ひ為に進退の是非を考察せるもの〻如し、就ては兼て植村氏も大に世話せんと申されし由なれは、同先生に一応計はん積なりと、余又其の可なる申上て帰参す、帰路息子様の稽古より帰らる〻を幸ひ江川氏の家前まで随行し、余の意見を懇々打明し大に警醒実考し、果して歯科の不適当なるに非ずんば之が為悪迄尽力せん事を勧む、又従て他書の雑読の否なる事を注意し上たり、氏は小説的文学にしん粋〔心酔〕せるもの〻如し、而して大関姉は是を以て文学思想に富む事と観ぜり、或は然らん、然し人は誰も文学的思想を有せざるなし、己が背中は洗ひ難し、大関姉も亦何ぞ然らざるを得ん

二十日　曇天

〔欄外〕「同宿の諸子等帰家す／土用の入り／誕生日／中村茂策君軽井沢に行く」

一昨十八日には金子君先づ帰家す、昨日は尾崎君・山本君と帰家し、今日は布施君・大瀧君と帰家せり、余は一昨夜布施・尾崎君の為に十銭程乾菓子を馳走し遣したり、両氏欣然たるか如し、其節カステーラを求む、而して白石君の所にて開き再び求に行きしなり。今朝布施君出立に先立ち余に英書を教へたる返礼として白足袋一足を調整して送らんとす、余堅く辞したれば詮なく治〔収〕めたり。余彼が心を納けたり。衆皆な朴質なりと雖も布施氏は殊に甲斐〳〵しき人物なり。今日は土用の入なり。只だ蒸し暑きのみ。今日は余が誕生日なり、余は明治六年の七月二十日正午十二時に生れしなり。万歳！、午后三時より白石君の寓に行んとす、則ち白石君の先行を見る、

追て伴行中村君の宅に至り暫く話し長野氏の畑に在るに会ひ町を経て帰る、余石橋にて洋乾〔羊羹カ〕六銭なるを四本求め一本白石君へ他は近藤・大関・野口の諸氏へ配送したり、蓋し誕生の祝としてなり。今宵再び渡辺六郎君に悟念し決心の程を母君に申延〔述〕る事を勧めたり。今朝六時半の汽〔ママ〕にて中村茂策君の軽井沢に行くを送る。余と白石のみ。

二十一日　曇天　安息日

〔欄外〕「第三安息日」

九時より安息学校開会、白石君司会、三十名程の集なりき。礼拝式も三十名程来会、司会として余之に当り白石君説教せり。夜分八時より開会、余司会、続て「日清戦争と基督教」といふ題にて三十分程演じ、次て白石君亦同様なる話説〔ママ〕あり、九時半閉会せり、十名の聴〔聴衆カ〕と入口に打立せるもの無慮十名ありき。今朝近藤氏の所へ数学を研究に来れる池田和三郎氏外一人来堂、夜分来れと言に来たり。

二十二日　晴天

〔欄外〕「秋山みと姉」

午前十時頃より森山氏を訪問す、老主人二三日前新潟より帰宅せりと、息子又在り、リウマチの気味なりと、三十分程話し去る。白石氏へ至る、則ち井戸普講にて早々に去る。加藤氏方へ至る、尊父在り話す、其うちに喜造君一昨日田舎に行きしか今帰れりと入来る、則ち二階に移座三十分程話し去る。帰路女学校の秋山姉を訪問し玄間〔玄関〕にて面会、信仰に関し家人の制裁如何と諚〔ママ〕る、果して洗礼を受る事は止められたりと、余仮令洗礼を受けざるも直の信仰だにあらば可なり

と悟〔論〕し間もなく去る、姉も又小供なれは行末大に掛〔懸念〕念なり。去る七日のことなりけり、余安田姉の荷をこる時同姉留守にて秋山姉のみ在り、余試に彼が家人の姓名を聞くに否手帳に認めさせしに何に思けん認めず、微笑して只だ自分の姓名のみ書かれたり、しかも紙面の真中に堅筆に認められたり、彼の女また大臣の娘なるらん乎。彼は最早此校を去ると、而して高田の町にて裁縫を稽古するやも知れず云々と、彼は安田姉の感化を受けたるものなり。秋山みと姉の処は東頸城郡川上村字切光〔28—128〕。蒸殺されさふな気候なり。頭さへ痛む。

二十三日　晴天

奥平姉へ手紙差出す。白石君来り大関姉の演説草稿の写を依願し行。午后散髪其道にて大弓四十本射たり。三時過より白石君と荒木・長野氏を訪問何れも留守。〔美以〕美々の沢本氏に行く、在り少し話し帰る。余入浴す。髪を散切して快精活神。夜分写事す。

二十四日　晴天

〔欄外〕「林檎」

午后三時頃より白石氏と同道清水氏の寓に訪問し五時半頃帰宿す、昨日清水氏より白石氏へ教会改革案の発表を為され、其打合旁々今日伺ひたるなり。今日清水氏方にて林檎の馳走になる、大に佳味なりき。四時頃より降雨夜分大に蒸したり。頭部の具合大に悪し。河合君より消息来る。夜分祈会、加藤・中村の両氏来会、余司会す。帰路一寸医院の近藤氏を訪ふ。

二十五日　雨天

小田厚太郎君より白石君同封にて消息あり、何れ姉崎にて基督教の演説会を開くべし日限は后報

すと。秋葉かつ子より来状、教会の不振に付きつぶやき来りぬ。町にて林檎二個五銭にて求め近藤君におねま・おめざとして進呈す。

二十六日　曇天

〔欄外〕「春日町講義所説教会（其四）」

午后八時春日町の講義所に至る、既に童子等満場、間もなく開会、余先づ小供の為の話を為す、不慣の事とて渋舌さぞ聞き苦しかりしならん。白石君キリストの十字架を話す、中村君・永野氏来会、大小聴衆三十名、重[主]に大は門口に打立せりき。

二十七日　晴天

布施君隣人を携れて来高、間もなく帰らる、一時間程話されたり。午后四時頃中村幹治君来訪、六時頃まで話さる、氏亦話手なり、中々才子なり。

二十八日　雨天　安息日

〔欄外〕「第四安息日／メリケン姉[28-129]」

……昨夜より今朝に掛け言ひ難き〇〇あり、取かやしのつかぬを遺憾とす、―神よ困[困窮]める我を憫み給へ、我は罪人の首なり、希くは恵の御手もて我を潔め給ゑ…、八時半会堂に至るやメリケン姉女学生某と書生一人を携れて会せり、書生は専門学校の人にて同道し来りしなりと、氏は越中富山のものにて暑中休暇の為帰省するなりと、余敢て拶挨[挨拶]せず、然し名を横井〔　〕といふとぞ、一行は今朝直江津より来りしなり、蓋し去る金曜日に来高、直に直江津に行くも船便悪くして今日迄逗留せしなりと、メリケン姉小児に話すに基督の光たる事と我等も亦其光を輝すもの

なる事を教るにろうそくの実施的教示を以てする事実に巧妙なりき。白石君説教さる。日曜学校来会者三十八九名、内小供五名、礼拝式に三十五名程なりき。白石君メリケン姉の嘱託に応じ直江津に行く、即集りの為也。夜分は今日二時頃より大雨となり、夜尚猖獗を極むる事とて八時といふ時刻来るも尚来衆なく、始て病院より婦人二人、之に白石行信氏と白石姉あり、余則ち「霊視の価値」を一時間話す

二十九日　雨天

〔欄外〕「直江津港の説教会（其四）／高田日本基督教会改革案、一、教会の体面を汚す行為あるもの、信仰の冷却して復廻の見込なきものは鋭意除名を為し、教会の威厳を一層明瞭に表彰すべきこと、一、現在の役員を悉く解任して新たに長老参名并執事一名を撰挙する事、一、教会地所は明かに共有財産の名義を以て登記を受け置く事、一、教会堂留守居番を更替〔交替〕する事、一、会計上其他必要上の事項を弁ずる為規約を定むる事、清水源蔵君考、明治二十八年七月二十三日」

朝十時頃白石氏へ行く、則ち氏丁度帰宅せし処にて、昨日直江津にて開きし小児の集は我常の好景にて希望の小児四十名程集り、メリケン姉も大に得意なりしと、斯くて夜分も集あり、相応に集りしといふ、メリケン姉は今朝九時佐渡へ出汎〔出帆〕せられたりといふ。午后再び白石氏へ行く、則ち小田厚太郎氏あり、其うちに清水源蔵氏来り、教会の談出で氏が重〔主〕に主張する教会改革案に就き長谷川氏独り幾分不同意の由、殊に教会の不動産を宮川氏より取戻す事に就ては全く反対なりと。堕落せる宮川氏を信用せる長谷川氏も又信仰上掛念〔懸念〕なる様子ありと。入浴。安田姉へ暴風見

舞を出す。

三十日　混天

時に晴れ時に曇り時に雨降り夜十時頃大雨となる。矢島氏へ手紙出す、芳郎氏へも共に、純吉君より来状。松尾教会(28—130)不振なり云々と。午后白石氏へ行く。

三十一日　晴天

波多野へ手紙差出す、同封にて里見貫一君へも認む。水曜日なれば祈会に行く、加藤・中村・瀧口・清水・尾原・長谷川・白石夫婦等会す、則ち中村氏司会たりき、長谷川氏感話す、氏は幾分保守的に属せる信仰を有せり。是より前七時頃病院の大関姉病と聞て之を見舞ふ、則ち床にありき、胃ケイレンを起したるなりと、近藤氏も来談、野口・渡辺・其他の看病婦入替〳〵大関姉の指揮を仰に来る

八月

一日　雨天

午后水野氏を訪問し二時間程話し、帰路一寸白石氏へ寄り入浴して帰宿す。夜分病院に行く、則ち大関姉最早全快採(ママ)務せらる、近藤氏の室にて不相変会釈に間断なし。当夜は白石君英学教授の為来り、今夜切にて当分夏休を為すと。午后十一時過まで談じ、帰宿着床するや十二時なりき。今晩八太氏の令息女東京より帰省す。

二日　曇天

〔欄外〕「高田教会員及在留信徒並に求道者―有望者（三）」

宮崎姉は早起洗濯する、余初て挨拶す、八太氏に似たり、年の頃三十六七と見ゆ、温厚寡言なり、今日より八太氏に代り台所仕事に余念なし、姉は今つるう姉(28―131)の下に独立女学校に在りと。又当地信徒並に求道者及び教会員其他知人を記銘する事左の如し、

独立女学校内　宮崎ヤス　森山辰次郎
中頸城郡明治村大字手島　中学校生徒　布施鉄雄　染葉美和
同　中学校生徒　尾崎喜平　白石実
同末広村大字飯室　金子謹治　加藤勉三
中学校生徒　大瀧尭蔵　横倉要三
中学校生徒　同　舜治　増山実
中学校生徒　山本正勝　信一氏妻君　森山ヤス(28―132)
東北学院神学部卒業生　須藤鬼一(28―133)　森山わと
煙草屋　尾島修三郎
人形屋　羽柴新吉
高田組弁護士　宮川小一郎
染葉佐吉

大友仙太郎
相羽達眼

中頸城郡大崎村

三日　雨天

矢島君より来状、父と純吉氏へ同封にて出信、午前十時頃より白石君と同道稲田・関町の信者を伺問す、即ち羽柴新吉氏の宅に到る、人形屋にて土を固めて玩弄的人形を製るなり。新吉氏極質朴にして殆ど一見ゴールドスミスの田舎の鍛鈶(冶)の容姿あり、併し精心(神)的な素養に欠くると普通教育に孤ある、此道に対する信仰又幾分迷信の惜なきに非ず、然も今は安息日何日なりといふを知らざる有様なり、併し全く堕落せしものとも見へず、氏は稲田に居るなり、それより関町の尾島修三郎氏の寓に到る、氏は煙草屋にて人物は先づ話の明(分)る人なり。先づ好人物なり、然し教に関する智識は尚其の真髄を掴得て得ざりし故にや、今は大に信仰を落したりと雖も尚ほ全く望なき人にも非ず、氏が今の考はキリスト教と社交の並立し難きを思ひ、さては教会の方に無沙汰を為すものゝやう、是れ氏の自白なり、尚ほ氏は己に就き今の不信仰を憂へて居れり、而して信仰発起の由来より信仰冷却の事情を懇々白状せられし事を聞くに一入気の毒に覚へたり。事情を詳悉するは過失を赦すことなりと、蓋し吾人が信仰より堕落したる兄弟姉妹を思ふまた此感なきにあらず。彼等の中には正当なる教導を受けず、又温厚なる交誼を受けざるもの往々有之、彼等の中途にして落信するも亦其筈なり、吾等伝道師としてあるひは教会員として信者に対する交誼の重且難なる事思ふべし。午后近藤氏に誘はれ白石氏と三人にて高城村小学校(28—134)に催さる衛生幻灯会

明治二八年八月

に行き中途にて帰る

四日　雨天　安息日

〔欄外〕「第一安息日」

余司会日曜学校開会、雨天なれは人少、大人共に二十五名程なりき、白石氏説教「マリヤ」に就て話さる、礼拝式に二十五名。夜分尚降雨なるにも不拘聴衆無慮十七名程、蓋し病院の青年多く見へたり。余「天国」に就て其の性質を話す、手島・奥平・波多野の諸氏より来状、

五日　雨天

〔欄外〕「中村茂策君ヲコリに罹り帰高」

午前白石・加藤・森山の諸氏へ訪問す。午后白石喜に会す、則曰く中村茂策君ヲコリを病み金曜日に帰高せり今日来りと。余則ち夜分訪ふ、則ち大に快方にて湯にも入り起ても起〔ママ〕りき、兼で同家へ遣さんとて求たる洋かんを見舞旁々小女等にと遣す、

六日　雨天

〔欄外〕「過慮の弊」

午前白石姉下に来る、午后中村茂策・加藤喜造・近藤君等引続き入来、尚瀬の上姉下に見へき。夜一寸近藤氏の許へ行き渡辺氏とも話し八時半頃帰る、吾人伝道中求道者・信者等の意向を探り大早計なる断評を附し為に偏狭なる待遇を為すものなり、是れ偏に自己の得信に帰する事ならんかなれど吾人謹慎すべきは過慮なり

七日　晴天

午前十時頃加藤喜造君、須藤鬼一君と入来時余話さる、須藤氏は好人物なり。夜水曜日の祈会あり、加藤君司会、集るもの六名、帰路白石・中村の二人と共に甘酒を傾く、一杯七厘、余一杯遣る。

八日　混天

〔欄外〕「総会並に親睦会」

午前快晴午后大雨、夜分殊に猖獗、午前白石君会堂方付け（片）午後〇半時（ママ）より開会の筈の総会及び親睦会は三時より開会、白石氏議長となり長老に白石・清水・荒木の三氏、女執事に森山ヤス子当りいたく辞されしも立て（達て）頼み漸く承諾せられたり、四時半頃より親睦会相開かれ三銭の会費にて茶菓の馳走あり、永野・染葉氏の謡歌あり、閉会解散せしは五時半頃なりき。大友・染葉の両氏に初て面会す、夜八時頃渡辺子（氏）来り、母君事明朝東京へ立つと、余渡辺氏の為小冊子を与へ尚少々教をすゝめ祈を為し、それより同道医院に到り大関様に挨拶し、姉に案内され幻灯を本家の座敷て見、九時五十分頃渡辺氏と一寸白石氏方へ行き間もなく帰宿、植村氏へ手紙を認め大関様に托さんとす、十二時着床、教会の集十八人

九日　晴天

〔欄外〕「大関姉上京」

昨夜手紙を書きなから「吾妻あられ」を食ひ今朝何となく心地悪し、五時過起床、六時半出発の大関姉を近藤氏と停車場に送る。昨日の約束により午后一時頃より白石・中村の両氏と白石行信

氏の須藤氏を誘ひ五分一の裏関の上に釣を垂る、午后六時過まで掛て只た三尾釣りぬ、殊に蕭々時雨に遇ひ大に閉口したり、中村君少し前に去り余等七時頃帰宅す。夜渡辺氏来りぬ。

十日　晴天

〔欄外〕「学生懇親会」

高田の有志者某々の発起に依る学生懇親会を寺町の善福寺[28—135]に開会さる、余も招待状を受けたれは白石君と二時頃より出掛く。先づ会費余は学生として七銭払ひ白石君は十五銭払はる。会するもの無慮三百名程にて三時半頃開会、有志の演説先づ有り、直江津より来りし実業家早川某と何某の二人及び何村の某の演説あり、尚上越同窓会の報告あり、次で撃剣[28—136]数合、后折詰のすしに酒出で之を食て閉会思々に散ず、先づ平々凡々の集会、学生諸氏の無気力なる有様を見て嘆一嘆す。昨日安田姉より来状。今日若林芳郎氏より来状。夜分渡辺氏余が為に歯の薬を持ち来らる。春日町辺に出火ありき。

十一日　晴天　安息日

〔欄外〕「第二安息日」

須藤鬼一君礼拝式の説教さる、詩篇の鹿の谷川を慕ふ所[28—137]を題詞とされたり。質トなる弁にて諄々と説かれたり、日曜学校小共無人只六名大人共に十五六名、又礼拝式にも十六名程なりき。大崎村の相羽達眼氏に拝合(ママ)ふ。大関姉より着報来る。夜分は例の如く八時開会、聴衆十名程謹聴、余は「伝道の精神」を話す、白石君は「日本の道徳改良と基督教」てふ意味にて話さる。近藤氏の所に十一時頃まで話す。

十二日　晴天

暑威赫々骨を鎔かさんとす。中村幹次君来訪。午后七時頃病院に至り近藤氏の室にて大関姉に面会暫く話す、姉は今夕の汽車にて帰高せしにて先づ暫くは当地にて働く様に取極め来りしと、則ちツルー姉は大関姉の申立にて知命堂病院の事比較的に大事業なれば今暫く高田に在るも苦しからずと申せしに、植村氏は非常に出京を促したりと、余九時退院。

十三日　晴天

国沢君の為為替証書を送付する事を近藤氏より又頼により之を引受け、序に国民の友の送付を依頼し遣る。帰路一寸白石氏へ寄り中村氏とも面会す。

十四日　晴天

昨日萩原某といふ東北学院の諸生〔書生〕に面会、磯辺の人、須藤に依り来る、今宵祈会にて集るもの九名、明日小田氏へ出張の約成る。散髪す、

〔挿図あり、〔口絵写真－4〕参照〕

十五日　晴天

〔欄外〕「中吉川村行」(28—138)

午前四時起床、直に身撥〔ママ〕を整へ白石君を誘ふ、氏則ち行はかりにて直に出立、五分一の白石氏なる須藤氏を叩く、氏尚床にあり、五分程待つに中村幹次君追来り、爰同勢四人集り同家を出発せしは殆ど五時になん〳〵せり、五分一より際町の裏を通り直江津に出で中吉川に着せしは丁度十一時頃なりき、道程六里強、途中大坂屋・あぶらやに休息、茶五銭づゝ置きたり。小田氏の厳

君は四十六七にして此辺にての経世家、又身代も最も豊富なるが如し、居宅の高荘美麗なること稀に見る所なり、余等は十丈〔畳〕と八丈〔畳〕ぶっ通の広間に案内されたり、大体五反田の伝左衛門氏の宅に彷彿たり。主人又話好きにて折々機嫌伺に来り談ぜらる、談話は重〔主〕に国産風土の事なりき。小鯛の煮たるにて午飯を出さる。間には梨・桃・はたんきやふ〔巴旦杏〕・菓子を出されたり、夜分生瓜を生にてわきりに切りしを水に漬て出されしには驚たり、余も瓜もみの積に食ふ、但砂糖着〔付〕てなり。夕飯には土壌〔泥鰌〕の玉子とぢになす・ふ等の露〔汁〕及びキヤペーヂのすみそにて食ふ、食後小田氏の猟場に到りさぎを追ひ、二回の発砲に一回は中らず二回目は薄暗かりければ急所を打ちそこなひ負傷せしめて逃らる。帰家灯下にて囲碁・将棋盛なり、余須藤氏と五目置位なり、中村氏に三目置位なり、白石氏との将棋は先方角落位なり。今日途にて貂を捕損じたり。

十六日　晴天

七時起床、須藤・中村等鮒を釣る、余と白石君主人を相手に談話すること二時間、不相変風土・作物・植物の事を話す。十一時頃大瀧舜治君来りき。余午后一時少し過き退き帰高の途に着く、途中二回海水にて面を洗ふ、而して傘は閉以て面を日に晒しぬ、五時十分直江津に着、是より一里後にて加藤喜造氏に遇ひき。直江津より伏木の木引（こびき）某と道偕となり高田まで来る、極好人物の様なりしも名を聞ず惜しゝ。水浴後玉子二個・かたくり三杯・菓子少許を食し十時頃着床、水分過飲胸苦しかりし。

十七日　晴天

明日の説教の仕度を為す。去月二十八日の価諡〔謦〕を□む、遺憾千万なり。

十八日　晴天　安息日

〔欄外〕「第三安息日／柿崎町[28—139]乃学術演説会」

白石行信氏日曜学校を開く、小供集ること十四五。余染葉氏と矢島姉にキリスト教入門の覚悟を話す、十時半礼拝式を開会、余之が司会兼説教の任に当る、即ち「偶像礼拝を謹むべし」てふ題を以て一時間話す、白石・須藤の両氏十時半頃来堂、集りは十三四名なりき、午后白石氏にて中村・近藤氏等と話す。夜分八時より説教あり、須藤氏「本末論」を話さる。長山君よりはがき来る。

十九日　晴天

一昨夜柿崎にて学術演説会開会、弁士には山田・中村・白石君等にて聴衆の多くは場外に佇立し居りたりと、余が衆に先ち一昨日独り帰高せしは柿崎の演説会の十六日に開くべきを都合により十七日に延したれば明十八日の安息日の差支なからん為なりし。今日千磐君へ暑中見舞状出す。今日午前十時過より正教会の伝教者岩田孝友氏を訪問す、立派なる人物にて能く談ず、余唯々拝聴、談話は重〔主〕に当地伝道の困難話なりき、氏曰く当地に仏教の入りしは重〔主〕に上杉が政略上に出しものにして、当地の人心が宗教思想に豊で輸入せしものに非ずと。又当地の人心は極保守的なり、……珍奇を好む……浮薄にして表面上最も交際に富む、……一般に暮しに困難なるの跡職業に忙しき様子なり、……忍耐心に乏し、……勇気なし、……豪邁なる気性に乏し、…倦退の弊あり、……、今日バラ氏より今月分為替来り受取る、午后町にて弓を試み四十本引く、大関姉夏中にて臥床、りんご八つ十三銭にて求め遣す、近藤氏の室で九時過まで話す、高等中学の渡辺氏に

会す、

二十日　晴天

長山君の為に近藤氏に貰て四日分の新聞日本を送る。昨日長山氏のはがきに「東京新聞の余りあらば一二葉送与を乞ふ」と、隔都の地とはいゝなから甚しいかな。昨日長谷川君よりもはがき至り上野氏の所を問ひ来る、今日返信す。屋根屋来り騒雑（騒々）し。午后白石君の許に行き談笑、時余時に福井なる妻君の祖父君大病なりとの報はがきもて父君より来る、「これあんたびっくりすることが起た」と白石君読上ぐ、妻君微笑「それは……もー年が年ですから……七十七八ですから云々」と、心中乱て余の如けんも表容に現さぬこそ気の毒なれ、聞ば御祖父は妻君を非常に愛したれば妻君も又親の如くに事へしなりと、白石君を初め余は特に同情を表し得ざる事とて、一□妻君の為場を転ずるの可なるさとり、余は白石君を誘ふて入浴す。帰路林檎八個十銭にて求め白石姉に遣す。当夜は楼上風通ふ辺にて端座、以て天父に祈る事時余大に快を覚へたり。矢島君よりはがき来りき。

二十一日　晴天

長山・宮川の両氏へはかき出す。午前松本常氏を伺ふ。序に弓を五十本引き終の十本にて三寸の弓割二中二寸の金的一中快絶。夜祈会にて中村茂策君司会、集るもの六。

二十二日　晴天

〔欄外〕「東金在原の后／尾島氏の家族／長谷川文太郎氏脱会の理由書、一、宇宙性一の神あることを信ず、一、愛の示現として基督を信ず、但し全然神子としては疑なき能はず、一、

祖先及英雄崇敬を主張す、一、日本基督教派の教会政治と習慣を拝視す、一、小生の信仰よりすれば蓋し純真新教に近からん、一、自ら恣慾の為め酒色に耽ること絶てなしといふも停らず酒を飲み芸妓の列る宴席にも臨む」

白石姉の祖父君事去る十八日午后死去せし由昨日報知来りし由、姉の父君は警察に働務するものゝ如し。千磐君よりはがき来りぬ。午前中村茂策君来談、林檎馳走す、共に白石氏に行き中村氏妻君に弔辞を為す。軈て須藤君入来十二時過まで話す。午后白石君入来、当地の教会の模様に就き難義〔ママ〕話を為す。午后六時頃より先づ新職人町の矢島姉を訪ふ、留守、悪相なる家婆曰く「あばちやは今は留守なり」と、渠曰く「あばちやは毎日十時頃より何処へか出行く、又折々は夜も宿泊す、今宵も何にか帰りしとて遅かるべし」と、余の疑察は愈々深くなりぬ、然し余は用意し来りし讃美歌譜入を投与し来りぬ。それより稲田の羽柴氏に到る、新吉氏裸体仕事に余念なかりし、余と知り身なりをわびつゝ挨拶せり、夕方取込居る様子なりければ長居を慮り先づ今年分の聖書の友日課表を与ふ、渠大に喜び余は実は昨年の日課表を今年尚繰返せりと、棚より小布留敷〔風呂敷カ〕の中聖書を取下し開巻、則ち昨年の日課表を取出し余が与へしを挿まれたり、窺ふに古敷〔風呂敷〕の上に塵埃も見へざりき、さては聖書を読むことは怠らさるものか、彼は極く質朴なり、暫時して去る。尚関河〔28—140〕を越へ尾島周八郎氏を伺ふ、丁度夕飯ノ最中にて間もなく主人出で、話は自身の教会に対する無沙汰の言明なり、要すに彼に全然利己的の信仰たりしものにて彼が想念には教会の故により小女の教育を為さん事、及び家事万端整理の上教会員たるの義務を奉すべしといふにあり、而して氏自ら教会員の譴責を受るは横浜の二の宮某との交渉沙汰と妻君出入の事なり、之れ

明治二八年八月

余自身に於ては光風霽月たるものなりといゝ居れり、幾分自暴自棄の迷溺あり、余居る事二時間最后に羅馬書の八章を読み簡端〔簡単〕に祈りて去る、本道より帰り病院にて白石君の話すを見登〔ママ〕り、近藤氏の室にて帯妻可非の議論を中裁〔仲裁〕し一寸大関姉に会ふ、姉はめざまし時計の十時半なるを持来り近藤氏に掛けさす。帰宿するや投書箱中端書あり入て灯下に見る、則ち奥平姉よりありもせぬ暴風見舞、荒木姉よりの音信にて知りぬとて申越る、渠自身の実験の如何にすさましかりけん事知らる。今日純吉君より来信、父との真面目なる雑談中将来の事業に及び本年を期して返答すべき旨語りたりと、又余より問たる返事にて在原の模様書き来り、曰く「三度目の養子は極質朴なれど此処鳥には気に入らぬ様子なり、勿論気のきかぬ処は確なる様子なり、およし事も余程思ふまゝにならぬをかこちあきらぬる的の如し、金もさまで自由ならず、方々若し教育ある人ならば厭世家とでもいふべき傾なしといふべからず、故に酒をくんで快を採り其にてボちやまかすものならぬ糀屋の店を開き養子が糀製造をなす」由なり。二三日前より寝心悪し、着床后時にして不知〳〵眠るを覚ゆ、今宵尾島氏に家人の名前を問ひしに左の如く書かれたり。千磐君暑きに病を得しも快愈せりと。氏は三十七才・次弟寿助は三十二才、巡査にて信州上伊那郡におり、三弟周作二十七は横浜の商館にありと、母ミカ五十五・妻セン三十一・長女ミキ十八・二女ハル十五・三女ムメ九・四女ハカ三・妹ムラ小学教員へ嫁す二十二なりと。松本常氏宮崎ヤス姉を訪来る、余中村氏と白石氏へ出掛る処にて失礼したり。蒸し暑甚しきこと非常なり。小田新次郎君見ゆ。

二十三日　晴天

〔欄外〕「小田氏の家族」

午前十時より森山氏を訪ふ、来客あり、妻君に会し三十分程話す、家族伝道の必要を説き新婦の出堂を促す、新婦名をわとといふ、白石先生の宅に至る、養蚕にて多忙らし、帰路横倉氏を訪ふ、主人迎ふ、四十未満の壮士丘眼豊体、子女をして代て会釈せしめらる、余子息の長けたるもの二人と鋏〔寸〕話をなし間もなく退く、午后小田新次郎氏来訪、近世進化新論〔28—14〕を投与す、大瀧幹治君来る。夜分近藤君来訪、六時頃より九時過まで話されたり、話柄多端、重〔主〕に当地の地方的弊癖を評難せり、其他に頃日の珍聞といふべき事を聞きたり、則ち近藤氏白石君より聞きしといふ事なれど、国沢君と安田姉間に艶聞ありとの事是なり、然も安田姉は既に殖民協会〔28—12〕員某、今壕州〔豪州〕に在るものと聘定の縁ある事なれば国沢氏にして懸愛の様子ありと心付たらんには安田姉なとが其の実情を間接に知覚せしめざる事あらんや、もし安田姉にして国沢氏の心意を察して尚ほ情実を知らせざるとは、あの歳頃に似合しからず、もし果して然らんには安田姉□々悖徳〔背徳〕の罪なしといふべからず。又安田姉既に国沢氏に悟す処ありて尚之に頓着せで恋々艶交を続くるものならんには国沢氏の道徳上に負ふ罪脱すべからず、要するに国沢氏と安田氏の関係光風霽月〔光風霽月〕の潔操を欠くは双方の為に惜む処なりとは、近頃白石氏が女学校の秋山・赤井の両姉の陳述と之に加ふるに中村茂策君在校の折、安田姉より御返事と書付たる消息頻繁なりしを見たりといふを聞きし白石君さてはと扣膝一番愈々艶交確実なりと合点したるもの〻如し。余之を近藤氏より聞く、熟ら〳〵在高中の安田姉の様子に就き少しく思ひ中たる処なきに非ず、蓋し他評の如く忌わしき沙汰の存せんとは信じ難し。嗚呼兎角浮世は五月蠅きものなるかな。……艶交必すしも醜行に非ず、聖潔なる艶交は神の嘉す所なり。今日小田新次郎君より同氏家族の名前を聞くに左の同勢あり

明治二八年八月

と、小田久伍（厳君）・同れい（母君）・同わか・同厚太郎・同新太郎・けい・よし・政三・四郎・亮平・しんの五男四女。長女わか子今既に富永家に嫁し高田瓦町に在り。

二十四日　晴天

〔欄外〕「泉弥六君来高（和泉）」

長山君よりはがき来り、急に二十六日に米沢指して出発すと、羨まし。昨日来「高山彦九郎」(28—143)を読で大に感ず、泣情子（泣上戸）なる処学ぶべし。泉弥六君軽井沢より来高、白石君の案内にて当家に来る、三時半頃なりき、今宵は白石君の宅にて饗応あり行かる、余晩食后同家に到り泉氏を携れ中村茂策君の宅に至り時余話す。夜に及で尚暑く殆ど着床后一時間にして寝に入る。

二十五日　晴天　安息日

〔欄外〕「第四安息日」

白石君司会にて安息日学校開会、二十名程集る、泉君子供の為に五分話す、拝礼式に泉君説教す、路加伝十六章の「不義なる番頭」(28—144)の説明にて、主意は「天に財を蓄ふべし」といふにありき、出席者二十名、夜分又泉君説教す、詩篇五十一の「くだけたる心」(28—145)に就て謙遜を以て罪を悔ゐ神に従ふべしといふにありて、立論明了（明瞭）平易にして極解し易きは氏の得手なり、昼間は三十五分、夜は四十分なりき。蓋し中村君を初め加藤・須藤の諸氏は一寸会堂の門口に集りしも何か用に拘付（託け）て他に行きけり、彼等輩にして然り、況や当地往来（ママ）の信徒諸氏の無気力不活溌なる、只々社会の制裁を是に恐るゝものゝ如し。帰路病院に由（寄）り、近藤今夕より頭痛せりとて着床せりと聞て見舞ふ、大した事もなきが如し、今日バラ氏へ受取書と旅費の請求を申送りたりし、

昨日着しふじ子と矢島君との配偶如何と父より相談に来る。夜分又蒸暑し、十時頃寝て十一時過着寝す。

二十六日　晴天

〔欄外〕「宮崎ヤス子帰京／宮川君盗難に遇ふ」

昨夜より唐風吹き今朝尚烈し、故に昨日約束せし御地行は止となり。泉君は長野へ宮崎ヤス子は東京へ何れも六時半の汽車にて出発せり。午前小田君来訪話す、朝近藤君の病を見舞ふ。昨日小倉苓姉よりはがき来りき、又河野氏よりも来る、一昨日には宮川巳作君より手紙来り、帰路立寄れとて〔綿密〕緬密なる道順を書送らる、又氏は和田嶺[28-46]にて盗賊に遇ひ四十五銭程取られたりと。宿爺に金一円貸与す。夜六時半頃より荒木氏へ行んとして中学校辺より驟雨に遭ひ松蔭に隠れしも堪られず雨を冒して帰宿す。

二十七日　晴天

〔簫雨〕肅雨時々降る、午后雷さへ鳴る。夜荒木とみ子より泉氏へ託して送られし手紙を以て荒木信宝氏の宅に到る、暫時談ず、主人曰く悴も昨夏広島へ行く時聖書を望まれ是を遣せしに時々調る様子なり云々と、帰路永野氏に寄る、老人昨日田舎より帰りし由、田舎にては昼間は経師屋を為し夜は謡歌を教ゆと、本町に出て弓三十本引き一寸病院を窺き手鉢二杯傾く、今日より「メーキングラフマン」を読初む、

二十八日　晴天

水曜日なれは祈会あり、会するもの中村両人・加藤・白石〔ママ〕婦夫と余にして白石君司会たり、「羅

馬書十二章」を読み信徒の天職を話さる。午前のこと清水源蔵君車にて来訪、教界の談柄に時余を費して去らる、余氏に「基督教と学術道徳」を施与す。今日は妙高風も幾分か冷気を含む、

二十九日　晴天

〔欄外〕「直江津港の説教会（其五）」

矢島君へ帰京の日取を知らせ、来月千葉町にて開くといふ同地建設式と奉堂式、尚是に加ふるに県下の大親睦会をも開会するといふに就き、斯ては或は不都合の嫌あらんも不知と思ふまゝ矢島君の意を聞き同意なら千葉の委員へ注告（忠告）せよと申送る、蓋し右式会を三つ同時に開会するは千葉町の為には便利ならんも、地方の人の為には幾分迷惑の感なきにも非ればなり。午后四時過き白石君に招かれ晩餐に牛鍋の馳走に与る、今宵直江津に説教会を開く積にて五時五十分の□汽車に乗らんとして汽車遅着六時半に投ず、正八時より開会、余は「世界主義と国家主義」といふ事に就き三十分程弁じ、白石君又「国民の健全」といふ意味にて明説せらる、惜むべきは途中にて音声の渋滞ありし事なり、余も之を感じたり、聴衆無慮六七十名は至極慎聴せられたり。九時出発十時五十分着高、暫く白石氏方に憩ひ帰宿、着せしは十二時頃なりき。

三十日　晴天

〔欄外〕「中村氏の家族／横倉氏の家族／染葉氏の家族」

昨夜小島清君よりはがき来り居り、氏は五日に上田へ来り十日頃上京の筈なりと。昨日白石氏に居合たる弥生子に聞くに、中村氏の家族は左の如し、中村良次・同其の妻某と茂策君・新吾・きよ・弥生・旭・旦、此外出てたるものに小島すゞ・何のなこ（山へくれてやつた）の諸子なり

と。余は近頃人を評価するの弊を自覚せり、是れ罪なる乎、否評価は交際上止を得さる事ならん、只だ評価の公平にして責任あるを要す、横倉氏の家族は信行（主人）・同妻とし、子女にはひで十九・正一十四・要二十四（兄）・三郎十・久六つ・広二つ、大島重となのらるゝ老婆七十一なりと、染葉氏の家族は美直四十五（主人）・同妻きん四十一、子女にはとく十八・美和十六・たま十三・こと十一と六十九の祖父佐吉氏なりと。田中真次君来訪、来る七日金沢を出立と

「今はきし庭面に落つる桐葉かな。」松尾若林の椽端にて見たりし昔の景色を忍で連ねぬ。

「うつせみの寿命迫りてこゑ高し。」当時窓前蝉の声五月蠅きを感じて

「事業のなることなくも秋ぞきぬ。」己往の無為を恨みて

三十一日　晴天

欄外「安田磐子の永眠」

昨日午后入浴して弓五十本引き、帰路白石氏へ寄るに氏曰く、ヲ！安田さんなくなったと、余ドキン、一息、憮然！沈黙暫時、時に田中在り、談心に入らず、余間もなく去り夕飯するに入らず、食后女学校に到り面会す、秋山涙扨（試）で安田姉の父よりのはがきを見せらる、則ち磐子姉は去る廿四日の午前三時に永眠せりと、姉の父名を退三といふ、余電報にて左の如く申送る「イワコシノシヲイタム」と、帰路病院へ寄り九時過まで話す、一度

明治二八年八月

九月

帰宿するや近藤后を追ひ来り、殊に菓子を携へらる、則ち十二時近く頃まで談話す、氏も安田姉の死を惜むものゝ一人なり、昨日荒木姉より長文の返書来る、宛も安田姉の訃音に胸を乱せし折柄滑稽的戯談半分の消息には心に落付かざりき、又父よりも八日前に帰国しては如何と促し来る、余は信野〔信濃〕の山野を跋渉するの暇を請求し遣りぬ、又国沢氏へも安田姉の訃音を報ず、今日荒木姉へ返事す、昨夜着床せしは十二時、安田姉の訃音と国元より帰期を促す等の事あり、加ふるに当地に於ける働きの不充分なるを想ひ、何につけかんに付け殆んど精紛れ神乱たるが如くなりき、されば余は心事を神に訴へ衷心より祈祷を捧げたり……、蓋し余は安田姉の死に就き大に悲しむと雖も無責任なる悲哀に沈まざらん事を思ふたり、先づ第一余は心理学上の証明はなし得ざるも、実際安田姉の霊魂は九天の上神の膝許に安座せる事を思はざらんと欲するも得ざるなり、而して余は姉の永逝を惜むの情を責任的に表さん為、姉の志を続かん事を期念〔祈念〕せり、「姉の志とは神の栄を顕の外なし」、其手初として先づ彼女の家族の救済を心掛る事是なり、否あながち姉の家族に限らず「斯道の為に鋭意尽力すること旧に倍せん事を期せんとす、嗚呼在天の磐子余が為に神及び主キリストにとりなし玉〔給〕へ、余が神及びキリストイエスの忠僕となり得ん為祈られよ、然して余をして御身の真の愛人の一人たらしめ給はんことを希望す。今日夕方尾島周八郎氏・羽柴新吉氏を訪問し序に暇乞す。今日そろ〳〵荷を形付〔片付〕初む、

一日　晴天　安息日

〔欄外〕「第一安息日」

日曜学校の集りは凡二十名、同礼拝式も二十名位なり、今〔ママ〕は中村茂策君説教さる、即ち「基督信徒の愚なる所」……羅馬書三章の一節の題詞を以て信徒たらんものは活ける神に望と信仰と愛を以て忠事すべしといふにありき。白石行信氏安田退三〔28-1行〕氏よりの書面、安田姉就眠始末を朗読されたり。荒木姉よりはかき来る、午后八時より説教会開会、余「基督の感化」を話す、会するもの十二名

二日　晴天

〔欄外〕「御地遊散〔游山〕」

午前白石行信氏より安田退三氏よりの書状、磐子就眠の始末を借り来る、則ち左の如し、

拝啓、未得貴顔候得共吾娘磐子儀本月廿四日午前第三時病死致候処ハ、不取敢寸紙を以て御報知仕置候通にて御驚愕為被成ト被存候、誠に残念無力斗不堪悲歎候、右病気の顛末を荒増し陳ふれば錦地を辞し帰県後兎角快起之気分乏しく、是折身体に冷を覚へ或る時は羽織を取出し着する等の事有之も、当地は本県中暑気薄き故気候に伴ひ可然乎と別段当人に於ては心に懸け不申候処、満光無在候処本月十三日午后より悪寒の気味ありて打臥し加養仕候、然るに小生儀は翌十四日早丁〔早朝〕より公務に就き出県致し候後、段々報知するに熱気増長し困苦の次第を申来るもマラリヤカ又はチブス症なるか判然せず、其内熱度三十度以上に昇り一切キニーネ剤の効もなく之彼不正悪症なるマラリヤに相違無之ものと認め其の治療に専ら着手中、本月二十二日午前二時三十分頃呼吸甚々悪しく閉息せんとする□況なるに就き電信を以

明治二八年九月

明治二八年九月

て危篤なるとの報に接したるに就き、直に本県下を出発帰寓仕候て病人の模様を一見するに不容易場合に陥りたり、乍去小生を見て大に喜悦の言葉を吐き精神も又存在せり、翌二十三日よりは益々熱気頑固として漸々四十度の高きを極め種々の手配を尽すと雖も終に煩悶するのみにて、四日十二時頃に至れは脈終消滅せり、然と雖も体格気衆の為め両親に対し言葉を交へ、又種々なる雑言を吐きなから絶命に至り候も、医師の探究等に依れは其地滞勤中本年春夏の際マラリヤに罹り数十日間相煩居候、其病根まだ〳〵全絶せざる処風土の差違且つ感冒等に伴ひ再発せし不正なる悪症にて之れに勝つ事不能不帰の客と被成候、右の荒増は貴校女子学院長矢島先生へ御伝へ被下様奉願候、先病況為御承知□上如此御座候、以上　敬具

廿八年八月二十六日　　安田退三

白石行信殿

机下

近藤君に誘れ御地遊散に出掛く、則ち中等汽車に投ず、時は三時十分前なりき、直江津停車場より西方半里は則ち御地なり、料理屋わくら楼に登る、正面に日本海の波静なるを望み、右方に平原を隔てゝ直江津港の家屋を望み、尚遠く米山[28-148]の佳をも手に取る如くにて一種の好景たりき、入浴后夕飯にかなりなる馳走あり、食後ろうそくの灯下近藤氏と最も真率なる談話は重[主]に両人身上話なりしも、多く近藤氏述懐せらる、……将来世に処するの方計・妻君撰たくの事・教会振起の方法、其他雑談多々あり、最后に互に祈祷を為して出楼、月を踏んで帰途に就きしは八時十分

過にて九時半着高、其足にて栗水飴五拾銭を注文し一寸病院へ寄り帰宿、着床せしは十一時なりき。

三日　晴天

〔欄外〕「安田磐子姉の追悼会」

午前渡辺六郎氏・清水源蔵氏・永野八郎氏・荒木信宝氏・長谷川文太郎氏等を暇乞す、蓋し渡辺氏・清水氏の所にて祈りす、清水氏翁飴を送らる、荒木氏の寓に到るやとみ子姉事昨日帰高せしよしにて面会不意なるに驚きたり、楼上にて三十分程話し去る、永野氏老人不在、則ちつね子姉会釈せらる、姉も又々可愛らしき心魂あり。三十分程話して去る、其時中村幹治氏へも寄り暇乞す、午後矢島リイ姉・白石行信・横倉家・森山氏等に暇乞したり、白石氏へは机の拝借料として十二銭の洋かんを差上たり、午后三時の予告なりしも后て同三時半頃より安田磐子姉の追悼会を高田女学校に開会され、白石行信氏司会に加藤喜造氏・長谷川文太郎氏・漢学の教師某と女学生某の追悼の文章・詩歌の朗読あり、終に白石喜之助氏の励めあり、五時半頃閉会せり、会するもの四十名程なり、会費金三銭茶菓出づ、因に記す、開場（会場）正面に表部（屏風カ）を立て其前に机を置き其上に安田姉の写真を安置し廻りに作花を装ふたり。（安田姉の和漢の教師は鷹見爽鳩氏[28—149]、生花の師範は大沼田宗匠氏なりといふ）、宮崎氏へ帰りしに荷問屋来り居り早速渡す、夕飯后祈祷を為し八太氏と相別る、翁は門前まで送られ余の見へぬまで見送られき。余翁の為に馬可講義を遣す、尚其他白石君に甲越軍記を遣す、近藤氏に駿台雑話[28—150]、野口姉に「基督のすがた[28—151]」、渡辺氏に「基督教と社会[28—152]」と小漢字典を遣す、又荒木信宝氏に馬太伝の講義を遣す、当教会有志者は余の為

に白石君の寓にて送別会を開かれ、開会に清水君の祈を以てせられしのみにて直に懇談会食になりたり、御馳走はだんこ十二粒づゝを竹の皮に入たるものなりき、加藤・両中村等好々談ず、会するもの荒木親子三人・長谷川文太郎・清水源蔵・園田貞次・瀧口正治・永野八郎・森山ヤス・赤井トラ・矢島リイ・両中村・白石行信・白石兄姉の十六氏なりき、さる程に余は彼等の残らず散退されざる頃医院なる近藤・大関の諸氏に暇乞に行き祈なぞなし遣来りければ、遂に白石氏に余を送らんとて会せしものは余の帰らぬ前時刻うつりたればとて既に散退せられたり、是を最后の失配〔失敗〕沙汰とす、近藤氏に金三円借り来る、尚其時大関姉余の為にあめ及び紙に包たる手拭を送らる、それより一寸宮崎へ行きバラ氏よりの為替を白石氏を〔ママ〕届くる様依頼し、尚ステーション前の中牛馬場に行き寝たるを起し荷物の代金を払ふ、則ち十四貫目の壱円四拾銭なりき、右は東京下谷迄の賃にて、下谷より白金へ後十銭内外なりと、尚一週間後ならでは着すまじといふ、着京の上はしやりき配達さるゝものと、便利の為今宵は白石君の寓に宿泊す、

四日　晴天

〔欄外〕「高田の見おさめ／関川」〔28—153〕

昨夜は種々奔走に忙わしく着床せしは十一時頃なりしが、何となく睡られざりしと思ふ程に、益々胸苦しくなりしは正しくだんごに中られたるものと見ゆ、よもすがら腹痛怠らずコレラにやならんかなぞ心配しつゝ明朝は迚も徒歩にて出立の叶わぬ事なぞ思ひ、汽車にて行ん乎なぞ心組み、遂に落ち〳〵寝ずして五時少し過近藤氏に起さる、蓋し氏は余の五時頃出立を送らん為に来られしなりき、是より前三時頃大便に行き大に下喇〔下痢〕したり、事の次第を近藤氏に告ければ同氏は

余の為に下利〔下痢〕治止の薬を三服送らる、然るに当家の妻君は四時少し過より起床、余か為に仕度の労を取らる、余は彼の女に対し幾分厚意を空うしたり。汽車にて長野まで行く事なれば緩る〳〵するも可なりと九時半の汽車に搭ず、白石君送に来る、軈て搭車汽笛と共に飛行するや余は昨夜の食中りの跡たちまち嘔吐の気味を感じ、加ふるに眼さへ暗み近所の山野の見境も失せ、遂に室内の同搭の人々の面さへ見境なきに至り、今にも脳充血となりて卒倒もやせんかと思われ殆ど困却せり、さる程に新井(28—154)へ来ぬ、余は飛か如くにして同地のステーションに駆下り切手(切符カ)さへ見せで先づ控所の腰掛に一の字なりに臥ぬ、恰もよし人衆更になく吹通す耕地を沿ふて来る風に吹かれつゝ疲労を治養しければ間もなく我に立かへる事を得たり、休息する事一時間半、再び長野行の切手を利用せん積にて次の上り汽車の時刻を調べ、且つは実際長野行の切手として利用し得るや否やを取調べたるに、何ぞ図らん当地は下車すべき所にもあらず、又長野へは百マイルなかりき故に長野行の切符は無功〔無効〕となりたり。余は愈々徒歩にて出発する事の必要にせまられ心中幾分の心配ありしにも拘らず旧道たどりて長野を指して歩を進めぬ、時に安心の為宝丹(28—155)五銭入を求む。是より前ステーションにて発肝〔発汗〕非常なりければ町に出でたる頃大に口乾き、今迄つい一度も口づさみしことなき雪を買ハんとて小僧の携へるを呼止め如何程買んかと一寸躊躇せしが三りんも買い見んとて、三りん出せしに大なる塊二個を呉れ余に安きに驚き一個は傍の小供に施したる。十一時半頃新井を出発、渋道坂路の険しきに閉口しつゝたゝさへ難儀なるに殆ど病後の容体なる身体にて、初の程は何分にも足の運も思のまゝに行かず、心は進めど足進まず、前途遥なるを思ふてそゝろに心安からざりき、斯て程良き所にて中食〔昼食〕を使ははやと心掛るも何処とて心に叶

ふ処なく、軈て二時頃に及び漸く一茶店を尋ね当家にて先づ飯を取る、家嫗曰く「今日は魚は何もなし、ほんの茶漬にて宜しきや」と、余可なりと、則ち赤黒き飯山盛一杯食したり、菜にはみそ漬きうりの香の物と芋の唐〔ママ〕を煮たるを付られき、余は尚外に一銭五厘の林檎三個を食し、裏の石川にて身体を洗ひなぞして二時間程休み、払如何と問ふに五銭五厘なりと、中食〔昼食〕の価一銭なりとは仮令一杯なりとて余が勝手にて一杯しか食はざるものなるに安真〔ママ〕なるには驚き入たり。四時頃該店を立ち難波妙高を右方に望み、左の方に遠く浅間山を詠〔眺〕めつゝ関山〔28—156〕・田口〔田切〕〔28—157〕を経て関川へとは着しぬ、但し妙高山を望むに最も良き所は田口〔田切〕の筆塚近傍なりとす。関川にて日暮る、同地に泊らんとするに何処にても呼留る処なし、しらず〳〵関川を通過き関川の橋を渡りぬれば日は増々暮れ行先ハ家の在否を知らざる様子なり、依て荒物店に寄り此先に宿屋のあるや否やを問ふ、主人曰く此先は一里半先なる野尻に行かざれば宿屋はなし、其間は最も淋しき原野にて一人夜旅は危険〔危険〕なり、先づ再び戻て関川に泊らるゝの安きに苦かざるべしと注意さる、余は右手の洋傘の柄を力限りに操り左手にて懐中のナイフを擁したり。されど故障ある身体を厭ひ且つは様子の知れざる町に至り夜半ぶら付て里犬にとかめられんも気のきかぬ事と思ひ、再び関川に戻る事と決し、さて店主の励められし高田屋といふへ行くや同店にては「頃日は養蚕多忙にて御求に応じ兼れば悪からず勘弁被下」と、それより二三軒を問ふに何れも同様の言前を以て拒絶さる、遂に亀屋といふに至る、同屋には先来の客あり最早都合悪しければ勘弁せよかしと、余又他に行く、又拒絶さる、則ち関川中余を泊むる所なきに至らんとす、余は再び亀屋に至り切に懇請して宿泊を促す、かみさん飯の用意なきを以て辞されしなり、故に余は其の心配を止め飯さへ食せて

寝所さへ与へられなば可なりといふ、爰に於て家婦曰く「それではお留め申べしかねー」と家主に語る、其中に足洗に水を取来り、家婦は飯を持来る、米は赤黒くして且つこわく、菜は茄子のさんばいとみやうがといかの煮たるものなり、余何も食はず飯二杯喫せり、湯あり大に心地を快活にするを得たり。先客二人は何も行商人と知られ、一人は五十路の親父にして広島県人なり、一人は二十一とかにて越中富山の人なり、何れも大炉の傍に座り煙草を喫しつゝ家人と談話に余念なきものゝ如し、爰に訝しきは彼の旅客と家人の談話を注意するに家人の語気重[主]に厳且つ大柄[横柄]にして旅客は宛も雇人たるが如き様子なりき、殊に宿帳を付ける時の如き宛然警官の犯人に対するが如きものありき、然し感心に余に対しては幾分彼等両人と異なりたる待遇ありき。越中富山の人なりといふ青年は昼のまゝのシャツ一枚を夜も尚着されたり。軈て寝に就かんとせし時家婦は余の荷物を預らん乎と注意さる、余彼女に諾す、寝床は二丈[畳]敷に三人合臥なりしが余には幾分撰具[ママ]を備へられたり、併し汗とのみ位は免れざりし。浅間山頭の明月はあばら宿に泊する身に取り唯一の慰解手なりき。

五日　晴天

〔欄外〕「長野町／長野日本基督教講義所[28-158]／長野講義所の信徒並に求道者」

五時半頃衆に先て起床、裏に出で呼水[ママ]の滾々として流れ来るを汲で総身を潔め、再び座敷に登り家内を窺ふに増々陋醜なるに心付きたり、軈て朝飯出づ、飯は暖かなりと雖も昨夜の類なり、菜にはみょうがの汁とゑびとこぶのつゆ出づ、余又何も手を着けずして飯のみ二杯喫す、主人弁当如何と促す、余之を命ず、則ちにぎり飯二個を調せらる、六時半出立たんとして宿料を問ふ、

十五銭なれど御身は飯を上らねは十四銭にて可なりと、余十五銭置く、他の客も夫〳〵同時に出立の要意〔用意〕に取掛る、越中の人はあさぎの股引を穿ち中位の風呂敷包を負て出らる、他の広島の人は南無妙法蓮華経の箱を背負はれしかも此の男はびっこなりき、途中にて一歩先行せし越中の人に追付き種々話し合ふに、彼は今迄薬売を為して中国・四国を徘徊せし者なるが、此度東京本郷なる兄に呼はるゝまゝに尋ね行くなりと、而して元来家の業は仕立屋にて兄も京にて仕立職を為したり、自分も其道にも通じ居れば矢張兄の手伝を為さん積なり云々と、余は此時彼の背負ふ荷物の中に今朝宿屋より大のむすび四つ五つあるに心付き、何気なく「御身の宿より取りし弁当の如何にも大きくも多くあるかな」と語りしに、彼曰く「はい、私共は昨夜米を持参してたかせたるにて、其のたいたゞけをむすびににきらしたるなり」と、余は生て此方過日軽井沢に一泊せしが第一番の宿屋泊にて、其第二番目は則ち昨夜亀屋へ泊りし事なれば、亀屋と油屋を比較するは無理なから勢然らざるを得さるものから、つい亀屋の陋醜なるを喃きければ、彼曰く否とよ、亀屋の如きは木賃宿にても上等の方なりと、余爰に於て初て亀屋の木賃宿なるを知りたり、呼〔嗚呼〕余は知らずして木賃宿に泊りけり、然りとては割合に宿賃の高かりし心地す。牟礼[28-159]駅にてりんご二個（三銭）を求め越中の男に一個遣す、さる程に牟礼より一里ばかりの閑村某村の休憩所風入好き茶屋に入り十一時過より二時頃まで休む、宿屋より持参せし弁当を食はんとするに如何にも悪米に閉口し三四口にして棄つ、越中の男茄子の煮たるを取りたれば余も真似て之を取る、彼はパん菓子を食ひ余はりんご二個を取る、大なるもの一銭五厘なりき、越中の男に前行させ彼が払ひ二銭を引受たれば喜で行れたり、彼の分と共に五銭五厘なりしが七銭置きたるに老婆・老父のお

茶代を難有〳〵と平身底〔低〕頭して送られたり、二銭はかりの茶代は東京辺にては吝なお客さんと冷さるべきにさても田舎は手軽なもの哉。長野町へ一里許の処にてあまり咽喉の乾きたるに乗じ氷水を喫す、尚玉子二銭と氷水一銭にて三銭となる積にて卵氷を命たるに案に違て四銭取らる、世の中は論法づくには行かぬものと見ゆ、同所にて藁履をも採替〔取替〕ゆ。四時長野に着講義所に投ず、千磐氏在り、湯札を貰ひ直に入浴、帰路大粒りンご七個十銭にて求め千磐氏に遣す。夜分千磐氏に案内され善光寺の寺内を散歩す、該寺内は当地の公園となりたれば一層雅致あり、殊に夜景の奇麗なる事東京にもかゝる所は易容く見らるべくもなし。善光寺の裏手休憩所ある所にて小話酣ならんとせし頃信徒原田・松村の両氏に邂逅、共に好遇なりとてそれより四人にて城山に歩を転じ、城山館の夜況を外観し城山の頂上に登り明月を眺望し、善光寺の前通を経て講義所に帰りしは十時頃なりき、松村氏名を忠恕といゝ原田氏名を重吉といふ、原田氏は井深氏の親類続とかいふ話なり、則ち会津の人にて当地在務の某氏（会津の人）の食客なりと、容貌挙動丸で浜田佳澄君に似たる人なり。順成せば有為の人傑たるの備あり。松村氏は温厚の青年、惜むべき事は氏幼き頃過て右手を焼ぎ今は不具に属せりと。是より前求道者にて隣家に寄宿せる小学校の教師宮入亀太郎氏なるもの来訪、一時間程話されき、氏は長野県埴科郡松代町の人なり、此人体格角にして厳全なり、思ふに思想又確固たるものあるべき乎、兎に角さすが象山〔28—160〕の生地に生れたる人物と知られたり。長野日本基督教講義所の模様を聞くに、現在信者総員三十名に求道者六七名にて、日曜日安息日学校に小児女のみ十五名位集り、礼拝式に六名より十名位、夜分も同様、水曜祈会には五六名位なりと。現に講義所に有力なる信者の姓名を聞くに、片山家にては主人和美氏

明治二八年九月

は未信者なれど、其他は皆信者にて片山倫（寛氏の祖母）・同佳（寛氏の母）・同寛・修・健・俊・亮・毅・直の七人の兄弟の之なり、又松村家は戸主忠雅氏の母君一人未信者にて他は皆信者なり、忠雅氏の父は既に無き人なり、忠雅氏の弟に忠恕氏あり、其の后は皆妹にて富代・雪江・増代といふ、富代子は聖書学館に、増代子は青山女学校に在学せり、雪江子は家に在て母君と共に家事の助手たり、兄弟中一番憫亡（貧乏）鬮を引かれしもの哉。原田重吉・橋本金次郎・田島某等ありと、尚睡眠者には加藤民雄・藤井安治・唐沢造酒（ママ）の諸氏ありといふ、其他に他教会員にて組合派の柴田・川崎の両氏、川崎姉の夫、浸礼の飯田氏あり、柴田姉の夫は理学士にて大林区署に勤めらるゝ由、氏は尚未信者なりといふ。求道者には郵便局の吉田氏・銀行の竹井氏・鉄道局の城殿氏・裁判所の今井氏・中学校の和田義一氏・神林某氏及婦人にて中川・金山・山口（唐沢氏の婦人）・杉山の諸姉ありといふ、宮入氏も求道者の一人なり。

六日　晴天

〔欄外〕「朝日温泉（28—161）／橋本睦之氏」

午前山口・片山・橋本・中島氏を訪ふに何れも不在、山口氏は既に上京せりと、帰宿するや松村忠雅氏あり初て会す、氏は容貌優にして挙動大石築城（28—162）氏に似たり、思ふに気質の程も幾分か類するものあるべき乎、氏は音楽を嗜好するもの〻如し、否総て遊戯的の事は人后に遅るゝものに非る事と知られたり。然し兎に角氏は当講義所の柱石なり。午后片山寛氏入来、則ち千磐氏余が為に朝日温泉に汗を洗わんとは昨日来の約束なりければ、今一人松村氏を誘ひ同氏の先約を違わして午后二時をトして長野町より一里許り東方の山間、水潔く岩古き所に狭路をたどりて千磐氏

の遅歩を待ち合せながら時余にして浴亭階楽館に着し、是ぞ謂ゆる朝日湯にて急流の辺に築造せる屋宇にて奇観宛も掛物に見るが如きものあり、長野に来り幽邃なる境に遊ばんと欲せば先づ此地を外にしては求むべからずといふも可なり。着館先づ房室風涼しき所を撰ぶに失敬にも先客あり之を横領す、銓なる第二等の室に入る、但し楼上なり、家人は余の外衆と知り合なり、さらぬだに会釈到らさるなくして、何となく朴なる所実以て気に入たり。松村・千磐の両氏は渓流に游泳せんとて出づ、余と片山は温泉に入る、浴場亦渓流に瀕せること〻て外観自由にして、湯室に垢を落しなから千磐等の游泳する様を見物し得る程なり、さても頃日は浴客尠なりと見へ男女両室の中、女湯の方のみ湧しあり、頃日は男女混合にて間に合せ居るもの〻如し、湯といふも元来少し温か味のある位にて入浴さる程の温度にもあらねば全く人工を加へたる温泉なり、然し湯の質は炭酸ソーダを含蓄すること〻て胃病感者〔患者〕には持て来いといふべき乎、懸湯〔掛け〕の上に「入浴毎に三口づ〻飲み玉ふべし、功能〔効能〕あり」とありければ余も三口飲だり、なるほど幾分ソーダの臭あり、外に何の味もなかりき。浴を上て楼に還るや千磐等は河より上り来り、四人思い〳〵に放談、コンペートーと生芽〔生姜〕の糟唐〔砂糖〕煮を相手に日暮まで入興せり、話柄の重〔主〕なる件は音楽・美術の事なりき、最后に払を問ふに二十三銭なりと、茶代十銭増して去る、朝日温泉てふ団扇を一本づ〻呉れたり、但し右二十三銭の中には吾人が特別に取りたる菓子料十二三銭は含む居るものと知らる。黄昏時館を去り千磐君の東道にてそば屋に登らんと道を善光寺の方に取りたり、但し松村君は用事に托して途中にて別る、片山・千磐の両氏に誘れて善光寺前の佐々木楼に登る、該楼そばやとして長野町の巨擘たり、屋宇宏麗東京にもそばやにて如斯ものは未だ見ざる処、さすが信州

明治二八年九月

のそばや丈なり。登楼待つ事三十分にして漸く「盛」を二箱づゝ持来る、之を食ふ、空腹の折柄味別なり、次に「懸」を二鉢づゝ取る、之又一種別味を覚へ余は頃日飲食に節なるにも拘らず、特例を以て四杯傾け満腹、破れ裂れやせんはかりとなりき、終に下女そばの揚湯を持来る、咽喉乾きたる故にや元来そば湯の厚味なるにや宛もソップをすゝるの感あり、数杯を傾けたり。聞く、そば湯は消化を助くるの功ありて、そばやにて此の湯を出して茶を出さぬは之か為なりと。此時千磐氏と片山氏は五杯半づゝ喫せられしも、余は四杯にてぐんなりしたり。かけももりも一銭二厘づゝなり。八時半頃去り善光寺前にて片山君に別れ一端〔一旦〕帰宿し直に独りにて橋本睦之氏を尋訪す、氏は年の頃四十余にして温厚の君子、如何様牧師然たる様子あり、談話は壁頭〔劈頭〕より教地の事にて応答質問に掛りしに、数件の話柄中余の事更に注意を促して詰問せし事凡答られしは、彼の教会員三十名許の中家族を具ふるもの八軒に及び、何れも全体信者なりといふ事是なり、蓋し余は尚押問するに氏は故意に家族あるものゝ信者を養成する事に尽力しつゝありと、さすが信越の部長殿丈哉と知られたり。尚談話の中に余が高田の伝道困難云〔ママ〕と語るや、彼曰く如何にも然らん、されど今は「何処も同じ秋の夕暮」ですよ、該地も中々困難の歎は免れ申さず云々と言れたり。十時過帰宿、十一時過寝に着きぬ。要するに長野の伝道は困難なりと雖も尚ほ頼母しきは概して市街の繁華なる事より幾分人心も活溌なる傾あれば高田に比して何分の希望多きが如し。長野町の繁昌なる事東京にても容易に見ざるものあり、殊に善光寺前の通の如き四五階の宿屋をや。

七日　晴天

〔欄外〕「上田町」

唐風強かりき。黎明出発せんとは昨夜の心算なりしも先日来の疲の故にや寝こかし六時前に起床、昨夜取寄置たる飯を食ひ千磐氏と勘定し宿泊否食料二日分二十銭を置く、蓋し昨日の遊行は千磐氏の余に饗せられしなり。例旅装具も備はり千磐氏に家前まで送られて、長野旭町より鉄道局の右傍に出で、川中島指して歩を急ぎぬ。行程一里余にして名にしおふ川中島へとは着しぬ、長橋あり試に武歩もて量る、三百間と知らる、越過て橋銭屋に就て之を問ふ、男曰く三百間なりと、余自ら曰く余も中々側量(測量)家なり、少くも平民的の側量(測量)家なり、飯が食なくならば側量(測量)家たるべしと、兎に角長いものなり、思ふに架設に就ては懸命の骨折は魂情(根性)たりといふべし。爰に訝しと思しは余の橋銭は四厘なりしに后より来りし男は五厘、其次に来りしは老翁にしてしかも重相な荷物を負けるが彼は八厘取られたりし事是なり。更に店を出で二歩橋銭の定標あるを見付け留て之を閲するに、成程荷物の大小・品物の如何に依て橋銭の差違あるなりけり、前の五厘取られし男は中風呂敷を携へられ老人は大風呂敷を擁せられたるなりき。尚両掛はいくら、長持はいくら、馬はいくら、車はいくらとありき。細いもの哉。橋名を「たんばしまばし」(28—163)といふ、中津村(28—164)にて午食す、則ち一膳飯一杯を奴豆腐の菜にて喫す、三銭なり、是より前少許后に村上義清の墓(28—165)を見舞ひたり、午后二時上田に着、先づ氷屋に入り休息す、鷹匠町を尋ぬ、容易に明(分)らず、又床屋に入り髯を修理し二銭置き再び鷹匠町の小林氏を聞く、中々知れず最后に立川雲平(28—166)氏の寓を見出す、則ち就て聞く、指示さるゝまゝに尋ぬ、尚明らず、再び氷屋に入り休息す、時に午后四

時なり、豆腐屋に至り問ふ、西洋人の随従者の家を教へられ其家に入る、先づ小林氏は何処なりやと問ふ、コック様の男取次き奥に向て「平野さん小林さんは何処です」と問ひながら再び余に対し精細に指示せらる、其の指示のまゝに尋ね行く、則ち小林格てふ門札を見出す、忻然(欣然)呼訪するに老婆様取次に出づ、彼余を知らず、余山田なりといふ、彼奥に入り小林氏に告ぐ、小林氏ビッコを引て出来る、余思らく彼病めりと、小林氏曰く「是はよくこそ来り、何ふして来り、何処より来りしや、先づ足を洗ひ玉へ、お金盥(給)に水を持来れ」「僕も浅間山へ登て今帰て休息して居る所なり」と、妻君水を持来り余藁履・脛絆(脚絆)を取り洗足、小林氏の先座せる座敷に通り屡らくの面会にて相互に不恙なるを祝す、妻君来り挨拶せらる、相互に彼是の教勢を談合す、小林氏浅間山へ登り大に疲れたりと大騒なり、小林氏入浴せば疲の忘れ様もあらんかと共に湯屋に行く、余飲用水を洗頭水に誤用して亭主に小言を食ひ、小林氏に「ヤー失配(失敗)したな」といわる、夕飯には香の物とニシンの乾したるを煮たると豆腐の露(汁)を菜に出す、露を替て飯も二杯喫す、家人飯の少量なるを責む、余旅疲に托して弁護す。小林氏の家族は老婆則ち母君（六十少し余）と妻君（三十少し余）に長女みつ子は四つ、最后の男の子は今年五月生なりといふ、妻君は小林氏の呼ひしにて金(28—167)と知られぬ。今宵瀬下一太氏なるもの入来、初めて会す、二十三四の青年、赤須広氏に似たり、気質の程も幾分相類するが如し、氏は信州北佐久作郡本牧村望田井古町の人、望田井講義所(28—168)の会員なり。性朴にして諄(淳)誠に田舎の青年丸出しなり、何となく甲斐〳〵しき風あり。曰く「ワシヤヘー上田へ来たらあんだか変になった、信仰が冷へさうになった、なんだか教会へ来た様な感がしねー、温味がない、何ふしたらよかろー」と、一つには自身の薄信を嘆じ、二つに

は上田の教会を非難するも直言なれば小林氏も一寸困り何ふこふと慰解されたり、瀬下氏は二十日程前よりレーマツシ治療の為該地に滞在の由、尚今月一杯は在田の由、小林氏の寓は十畳六畳打通の座敷に尚六畳と四畳の居間あり、台所もあり、又東南に面して四畳半程の二階楼あり、小林氏の勉強室に適当、夏期は暑き由、当地は士族屋敷の家屋に限り雨戸なし、但し軒は深し雪国の癖に変なり、夏冬共障子一重なり。夜分大に涼し、深更に至り暴風雨となる、但し大騒には至らず

八日　晴天　安息日

〔欄外〕「上田教会」[28—169]

午前六時起床、顔を洗はんとするに水乏し、妻君遠隔の所に汲に行く、余之を助く、井戸の遠を当家の一不便と為す。今朝家婆と相会し談す、遂に改りたる挨拶なかりき。朝飯に茄子の汁としやが芋の湯出（茹で）たるあり、二杯喫す、老婆亦余の小食を結（詰）る、昨夜小林氏余に命ずるに今朝礼拝式の説教を以てす、余亦諾す、昨夜の雨一端晴れ今朝七時頃より再び雨降り八時半より九時頃に至り車軸を流すが如し、余小林氏と同道大雨然も裏を汚すを冒して出堂、大人会員一二名と米国婦人ブロッコ姉[28—170]を初め小児女等十三四人集り、軈て九時を報するや其前数分よりブロッコ姉ヲルガンを曳き、小林氏時計を合図に開校、日曜学校に係る組を三つに分ち、最幼年を小林氏、次を某日本婦人、最高年の婦人（小女）五名をブロッコ姉受持たる、ブロッコ姉は美以美教会より出る「日曜学校日課」により教ゆると見へ旧約の話を得意然と講ぜられき、随分日本語は達者と見ゆ、九時半一先づ閉会、更にブロッコ姉一人全生徒に向て絵釈の話あり、后全く開散（解散）す、十時を

合図に小林氏簡略に司会の労を取られ余登壇、一時間と十分の説教は幾分が聴衆の厭倦を促せしやも不知、況や余生来の訥弁を以てせしに於てをや、余は「基督の感化及び其の誘導」てふ題にて話したり、集るもの三十一人中に女十二程あり、男子には青年も多く見へたり、西洋婦人ブロッコ姉の外に尚一人見へたり、彼等説教最中頻りに余の顔を見詰め居たり、午飯には茄子の辛焼にて御馳走になる。午后三時頃小林氏の寓に青年五六名程集り聖書研究並に談話会の催あり、本日は初会にて祈会のみにて畢りぬ、会するもの佐藤（仙台より来りし人）・渡辺（横浜に行て居た人）・瀬下・日下部・関屋兄弟の諸氏なりき、何れも諄朴〔純朴〕にして頼もしき面々と知られたり、殊に日下部謙太郎氏の真面目にして敬虔の資を具ふる様実に敬服の至りなり。当地教会は明治十一年頃当地出身の稲垣信氏に依て初て布教されし所にして、其後盛衰の転廻数廻なりしも今は大に振興の概あり、小林氏も得意に尽力せらる、会員現在七十名程の中、毎安息日に三十五名、同夜の説教会に二十名、水曜祈会に十五六名の集会ありと、婦人の盛力狂〔旺盛〕にして女執事も沢山あり、洩聞くに昨今女執事等と男子部の長老輩と隙あり、女子部の役員総辞職の届書出たり云々、因に記す、女子部の面々はブロッコ姉等を戴き幾分小林氏に抗するの概ありといふ、兎に角教会内に紛柄沙汰あるはまだ〳〵結構なり、以て活気の存するを知に足るべし。当教会の長老四人の中三人に面会す、犬飼新・小林久治・重田助治郎・渡辺浪治氏是なり、渡辺氏に会わず。午后五時頃石原先生来田の趣にて停車場まで迎ふ、汽車遅着六時五十分頃着、直に日下部（謙太郎）・渡辺・小林氏等と共に籔そばに登り「もり」二杯に「かもなんばん」一杯を喫し満腹、例の如くそば湯を牛飲す、しかも替たり。石原先生の来田は大会伝道局の事情を諭告報白するを以

て目的とすることゝて、一言せば大会伝道費の募集に来られしなり、一時教会に罷越小林氏簡短〔簡単〕に司会し、石原先づ未信者への教話として「罪と救」てふ事を一段演せられ、后伝道局の話に掛られ、衆皆な大会伝導局の何たるを初て知られしものゝ如し、四十名程会せり、多く信徒にして中途にて去るものなかりき。石原氏は旧知某の寓に宿泊す、余等着床せしは十一時頃なりき。瀬下氏に望田井の信者の姓名を聞く、則ち武重一祐・大沢茂十郎・大沢四郎・同孝二郎・小林喜代太郎・武重義一・瀬下義造・萩原嘉之助・相〔　〕愛之助の諸氏是なり。望田井近辺には宿屋といふ宿屋は芦田の〔28—171〕「むさし屋」一軒なりといふ。

九日　晴天

〔欄外〕「横川駅」

六時起床、七時半頃瀬下氏入来、次で石原氏来訪、石原氏も小林氏も談合振わしき所互に似たるものあり、余と瀬下氏は彼談両々自分流義〔儀〕を異にせり。其うちに関屋姉入来、姉は広島に在りし事あり、竹内平八氏と極知の由伝言頼まる、余昨日より咽喉を傷ひ説教一時間余に亘り一層疲労を加へ、昨日までは尚ほ今日松本の方へ出立すべき存念なりしも、昨夜寝ながら風気〔風邪〕の追々募るに心置かれ、松本辺にて床に着く様の事ありては不便此上なき事と案じ不得止松本行は見合せ汽車にて東上、上州の叔父の許に急かんものと九時半の汽車に乗らんとて少し早目に停車場に待つ、中々来らず遂に十一時頃搭車汽笛と共に上田を立つ。搭客多くして腰を掛る席なし、止なく佇立軽井沢まで来る。上田より軽井沢までは三十二銭なり、軽井沢に下り油屋に入り午飯を命ず、なら漬に鯉汁出づ、汁甘かりければ替へ十五銭取らる。時は一時にならんとする頃なりき、

叔父の寓長厳寺[28-172]は横川より程遠かるましきことゝ思ひ緩々せんも可なりと、則ち当地の西洋人の居留地を見物せんものと旧軽井沢に歩を進む、二百戸許の宿あり巨楼の宿泊屋一二軒あり、何れも洋人の専有たるが如し、尚多くの洋人宿の両端に別荘を建て白布の日蓋先づ目に就き近付て見るに安楽椅子・遊戯道具放置せるあり、建築の模様位置等を見るに我日本の美術思想と異なるにや、庭園眺望の境に意を用ひざるものゝ如く宛然田舎の村登に飲食店前后の区別なく軒を設くるが如きものあり、尚一体に当地は余り景色に富めりとも思われず、思ふに空気の鮮潔なる処こそ彼等洋人の意に叶ひし理合なるか、余は宿を通りぬけマクネヤ氏の寓に尋ね泉氏に会す、数分間談し同氏の案内にて当宿より十七八丁ある碓氷峠の絶頂「ごんげん」の神社[28-173]まで来り、該地にて名物「ちからもち」を泉氏に驕[奢]らる、庄前のごんげん社の庭に上り遠く上州高崎辺より尚遠く雲烟膜[模]糊の間に武蔵野を望み、間近く妙義山頭岩直なる所を見、自然界の妙境殆んど自を失せり、同所にて泉氏に別れ氏は元の路に戻り余は長佇曲路しかも芒を別けるが如き狭路をたどり渓谷に下り丘上に出で一涯原野の如き山頂に秋草の波咲くに物思を促されつゝ四里程の渋路を二時間半にして過ぎ、横川に着せし頃は黄昏時なりき、是より前ごんげんより坂本[28-174]に出る間、峠の中頃に野家一軒と破家人なきもの一軒ありき、通行人絶てなく坂本に近て四五の野夫田婦の炭を背負て横川に下るに追着たるのみ、坂本にて梨を食ひ休み、小幡村[28-175]を問ふ、横川より六里なりと、尚横川の宿屋何処可なりと問ひ萩の屋と万屋とは佳なり、萩の屋こそ可ならんと、されど余は万屋に投ず、下女路傍に頻せる底天の室六丈[畳]程の座に案内さる、湯はふきたるのみ、夕飯には鯉汁・松魚の煮付け・豆腐の露を菜に出さる、是より前茶と菓子出づ、飯二杯喫し下女小食に驚

くものゝ如し、大に疲労し九時頃着床、夜分熱気少々出つ、随て咳吐屡々迫り幾分苦しかりし、蓋し用心してシヤツを着し首を風呂敷にて巻きたるため大に病勢を軽ろめたり。

十日　晴天

〔欄外〕「着京」

六時起床、痰疾頻迫声枯れ頭重く足渋なり、宛然病后の概あり、爰に於て昨夜までは叔父の許にぞ寄らんと心組みし事も、今朝また其の不可得を感じたり、則ち六里の徒歩は到底不能なるを思ひ由、道中無事なりとするも如何に叔父の所なればとて着后直に床に着くが如き事は不面白事なれば断然直行上京の途に就かんことゝ決す、されば高崎近在の矢島氏の郷里へも立寄らず、少しく事情あり彼所へは是非尋ね度思ひしも病気沙汰には如何とも致方なかりき、偖て八時出の汽車に搭すべしと預悟す、朝には豆腐のあんかけと汁と出づ、女に宿料を問ふ、二十銭なりと、之を渡す、主人「汽車着せり（軽井沢を六時半に出）搭車の御客様御用意あれ」と注意さる、余は昨夜の夕飯の折消極的の茶代を置きたれは別に茶代を置かず、八時停車場に到る、衆皆な搭車緩々二十八銭にて切符を買ひ搭車大に悠なり、搭車后一時間待つ、荷物搭載の為にや、兎に角西洋人の前に忸かしき程なりき、高崎迄の中三四ヶ所停車、処々より搭車の客頻多、為に余の室又立錐の余地なきに至れり、高崎にて乗替、半時間相待ち更に七十八銭にて目黒迄の切符を求め搭車、該地より室大に悠、横臥亦自由なりき、二時上野に着、但し余は赤羽にて下り乗替へきなり、由て上野より再び赤羽に戻り詰所にて少々相待ち、四時赤羽より搭車四時半目黒に着、直に秋葉氏に在る鹿島氏を訪ふ、荷物未着せず、里見・秋葉の消息を聞くに里見・今関・川島の三人来り、

秋葉氏等は来る二十七日上京の筈と、学院寄宿舎に来り先つ三人に会す、互に無事を祝し合ひ、賄に到り夕飯喫し、夜分里見と同泊若林の寝床に入る、若林は尚浅草に在りと、諸氏は去る七日に出京せし由、余汽車中上野に来り再び赤羽に行迄何も口にせず、二度目に赤羽に待つ時梨大粒一個三銭を食ふに空腹の折柄美味なりしも大なる割に非ざりき、尚あんぱん・せんべ等を喫す、帰路石原氏の留守宅へ寄り石原氏の明日帰京の趣を告ぐ。今宵無事着京の報を出す者左の如し、高田教会・小林格・松尾山田・千磐・宮崎の諸氏

十一日　晴天

大関・宮川・奥平・河野の諸兄姉へ着報出す、二十四銭にて小馬〔駒〕下駄を求む、帰路井深氏に会す、午后二時より麻布の方へ出発、中野・里見を訪ひ波多野に行く、承五郎安楽椅〔椅子〕の長きに横寄〔ママ〕、椽先のお鋭〔鉞〕姉に説喩諄々酣なる処なりき、后にて聞けはお鉞姉今あたご下の啓蒙学校に口あり、三日間の中に極〔ママ〕るべけれは三日間寄宿を乞ふとは姉の願なりと、然し種々の事情を以て承五郎氏之を諾さず、詰り三日間の宿料六十銭を与へて去らせしなり、是より先純吉氏既に来野、夕飯馳走、其中に貫一氏来野、談合数時、十時頃純・貫両氏先づ去り余は宿る、長山氏の外誰も帰校者なし、当夏当家の出来事大事なきも妻君菅子は微恙を保養に託して去月初旬佐倉に罷越、今に帰京なく、幾分心気上の微恙あるには困る事なり。又伯母様と峰子様には去月の中頃短子〔逗子カ〕に避暑に参られ去三日に帰京せられりと、又千代女事去り短子〔逗子カ〕より女来る、但し伯母様の携れ来りしものなりと、朴性なる処甲斐〳〵敷ものあり、又庭園椽端に近く瓢箪形の叩き池出来、中に金魚小もの百匹に大もの十匹程在り、殊に噴水〔噴水〕管の設あるはしやれたるものなり。尚主人公自転車

を借り毎日威夫・晋二氏等入来遊ぶ由、高田に信ありしが主人初め諸氏も大に上達せし由、尚承五郎氏は空気入の自転車を求められたりと、大に油乗る。

十二日　晴天

草間時福[28—176]氏事今度大坂郵便局長に転任、今日午前八時半新橋発下西の由、波多野にても伯母様・承五郎氏送に行かる。亮海氏よりの書状廻送ありき。当家にて関谷の叔母及小女病気の為千葉へ保養に行れたりと承る、尚叔母様は脚気の気味なるも小女は如何なる病か判然せず、当家の伯母様も縷々菅子の難評話に長咄あり、双方慎むべき事なるにと思ひたり。午食后退出、関谷を指して糀町[麹町]に出で五時半頃関谷に着、夕飯時なりしも飯なく蕎麦を三箱取らる。叔父公は今朝出署、今宵は泊番にて明日帰宿の由、風気尚潜伏せり。

十三日　晴天

一昨日小倉様を訪ふ、尚山野氏より聞くに鋭喜君例の症発し房州保田[28—177]に避暑せりと、余今朝見舞状を投ず、午后五時頃叔父帰宿種談合、病人共の様子を窺ふ、今明日中には帰京の筈なりと、午后七時頃桶口氏入来共に夕飯す、氏雨を冒して帰宅す

十四日　晴天

午前五時半起床、六時頃力氏は本郷の小学校へ、春氏は同郁文館[28—178]へ、叔父は八時出署、余は九時頃退出、波多野へ寄り叔母等の病状・帰京の今明ならんを告げ、又々菅子の難評を承り午食後退出、白金指して急ぐ、天神坂上[28—179]サンフラシスコにて散髪し今関氏と同道入浴。夜分七時過中村茂策氏帰京と聞き里見・今関・川島・若林・田中・幼年生三四人品川に迎ふ、八時半に着、大

に喜ばる、余等待つ事一時間半なりき。聞く中村氏は先頃余が送別会のだんごに中てられ翌々日小田厚太郎氏の宅にて宿疾特発(突発)、大に困り辛ふじて帰高、其後加養の為上京後(遅)れ今尚本当に癒へずといふ、宮崎の諸氏より来状ある。

十五日　晴天　安息日

若林・鈴木等と出発、里見と波多野へ高田の土産飴を遣す、波多野にて貫一氏に会し氏も同道教会に至る、河合氏説教さる、「四福音の天啓なる事」を弁証的に論述されたり、会するもの二十名、教会の有志者に会す、独り新島氏の将に小会を開かんとせし時なるを以て会で来る、然るに正に帰途に着くや後より追就かるものは新島氏なり、久しぶりの対面互に無事を祝し無沙汰を詫ぶ、四の角(28—180)にて別れ、里見に行き老母様余が為に上総より送られたるうどんを馳走さる、三時貫一君豊岡町(28—181)の北川氏に行に同道、帰来三の橋(28—182)辺にて大弓を両人にて五拾本引き余り当らで出づ、余五銭払ふ、寺町にて巡査に北川氏の寓を聞き豊岡町にて里見氏に別る、夜分は風気尚脱せざるを以て赤坂行は見合せ台町教会に至る、石原氏大会伝道地たる臼田(28—183)近傍の形勢を報告せらる、因に記す、上田は明治十一年頃・小諸は十五年頃・春日は明治十七年頃・臼田は明治十九年頃初て布教に取掛りしものにて、臼田の伝道の開初は上田龍維氏抑の発起者なり、偖て今や大会伝道局にて着手以来先日石原氏出張、授洗者の分を入れ一年間に十五名の授洗者と求道者七十名程を得るに至り、右概して当時の勢追々好景気なりと、余が荷物は昨日着、下谷より持込賃十八銭取られ、二本榎より学校まで車屋に五銭取られぬ、別段損害を受けざるも飴の洩出して夜具を汚したるには閉口したり。

十六日　晴天

今朝宮川氏帰校、一昨日横浜へ着、昨日該地の教会にて安息日を相守、午前は指路教会に至り礼拝式の集、三十人許なりしといふ、昨夜教会にて聖書学館の人を見受、荒木姉への預物を持行き同姉及小菅姉にも面会せり、帰路石原氏を訪問、重(主)に余のみ談じたるは近頃の珍事、思ふに先生多忙にて心中窃に掃出たかりしやも不知、いゝ加減にして去る。白石氏へ手紙差出す、序に近藤氏へも認む。今日山野氏の室に仮に越す、然るに伊藤氏今度神学校へ入学するに就て品川の院の繁雑を避て先づ入宿、山野氏の室に投ず、深屋氏室の裏鬮を催し国沢君に抚せられ止む、余亦国沢氏に迫り懸けらる、今朝河野氏帰校す、亮海氏へ不寄の趣申送る。

十七日　晴天

ボールや器械体操を久しぶりにて試み大に疲る、入浴す、千磐氏帰京山野の室に入る、大振(賑カ)やかなり、殊に夜分に至り国沢・深屋・河野・長山等会合、棋碁さへ始り十時過去らる、長山氏国よりの来客ありき、奥平姉より十一日出の書面高田より着す。

十八日　晴天

風邪幾分か快方なるも昨日運動過度の為大に節々疲労す。午前八時室を鬮にて定む、引もの長山・河野・国沢・宮川・本川・早川・山野・深屋及び余にて、代りを以て引くもの村松・矢島・小河内・清水等とす、斯て余は十四号室になりしも相談の上十八号の宮川氏と合宿す、大に好都合となる。引越の為に一日掛りぬ、但し矢島は十五号に中りしが山野氏も三階より同室に替たり、午后四時頃井深先生を訪ふ、余は高田の情況を概述し尚余話数刻に亘り去る

十九日　晴天

大関姉は葉書にて着報に返信さる。

二十日　晴天

奥平姉に見舞状差出す、蓋し同姉の最近の兄様御事兼て病気に煩ひ居られし所去る八日午后六時半溘焉逝去されし由、去る十一日御認の手紙同十七日高田の方より転廻して落手す、

二十一日　曇天

午后雨ふる、午前宮川・里見と三田より日影町辺に散行、午食頃帰校す

二十二日　雨天　安息日

若林・鈴木・手島等と同行、手島は牛込へ余等は赤坂へ行く、但し余は行掛波多野へ寄り九時過出堂、河合氏の説教後院に至る、十時よりの積なりしに九時より始まりしなりと、河合氏の寓にて弁当使用、二時頃帰途に就き北郷氏の宅へ寄り来客ありければ妻君に面会、直に去る、河合氏妻君着床、懐肝(妊)沙汰にて微恙ありし為なり、但し来る十二月は臨月なりといふ、妻君曰く二十五日に生む積なりと、夜分台町教会に至る、国沢君説教せり、約翰伝十二章二十二を題詩として基督信徒の友情に就き懇篤なる説諭ありき

二十三日　雨天

昨日帰途中野へ寄り当時帰省中の重遠氏の微恙に托して座床するに面会二十分程話しぬ、時に久々にて福島の伯母様にも面会せり、伯母様の話に昨日は関谷叔母事早川叔父に送られて帰京、早川の春子も来りぬと、余今日休暇に托して植村氏より小石川に至らんとす、将に弁当も整へ御

座を着し出発せんと里見の室にまこつき居るに芝田松造氏入来、折しも雨烈しくなりければ幸に小石川行見合せ芝田氏の新客を会釈し種々戦争談を聞せられ新聞紙上以外の様子を知り得たり、尚委細は同氏の日記修正次第拝見する約を為す、芳郎氏して菓子十銭買はす、彼之を小使に頼む、余少しく不快、芝田氏十二時近まで話して去らる、二本榎に午飯の要意〔用意〕するものありと。

二十四日　雨天

雨を冒して小石川関谷に行き午后五時半帰途に就き、又〳〵雨を冒し悪路を厭ふて草鞋掛にて出発、八時頃帰宿す、即ち矢島君帰校し居り、長山の室に三人頭を並て談話の中に着床、関谷にても母子共追々快方なりと、此度叔母の送り旁々早川叔父は春子同道上京、諸方を見物し昨日午后帰葉されし由

二十五日　雨天

昨日白石君に手紙出す、今朝チヤペルにて二十年間台湾に伝道せるトーマスボルクレー氏の演説あり、重〔主〕に台湾の大勢及び教会の歴史を略述せらる、年々の受洗者総て三千人位なりと。今朝小田厚太郎君帰校、昨日高田を出しも汽車遅れ疲たりて高崎に泊りしなりと。午后小倉氏の許に話す。氏は三日程前に帰れりと。

二十六日　雨天

〔欄外〕「植村先生と談合」

長山・矢島の両氏と弁当持にて先づ番町植村氏の許に行く、劈頭長山君水戸に於ける道及働手千屋君不首尾の模様を語り、次で野上某の病状危篤にて帰国の話等ある、次に矢島君及余に伝道地

の模様尋ねらる、蓋し余は植村氏の炯眼なる已に承知の事なれば精しく語らず、九十九里の伝道者に就き柳沢氏[28—185]を招き度旨矢島氏申出しに、先生曰く九十九里の為にも柳沢位にては仕方かあるまい、一体九十九里の人は所望の程の底[低カ]いものかな、更に柳沢氏に到るとは至て要求が少し、思ふに九十九里の人は豆腐よりも唐[殿カ]を好まるゝものと見ゆ、柳沢氏にして都合悪くば青木氏[28—186]を望むとは又誤れり、彼は親睦会の茶番には長法[重宝]なれど伝道者としては不向なり、氏は宿屋のガイダーに適当なり、尚柳沢氏も同氏の為あまり伝ずる事は不為ならんと、先生談酣なるに及び懇々余等に教訓する所ありき、先生余を評して「長き煙草管を持たるゝにや」と、余に向て此言葉を寄せらるゝものは先生と里見叔[ママ]のみ、余自も重々承知の事なれど先生の目の高きには大に感服したり。談渡辺六郎氏の事に及び、余は彼が文学的の意向を制し従来の歯科を専心に究めらるゝの得策たるを説き、彼も余等の励に従ひ今は落着て業務に勉励せる旨を語りしに、先生余に誥て何故に六郎氏の文学者たらんとの志望を折きしや、其の理は如何と、余彼の志の浅薄なると事情の関係より歯科医となりて一人前の職を得るの賢きをいふ、氏曰く「歯医に隨落[堕落カ]せぬものありや」若し六郎にして隨落[堕落カ]せば君の勢[所為]なりと、要するに先生は英書を能く読む事、会話を務めても熟練する事（洋行の順備[準備]の為）、説教はヲリヂナルに思考すべき事、なぞに力を入て覚されたり。先生門前□歩送らる、九段の池畔にて弁当を使ひ神田にて長沢の揃の帽子山高を壱円四十銭づゝにて求められし時、一時間程待ち余人質となり、それより銀座に出で安田様へ送る基督教徒のなぐさめを求め、聖書の友会社に一寸寄り五時頃帰校す、歩行中痔の為心掛なりき。

二十七日　雨天

〔欄外〕「神学部開校式」

金子氏より礼状来る、午后二時より開校式あり、井深氏司会報告、ミロル氏教訓（道を伝ふるものゝ二資格とて猟師と牧者の二職に就き励めらる）。教師の変更としてはフルベッーキ氏去てミロル氏入り、別科の石原・北山氏去て小倉氏入る、尚ほ実際授業の始まるは来月三日よりなり、熊本の安田退三氏に見舞として「基督信徒のなぐさめ」を逓送す、又リーフレット十枚矢島氏より貰ひ高田に送る、宮川氏と同封にて好川氏へ手紙出す、六時頃より秋葉氏を迎ふる為に品川停車場に行く、同行者若林・川島・今関・矢島等なり、一時間余待つも来らず、時に目方に掛るに左の如く出づ、余は十二貫五百五十目〔匁〕、矢島君は十二貫八百目〔匁〕、若林君は十三貫八百目〔匁〕、今関君は十四貫四百目〔匁〕、川島君は十四貫、夜分小田君入来、高田の談柄に二時間程話す、氏も亦高田の為に杞憂を抱く最なる人なり、マヰンチ姉〔28—187〕出張后の模様早や非〻〔比比〕沙汰ありと、将来の事思ひやらるゝなり。

二十八日　曇天

秋葉氏一行昨夜十時頃帰京、今日午后見舞に行く、下女として寺崎〔28—188〕の戸村の娘きよなるもの来る、夜分も話に行き十時過まで話し祈祷して去る、

二十九日　晴天　安息日

井深氏説教さる、天国の進歩を説て其の方便として信徒の義務を論じ終に大会の寄附金を催促せり。集るもの三十二人、頃日の大会なり。余行掛に里見氏を訪ひ同氏を誘ひ行く、皈〔帰〕りには新島

氏の寓に誘れ牛鍋馳走になり二時頃去り、再び里見に来り純吉氏と同道帰校す、長谷川には昨夜帰京、直に新島氏の許に寄せられし旨申さる、今日新島氏にての会合は長谷川・杉本・新島及余なりき、尚ほ食事の最中中谷君来訪、弓を携へられ今より矢場に行くなり、毎日曜毎に出掛るなり云々、午后七時より開会の台町教会の説教会に臨み、鹿島氏の説教を拝聴す。

三十日　晴天

熊本の安田退三氏へ手紙差上ぐ、午后秋葉氏より「近世哲学」(28—189)を拝借し来る、賄に先頃十一日よりの食料一円七十五銭払ふ、今日柔道会の評議会あり、余と中村君幹事に撰挙せらる。尚来る三日を以て開会式を挙げ、当日は茶菓をも出す事とし多数決にて会費五銭の事とす、久しぶりにてベースボールを為す、サードベースは余に取りては難し。然し今日総て四点の勝なりき。

十月

一日　晴天

横浜海岸教会にて東京第一中会秋季中会開会さる。養生の為乳を飲み初む。但し毎朝五勺づゝなり。近藤虎馬君に手紙差出す、同封にて渡辺六郎君にも認む、ランヂス氏にロボルトソンの説教集返(返)す。

二日　晴天

今朝より牛乳一合づゝとす。

三日　晴天
今日より全く授業始りぬ。柔道部の開業式あり、后茶菓出づ
四日　晴天
賄交換の議あり、有志者奔走す、余も又大賛成の一人なり、
五日　晴天
午后矢島君同道秋葉氏の寓に至る、秋葉氏語るにふじ女を以て矢島氏に推撰するの事を以てす、但し秋葉氏は矢島氏を奥間に誘ふて語られしものなり。不知矢島氏の意如何乎、今日高等学校に在京各学校クラブよりの混合マッヂあり、学院より手島・篠原の両氏出づ、手島はキャッチヤー、篠原はライトなりしに何も上出来なりしといふ、午前九時より柔術稽古あり、十二名出席す、入浴せり、
六日　晴天
赤坂教会に行く、若林氏と小石川関谷に行く、祖母様のみあり、弁当を食し一寸青年会へ寄る、二三百人の聴衆ありき、余は芳郎氏と別れ丸善にてソシアルエボリーウシヨンを聞く、安値なるものなし、帰路波多野へ寄る、関谷叔前程帰りし所なりと、伯母様月曜よりすばこの気味にて着床せり、河野氏に托して浦和にて足袋を買ひ貰ふ、紺足袋の代十五銭、廉なりといふべし
七日　晴天
午后秋葉氏へ行く、時に門前にて間野鉞子の入来するに会ふ、今日東金より出発せしなりと、

八日　雨天

〔欄外〕「千葉教会堂献堂式／同教会建設式／千葉県に基督教徒懇親会」

今日は千葉教会建設兼教会奉堂式あり、井深・植村の両氏も出掛らる、又松尾よりも父・里見叔・光・伊志田・秋太・計来等出張せりと、午后一寸秋葉氏に到る、鉞子あり時に夫人と談合中なりしが、勝子余に耳語して曰く鉞子今度聖書学館へ入学志願の由に申出なれど、秋葉氏の意見にては今一度働て然る上にて入校の事可ならんと勧むるも聞かずと、大にもてあませり、

九日　晴天

今日は千葉にて県下の信者親睦会のある日なり、

十日　雨天

〔欄外〕「神学部新入生歓迎会」

午后霽る、里見等と入浴、七時頃帰宿、辛ふじて神学生新入の歓迎会に列す、国沢氏主会〔ママ〕、井深氏の感話・千磐氏の歓迎の辞・ミロル氏の答辞・上野氏の答辞等あり、国氏の祈祷にて閉式、后茶菓出づ、白石君より手紙来り、今度北五の辻に移転せし由、尚同氏の写真送らる、

十一日　晴天

〔欄外〕「入学生名前」

米人ランデス氏の学友、今大坂に働きつゝあるウードホール氏なるもの(28—190)ランデス氏の寓に永眠す、之が為に我校休業す、今年入学の神学生左の如し、別科へ飯沼基（高知）、予科へ竹内虎也（高知）・大原里俊（高知）・島村穂吉（高知）・伊藤常〔伊東常太郎〕郎（茨城）、本科一年へ上野雄図馬

（高知）

十二日　晴天

午前十時よりチャペルにてウードホール氏の葬式あり、米国公使ダン氏[28—191]初め在京の諸宣教師等会す、尚有志の信徒等集りければ会集無慮満堂なりき、アレキサンドル氏の司会並に説教あり、ランデス氏の履歴[履歴]話・加田氏の旧話（氏の逸事）・井深氏の切凱[凱切]なる祈祷あり、十一時半頃了会、直に谷中の火葬場に行かる、蓋し病症はチブスなり、今日最も悲観なりしは氏の未亡人なる方には亡人と頭を並べて着床し、今尚不快にて初の程は良人と何れが危きや明[分]らぬ有様なりしも、遂に自らが先づ生き残されしにぞ、柩の将に出棺せんとして会葬者等庭内を徘徊し柩馬車の出掛けんとせしとき、彼の未亡人はランデス氏の窓より頭差延て見送り居られき、午后秋葉氏方にてしるこ馳走になりしも、少し来客の為手落ち不出来なりしかば勝子も不興なりき、

十三日　晴天　安息日

教会にて礼拝式后総会あり、長老五人を三人にし撰挙せしに井田・河合・新島と当る、然し井田・新島の辞退に就き尚后会に決議せんとて中途にて閉会す、

十四日　晴天

父事千葉へ来り腫の為滞留、医院にさへ見せしが最早療治したれば今明日中に帰省すと。

十五日　雨天

昨朝秋葉氏よりボーニンの哲学史を拝借し来る、

十六日　晴天

植村氏の弁証学今日初て授業あり、教科書の要領を質問さるゝなり、我等応答の渋訥〔訥渋〕なるを評して「警官の前に罪人の白状するか如き様子なり、今少し弁証的に発言せよ、発言の快整ならんは大切なり、よく〳〵注意せよかし」と、散髪して三分頭となる、諸氏評して新出家出来たりと、入浴す、今日より賄の飯を食はず、

十七日　晴天　神嘗祭

〔欄外〕「日曜学校と教会の盛衰」

午后三田に散歩し上下肌着を注文す、午后青年会館に頌栄女学校慈善音楽会あり、諸氏行けり、盛会なりしと、小倉君に舟遊散〔遊山〕に誘れ割愛せしは残念、昨夜台町の祈会の主意に日曜学校の為といふありと聞て、大人の為の日曜学校振起せん事の必要迫れるを覚ゆ、教勢不振の原因にして信徒等の教理不通にありとせば（余は然思ふ）大人日曜学校不振は以て教会不振の原因なりとも謂ふべき乎、余が郷里の教会も日曜学校を重づる事礼拝式に譲らず、尚東京数寄屋橋教会も亦此辺には大に力を用るなり、然るに其余の諸教会は概して日曜学校を以て単に小児の学校に限り、あるいは洗礼志願者の養成に当るは心得ぬ事なり、

十八日　晴天

奥平姉より消息あり無恙の由

十九日　晴天

〔欄外〕「正則〔28―19〕対学院ベースボールマッチ」

教理歴史贖罪論の編を読む、午后二時より正則中学校とマッチあり、我校より手島・篠原・小口・里見・田中・森田・磯貝・富沢・熊野の諸氏出で、最初一二回に於て二点の敗となり、それより相方共ノーイン相続きしも最后の一勝負にて我校二点を返し実に三点の勝を得たり、際速き勝負にてありき、

二十日　晴天　安息日

〔欄外〕「救世軍／教会総会」

若林・鈴木等と赤坂教会に行く、則ちワデル氏創世記第一章一節を以て神は吾人の重なる主[28-193]なり、万事神の為に働くべしといふ意味にて説教さる、一寸波多野へ寄り午飯馳走になり、笄町の長谷川君を尋ね夕飯馳走、同氏の築地の美以美教会に説教に行かるゝに同道、新橋の救世軍の説教を聞かばやと七時頃入場す、早や聴衆四五十もあり、遂には満堂となり二百人位は集りしものゝ如し、彼等の服装は日本服にしてライト大佐[28-194]を初め十名程の員々等講壇に並列し、先づ最初に楽を奏せられ、あるいは祈祷、あるいは聖書朗読又は説教等代〳〵相務められたり、其の初に軍歌を一銭つゝにて配附せらる、其の奏楽は快活にして単に其の祈祷は真率にして短く、其の説教も単純にして平易なり、而して其の熱心なりしこと大に□すべきものあると同時に亦幾分か舞蹈[舞踏]様なるは変なりき、今日教会にて総会相開かれ余長老に撰挙せらる、蓋し一度は辞したりしも何うしてもとの依頼により之を承諾したり。尚ほ過日当撰の河合・新島の両氏は承諾されたり、又田中氏は今日撰出させしも同氏は井田氏とも相談の上自分の辞職を以て教会の便利ならんと思ひたれは辞するなりと、然し尚篤と勘考すべしとの事にて田中氏の事は次週に延したり。

明治二八年一〇月

二十一日　晴天
今日よりコンデンスミルクを使用す、午后秋葉氏へ行く、昨日良平来京せりと、面会す、ベースボールの連中田中へ写真を採に行かる、
二十二日　雨天
里見食過て昨夜より着床、少々吐しやす（吐瀉）、今朝安田退三氏より磐子様の遺稿「起の花かたみ」(28—195)を寄送さる、尚高田の近藤虎馬君より写真を逓送されぬ、
二十三日　雨天
運動会の相談会あり、山野君我級より出づ、蓋し級長の故を以てなり、
二十四日　雨天
午后三田に至り兼て注文せしシャツ及下はきを九十五銭にて求む、
二十五日　晴天
午后赤坂教会に祈会の為行き十時過帰宿、会するもの八名なりき、
二十六日　晴天
〔欄外〕「赤坂教会説教会」
我校ベースボール、セカンドチャンピヲン等東洋英和中学のセカンドとマッチを運動場にて催し九インの勝なりき、チャンピヲンには望月・小島・石川・磯谷・富沢・石井・新井・鈴木・原の諸氏出でき、新栄教会に京浜婦人大祈祷会ありし由、赤坂教会に於て午后七時より和田秀豊氏(28—196)の在天の屋、山田寅之助氏(28—197)の人生の戦争の説教あり、余は里見・波多野の両翁婦を誘ひ行く、

寒気大に加はり腰掛に在りて非常に感ず、会するもの三十名、尚今晩は台町教会にも明治学院青年会の催に係る大演説会あり、水芦・戸川・本田の諸氏出席、大に好景気なりし由

二十七日　晴天　安息日

教会の道すから小林格氏に会す、親属〔親族〕某病人あり来りしと、今〔ママ〕午后二時より新島氏の寓に日曜学校の青年数名、則ち井田兄弟・牧兄弟及若林等会合、新島氏司会一言励めあり、余祈祷を為し后茶菓出で四時半頃まで快談す、牧氏兄を〔　〕義弟を〔　〕雄といふ、尚〔　〕義氏の上にもありと、夜七時半頃より説教会開会、ミロル氏「基督教を信ずる理由」、石原氏の「人類の起原」てふ何れも平易真率なる話にて何れも感じたるもの〻如し、会するもの三十名程、六時より雨ふりしも九時より霽れたり、

二十八日　晴天

〔欄外〕「クラスミーチング」

国元へ矢島君の郷里の番地を知らす、午前加藤喜造君来訪さる、今日より綿入を着初む、亦股引は昨日より穿き出す、炭一表〔ママ〕十六銭にて求む、午后六時半よりクラスミーチングを長山君の室にて＝第八号室＝開会、山野氏司会、有益なる談話―キリストの恩恵を深く感ずべし、以て伝道の精神を実際に保持すべし―あり、尚清水久次郎氏も同様の感話あり、千磐・清水・自分等の祈あり、后茶菓出で十時頃まで快談放語、芝山氏一人欠く、三田にて「ミルク」を求む、

二十九日　晴天

〔欄外〕「祈祷感話会」

兼て月に一度づゝ教授・生徒一同にて毎月最后の火曜日に於て祈祷感話会を開く事なるが、今日は其の当日にてアレキサンドル教師の司会の元に開会、可林多（哥林多）前書二章二節を以て各々キリストの十字架を伝ふべしといふにありき、氏のモットーはキリストの心を以てキリストの十字架を実地ニ宣一（専一）伝ふべしといふにあり、矢島・長山・関君等祈り、兎角空しく時移るにぞア氏切りに励むるに、軈て北野氏一言の励に斯様に祈るもの少きは之れ当学院の特色なり、尚進で衷心より祈るものゝ出でんを望むと祈る、夜分長谷川君と六本木の寄に行く、（寄席）（28—198）伯円欠席せり、（28—199）

三十日　雨天

三十一日　晴天

十一月

一日　晴天

今日より賄替りたるも初業の故にや千万不整頓なり、七番の眼鏡を求む

二日　晴天

〔欄外〕「明治学院運動会」

今日学院大運動会を運動場に開会、先づ午前はベースボールあり、十時より十二時に至るに尚了らず、然と雖も余等の組十余インを勝ちたれば尚四回を残して勝負を決し余等の勝となりたり、余はレフトフヰルドを務め后三ード（サード）となる、午後一時より旗取・二人三脚・ジヤガ芋捨（拾）・二百ヤード競争・擬馬競争・スプーンレース・打□及藁履穿き競争・片足競争・三百ヤード競争・高

飛・幅飛・撰手競争等あり、余は三百ヤードにて二等賞を得たるのみ、中頃菓子・柿等出づ、今日勝利者の中には影山・富沢は撰手競争に一等賞として前者は壱円位の「ハンケち」一ダースに、後はシャツ二枚、後一等賞は若林の幅飛にて取たるガマグチ三十五銭程を好として鞋袋〔足袋〕・モ、ヒキ等なりき、余は二等賞にて手袋を取りたり、又ベースボル〔ママ〕の勝利者は各六個つゝの柿を貰ひたり、余は半月余りパんを食したる為にや思ひのまゝに行かざりき、午後親父より佐倉へ行き撃剣にて勝利を得たる模様を申越れたり、

三日　雨天　安息日　天長節

〔欄外〕「天長節」

御座脚半〔脚絆〕にて教会に行く、マクネア氏説教后晩餐式あり、十一時五十分頃了り新島氏の寓にて弁当を食し四時頃帰宿、夜台町にて鵜野氏の説教を聞きたり、

四日　曇天

天長節は昨日なりしも昨日は日曜なりければ例により今日休となる、午後六時より秋葉氏の宅にて良平氏の為の祈会あり、小菅・若林・矢島等会す、矢島君司会す、蓋同氏の発議に係る会なり、九時頃帰宿す

五日　晴天

北白川宮〔28—200〕愈々今朝七時十五分崩御の旨公報出づ

六日　晴天

北川宮薨去に就き哀悼の為今日は休業となる、宮様御亡の事は既に台湾にてありしことの様に囃

せり、事実は然るものゝ如し、実に陣中にて御薨御ましたらんには歴史上最も光栄あることゝ知らるべきに如何なれば秘したりけん

七日　晴天

八日　晴天

九日　晴天

〔欄外〕「正則対学院ベースボールマッチ」

正則尋常中学よりベースボールマッチ申込れ今日二時より学院運動場にて仕合、相手好く防ぎ互にノーイン続きしが、八九部(分)通済たる頃学院方五インの負となり最后の働きにて四インを廻(返)し結局一インの負となりしは残念なりき、去る四日より矢島氏の発起にて秋葉氏の宅にて良平氏の為連夜の祈会を開きしが、今晩にて止む

十日　晴天　安息日

教会より先づ小石川関谷に行き弁当使用、一時頃より本郷第一病院(28—201)の秋葉良平氏を見舞、哥林多前書十三章を読み祈して三時頃去る、関谷にて理吉事金子三円程を国元へ無心に及ひし由にて、親には病気沙汰ならねば送金せさる積なるが事実取調べ呉との文書を見たり、嗚呼、実に心配なる音信なり、余之を聞き今晩彼を呼寄せ打語らんものと一時頃はがきを以て招きぬ、九時頃まで待つも来ず、さては正当の事理あるに非る乎、愈々心もとなし、十一時過帰校す

十一日　雲天

北白川の宮の国葬に就き学校休業さる、午前秋葉氏へ行き福音の道(28—202)・福音の大原理(28—203)を借用し来

る、帰路里見の老母と御鋭〔銭〕姉に会す、秋葉氏へ行くなりと、后にて聞けば鋭〔銭〕姉事啓蒙学校[28—204]の方罷められたるなりと、不知如何なる事情ありてにや、今日来りしは後策なりと

十二日　曇天

十三日　雨天

秋葉良平氏今日退院せりと、

十四日　晴天

秋葉氏方に良平氏病〔病痾〕阿治癒に就き感謝会あり出席す、

十五日　晴天

金曜会の演説会二時より開会、余司会となり島田・大原の両氏弁士たり、尚鹿島氏も弁士たりしも欠席せられたり、会するもの八人、

十六日　晴天

普通学部乙部文学大会あり、十銭の入場券を求め到る、余り面白からず、今日散髪し赤坂の氷川町に南某の比較宗教学の講義ある由に聞き罷出が、今日は差支一□見合せたりと、一寸波多野へ寄る、家人皆留守、栗田鎌吉君在り、氏は今度肺病に罹り治療の為出京せしも何処にても病院満員たるを以て明日は千葉の病院へ行くなりと、則ち今日は亀右門〔亀右衛門〕氏に暇乞に来られしものゝ如し、

十七日　晴天

教会より小石川関谷に行き、本郷へ出で神田にて夕飯の代にしることを喫し、銀座亭[28—205]に登り講釈

明治二八年一一月

を聴聞す、入場料二銭五厘・ふとん料一銭なり、余ふとんをとらざりき、過日理吉の話ありしが当夜余が関谷を去るや間もなく来りし由にて、彼が入金の次第は彼頃日他家へ転じ度存念にて、さては其の掛りとて少々入用なりしも、今日再び落就く様に決心したれば御心配には不及云々と

十八日　晴天

昨日礼拝式の時河合氏絶叫して曰く彼の遼東半島還附の件に就て我国民の憤争朝野に紛擾たり、然し基督信徒は遼東半島は愚か全世界を得も、もし其の霊魂を失ば何の益あらんやといふ、この霊魂の為に如何程馳(配)慮したるやと

十九日　曇天

〔欄外〕「渡辺吾作氏」

午后霧雨となる、岐阜県大藪の渡辺吾作氏長谷川氏を尋ねて来り、余も面会暫く話し夕飯后長谷川氏は氏を救世軍に携れ行く、余宮川氏と三田まで彼等に従ふ、

二十日　雨天

二十一日　雨天

〔欄外〕「クラスミーチング」

予て期したるクラスミーチングを長山氏の室六号にて開会、矢島・和田の両氏委員、矢島氏司会、伝道者たるもの時の潮流に逆ふべし、特に今に於て然り云々、后柿と茶菓出で興に囲碁・トランプ・花合等あり、十時過ぎ割愛す、同級生皆集りたり。矢島氏の司会に次で清水君友情を語り、千磐氏亦矢島氏の様な事を話さる、温き集なりき

二十二日　雲天

金曜会の弁士宮川・島村の両は首尾好く演ぜらる、司会者は川添君なり、君の批評に宮川君の弁は「嫌なり」と、意は少し器械的なるを難じたるものならん、鹿島再度欠席し為に川添氏向になりて憤慨、曰く斯の如き人とは共に手を携ふるも忌わし、宜しく相当に譴責し金曜会に謝せしむべしと、則ち国沢氏之が談談般員（ママ）となる、其時大原氏曰く先夜余等の演説に批評を加へざりしは何事ぞ云々、島田氏も人少なるに不平を唱へ居りき云々、何にが何□やら、昨日白石氏へギゾー文明史（28—206）とカーライル英雄論送る、秋葉氏に頼まれ奥平氏への本を三田四国町の西松高氏の寓になる渡辺氏に届けんとして已に立たる、則ち三田郵便局より小包にて出す、賃銭十九銭なりき、

二十三日　晴天　神嘗祭

〔欄外〕「神嘗祭」

南氏の比較宗教論を聞んが為八時頃より氷川町に出発、十二時頃帰校す、同僚五人有益なりき、南氏は同志社出にて米国エール大学卒業、哲学博士なりと、今正則中学校に教授たり、小林鉞子の聖書学館へ入館せんとて秋葉氏にあるに会す、

二十四日　晴天　安息日

寒気身にしむ、教会を去り里見にて弁当を喫し四時頃より波多野に到り恰も承五郎氏と妻君のみあり、主人の宗教談あり愉快なりき、氏は中々欧化主義の人なり（今更なったといふにあらねど）、小会にて去る、土日曜夜の説教会に討議す、余加席、七時半より開会する教会の説教会に行く、長谷川氏弁士たり、集るもの十五名、寒を冒して帰宿、承五郎氏より三井銀行にて社員集

めの談あるを聞き早速福島三造氏に報知す、

二十五日　晴天

福島君より返事来り、午后六時半よりチヤペルにて島田三郎氏[28-207]の演説あり（物質的進歩の欠点）院外の聴衆少からず、小林鉞子一昨土曜日聖書学館に入る、午后秋葉氏へ行く、氏は去る土曜日に軽井沢へ行き今日午后五時頃帰京せりと、談聖書学館の事に及び荒木とみ子退館の話も其后同姉の方向に就ての斡旋談ありき、同館もとかく不穏の様子なり。

二十六日　晴天

〔欄外〕「石本三十郎氏逝く」

米国ホプキンス大学に在る石本三十郎君病死の報[28-208]来る、則ち郵便にて昨夜石本氏、バラ氏へはインブリ氏より、井深氏へは陶山氏より来る、病に罹りたるは十月の半頃の事にて本月二日に永眠せりと、悲惨、今日は終の火曜日に当り一時より祈祷会あり、ランヂス氏司会、神は我等の父なれば我等の願を容れ玉ふ[給]とて祈祷の大切なることを談らる、福島君来り、授業中にて不会、書置あり、三井銀行の試験を考らるゝ由、今日波多野氏に面会したりし由、余石本様に弔す、

二十七日　晴天

午前秋葉氏に呼れ矢島氏と赤飯馳走になる、矢島氏と入浴す、

二十八日　晴天

二十九日　晴天

〔欄外〕「石本三十郎氏追悼会／第十五回明治青山同盟文学会」

本院チヤペルに於て午后二時より石本三十郎氏の追悼会あり、内外の会衆満堂、アレキサンドル氏司会、井深先生説教[28—209]、熊野先生履歴談[履歴]、マコーレー氏所感—西洋人代表にて弔辞あり、水芦氏日本教師代表弔辞、国沢氏神学部代表弔辞、普通学部代表弔文朗読篠原耐氏（国沢氏も弔文朗読なりき）、午后四時過ぎ閉会、尚最后に石原氏の祈祷ありしに先生中途にて涙泣にむせばれ断舌せり、されば満堂の人々誰とて袖をぬらさぬ者はなかりける、本日は休業なりき、黄昏頃より風烈しくなりぬ、さる程に今晩は同盟文学会を青山に開会さる、余ものずきにも幼年諸氏と唐風を犯して出席、相方共順備[準備]不足の概あり不出来なりし、唯聞くべきは最后に青山学院の河野善一[28—210]氏のロバート・バーンス[28—211]は大字なりき、試に順序を記さんに左の如し、

音楽　三浦葉子・杉原民子・西沢雪子、
祈祷　教授某、
歓迎辞　会長某、
音楽　リットル・チルドレンス・ペ[ア]レーヤース　作者ブルナック　アレキサンドル夫人独吟、
英語論文　The Mission School of the Future　篠原耐（明治）、
邦語演説　大国民の要素　広瀬又六（青山）、
音楽　ゼ・キングス・ハイウエー　作者モトロイ　ジョンソン夫人独吟、
英語演説　War, in Once, and Once, in War　斎藤治作（青山）、
邦語演説　二十世紀の日本人　田向伊之助（明治）、

明治二八年一一月

明治二八年一二月

音楽独吟　作者デンネス　佐々木祐継[28-212]、
英語演説　The Greatest Power in Human Society　戸田謙二（明治）、
邦語論文　ロバート・ボルシス　河野善一（青山）、
頌歌・祝祷、
終にパン菓子出づ、蓋し余興は廃したりと、司会者の報告大に可なり、十時過帰宿、

三十日　晴天

〔欄外〕「波多野筆子六十一才の寿宴／赤坂教会説教会」
波多野筆子六十一才の才祝あり、晩餐の馳走に与かる、来会するもの大小無慮三十名、里見一家・中野一家・関谷一家・高田一家・樋口おたつ子・茂富父子・串戸氏・大橋老母等なり、青山幸三郎令弟・令妹等も来られき、青山氏の令弟と里見純吉の剣舞あり、何れも好出来にて一場を驚すに足りたり、高田群司氏始め諸君の祝歌ありき、余は松魚節二本を祝儀の足として遣す、今宵赤坂教会に説教会あり、弁士には水芦先生・ランヂス（中村氏通弁）来られ聴衆十三四名なりしといふ、余遅刻して不参

十二月

一日　晴天　安息日
河合氏心気進まずとて新島氏説教さる、会するもの十六七名、是より先き中台一家の退会沙汰あり、河合氏の心痛此事に依と見ゆ、則ち説教后新島氏と河合氏相談あり、余も中頃より呼れ相談

に中入す、新島氏情迫て泣祷す、次で河合氏も涙汲で祈らる、つひに河合氏一応談般〔談判〕の為中台氏へ行くことゝ決す、中台氏の退会は当教会員の不懇親なりといふより下谷教会[28-213]に転会せらるゝなり、新島氏の憤泣また無理ならず、中台氏の教会に対する不服は新島氏に取りては自身の落度なるが如くに感ずると見へ、曰く「自分にては大に教会の為に尽せる積なれど尚自身の為に教会員を信仰より落すか」と肺腑よりの嘆祈、余も思ず泣涙にむせびたり。里見にて弁当を使ひ四時頃より波多野へ行き夕飯馳走、七時頃まで話し兼て山内益太郎氏波多野家出入許容の事に就て承五郎氏に談般〔談判〕致さんものと心構居りしが、今宵承五郎氏の奥間に入りしを機会に談合せしに、氏曰く「山内の家庭の団楽〔団欒〕に入るは好まぬが母の許に来るは咎も宥もなし勝手たるべし、亦彼が勉学の費用位も支弁すべし云々」と、要するに益太郎氏不通なるは感情沙汰の事ゆへ今しはらくの年月を経過するに非れば全き出入は叶ふまじき乎、今宵赤坂教会に説教会あり、秋葉氏・マクネアの両氏出席演ぜられ、聴衆十八九名と見へたり、日影町にて白地の毛布一枚二円九十銭にて求む、

二日　晴天

広岡先生に十一月分謝礼金五円払ふ。

三日　晴天

四日　雨天

アレキサンドル氏試験問題提出さる、夜秋葉氏に行き喜一郎氏の来るに会す

五日　曇天
越後の白石君より来状、彼の地皆々無事の由、文意懇切床しく感ず、
六日　晴天
奥平姉より来状、無事御自身の薄信を愁訴し来る、金曜会祈会六人集る、
七日　晴天
兼て依頼されたれば朝飯后七時頃よりすゝはきの為波多野へ行く、純吉氏既に先に在る、外来の者は余等とばあや・真佐樹氏のみ、午后五時頃形就〔片付〕く、蓋し二時頃より重〔主〕に障子を張りたり、又妻君日頃不快にて着床故に奥の二間は残す、午后十一時過まで談じ純吉氏と寄宿〔帰宿〕せしは十二時近く純吉氏共に寝らる、父よりはがき来り、冬期休に帰国せよと
八日　晴天　安息日
〔欄外〕「長老按手礼式」
マコーレー氏説教さる、終に余が為長老就任式の礼ありき、来る十二日横須賀に海軍人歓迎会を開くに就き其が入費寄附を募る、五拾銭程集る、午后一寸秋葉氏へ行く、妻君不快着床し居らる、理吉に手紙差出す、小石川講道館に柔道の仕合あり、学院より篠原・川島の両氏撰抜されて出席、川島君は勝利を得たりといふ、両人に弁当料として金十銭つゝ附送す、
九日　晴天
十日　晴天

十一日　晴天

近藤虎馬君より消息あり、無事の由、神学の試験あり、罪の本原〔本源〕を読む、

十二日　晴天

〔欄外〕「クラスミーチング」

午后六時より長山君の室にてクラスミーチング会開〔ママ〕、山野－風邪、深尾－病気の両氏の外皆集る、尚田島賢蔵氏も列す、長山・清水の両氏委員にて清水君司会、一時間祈会あり、后例の通りトランプ・碁・将碁〔将棋〕の遊戯あり、十時頃まで放談快遊せり

十三日　晴天

祈祷会の為赤坂教会に行く、午后七時半開会、長谷川君司会、会するもの六名、帰路長谷川君の寓に寄り懇話山々、床中にて十二時頃まで語る、さる程に添寝の故にや寒気堪へがたく大に閉口したり、長谷川氏秋葉姉より聞きたりと謂へらく、同氏の先日岐阜竹の鼻〔竹ケ鼻〕に立寄りしは何か特殊の事情ありてのことならん、また余が彼の姉と文通せれるも世に例少からぬある特殊の目的の故ならんには由々しき大事にて誠に忌わしき廉あれば、断全〔断然〕文通も中止致し度旨申越されたり云々と、彼の姉の品性より推量せば斯様なる婆慮あるもまた怪むに足らず、さるにても姉の如き高潔なる性情にて尚如斯事辺に配慮さるゝとは婦人は何ふしても婦人だけと知らる、

十四日　晴天

七時五十分頃起床、朝飯をそこ〳〵に済まし九時半頃帰校、兼て予期せし柔道の仕合已に初まりつゝあり、会員一同に出席花々しき仕合あり、余は横田・若林氏と取組み后者に負く、是れ疲労

の勢〔ママ〕なりと思ふ、先生に午飯を差上ぐ、

十五日　晴天　安息日

河合君微恙にて長谷川君説教せり、河合氏にて便当〔弁当〕使用一度、鈴木寿氏の兄君在り、河合氏と三人にて神田青年館に小崎氏の説教を聞き、帰路九段の庭内を見物し、黄昏時両氏は河合氏の寓に、余は別れ一ツ木にてすしを喫し再び河合氏へ行く、妻君心地変なりとて床に就く、出産来る二十頃〔ママ〕なりと、長谷川君来り、其内に学校より寿君来る、一同にて教会に行く、又長谷川君説教す、氏は午后大田に於ても説教せりといふ、氏も亦達者なりといふべし、

十六日　晴天

〔欄外〕「期末の試験」

ミロル氏旧約の注釈の試験ありき、

十七日　晴天

ミロル氏新約書の緒論の試験ありき、

十八日　晴天

靖国神社合会式にて大祭日通り休業

十九日　晴天

ランヂス氏の注釈の試験は午前あり、ミロル氏説教学の試験は午后ありき、

二十日　晴天

〔欄外〕「赤坂教会クリスマス」

午前九時より井深氏の教会歴史試験ありき、一時間半にて終る、今日にて学期試験も了りぬ、

二十一日　晴天

長山・清水・川添の三氏大会伝道局の依頼に応じ水戸表へ臨時伝道に出張することゝなり今朝十時品川より出発す、余等送る、午后銀座へ廻り「幸福の生涯」(28―214)を二十二銭にて求め奥平姉に送与す、三十間堀の大田賢〔　〕氏の事務所なる山内益太郎氏を訪ふ、即ち二階の応接間に案内さる、同氏は該所に在り主人大田氏よりも信用され大に持(用)ひられ居る由自白さる、尚往く〳〵は法律家たるの志望にて今や明治法律学校(28―215)々員となり来年の九月には卒業の筈なりと、蓋し平日は通学せず講義録のみを取れりといふ、同氏の申分に右月謝金一円は米沢人某と房州の人某より用立てられ居る由、然し彼等は他人のことゆゑ波多野にて助け呉るゝなら、何卒然るべきやふ願わしとの事にて、余は尚承五郎に掛合ふ筈にて帰参す、小石川関谷に到る、何も無事、夕飯馳(マヽ)後降雨を心配しつゝ赤坂の河合氏まで来る、則ち昨夜十時頃出産、特に男子にて母子共無事、長谷川氏と氏の寓に帰る、氏尚夕飯前にて豕を求む、九時頃より夕飯となる、余又御証(相伴)番す、十二時過寝に入る

二十二日　晴天　安息日

七時起床、炊事に係る、たちまち八時となる、長谷川君八時半頃起く、昨夜の豕を蒸たり、余日曜学校の間に合わん為長谷川君より一歩先に来る、小供二十人程已に在り暴れ廻る、其内に河合氏来り、余郵便を小引とし聖書を説き福音の大能を教ふるに書冊の配分して尽る此に非るを教ゆ、河合氏説教さる、題して「馬槽のキリスト」なり、集るもの男七人女三人都合十人、会堂に

て弁当食し長谷川・井田兄弟・牧・河合の五氏と共に代田村(28—216)のクリスマスに(ママ)に行く、二時二十分間にして着、二時半頃より田中氏司会者にて開会、日曜学校生徒中常に集るもの五男三女の小供、あるいは聖書朗読あるひは演説・暗誦・讃美等あり、中々見事なりき、式了て日曜学校生徒にてかるた・すこ六・羽等の賜ものあり、尚小供にはみかん大人には甘酒の馳走ありき、三時五十分帰路に就き六時頃長谷川氏の寓に着、牧・井田兄弟等と夕飯を喫す、諸氏室内に飯道具散乱たるに驚かる、長谷川七時過より教会に到る、余風邪とならんを恐れ三田を通て帰校す、

二十三日　晴天

〔欄外〕「松田魁一郎氏の葬式」

十時頃より三田郵便局に到り為替を取らんとす、暮の月と来て人衆山の如く一時間待ち漸く受取る、長谷川君を訪ふ、将に出んどす(ママ)、氏未食前なりと、則ち供に材木町の天ぷら屋に入り午飯し二十七銭五厘払ひぬ、教会に到れは已に一時、今日午后二時より松田魁一郎氏の葬式あり、余等是が順備(準備)を心安に請合しなり、然るに今来りて見れば早て会葬者二三人在り、クリスマスの飾は尚依然として存し、大に狼狽の体にて右飾物を取り除け、田中氏を補て十字架形の花飾と丸輪の花飾を造り辛ふじて間に合ひたり、二時より開会、河合氏司会、讃美百九十七番、余哥林多書十五章朗読、長谷川君の祈祷、讃美、田中氏履歴、讃美、説教河合氏、同氏祈祷、二百六十六番讃美にて了る、会葬者親戚知人等十数名にて都合二十四五人なり、蓋し会員余り来らず、三時半教会を出発、四時青山に着、直に開式、讃美百四十四番、聖書伝道書十二章、祈祷、讃美にて了り埋葬す、但し埋葬后何の式もなきは何となふものたらぬ心地しけり、休茶屋に招かれ茶を貰ひ

尚餅菓子を一袋づゝ配附されたり、帰路牧氏方に寄り夕飯馳走となる、長谷川の寓へ来るや松本・村杉の両氏あり、余餅菓子を取り又炭を取る、尚有合の芋を煮て食はせたり、彼等十一時頃まで話されき、

二十四日　晴天

昨夜は着なりにて着床、今朝五時起床、先づ長谷川氏の為飯を整ふ、氏腹痛にかこづけ七時過に起床、八時頃漸く上総行の途に就かる、車屋を本所まで二十銭にて雇ふ、后形着〔片付け〕に半日かゝり午后入浴し北郷氏へ本箱とこり〔行李カ〕を預け、里見・波多野・中野を見舞六時頃帰校す、今宵台町教会のクリスマスに出席、かなり盛大にして飾付の意匠はなか〳〵凝らしたものなりき、特に星より両側に光線の中にメリークリスマスと画きたると、二階の下にまくを張り軍艦に凝したるなぞ考ものなりし、茶番興言〔狂言〕なぞなかりしは感心なりき、

二十五日　晴天

六時半頃小使小包を持来る、則ち小滝姉より送られたるクリスマスの贈物手袋なりき、意外の誂にて歎喜おく能はず、嵌ては脱ぎ脱では嵌ること時余に亘る、秋葉氏を見舞、清子の品川のクリスマスに行くに美服を着たりとて秋葉氏の大小言ありき

二十六日　雨天

午后霽る、昨夜は風邪の気味なりければ早く臥す、夜半汗出で熱薄ぎたるものゝ如し、四時目醒め国沢君の為飯を造〔作〕る、国沢君曰く「この御馳走ばかりは忘られぬ」と、氏は雨を冒して五時四十分頃出発せり、閑友数名送らる、余風気なりければ不参、名古屋へ二泊して大阪へは明々后

日行く筈なりと、午后風気快く入浴す、奥平氏より礼状来る、矢島君帰校せり、

二十七日　雨天

宮川氏と同道、午后芝教会クリスマスに出掛く、かなり盛なりき、窓を蓋ふて夜景と為したりしは一寸思付なりき、一時開場二時開会なりければ前に警醒社にて教会の祈祷文二十枚を求む、尚帰路長谷川の留守宅を見舞米を取て来る、芝教会を出るや雨に遇ひ、長谷川の宅より強雨となりき、芝教会にて中村幹次君に会す、氏の妹も携れられき、午后六時頃より矢島氏と秋葉氏に遊び暴雨にて同家に矢島と添寝す、是より前八時頃今関喜一郎氏来る、横須賀勝次郎氏へ衣服及金子を持参せるなりと、氏は秋葉氏と寝たり

二十八日　晴天

秋葉かつ子去る二十五日よりレウマチの気味にて今日尚臥、余等九時過帰参す、おせい子を学校に招きしに加字木たね子と共に来り、矢島氏菓子を取り花合・かるたに十二時頃まで遊ばれたり、自分一時頃より一寸小倉氏を見舞に大掃除最早〔ママ〕にてそこ〳〵に去り、加藤氏なる島田氏を訪ひ試弓二十本、久しぶりなれば余り当らず、去て入浴、帰路白金台町にて牛を五銭取り夕飯に充つ、国元親父より秋葉氏へ来状、秋葉氏と矢島氏下東見合となる、

二十九日　晴天　安息日

九時半より日曜学校開会、小供十二三名来る、自分開校話す、十時より河合氏礼拝式の説教さる、集るもの十一名、自分新島氏に代て教会費・クリスマス費用等を集む、午后河合氏と信者を訪問せんとて先づ清水由松氏を見舞ふ、則ち留守、村井婆を訪ふ、在り暫く話し帰る、夜分数寄

屋橋教会へ行き佐々りう子を待ち合せ自営館への払金壱円五拾銭を托す、但し今年度の分三円は順送に致す可き様依頼して遣す、佐々姉とは屡にて面話せり、姉は目下画工研究の為赤坂中町に通学し居はこび木町なりと、同姉の会釈も上図（上手）に社交に熟して来りしには驚ひたり、再び赤坂教会に到る、則ち河合氏説教さる、七人の聴衆外に小供四五在りき、

三十日　晴天

午后三田より麻布長谷川の寓に廻り小倉様を見舞、鋭喜君障子を張り居り手伝ふ、夜分七時よりランヂス氏方へクリスマスの祝宴にとて例年の通り在学生を招かれパん菓子の馳走に与る、尚余興として種々なる遊戯を為し九時半頃退く、来会せしもの二十五六人内神学生九人

三十一日　晴天

午前入浴、新年の礼状を認む、秋葉姉五六日前より着床、レウマチの気味なりしが今日は起床さる、矢島君今朝六時小金井に草履掛にて出発、氏の為に飯を焼て遣したり、自分去る二十二日より賄の飯を食はざりしか今朝より始む、

註

28－1　スサンナ、ウエスレーの伝

『スザンナ・ウェスレー女の伝』（原題は*Life of Susanna Wesley.*）のことか。同書は、美以雑書会社（スペンセル女師（Spencer, Clarissa Hale.）著、元良米女訳、一八八八年）やメソヂスト出版舎（スペンセル女師著、元良米女訳、一八九四年）から刊行されている。スザンナ・ウェスレー（Wesley, Susanna. 一六六九－一七四二）は、イギリスのロンドンに生まれ、メソジスト教会の基礎を築いたジョン・ウェスレーと、兄を助け賛美歌作家として名を馳せたチャールズ・ウェスレー兄弟の母親。

28－2　波多野承五郎　→　註28－3および『資料集』第一六集、註26－13参照。

28－3　三井銀行

豪商三井家が一六八三（天和三）年に為替両替商をはじめ、一八七六（明治九）年に名称を三井銀行とし、駿河町三井洋館に日本最初の私立銀行を設立した。一八九三年七月、商法の規定により合名会社三井銀行となった。一八九一年に同銀行に入社した波多野承五郎は、一八九五年当時、秘書記主任を務めており、同年一二月に発行された『明治二十九年三井銀行案内』では編集兼発行者となっている。

28－4　郵船会社　→　日本郵船会社

一八八五（明治一八）年、郵便汽船三菱会社と共同運輸会社の合併により誕生した日本三大海運会社の一つ。『日本郵船株式会社百年史』（財団法人日本経営史研究所編、日本郵船株式会社、一九八八年）によると、一八九三年秋から海運は好況となり、また日清戦争の勃発によって軍事輸送に対応する御用船を政府に提供することとなり、一八九四年に入ると船舶の購入が活発化した。御用船のうち日本郵船からの徴発分は全体の五九パーセントを占めていたという。日清戦争後の一八九六年には、日本郵船が欧州・米国・豪州の三大遠洋航路を開設したのをはじめとして、日本海運業の海外進出が本格化していく。

28－5　九段分捕品見物

日清戦争における戦利品の陳列公開が靖国神社の招魂館・遊就館で行われた。その際の戦利品を九段分捕品と言った。陳列された分捕品の詳細は『読売新聞』（明治二七年一〇月四日朝刊）に掲載されている。当時の様子を描いた浮世絵に小国画『大日本大勝利分捕品縦覧之図』や梅堂画『九段靖国神社境内陳列清軍器分捕品』（一八九四年）等がある。また、一八九五年一月に耕書堂から刊行された『日清戦争漫画』には「九段招魂社ニ於テ分捕品陳列詣人群集ノ図」が掲載されている。

28－6　泉弥六　→　和泉弥六（いずみ　やろく　生年未詳－一九二六）

一八八八（明治二一）年明治学院英語科に入学、のちに神学部に転じ一八九三年卒業。晩年には明治学院理事も務めた。著書に『罪の価は死なり』（石本三十郎発行、一八九一年）、マクネヤとの翻訳書に『基督教の学術的研究』がある（『資料集』第一六集、註27－32参照）。井深梶之助の一九二六（大正一五）年一月一八日の日記（ID: 1201610450）には、前日に亡くなった和泉について「午後三時昨日死去セル和泉弥六氏ノ葬儀ヘ会葬ス、同氏神学部卒業ノ後三四年伝道ニ従事シ東京実業界ニ身ヲ投シタル人ナリ、性質温和親切ノ人ナリ」と記されている。井深の弔問文も残る（ID: 1201710318）。

28－7　材木町の講義所

麻布材木町七五番地（現在の東京都港区西麻布一丁目、六本木六・七丁目付近）にあった講義所のこと。一八九三（明治二六）年六月に明治学院神学部を卒業した北郷（きたごう）保守が伝道師を務めていた。日記の三月三一日条にある「北郷氏の講義所」もこの講義所のこと。なお北郷は、一八六四（元治元）年、現在の福島県いわき市に生まれ、一八九三（明治二六）年に明治学院神学部を卒業した。一九〇〇年には浜町の説教所（講義所）の伝道責任者となっている（『日本基督教会史』、山本秀煌編、日本基督教会事務所、一九二九年）。

28－8　李鴻章（り　こうしょう　一八二三－一九〇一）

中国清代の政治家。日清戦争後、講話交渉で全権を任され、一八九五（明治二六）年三月から山口県赤間関市（現在の下関市）に滞在。伊藤博文・陸奥宗光と講和会議を行い、四月一七日に日清講話条約（下関条約）を締結し

た。交渉中の三月二四日、李は講和に反対する小山六之助（豊太郎）によって狙撃され負傷した。

28－9　**猿町**　→　白金猿町

芝白金猿町とも。江戸期から一九二九（昭和四）年にかけてあった町名。現在の港区高輪三丁目、白金台二丁目付近。

28－10　**明治学院卒業式**

『福音新報』第二一二号（一八九五年四月一日）にも当該卒業式の様子が記されている。

28－11　**大鳥圭介**（おおとり　けいすけ　一八三三－一九一一）

軍人・政治家。兵庫県出身。幕府軍の近代化に従事し歩兵奉行となる。江戸開城に反対して関東・奥羽を転戦し、蝦夷島政府陸軍奉行となるが五稜郭で降伏。出獄後、陸軍省をへて工部省で累進、一八八二（明治一五）年元老院議官となる。この前後、工部大学校校長・学習院院長を務める。一八八九年清国公使、一八九四年年朝鮮公使を兼務し、日清戦争の外交工作にあたった。同年一一月一〇日より枢密顧問官を務めた。

28－12　**末松多美彦**（すえまつ　たみひこ＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、福岡県出身。

28－13　**政田辰治**（まさだ　たつじ＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、鳥取県出身。卒業後渡米。

28－14　**松永文雄**（まつなが　ふみお＊　生没年未詳）

『神学部一覧　明治二十八年』によると、明治学院神学部を一八九五年に卒業後、伝道者として高知に赴任。

28－15　**川井運吉**（かわい　うんきち＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、秋田県出身。

28－16　**好川二一**（よしかわ　にいち　一八七〇－一九三五）

「神学部学籍簿」によると一八九一（明治二四）年九月神学部予科に入学。『神学部一覧　明治二十八年』によると、明治学院神学部を一八九五年に卒業後、伝道者として京都に赴任。日記によると、好川は四月四日に幸三に写

真を一枚残して西京へ発ち、幸三は同月九日、好川の「遺物品」を郵送している。好川については、「明治二九年四月　日本基督教会第一東京中会記録　附臨時中会記録」の第一三条に「伝道者好川二一君ヨリ差出サレタル浪花中会へ転会致度旨ノ願書」が提出され、可決されたことが記されている。同地で二年間の伝道を行った後、一八九七年四月より一年間越後高田で伝道した。また『日本基督教会年鑑　昭和一〇年』（日本基督教会事務所編刊、一九三五年）によると、アメリカのカンバーランド長老派ミッションのヘール宣教師兄弟によって一八九〇年に設立された日本基督教会四日市教会で、一九〇七年から一九二五（大正一四）年まで牧師を務めたことがわかる。

28－17　**樺嶋樸**（かばしま　ぼく＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、福岡出身。卒業後は神戸石炭商会に勤めた。

28－18　**熊野春江**（くまの　はるえ＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、長崎出身。卒業後は明治学院高等科生徒となり、一八九七（明治三〇）年高等科卒業。

28－19　**篠原耐**（しのはら　たい＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、埼玉県出身。普通学部普通科を卒業後、高等科に入学。日記の一一月二九日条には、石本三十郎氏追悼会において篠原が明治学院普通学部代表として弔文を朗読したことが記されている。

28－20　**秋葉鑑次郎**（あきば　かんじろう＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、東京出身。

28－21　**浅見好太郎**（あさみ　こうたろう＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、群馬県出身。卒業後、神戸レビー商会に勤務。

28－22　**平野円**（ひらの　まどか＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、東京出身。

28－23　**中沢貞蔵**（なかざわ　ていぞう＊　生没年未詳）

『普通学部一覧　明治二十九年』によると、新潟県出身。

28－24　八木篤造（やぎ　とくぞう＊　生没年未詳）
『普通学部一覧　明治二十九年』によると、広島県出身。

28－25　赤須広（あかす　ひろし　一八六六－一九二二）
茨城県出身。一八八八（明治二一）年水戸教会において高木信吉より受洗。一八九一年明治学院神学部予科に入学。在学中の一八九二年に補教師に任命された。『神学部一覧　明治二十八年』によると、卒業後、伝道者として越後村上に赴任。一九〇五年に按手礼を受け、神戸教会・水戸教会の牧師を歴任した。「明治二九年四月　日本基督教会第一東京中会記録　附臨時中会記録」の「第四条委員報告の（七）新潟県」の項に「村上教会伝道者赤須広氏木更津講義所ニ転任ス」とある。

28－26　千屋和（ちや　のどか　一八六九－一九二七）
高知県出身。旧土佐藩士千屋和夫の長男として生まれる。一八八五（明治二八）年、当時高知に伝道中であった山本秀煌より受洗し高知教会に入会。一八九一年九月に明治学院神学部予科に入学し、本科卒業後は伝道者として水戸教会に赴任。一八九八年按手礼を受けて教師に任ぜられ、広島教会・信州上田教会に赴任し、のちに新栄教会の第三代牧師を一九〇四年から一九二七年まで務めた。

28－27　河田繁太郎（かわた　はんたろう＊　生没年未詳）
『神学部一覧　明治二十八年』によると、卒業後、伝道者として東京に在住。

28－28　笹倉弥吉（ささくら　やきち　一八六八－一九四六）
兵庫県出身。一八八六（明治一九）年受洗。「明治学院神学部学籍簿」によると一八九一年神学部予科に入学。『福音新報』第一九九号（一八九五年一月四日）の広告には、笹倉が卒業前から名古屋にて伝道に従事していることが記されている。卒業後は、名古屋教会に赴任。一八九七年按手礼を受けて同教会の牧師となる。一九〇三年渡米しユニオン神学校に留学。一九〇六年帰国後は海岸教会（現在の横浜海岸教会）の牧師に就任した。

28－29　白井胤録（しらい　たねろく　一八七三－一九一六）
愛媛県出身。「神学部学籍簿」によると「白井胤禄」と表記され、一八九三（明治二六）年神学部本科二年に入学。

保証人は牧師貴山幸次郎。『神学部一覧　明治二十八年』によると、卒業後、伝道者として名古屋に赴任。一九〇二年按手礼を受けて正教師となる。東京神学社の創設にあたって植村正久を助け、一九〇四年開校後は新約聖書総論を担当した。

28－30　白石喜之助（しらいし　きのすけ　一八七〇－一九四二）
鹿児島県出身。同志社を中退した後、一八九三（明治二六）年神学部本科二年に入学。「神学部学籍簿」によると、保証人は牧師和田秀豊（註28－196参照）。『神学部一覧　明治二十八年』によると、卒業後、伝道者として越後高田に赴任。一八九七年按手礼を受け、新潟日本基督教会の牧師となる。その後、掛川・浜松・市川・甲府などの地方教会の牧師を歴任。一九二〇（大正九）年渡米し、サンフランシスコ日本人教会牧師を務める。一九二五年帰国後も青山・名古屋中央・札幌などの各教会を牧し、一九三七（昭和一二）年に引退。『古代印度哲学』・『基督教読本』など著書も多く残る。

28－31　鈴木直丸（すずき　なおまる＊　生没年未詳）
『神学部一覧　明治二十八年』によると、卒業後、伝道者として肥前佐賀に赴任。

28－32　竹林寅蔵（たけばやし　とらぞう＊　生没年未詳）
『神学部一覧　明治二十八年』によると、卒業後、伝道者として土佐高岡に赴任。

28－33　白土弥之助（しらと　やのすけ＊　一八六二－没年未詳）
茨城県出身。「神学部学籍簿」によると、一八九三（明治二六）年神学部別科に入学。保証人は牧師高木信吉。『神学部一覧　明治二十八年』によると、神学部別科を卒業後、伝道者として上州桐生に赴任。

28－34　竹内平八（たけうち　へいはち＊　生没年未詳）
『神学部一覧　明治二十八年』によると、明治学院神学部別科を卒業するも、「伝道者、未詳」と記される。

28－35　鵜野市太郎（うの　いちたろう＊　一八六四－一八九七）
神奈川県出身。一八九三（明治二六）年神学部別科に入学。『神学部一覧　明治二十八年』によると、別科を卒業後、伝道者として下総大森に赴任。その後、『福音新報』第九四号（一八九七年四月一六日）によると、肺病を患

い入院、横浜で療養していたが、一八九七年四月五日に死去。

28－36　福田錠二（ふくだ　じょうじ　生没年未詳）

牧師。栃木県出身。一八八四（明治一七）年宇都宮教会に於いて受洗後、上京し正教神学校に入学。翌年退学し、ナックス・フルベッキの両氏につき神学を修め、一八八六年米国に留学。サンフランシスコ大学・マコーミック神学院で学び、一八九一年帰国。以後牛込教会等で牧師を務め、伝道に尽力した。

28－37　高義駿・姜璟熙（こう　ぎしゅん＊・きょう　けいき＊　ともに生没年未詳）

一九八四（明治一七）年、朝鮮の甲午改革政府の外国留学方針意より慶応義塾に留学した朝鮮人日本留学生で、彼らで構成された親睦会（一八九五年四月創立）の「大朝鮮人日本留学生親睦会規則」付載「本会会員名簿」に二人の名が見える。当時二人は東京麹町区下六番町六番地にあった明治女学校に居住していた（『近代日本研究』三六慶應義塾福沢研究センター編、二〇一九年、三七二頁）。のちに高義駿は朝鮮総督府郡守となり、一九一八（大正七）年、当時の内閣総理大臣原敬より従六位に叙された（国立公文書館所蔵「叙位裁可書・大正七年・叙位巻二十三」）。なお、高義駿については、一八九四年来日し、大隈重信・押川方義等が組織した海外教育会の庇護のもと早稲田専門学校邦語政治科に七年学んだとする説もある（『現代漢城の風雲と名士』細井肇著、日韓書房、一九一〇年）。

28－38　一二三屋　→　一二三館か

一二三館は一八九五（明治二八）年当時、東京築地二丁目一五番地にあった書林。米国で刊行された田村直臣の *"The Japanese Bride."*（ハーパー・アンド・ブラザー社、一八九三年）の翻訳『日本の花嫁』を刊行するも発売禁止となった（『読売新聞』一八九三年一〇月一八日朝刊）。

28－39　「基督教と学術道徳」

『基督教と学術道徳』マルコルム・マッコル（マルコル・マッコール MacColl, Malcolm.）著、高橋五郎訳、三一神学校、一八九四年。

註　明治二八年

28－40　北郷氏の講義所　→　註28－7参照。

28－41　宮川巳作（みやがわ　みさく　一八七五－一九三二）
牧師。長野県出身。「神学部学籍簿」によると、一八九四（明治二七）年明治学院神学部予科に入る。一八九八年研究科を卒業後、一関・桐生・札幌独立教会・赤坂伝道学校・赤坂教会等を経て明治学院神学部および東京神学社の教授となる。一八九八年八月按手礼を受ける。以後、霊南坂教会・大連日本基督教会・大連中央教会・平城教会等で牧師を務めた。著書に『信徒保羅』・『加拉太書研究』・『保羅の生涯と其著書』等がある。宮川の死を悼んで編まれた小山寅之助編『追想』（一九三三年）には、好川二一（註28－16参照）も追悼文を寄せている。

28－42　井深氏の説教
「第一東京中会記録　自明治二十七年　至明治二十九年」の一八九五（明治二八）年四月二日開催の記録には「議長井深教師創世記第九章第五、六節ヲ題トシテ説教ス」とある。説教内容は「「井深梶之助口述録集」」（ID: 12016 10214）に題名を「汝殺ス勿レ」として残る。

28－43　肺黴（はいかび）症
肺に真菌（カビ）が感染した肺真菌症のこと。

28－44　石田平三郎　→　伊志田平三郎（いしだ　へいざぶろう＊　生没年未詳）
妻は、幸三の叔父にあたる里見富三郎（『資料集』第一六集、註26－9参照）の妹淑。『福音新報』第二〇六号（一八九五年二月二二日）所載の「千葉県九十九里教会通信」によると、一八九四（明治二七）年一二月に、伊志田は九十九里教会の長老の一人として新たに選出され、翌年一月一三日、その就任式が行われた。「第一東京中会記録自明治二十七年　至明治二十九年」に記される一八九五年四月二日開催の記録には、出席議員の一人として「九十九里教会　長老　伊志田平三郎君」と記されている。

28－45　馬場茂策（ばば　もさく＊　生没年未詳）
「神学部学籍簿」によると、一八九三（明治二六）年九月神学部本科に入学。

28－46　キニイネ ↓ キニーネ（蘭：kinine）またはキニン（英：quinine）
南米アンデス山地を原産とするキナという木の樹皮に含まれる成分で、解熱・鎮痛・強壮剤などに用いる。また、マラリアの治療薬として知られる。日本国内でキナの栽培に成功し、純国産のキニーネを製造するのは一九三四（昭和九）年のこと。

28－47　改正英訳の聖書 ↓ 改訂版聖書
一七世紀初頭から一九世後半まで「ジェイムズ王訳」（*King James Version.* または *Authorized Version.* 一六一一年）に代表される、国王の命令によって翻訳された欽定訳聖書が多く用いられた。一九世紀も終わる頃になって大幅な改訂作業がイギリスで行われ、一八八〇年に新約聖書が、一八八四年に旧約聖書が発行されて改訂版聖書（*Revised Version: RV*）と呼ばれた。欽定訳の誤訳や難解な表現などが大幅に修正されており、活用された。

28－48　十字架の日
イエス・キリストが十字架にかけられた日のこと。この三日後にイエス・キリストの復活を祝した復活祭（イースター）が行われる。『福音新報』第二一二号（一八九五年四月五日）の巻頭に「十字架の日」と題する記述がある。

28－49　長谷川裕（はせがわ　ゆたか　一八六七－一九二五）
伝道者。常陸笠間藩（現在の茨城県笠間市）の藩医の子として生まれる。一八八五（明治一八）年茨城県立医学校に入学。翌年フルベッキより受洗。東京一致神学校で学び、一八九一年数寄屋橋教会（現在の巣鴨教会）の伝道師となった。その後、牛込同胞教会牧師、福島教会（現在の福島新町教会）牧師等を歴任した。

28－50　石原先生 ↓ 石原保太郎 ↓ 解題註（21）参照。

28－51　築地三一教会 ↓ 東京聖三一教会
築地居留地の新校舎で学ぶ立教学校（立教学院）の学生および築地在住の信徒・求道者で構成された立教教会と、深川の聖三一教会（真光教会）から分かれた信徒によって、一八八九年に設立された聖公会の教会。同年一二月、聖三一大聖堂献堂式が行われた。初代牧師は名出保太郎。当時の聖堂は赤煉瓦造りで、東京教区設立まで北東京地方部大聖堂であった。

28－52　田中にてクラス全体の写真を取りたり　→『資料集』第一六集の〔口絵写真2〕参照。

28－53　松本又太郎　→　松本亦太郎（まつもと　またたろう　一八六五－一九四三）
心理学者。高崎藩士飯野翼・千代の次男として生まれる。のち松本勘十郎の養嗣子となる。一八九三（明治二六）年東京帝国大学卒業後、イェール大学・ライプツィヒ大学に留学。帰国後は東京高等師範学校・女子高等師範学校の教授を経て、京都帝国大学、東京帝国大学教授を歴任した。

28－54　原田助（はらだ　たすく　一八六三－一九四〇）
牧師、教育者。熊本藩士鎌田収の次男として熊本に生まれる。後に原田家を嗣ぐ。熊本洋学校・同志社英学校に学び、受洗して神学科に進む。一八八五（明治一八）年牧師となる。イェール大学に留学。一九〇七年同志社社長、のち総長に就任。一九二〇（大正九）年ハワイ大東洋学部長となる。

28－55　和田垣謙三（わだがき　けんぞう　一八六〇－一九一九）
経済学者。法学博士。文部省御用掛をへて、一八八六（明治一九）年帝国大学法科大学講師となる。四月二〇日条の「帝国大学青年会演説会」については、『福音新報』第二一五号（一八九五年四月二六日）に記述がある。

28－56　大鳥圭介氏の日清文明の比較
『福音新報』第二一五号（前掲）「帝国大学青年会演説会」の記述によると、四月二〇日条の演題は「日清教育の比較」とある。

28－57　板垣退助氏の「青年処世の法及国に対する本分」
板垣退助（いたがき　たいすけ　一八三七－一九一九）は、当時自由党総裁。『福音新報』第二一五号（前掲）「帝国大学青年会演説会」の記述によると、四月二〇日条の演題は「身を以て社会に対することに就ての意見、国を以て外国に対する事についての意見」とある。またこの日最後の登壇となった板垣を聴衆は万歳で歓迎したという。翌年、板垣は第二次伊藤博文内閣の内務大臣に就任した。

28－58　佐久間吉太郎　→『資料集』第一六集、註26－59参照。

28－59　河合亀輔（かわい　かめすけ　一八六七－一九三三）

牧師。山形県出身。一八八四（明治一七）年スコットランド一致長老教会宣教師T・リンゼーより受洗。翌年三田英学校本科を終え、青山学院に入学するも、明治学院普通学部に転じ、一八九〇年卒業。一八九二年教師試補となり渡米。ユニオン神学校・コロンビア大学に学ぶ。一八九五年当時は、当日記により赤坂教会において伝道者として働いていたことが知られるが、翌年一八九六年五月には、日本基督教会伝道局より台湾に派遣され、台北での講義所設立や台北教会創立等に尽力した。一八九七年按手礼を受ける。

28－60　教会歴史

『教会歴史』（上・下二巻、ウードブリヂ（Woodbridge, Samuel Merrill.）［著］、瀬川浅訳刊、一八八八年）のこと。なお訳者の瀬川浅（あさし）は、長崎でスタウトの元に学び、一八七三（明治六）年に受洗した。東京一致神学校で学び、九州各地を伝道するとともにスタウトを助け、一八八八年、スティル・アカデミー（のちの東山学院）の神学部長であったスタウトの帰国に伴い、後任に就任した。

28－61　大久保躑躅園

大久保の躑躅は、江戸時代、大久保百人町に住んだ鉄砲組百人隊の同心たちが副業で育て、有名になった。その後衰退するが、一八九五（明治二八）年の『風俗画報』によれば、「当地の中島友徳氏は東京府楠本知事の勧めもあって、須藤直久（万華園主人）・大竹国太郎・中村忠義の三氏に謀り、四氏が発起人となって各家から花樹を出してもらい、規則を定めて明治二十六年二月に大久保躑躅園を開設した。広さ七千坪余。四月の末になると近隣に飲食店が立ち並び、大小の幟りが翻り、客寄せの声が騒がしい活人形（作り人形）の遊観場もでき、喧騒の街となった」という。一九〇二年、日比谷公園が新設され、大久保躑躅の植木は日比谷公園に移植され、跡地は急速に住宅化していった。

28－62　津田仙（つだ　せん　一八三七－一九〇八）

農学者。下総国（現在の千葉県）佐倉藩士小島善右衛門良親の四男として生まれる。一八五一（嘉永四）年桜井家

の養子となり、江戸に出て蘭学・英学を学ぶ。一八六一（文久元）年津田初子と結婚し津田家の婿養子となる。外国奉行通弁となり、一八六七（慶應三）年、小野友五郎の随員として福沢諭吉らとともに渡米。一八七三（明治六）年、ウィーン万国博覧会に出席する日本政府派遣団の一人として渡欧。翌年、J・ソーパーより受洗。D・E・スクーンメーカーの女子小学校（青山女学院の前身）の創設に協力した。一八七五年に学農社、翌年学農社農学校を設立。『農業雑誌』や『北海道開拓雑誌』を発刊した。著書に『農事三事』がある。津田梅子は仙の次女。

28－63　新撰讃美歌

奥野昌綱・松山高吉・植村正久によって編まれた讃美歌集。歌詞のみの版が一八八八（明治二一）年、楽譜付き版が一八九〇年、ソルファー譜附きの版が一八九一年に出版された。

28－64　小林格　→　解題註（68）参照。

28－65　渡辺顕（わたなべ　けん＊　生没年未詳）

『神学部一覧　明治二十八年』によると、幸三の一学年下で当時本科第一年生。香川県出身。

28－66　朝顔日記

浄瑠璃「生写朝顔話（しょうつしあさがおばなし）」の通称。時代物。五段。山田案山子遺稿、翠松園主人校補。天保三（一八三二）年、大坂稲荷文楽芝居で初演。秋月の娘深雪（みゆき）と宮城阿曾次郎とのすれちがいを重ねる恋物語。

28－67　芝巴町　→　芝西久保巴町

西久保巴町は一八六九（明治二）年から一九七七（昭和五二）年にかけて、現在の港区虎ノ門三丁目にあった町名。一八七八年に芝区に所属し、芝西久保巴町となった。

28－68　みのゝ国竹か鼻　→　竹ケ鼻（たけがはな）

岐阜県羽栗郡に存在した町名で、現在の羽島市竹鼻町とその周辺。近世には美濃路の脇往還であった竹鼻街道・駒塚街道の中継地であり、商業の街として栄えた。また江戸時代後期からは美濃縞の生産の中心地であった。一八九〇（明治二二）年、竹ヶ鼻村が町制施行により竹ヶ鼻町になり、一九五四（昭和二九）年、合併により羽島市が発足しその一部となった。

28－69　基督信徒のなくさめ

『基督教徒のなぐさめ』（内村鑑三著、警醒社、一八九三年）のことか。

28－70　教理歴史

『教理歴史』（ヘンリー・シー・シェルドン（Sheldon, Henry Clay.）原著、松浦松胤訳、一八九二年。なお同書は一八九五年、メソヂスト出版舎からも刊行されている。

28－71　小石川区表町

小石川表町とも。小石川区は、一八七八（明治一一）年の郡区町村編制法により設置された区名。一九四七（昭和二二）年に本郷区と合併して文京区となった。表町は一八六九（明治二）年から一九六四（昭和三九）年にかけて見える町名。一八七八年、小石川区に所属。現在の東京都文京区小石川と春日の一部。

28－72　教会史講演

『教会史講演』デー・エス・スペンセル（Spencer, D. S.）著、富山三郎［訳］、美以出版舎、一八九二年。

28－73　加藤喜蔵　↓　加藤喜造（かとう　きぞう＊　生没年未詳）

「第一東京中会記録　自明治二十七年　至明治二十九年」に記される明治二八年一〇月一日横浜海岸教会堂開催の記録、および明治二九年四月七日東京台町教会開催の記録には、高田教会の長老として加藤喜造の名が見える。日記の六月一日条には「水産学校　加藤喜蔵」と見える。

28－74　慶応義塾に春期運動会

慶応義塾の運動会は、一八八六（明治一九）年六月に三田山上の運動場で催された遊戯会が最初とされ、当初は春・秋の年二回開催されていた。一八八九年からは年一回春の開催となり、一八九二年に体育会が創設されてからは種目にも改良が加えられ、内容も充実し、東京名物の一つと呼ばれるほどになった。『風俗画報』第九七号（一八九五年八月一〇日発行）には、当年の「春季慶応義塾大運動会」について、会場内に日清戦争での「戦利品たる支那の軍旗」が吊されていたことや、当日の競技内容等が挿図とともに掲載されている。日記に記された明治学院より若林・篠原がチャンピオンとして参加したのは、上記『風俗画報』の記述によると、第八六番目の種目「各学

校チャンピオンレース」であったと思われる。

28－75　甲越軍記

『甲越軍記』（初編～三編、速水春曉齋著画）は、川中島の戦いを題材にした江戸時代後期の軍記物。講談の題材としても取り上げられ、明治以降も『絵本甲越軍記』（春陽堂、一八八三年）、『明治新刻甲越軍記』（町田滝司編、金幸堂、一八八四年）、『校訂甲越軍記』（帝国文庫、第一九編、博文館編輯局校訂、博文館、一八九四年）などが数多く刊行された。

28－76　横川駅

現在の群馬県安中市松井田町横川にある信越本線の駅。一八八五（明治一八）年、官設鉄道により高崎駅と横川駅間が開通し開業した。

28－77　埴科郡森村

埴科（はにしな）郡は古代から信濃国に見られた郡名で、一八七九（明治一二）年に郡区町村編制法の施行により長野県の行政区画として発足した。森村は近世以来埴科郡にあった村で、現在の長野県千曲市大字森。

28－78　基督教会堂

長野県における聖公会の伝道は、カナダ聖公会のウォーラーによって始められた。ウォーラーは、一八九〇（明治二三）年に来日し、福島での伝道を経て一八九二年に長野に移り、長野町に伝道の拠点を置いた。しかしウォーラーが西長野に会堂（現在の日本聖公会長野聖救主教会）を建設したのは、一八九八年である。幸三が見たのは聖公会の教会堂ではなく、一八九二年にカナダ・メソジスト教会のダンロップが県町二二番戸（現在の長野市県町）に設立した日本メソジスト教会長野教会（現在の日本基督教団県町教会）であったと思われる。

28－79　日本基督教長野講義所　→　日本基督教会長野講義所

日本基督教会長野講義所は、一八九〇（明治二三）年に長野日本基督教会講義所として設立された。当初長門町（ながとまち）（現在の長野市長野長門町）にあったという（『長野市誌』第五巻、歴史編、近代一、長野市誌編さん委員会編、一九九七年）。『福音新報』第六号（一八九五年八月九日）に「（長野講義所は）去る五月津久井氏上諏訪に転任せられ

爾来無牧の姿なりしが、其後明治学院神学部より千磐武雄氏来り九月迄当地滞在の予定にて来長せられ、目下当地の為に働かる」とある。幸三が訪れた講義所は、この講義所であったと思われる。

28－80　モタイ　↓　茂田井

江戸期から明治前期まで佐久郡にあった村名。村内には中山道の望月宿と芦田宿間の宿場である茂田井宿があった。現在の長野県佐久市と北佐久郡立科町にまたがる地域。茂田井講義所については、註28－168を参照。

28－81　服部綾雄（はっとり　あやお　一八六三－一九一四）

牧師・教育者。静岡県出身。一〇歳の時に横浜に遊学、J・C・ヘボン家に書生として住み込み、ヘボン塾で英語を学ぶ。一八七五（明治八）年頃に宣教師H・ルーミスより受洗。一八八二年築地大学校を卒業。一八八六年明治学院の創設に際し、初代幹事となる。一方、一八八四年東京一致神学校を卒業し、一八八六年米国プリンストン神学校に入学、一八九二年帰国後、按手礼を受け、東京牛込教会の牧師となる。一八九四年同牧師を辞し、富山県立中学校、岡山県立岡山中学校などの校長を務めた。その間、服部は明治学院神学部理事員の会計の一人に名を連ねている（『神学部一覧　明治二十八年』）。一九〇八年衆議院議員（国民党）となる。一九一三（大正二年）カリフォルニア州で排日運動がおこった際、問題解決のため渡米したが、翌年四月一日サンフランシスコのホテルで脳溢血のため死去した。綱島佳吉著『排日問題と基督教徒』（警醒社書店、一九一六年）所収の「服部綾雄君を懐ふ」には、服部の性行が詳しく記されており、「柔和な性格」・「表裏なき善良な人物」・「善良なる基督教徒」などとその人柄が評されている。石本三十郎は妹婿。

28－82　横浜の稲垣先生　↓　稲垣信（いながき　あきら　一八四八－一九二六）

牧師。江戸の上田藩邸で生まれた。一六歳で藩主松平忠礼の近習となり、藩校明倫堂で学ぶ。一八六八（明治元）年には長崎に留学、のち慶応義塾でも学んだ。長崎滞在中にキリスト教に触れ、上田に戻ってからは自宅を開放して聖書研究会・祈祷会を開き、上田禁酒会を組織して禁酒運動と伝道活動に励んだ。一八七六年横浜の日本基督公会（現在の日本キリスト教会横浜海岸教会）で、宣教師J・H・バラから洗礼を受け、E・R・ミラーとブラウン塾の塾生真木重遠と共に上田で伝道を始め、上田基督公会（現在の日本キリスト教会上田教会）を創立した。一八

七七年、横浜海岸教会に招聘されて会計係に、その後長老に就任する。翌年には植村正久・井深梶之助らと共に牧師就任の按手を受けた。一八九三年より五年間、巡回伝道に従事したが、一八九八年巡回伝道を引退し、再び横浜海岸教会の牧師になる。のち麹町教会・三島教会を牧した。

28－83　金谷山（かなやさん）

金谷山は、新潟県上越市の旧高田市街地西南部近くにある山で、標高は一四五メートル。金谷山スキー場があり、一九一一（明治四四）年にオーストリア＝ハンガリー帝国の軍人、レルヒ少佐が日本初となるスキー講習を行ったことから、「日本スキーの発祥地」としても知られる。

28－84　大谷虞　→『資料集』第一六集、註27－27参照。

28－85　女学校　→　高田女学校　→　解題註（56）参照。

28－86　安田いは　→　安田磐子（やすだ　いわこ　一八七一－一八九五）

熊本県出身。旧熊本藩士安田退三（註28－147参照）の次女。愛知県北設楽郡長であった父と共に名古屋で生活し、愛知県師範学校附属女子部に入学するが、女子部の廃止により退学。一八八七（明治二〇）年に桜井女学校に入学。一八八八年牛込教会にて牧師服部章蔵より受洗。一八九三年六月高等科を卒業し、高田女学校に英語教師として赴任。高田では女学校の教師のほか、高田教会の奏楽者、日曜学校の教師として奉仕した。一八九五年七月に郷里熊本へ帰るが、ほどなくマラリアに罹り同年八月に急逝。翌年追悼集『阿蘇のけぶり』（註28－195参照）が刊行された。磐子の追悼会は高田女学校講堂で行われ、校長白石行信（註28－87参照）は弔詞の中で「此処に基督の道を伝えたるは、嬢を以て嚆矢とす」と述べている。

28－87　白石行信（しらいし　ゆきのぶ　生没年未詳）

『福音週報』第七号（一八九〇年四月二五日）「越後高田一致教会通信」の項には、一八九〇（明治二三）年四月一三日に高田一致教会の設立式が開催され、その際長老に白石行信と大須賀五郎の二名が選ばれたとある。高田女学校創設後は森山信一らの後任として校長を務め、一八九五年九月三日に行われた安田磐子（註28－86参照）の追悼会では司会を務めた。

28－88　森山信一（もりやま　しんいち　一八四四－没年未詳）
もと高田藩士。旧名は登志雄。自由党院。一八八三（明治一六）年、新潟県高田（現在の上越市）の自由党員が政府高官暗殺計画を口実に弾劾された高田事件で、逮捕・処罰された一人。出獄後教会に携わり、一八八八年、ミッションスクールである高田女学校（解題註（56）参照）を設立、のちに校長に就任した。

28－89　衣のライ病云々
旧約聖書の『レビ記』一三章四七節「また衣服にらい病の患部が生じた時は」の部分。聖書では、「皮膚に傷を受ける」ということが重要な主題になっており、皮膚の疾病を、幸三が用いたと思われる『新約全書』（［聖書翻訳委員会］、一八八〇年）では「らい」、『新改訳聖書』第三版（日本聖書刊行会編、二〇〇三年）は「ツァラアト」、『新共同訳聖書』（日本聖書協会、一九八七年）では「重い皮膚病」と訳している。

28－90　近藤　→　近藤虎馬（こんどう　とらま＊　生没年未詳）
知命堂病院の薬剤師。森川政一著『知命堂病院百十年史』（知命堂病院発行、一九八二年）二八頁によると、岡山医学校薬学科を卒業後、一八九二（明治二四）年知命堂病院の初代薬局長となり、のちに事務長兼薬局長となった。また、一九〇三年四月より高田師範学校の化学教授嘱託となり、一五年以上勤めた。一九一三年知命堂病院の事務長専任となり、一九二八（昭和二）年まで勤務した。『基督教新聞』第六一〇号（一八九五年四月五日）の記事からは、一八九五年当時、知命堂病院に勤務するキリスト教信徒の主軸として、大関和（註28－94参照）とともに近藤が大きな役割を果たしていたことがうかがえる（註28－91参照）。

28－91　知命堂病院
一八七一（明治四）年、現在の新潟県上越市西城町に瀬尾玄弘が「知命堂」の名称で医院を開業したのに始まり、現在に至る。『基督教新聞』第六一〇号（一八九五年四月五日）所載の「越後高田通信」には、当院について次のように記す。「当地にて有名なる知命堂病院には信徒として薬剤師近藤虎馬、看護婦長大関ちかの兄姉あり、共に同院に重く信用せらるゝ為め神の導は此病院に向ひ伸ばされ、薬剤師・看護婦等の為め毎月二回の定期集会を催し、国沢君は常に道を伝へられ為めに目下十二名の熱心なる求道者を出すに至りたり、日曜日夜の説教は信徒求道

者の外、敢て聴くものなかりしが二月よりは毎時新らしき来聴者一二名づゝ現れ、或る時には二十五名の者熱心にきゝたることあり、是迄耶蘇の説教として冷遇せられつゝありし、此集りに斯く活気を帯ぶるに至りしは主恩の益々此地に現はるゝ機期なるべしと一同感謝する所なり」。

28－92　独立女学校　→　女子独立学校　→　解題註（64）参照。

28－93　女子学院

女子学院は、一八七〇（明治三）年築地に設立されたA六番女学校（後に原女学校→新栄女学校）、一八七三年設立のB六番女学校（後に新栄女学校）、一八七六年設立の桜井女学校（解題註（55）参照）が統合・改称し、一八九〇年に女子学院として発足した。

28－94　大関和（おおぜき　ちか　一八五八－一九三二）

下野国黒羽村（現在の栃木県大田原市）に生まれ、維新後東京に移る。渡辺家に嫁ぐが、のち二児を連れて離婚し、植村正久の教える正美英学塾に学び、一八八七年に受洗。その前年年桜井女学校附属看護婦養成所に入り、一八八八年に看護婦の資格を取得し、近代教育を受けた初の看護婦となる。帝国大学附属病院外科看護婦取締を二年務め、新潟の高田女学校舎監兼伝道師を経て、一八九四年、高田の知命堂病院産婆看護婦養成所に勤務。東京に戻り一八九六年に東京看護婦会講習所責任者、一九〇一年同会会頭となった。

28－95　矢島ふじ　→　矢島ふじ子（やじま　ふじこ＊　一八七〇－一八九五）

『基督教新聞』第六二二号（一八九五年六月二八日）所載の「越後高田教況」には、ふじ子の生前の様子と死去に至るまでの経緯ついて次のように伝えている。「知命堂病院看護婦たりし矢島ふじ子は、春来熱心に求道せられ居りしが、本月第一水曜日の祈り会には衆に先んじて参集せられ尤も熱心静平なる挙動を表して一同と退散せられしが、翌々日急性腹膜炎に罹り再び起つべからざるを知らるゝや、白石君を枕頭に招きて過去の悔改を為し且つ天父の手中に静かに帰せん云々と、至って確立せる信仰の表白を為されしが、遂に十一日午後八時半二十四歳てふ花の顔は此世に幻を止めて永眠せられたれば、翌十二日会堂に於て葬送の式を行へり」

28－96　赤井トラ（あかい　とら　生没年未詳）

詳細は不明であるが、『基督教新聞』第六四五号（一八九五年一二月六日）「越後高田通信」には「日曜学校に出席する生徒は十名内外にて教員には白石喜之助君・同夫人・栗本スク姉・赤井トラ姉尽力せらる」とあり、高田教会の日曜学校で教師の一人を務めていたことが分かる。

28－97　仏教の学校　→　高陽女学校　→　解題註（61）参照。

28－98　薩摩下駄

台・歯ともに一つの木材から刳って作る駒下駄に似た形で、台の幅が広く、白い太めの緒をすげた男性用の下駄。多く杉材で作る。芋下駄（薯下駄）とも。薩摩下駄について、明治学院普通学部を一九〇二（明治三五）年に卒業した生方敏郎は著書『明治・大正見聞史』（春秋社、一九二六年）所収「明治時代の学生生活・二」の中で「下駄は皆一様に書生とあるからには薩摩下駄を穿いていた。これを薯下駄とも云って女の穿くポックリに似て余り穿きいいものではなかった」と記している。

28－99　講義所

「明治廿八年九月　日本基督教会第一東京中会記録」所収の「自明治廿八年二月至明治廿八年八月　第一東京中会統計表」の講義所の項には、中会が直轄する二一箇所の講義所が記されているが、直江津の講義所は記されていない。『福音新報』第四号（一八九五年七月二〇日）所収「越後高田通信」には、「白石、山田両氏は相変らず熱心に尽力せられ、直江津講義所、春日町講義所には毎月二回づゝ、各出張従事せらる」とあることから、直江津には、集会を開催することの出来る家屋ないし部屋があり、講義所の役割を果たしていたものと思われる。

28－100　早川友三（はやかわ　ゆうぞう＊　一八七〇－没年未詳）

広島県出身。「神学部学籍簿」によると、一八九四（明治二七）年明治学院神学部予科に入学、一八九八年神学部本科を卒業。『神学部一覧　明治三十一年』によると、卒業後、伝道者として東京麹町教会に赴任。『日本基督教会年鑑　大正七年』（日本基督教会大会事務局、一九一八年）には新舞鶴伝道教会の教師として名が見える。一八九九年に按手礼を受けた。

註　明治二八年

28－101　旧城跡

徳川家康の六男、松平忠輝の居城として、一七世紀初頭、高田平野の菩提ヶ原に築かれた高田城の城址。一八七〇（明治三）年に本丸御殿、三重櫓などを焼失。焼失を免れた建造物も一八七三年には廃城令によって取り壊された。三重櫓が焼失して以降、城郭は土塁と堀が残るのみであったが、一九九三（平成五）年に三重櫓が再建された。現在の上越市本城（もとしろ）町にある。

28－102　植村氏の北堂　→　植村テイ（うえむら　てい　一八四〇－一八八八）

植村正久の伝記『植村正久伝』（青芳勝久著、教文館、一九三五年）によると、植村の父植村祷十郎（とうじゅうろう）は、一五〇〇石取りの旗本で、上総国山辺郡武射田村（現在の千葉県東金市）に領地を持っていた。母のテイは、武射田村の医師中村氏の娘で、祷十郎と結婚し、一八五七（安政四）年に正久を、次いで二人の男子をもうけた。維新後、武射田村に帰農したが、正久に横浜で洋楽を学ばせるなど、正久を支えた。正久が受洗した五年後、父母も受洗している。大関和は、正久が牧する下谷一致教会でテイに会い影響を受けたという。

28－103　聖書にも「曹爾年若きを以て人にあなとらるゝ勿れ」とあり

新約聖書『テモテへの前の書』四章一二節「なんぢ年若きをもて人に軽んぜらるな」に拠る。

28－104　春日町講義所

一八八九（明治二二）年、町村制施行に伴い旧高田城下の町人町四七町ほかが合併し高田町が発足したが、春日町は町人町の高田横春日町（現在の上越市南本町）と高田竪春日町（同上越市本町）のこと。直江津の講義所（註28－99参照）同様「自明治廿八年二月至明治廿八年八月　第一東京中会統計表」の講義所の項には、春日町の講義所に相当する講義所の記載はないが、『福音新報』第四号（前掲書）には「春日町講義所」とあることから、直江津の講義所同様、集会を開催することの出来る家屋ないし部屋があり、講義所の役割を果たしていたものと思われる。日記の六月一一日条より春日町の講義所は、一八九五年に長野国彦の斡旋により設けられたことが分かる。

28－105　五分一（ごぶいち）

一八六九（明治元）年に江戸屋敷・奥州釜子陣屋から引き揚げてきた藩士のために、高田城下の武家屋敷跡に設け

られた町。一八八九年新潟県中頸城郡高城村の一部となり、一九〇八年高城村が高田町と合併、一九一一年に高田市の一部となる。現在の上越市栄町・幸町・東本町付近。

28－106　関町

現在の上越市南本町二丁目付近。この町は、高田宿を構成する一町で、伝役馬を負担した。

28－107　ベースボールマッチ

当日の試合についての記録は未見。『慶応義塾野球部史』（慶応義塾体育会野球部史編纂委員会編　一九六〇年）によると、翌日の一八九五（明治二八）年六月二二日には、慶応義塾野球部が「明治学院と連合して、一高に押寄せ、明学の下村投手となり、義塾の石川七回から代って投手となり奮斗（ママ）したが、一高強く十二対一で、連合軍は九回一点を入れ辛くも零敗をまぬがれた」とある。また『第一高等学校野球部記録』（第一高等学校野球部編刊　一九九九年）には、二二日の明治学院・慶応義塾連合チーム対一高の試合は、青山英和学校の球場で行われたとある。

28－108　第一高等中学

現在の東京大学教養学部および、千葉大学医学部、同薬学部の前身となった旧制高等学校で、旧制一高とも呼ばれる。一八八九（明治二二）年、かつて水戸藩主徳川家中屋敷であった本郷区向ヶ岡弥生町二番地（現在の東京大学農学部キャンパス）に新校舎を建設し、神田一ツ橋から移転した。同校は、一九三五（昭和一〇）年、駒場の東京大学農学部と敷地を交換し本郷から駒場へと移転し、一九四九年に東京大学教養部へと改組された。

28－109　本郷向ヶ丘の運動場

第一高等学校が本郷にあった時代の校内運動場。現在の東京大学農学部キャンパスの野球場付近に陸上競技場、現在の生命科学総合研究棟付近にグランドがあったが（『第一高等学校六十年史』（第一高等学校編刊、一九三九年）所収「第一高等学校平面略図　大正十二年震災直前」参照）、野球が行われたのはこのグランドであろう。

28－110　新島善直（にいじま　よしなお　一八七一－一九四三）

幕府直参の新島善之の長男として東京小石川に生まれる。中村正直の同人社に学び、一八八八（明治二一）年駒場の農科大学予科に入学。林学を専攻。翌年、赤坂日本基督教会でワデル・Hより受洗。大学卒業後も助手として大

学に残るが、一八九九年札幌農学校の教授となる。のちに東北帝国大学農科大学林学科の初代教授、北星女学校校長などを務めた。また、林学者として造林、森林害虫防除に貢献した。

28－111　**歯科医江川**

『日本杏林要覧』（日本杏林社編　一九〇九年）によると、新潟県郡部の項に高田の歯科医江川として次の記載がある。「江川鈴弥　【試験廿年十月】新潟士族、元治元年生●中頸城郡高田町上小七九△四五」とある。上小は高田町上小町（かみごまち）（現在の上越市本町四丁目付近）、△四五は電話番号の意。

28－112　**パノラマ**

パノラマとは、半円形の背景を描いた画面の前に、草木や人形など立体的な模型をおき、照明の効果によって観賞者に広い景色を見ているような感じを与える装置のこと。パノラマを設置して、料金を取って客にそれを見せる館をパノラマ館という。日本最初のパノラマ館は明治二三年（一八九〇）五月七日開場の上野パノラマ館。

28－113　**大森**　→　大森隆碩　→　解題註（54）参照。

28－114　**メソデスト講義所**

一八九六年、上越地方におけるメソジストの伝道地は高田・新井・直江津・糸魚川の四ヶ所、講義所は高田・稲田（現在の上越市稲田）の二ヶ所であった。

28－115　**阿蘇郡宮地**（みやじ）

熊本県阿蘇郡にあった村。一九〇一（明治三四）年、町制施行により宮地町となり、一九五四（昭和二九）年、坂梨村等と合併して一の宮町となる。現在の阿蘇市一の宮町宮地。

28－116　**高田町祇園祭**

直江津の八坂神社で平安時代より行われてきたと伝えられている夏祭り。江戸時代初頭、松平忠輝が直江津にあった福島城を廃城し高田城へ移る際、直江津中の寺社仏閣が高田城下へ移される中、八坂神社だけは直江津に残された。その代わりに祇園祭の際は神輿を高田まで出張させるようになったと伝えられており、江戸時代以来、直江津と高田の両地区で行われた。一九七一（昭和四六）年に高田市と直江津市が合併し上越市になった際、「上越まつ

り」と改称した。

28－117　菅原村

かつて新潟県中頸城郡にあった村。一八八九（明治二二）年の町村制施行に伴い中頸城郡菅原村など一三ヶ村が合併し菅原村となり、一九五五（昭和三〇）年、中頸城郡櫛池村と合併し清里村となった。現在の上越市清里区菅原付近。

28－118　電信郵便学校　→　東京郵便電信学校

一八七一（明治四）年に工部省が電信技術者養成のため設置した修技教場に淵源を持つ。一八七三年には、授業料等を無償化する一方で日給を支給し、かわりに入学から五年間の奉職を義務年限とした。改称・改組を重ね、一八九〇年に東京郵便電信学校が設置された。同校は芝公園にあり、甲科・乙科を置き、中学校三年終了程度は乙科に、中学校卒業者は甲科に無試験入学可能とし、部外者の入学も可能であった。のちの逓信官吏練習所。

28－119　ルツのナホミに於るか如き

ルツは『ルツ記』のこと。『ルツ記』は旧約聖書の一つで、モアブ人女性ルツの物語。ユダのベツレヘム出身者であるエリメレクは、妻のナオミと二人の息子を伴ってモアブの地に移り住む。二人の息子はその地で結婚するが、エリメレクはナオミを、二人の息子達もそれぞれの妻オルパとルツを残したまま死んでしまう。そこでナオミは夫の故郷ユダに帰ることを決意し、息子達の寡婦となった二人に対し、それぞれの故郷に帰るよう勧める。しかしルツはナオミのそばにいることを望み、二人はエリメレクの故郷、ベツレヘムへと帰郷した。ナオミは姑、ルツは息子の嫁であることから、幸三は森山氏の妻と新婦の関係をナオミとルツに例えたものと思われる。

28－120　「怠の糧を食はざる」

新約聖書『テサロニケの信徒への手紙二』三章一〇節「働こうとしない者は、食べることもしてはならない」（口語訳聖書）によるものと思われる。

28－121　新職人町

江戸時代は、高田城下の町人町の一つ。一八八九（明治二二）年の町村制施行により高田町の一部となり、一九一

一年までは高田新職人町。一九一一年からは高田市の一部。現在の上越市大町五丁目付近。

28－122　愛の風

高田平野の西縁部の標高三〇メートルから六〇メートルの台地に分布する愛の風段丘を構成する地層のこと。愛の風面とも呼ばれる丘陵地帯。また上越地方の方言で、春から夏にかけて、日本海沿岸で吹く、北ないし北東の穏やかな風、あるいはそのような風の吹く所のこともいう。

28－123　春日山

上越市西部の丘陵にある山で、山名は奈良の春日大社を分霊勧進したことに由来する。上杉謙信の居城として有名な中世の山城、春日山城がここに置かれた。頂上からは、かつての越後府中（直江津）の町々や周辺の山々、日本海を望むことができる。

28－124　底なし井戸

春日山城本丸の西方下部にある大井戸。

28－125　春日神社

春日山の東麓に位置する神社。九五八（天徳二）年奈良春日大社の分霊を祀り、春日山山頂に創建された。春日山城築城の際（註28－123参照）に現在地に移転。

28－126　下小町（しもこまち）

町名は福島城下にあった小町を継承し、高田城下に移転後は上小町・中小町・下小町に分かれ、小町三町と呼ばれ、問屋が集住した。一八八九（明治二二）年の町村制施行により高田町の一部となり、一九一一年までは高田下小町。一九一一年からは高田市の一部。現在の上越市本町六丁目付近。

28－127　仏教管見

『仏教管見』田中達著、メソヂスト出版舎、一八九五年。

28－128　東頸城郡川上村切光

東頸城郡川上村は、一八八九（明治二二）年の町村制施行に伴い同郡の高谷・切光・今清水・泉の四村が合併し発

足した。一九〇一年に東頸城郡の里見村・川上村・川辺村が合併し牧村となった。同村は、二〇〇五（平成一七）年に上越市に編入され、村域は上越市牧区となった。

28－129　メリケン姉　→　ミリケン（Milliken, Elizabeth Patton. 一八六〇－一九五一）
アメリカ長老教会婦人宣教師。フロリダ州に生まれる。一八八四（明治一七）年宣教師として、トゥルー（註28－131参照）と来日。同年、桜井女学校（解題註（55）参照）内に幼稚保育科を設置した。一八九一年九月、高田女学校（解題註（56）参照）の英語教師として赴任。一八九七年同校廃校後は桜井女学校の後身である女子学院に復帰。在職四〇年の後、一九二四（大正一三）年に帰国した。

28－130　松尾教会
松尾村（現在の千葉県山武市松尾町）の九十九里教会のこと。

28－131　つるう姉　→　トゥルー（True, Maria Thursey Pitcher. 一八四〇－一八九六）
アメリカ長老教会婦人宣教師。ニューヨーク州に生まれる。アルバート・トゥルー牧師と結婚したが一八七一（明治四）年に夫が病死。一八七三年に伝道のため中国に渡り、翌年一一月来日した。一八七六年アメリカ長老教会の宣教師に任命されたが、一八九二年宣教師を辞任し翌年帰米。一八八四年再来日し、東京の原女学校・新栄女学校・桜井女学校・独立女学校などで教鞭を執り、女子教育の発展および女子学院の創立に大きく貢献した。また女性のための療養施設として衛生園を設立した。

28－132　森山ヤス（もりやま　やす　生没年未詳）
森山信一（註28－88参照）の妻。『基督教新聞』第六三三号（一八九五年九月一三日）所載の「越後高田近況及安田磐子の追悼会」によると、八月八日に開かれた高田教会の年会において「女執事」に当選、承諾されている。

28－133　須藤鬼一（すどう　きいち　生没年未詳）
一八九三（明治二六）年、北海キリスト教伝道義会の依頼を受け伝道師として旭川に赴任し、一条通に旭川基督所（のちの旭川六条教会）を設けて布教。著書に『詩文幼学便覧：作例插画』がある。

28－134　高城村小学校（たかぎむら）　→　高城尋常小学校

高城村は一八八九（明治二二）年、町村制施行に伴い高田外馬塚町・馬塚町などを合併し創設された。高城尋常小学校は、高城村に一八九二年創設された小学校である。なお高城村は、一九〇八年に中頸城郡高田町と合併し消滅し、現在は上越市の一部となっている。

28－135　寺町の善福寺

寺町は、高田城下の西端に南北に位置した寺院街区。旧春日山城下・旧福島城下・直江津などから移転した寺院が多い。現在の上越市寺町一丁目から三丁目。善福寺は浄土真宗浄興寺派の寺院。創建の時期は不明であるが、一五九八（慶長三）年に福島城下の善光寺町に再興されたと伝えられている。一六三六（寛永一三）年に親鸞ゆかりの寺院で新潟県最大の本堂をもつ浄興寺の塔頭となり、現在の場所には、一六六五（寛文五）年の地震後に浄興寺とともに移転した。

28－136　撃剣（げきけん）

刀剣・木刀・竹刀で相手をうち、自分を守る武術・剣術。明治初期には、剣術の試合を見世物として行う撃剣興行が流行した。

28－137　詩篇の鹿の谷川を慕う所

旧約聖書の『詩篇』四二章一節の「神よ、鹿が谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐ」（口語訳聖書）のこと。この一節はそのまま賛美歌（リビング・プレイズ六九番「鹿のように」）となり、親しまれている。

28－138　中吉川村

一八八九（明治二二）年に山口村等が合併して成立した中頸城郡北東部の村名。一九〇一年に中頸城郡上吉川村の一部・中吉川村・大出口村が合併し吉川村が発足、その後源村などを合併し吉川町となった。二〇〇五（平成一七）年、上越市に編入され、町域は地域自治区吉川区となる。

28－139　柿崎町

柿崎は、鎌倉期に越後国頸城郡佐見荘に見える地名。江戸時代から一八八九（明治二二）年までは頸城郡に属し柿

崎村と呼ばれ、同年町村制施行に伴い、中頸城郡柿崎村となる。周辺の村々を二度にわたり合併し、一九五五（昭和三〇）年には下黒川村等と合併し柿崎町となる。二〇〇五（平成一七）年、上越市に編入され、町域は地域自治区柿崎区となる。

28－140　関河 → 関川

長野県および新潟県を流れ日本海に注ぐ一級河川。新潟県妙高市の焼山を源流にし、妙高山南麓を流れた後、高田平野を潤し、上越市直江津で日本海に注ぐ。

28－141　近世進化新論

『近世進化新論』ジョン・フィスク（Fiske, Joh.）著、杉浦義道訳、池田栄進館、一八九三年。

28－142　殖民協会

松方内閣の外務大臣を辞した榎本武揚の呼びかけによって一八九三（明治二六）年に創立されたアジア・南洋研究団体。海権の航路を拡張し、移住殖民の業を盛んにし、商権の拡張を目的とすること及び、メキシコに植民地を建設することを趣意書に掲げて発足した。

28－143　「高山彦九郎」

『高山彦九郎』（波多野承五郎著刊、一八九三年）のことか。「二榎日記」の四月三〇日条に、波多野承五郎が著した高山彦九郎の伝についての記述がある（『資料集』第一六集、八六頁）。ほかにも当時刊行されていた高山彦九郎関係書籍には、『高山彦九郎』（少年文学、第二九編、村上浪六著、博文館、一八九四年）などがある。

28－144　路加伝十六章の「不義なる番頭」

新約聖書『ルカによる福音書』一六章一節から一三節にある「不正な管理人」の部分。

28－145　詩篇五十一の「くだけたる心」

旧約聖書『詩篇』五一章一七節の「神のもとめたまふ祭物（そなへもの）はくだけたる霊魂（たましひ）なり、神よなんぢは碎（くだ）けたる悔（くい）しこゝろを貌（かろ）しめたまふまじ」（文語訳聖書）の部分。

28－146　和田嶺　↓　和田峠

和田峠は中山道（中仙道）にある峠で、長野県小県郡長和町と諏訪郡下諏訪町の間にある。近世の中山道は六十九次で、上州から碓氷峠を超え信濃の軽井沢宿に入り、木曽の馬込宿を出て美濃に入る。その間二十六次、各宿の間はおよそ一・二里だが、和田宿と下諏訪宿の間は五里以上あり、街道のなかで最長である。両宿の間には小県郡と諏訪郡を分ける和田峠があり、街道一の難所といわれた。

28－147　安田退三（やすだ　たいぞう＊　生没年未詳）

安田磐子（註28－86参照）の父。『玉名市史』通史編　下巻（玉名市立歴史博物館こころピア編、玉名市、二〇〇五年）によると、もとの名は源之丞であったが、通称に官名国名を用いてはならないという政府の布告に基づき退三と改名。一八七三（明治六）年白川県と八代県の合併が行われた際、新白川県の熊本市街における第一大区長に任命された。のちに名古屋にうつり愛知県北設楽郡長となる。

28－148　米山

柏崎市と上越市との境にある山。標高九九三メートルの独立峰で、日本三百名山の一つに選ばれている。

28－149　鷹見爽鳩（たかみ　そうきゅう＊　生没年未詳）

詳細は不明であるが、『福音新報』第一一号（一八九五年九月一三日）には、高田で九月三日に開催された安田磐子（註28－86参照）の追悼式に参加し、弔辞を述べたとの記述がある。また『阿蘇のけぶり』（註28－195参照）には、「雑録　越の花かたみをよみて」という文章を寄せている。なお日記および『阿蘇のけぶり』では名を鷹見爽鳩と記し、『福音新報』では「鷹見夾鳩」と記している。

28－150　駿台雑話

『駿台雑話』は、江戸時代中期の朱子学者である室鳩巣が著した随筆集で一七三二（享保一七）年に成立。一七五〇（寛延三）年刊。全五巻。明治期には一八九四（明治二七）年に尚栄堂・尚古堂から刊行されている。また明治期から一九四五（昭和二〇）年頃にかけて、本書の注釈書・抜粋本が一〇種以上刊行された。

28－151　「基督のすがた」
『基督のすがた』基督教叢書、第五巻、前後篇、ゼームス・スタウカル（Stalker, James.）原著、植村正久・田中達合訳、南海堂、一八九一年、原書名は*Imago Christi: The example of Jesus Christ.*。

28－152　「基督教と社会」
『基督教ト社会トノ関係』（岩田徳義著、東京聖教書類会社、一八八八年）のことか。

28－153　関川
近世五街道の一つである北国街道は、中山道追分宿から分岐し越後高田城下、さらに佐渡まで通じた街道であったが、関川は北国街道にあった関所の一つで、現在の新潟県妙高市の一部。

28－154　新井
北国街道の宿場町の一つ。また同宿と信州の飯山とを結ぶ飯山街道の起点でもあり、交通の要所として発展した。現在の新潟県妙高市の一部。

28－155　宝丹
一八六二（文久二）年、江戸池の端の守田治兵衛店が売り出した粉末の気付け薬。頭痛・はきけ・めまいなどに用いる。

28－156　関山
北国街道の宿場の一つで、現在の新潟県妙高市の一部。信越本線の関山駅があった。

28－157　田口　↓　田切（たぎり）
北国街道の宿場の一つで、現在の新潟県妙高市の一部。

28－158　長野日本基督教講義所　↓　日本基督教会長野講義所　↓　註28－79参照。

28－159　牟礼
長野県上水内（かみみのち）郡にあった村で、現在の同郡飯綱町の一部。

28－160　象山　↓　佐久間象山（一八一一－一八六四）

江戸時代後期の信州松代藩士で兵学者・思想家。松代藩士の長男として信濃国埴科郡松代字浦町（現在の長野県長野市松代町）で生まれた。江戸で儒学・兵学を学び、砲術・兵学を教えた。一八五四（嘉永七）年、吉田松陰の密航に連座し八年間蟄居。一八六四（元治元）年、京都で攘夷派の浪士に暗殺された。

28－161　朝日温泉

善光寺から一八町、長野町大字茂菅（現在の長野市茂菅）の裾花川沿いにあった温泉場。

28－162　大石築城　↓　大石城築（おおいし〔　〕生没年未詳）

資料により名前を「築城」とするものと、「城築」とするものがある。『千葉教会宣教一〇〇年史』（千葉教会宣教一〇〇年編集委員会編、日本キリスト教団千葉教会、一九八一年）の教会年表の項に、明治二七年より同二九年一二月まで大石築城が同教会で教師を務めたとある。『神学部一覧　明治二十八年』の「明治二十七年卒業」の項には「伝道者、千葉　大石城築」とあり、また「明治廿八年四月　日本基督教会第一東京中会記録」にも「定住伝道者大石城築君報告」として「千葉県千葉町伝道ノ景況」と題する記事が掲載されている。

28－163　たんばしまばし　↓　丹波島橋

長野県長野市の犀川に架かる橋梁。江戸時代は、犀川の渡し（丹波島の渡し）が置かれ、渡しの南（現在の丹波島一丁目付近）に丹波島宿が設けられており、北国街道の要所の一つであった。一八九〇（明治二三）年に丹波島宿有志による丹波島架橋会社により、有料の木橋が架けられた。一八九七年に県に移管され、無料化された。

28－164　中津村

長野県北佐久郡にあった村。江戸時代には中山道の宿場町（塩名田宿（しおなだしゅく））があった。昭和の大合併で消滅。現在の佐久市塩名田・御馬寄付近。

28－165　村上義清の墓

村上義清（一五〇一－一五七三）は、戦国時代の武将で北信濃の戦国大名。信濃国埴科郡葛尾城主で、武田晴信（のちの信玄）の侵攻を二度撃退した。家督相続時には信濃国の東部から北部を支配下に収め、村上氏の最盛期に

当主となった。一五七三（元亀四）年に病死し、自らが建立した日滝寺（現存せず）に葬られたというが、その墓所については諸説ある。長野県埴科郡坂城町の出浦家墓所中には後年分骨されたという墓所が残っており、幸三が参墓したのは、ここであったと思われる。

28－166　立川雲平（たつかわ　うんぺい　一八五七－一九三六）

政治家・弁護士。淡路国三原郡立川瀬村（現在の兵庫県南あわじ市賀集立川瀬）で生まれ、洲本の藩校を経て徳島師範学校へ入学、後に明治法律学校（註28－215参照）へ入学した。代言人試験に合格し郷里で弁護士事務所を開業したが、後に長野県に居を移し、長野県会議員や衆議院議員を務めた。また任期中政府の社会主義弾圧を批判する活動を行い、佐久地方の自由民権運動を指導した。島崎藤村の『破壊』に登場する市村代議士のモデルといわれる。

28－167　金

小林格の妻の名を、日本基督教団桐生教会の『教会百年史』（解題註（68）参照）では、「幾武子」と記す。

28－168　茂田井講義所

北佐久郡本牧村茂田井にあった日本基督教会の講義所。『日本基督教会統計年鑑』（井深梶之助・星野光多編、警醒社、一九〇四年）の「教会及講義所　○東京中会」の項には、「川西講義所　長野県北佐久郡茂田井」とあることから、茂田井の講義所は、川西講義所のことと思われる。地名の茂田井については註28－80を参照のこと。

28－169　上田教会

稲垣信（註28－82参照）らが設立した上田日本基督公会（現在の日本基督教会上田教会）へは、一八七七（明治一〇）年に真木重遠が伝道師として招かれた。同年、日本基督一致教会が成立すると、上田教会もそこに加わった。一八七九年、真木は牧師の按手礼を受けたが、一八八〇年に辞任する。その後小林格（解題註（68）参照）が伝道師として就任、一八八四年に新会堂の献堂式を行い、一八八五年には小林が長老に就任して小諸・松本・飯田などへ伝道を進めた。一八九三年に波多野伝四郎牧師が赴任したが、一八九五年に金沢教会に転任し、再び小林が赴任した。幸三が訪れたのは、小林の二度目の赴任の時のことである。

28－170　ブロッコ姉　→メアリー・E・ブロコウ(Brokaw, Mary E. 一八六一－没年未詳)
アメリカ長老教会女性宣教師。一八八四（明治一七）年長崎に来日し、スティール・アカデミーの女子学校であるスタージェス・セミナリー（梅香崎女学校）の創設に尽力した。一八九〇年に横浜のフェリス・セミナリーに移り、一八九五年より一八九九年に帰国するまで上田での伝道活動を行った。

28－171　芦田（あしだ）
長野県北佐久郡にあった村名。江戸時代には中山道の宿場町である芦田宿があった。現在の北佐久郡立科町の一部。

28－172　長源寺
長野県飯田市箕瀬（みのせ）町にある日蓮宗の寺院。

28－173　碓氷峠の絶頂「ごんげん」の神社
北佐久郡軽井沢町峠町にある神社で、軽井沢から碓氷峠に向かう峠の頂上に近い場所にある。本宮社殿が県境にあるため、長野では「熊野皇大神社」、群馬では「熊野神社」と呼ばれているが、古くから「碓氷の権現様」と呼ばれている。力餅が名物。

28－174　坂本
江戸時代、中山道の宿場坂本宿のあった地。現在の群馬県安中市松井田町坂本付近。長野県との県境に位置している。

28－175　小幡村
鎌倉時代から戦国時代まで豪族小幡氏の拠点として栄えた地で、現在の群馬県甘楽郡甘楽町小幡。

28－176　草間時福（くさま　ときよし　一八五三－一九三二）
教育者・政治家。京都の士族下田耕助（好文）の四男として生まれ、のち草間列五郎の養子となる。一八七〇（明治三）年東京に出て安井息軒・中村敬宇等に学び、一八七四年慶応義塾に入塾。翌年同塾を卒業後は愛媛県松山英学校（のちの松山中学校）長・松山北予中学校長を務め、西洋式教育の実践や自由主義教育の普及と教育に貢献し

た。その後、ジャーナリスト・民権運動家として活動したが、一八八四年官界に転身し、工部省准奏任御用掛・逓信省灯台局次長・同省郵便為替貯金管理所長等を歴任した。

28－177 **房州保田**

千葉県南部の安房郡鋸南（きょなん）町の一部。風光明媚な保田海岸へは明治時代に夏目漱石などが訪れ、房州海水浴発祥地といわれる。また小林一茶・徳富蘆花・若山牧水・獅子文六らが愛した土地でもあった。

28－178 **郁文館** ↓『資料集』第一六集、註27－39参照。

28－179 **天神坂上**

天神坂は、東京都港区高輪にある坂。港区白金一丁目の清正公前から桜田通りを横切り、南東方向に入る。

28－180 **四の角** ↓ 四ツ辻のことか

四ツ辻は、『新撰東京実地案内』に「西の久保より飯倉へ下る所の四通路なり、東は芝三内、西は青山、南は赤羽、北は西の久保へ通ずるの故を以て四ツ辻と号（なづ）く」とある。

28－181 **豊岡町** ↓ 三田豊岡町（みたとよおかちょう）

江戸時代以来の町名。一九六七（昭和四二）年に廃止された。現在の港区三田四丁目・五丁目付近。

28－182 **三の橋** ↓ 三之橋

港区を流れる唯一の川である古川は、玉川上水の余水を源流としており、一六七五（延宝三）年、麻布山付近に大名屋敷や寺社仏閣を造営するにあたり、江戸湊までの最後の一キロほどが運河として再整備された。新しく作られた運河は「新堀川」と名付けられ、一方、運河の終点である麻布十番から上流の川は「古くからある川」つまり「古川」と呼ばれるようになったといわれている。三の橋は、町の東と南の二方が新堀川に沿う新堀町（現在の南麻布二丁目付近）の中央から新堀川に架かる橋で、南麻布二丁目から三田五丁目に至る。

28－183 **臼田**

長野県中東部、南佐久郡にあった旧町名。現在は佐久市の一部。なお石原保太郎らによる佐久伝道については、『福音新報』第一一号（一八九五年九月一三日）の「日本基督教会伝道局運動　佐久第二期伝道　第一報」・『同』

第一二号（同年九月二〇日）の「信州佐久第二期運動　第一報（続）」に詳しい。

28－184　**トーマスボルクレー**　→　トーマス・バークレー（Barclay, Thomas. 一八四九－一九三五）
グラスゴーに生まれ、グラスゴー大学等で学んだ。イギリス長老伝道会より台湾に派遣され、台南神学院を設立し、教会ローマ字を用いて聖書の台湾語訳を完成させるなど、台湾伝道に生涯を捧げたことで知られている。

28－185　**柳沢**　→　永井直治、『資料集』第一六集、註26－15参照。

28－186　**青木**　→　青木仲英（あおき　ちゅうえい　一八五八－一九四三）
牧師。武蔵国岩槻藩家老の長男として江戸藩邸で生まれた。叔父の戸田忠厚の影響で基督教に接し、一八七五（明治八）年に受洗した。一八八二年に東京一致神学校を卒業し、按手礼を受け千葉の佐倉教会など全国各地の開拓伝道に尽力した。

28－187　**マキンチ姉**　→　フィンチ（Finch, Estera. 一八六九－一九二四）
アメリカの超教派婦人宣教師。日本名星野光代。一八九三（明治二六）年に来日し、姫路を経て一時東京の角筈で自給伝道に従事し、一八九五年九月から新潟県高田で伝道を開始した。しかし日本での伝道に失望し一旦帰国、一八九八年に再来日し、主に横須賀で日本陸海軍の軍人伝道に当たった。一九〇九年に日本に帰化して星野光代と改名した。

28－188　**寺崎**
江戸時代より寺崎村。一八八九（明治二二）年より、武射郡成東町の一部。現在の山武市寺崎付近。

28－189　**「近世哲学」**
『訳解近世哲学』（ぼうゑん（Bowen, Francis.）原著、有賀長雄訳解、弘道書院、一八八四年）のことか。

28－190　**ウードホール**　→　ジョージ・エドワード・ウッドハル（Woodhull, George Edward. 一八五九－一八九五）
アメリカ長老教会宣教師。一八八八（明治二一）年に来日し、堺日本基督教会などで宣教した。一八九五年一〇月一一日腸チフスのため逝去、三五歳であった。染井霊園に墓地がある。

28－191　米国公使ダン　→　エドウィン・ダン（Dun, Edwin. 一八四八－一九三一）
アメリカ、オハイオ州出身。明治期のお雇い外国人で外交官。獣医師として一八七三（明治六）年に開拓使の技術指導者として来日した。函館近郊の七重を経て札幌に赴任、牧羊場・牧牛場の設置を提案するなど、北海道における畜産業の発展に大きく貢献した。一八八三年に帰国。しかしアメリカ政府により北海道における業績が評価され、一八八四年、アメリカ公使館二等書記官として来日。一八八九年に参事官、一八九〇年に代理公使、一八九三年に公使に昇進した。一八九四年に日清戦争が勃発した際には和平交渉実現のために奔走したといわれる。一八九七年に公使を辞任した。

28－192　正則　→　正則中学校　→『資料集』第一六集、註26－90参照。

28－193　ワデル　→　ヒュー・ワデル（Wadell, Hugh. 一八四〇－一九〇一）
スコットランド一致長老教会宣教師。牧師の子としてアイルランドに生まれる。一八七四（明治七）年に来日。築地大学校で教え、その後芝西久保葺手町に私塾を開設。一八八六年東京一致神学校教授に就任。『普通学部一覧明治二十五年』には理事員の一人として名が見える。また、一八八六年頃から赤坂で学校事業にも着手した。一九〇〇年に帰国するまで二七年間日本での伝道に尽力した。

28－194　ライト大佐　→　エドワード・ライト（Wright, Edward. 一八六一－一九四七）
救世軍の大佐であり、初代日本救世軍司令官。イギリス、ロンドンに生まれ、救世軍に入隊する。一八九五（明治二八）年にウィリアム・ブース大将が日本開戦を計画した時志願し、同年九月四日に来日した。東京府京橋区新富町に本営を置き、一〇月には金六町（現在の中央区新橋）に小隊を設けた。『救世軍の歌』を編纂し、『ときのこゑ』を発刊している。翌年には横浜・八王子・岡山にも小隊を設けた。その頃、後に日本人初の救世軍士官になる山室軍平の入隊を許可している。しかし妻が重病になり、ライト自身も健康を害したので、万国本営の命令で一八九九年帰国した。なお生没年については、山本美紀「〈研究ノート〉日英救世軍の初期幻燈上映における「場」の影響―娯楽と社会教会の狭間で―」（『アジア・キリスト教・多元性』一五号、「アジア・キリスト教・多元性」研究会編刊、二〇一七年）によった。

28－195　磐子様の遺稿「起の花かたみ」→「越の花かたみ／越の花筐」
幸三は、磐子（註28－86参照）の父親安田退三（註28－147参照）より遺稿集「越の花かたみ／越の花筐」を一〇月二二日受け取っているが、この書籍については不明である。なお安田磐子死去の翌年一〇月、女子学院および高田女学校教員により磐子の伝記『阿蘇のけぶり』（滝口みか子編、三谷たみ子発行、一八九六年）が編纂・刊行された。そこには磐子が編んだ和歌集「越の花かたみ／越の花筐」が収録されている。その序文には、磐子が短歌を師事した鷹見爽鳩（註28－149参照）が、磐子から和歌集刊行のため題名の考案を依頼され名付けたと記していることから、生前には書名も決まり刊行の準備が進んでいたと思われる。

28－196　和田秀豊（わだ　しゅうほう　一八五四－一九四六）
牧師・社会事業家。大隅国肝属郡垂水郷（現在の鹿児島県垂水市）の薩摩藩士の家に生まれた。上京し慶応義塾、また海軍兵学校の中教授であった粟津高明の塾で学び、聖公会の宣教師チャニング・ウィリアムズより受洗。一八八四（明治一七）年に日本基督教会の正教師になり、芝教会・大阪基督教会などの牧師をつとめた。一八九一年に伝道と社会奉仕の団体である好善社に入社し、のに社長に就任した。一八九四年にはハンセン病患者の施設慰廃園を創立、のち東京同愛盲学校（現在のヘレン・ケラー学院）校長、結核療養所憩園理事長も兼務して、幅広い活動を行った。

28－197　山田寅之助（やまだ　とらのすけ　一八六一－一九二八）
日本メソジスト教会の牧師・青山学院の教師。現在の弘前市に生まれ、弘前教会でジョン・イングより受洗。横浜美会教会神学校を卒業後、弘前・黒石での伝道活動を経て日本メソジスト教会函館教会（現在の日本基督教団函館教会）の牧師を務め、松代・名古屋・仙台で牧師を務めた。一八八九年より青山学院神学部の教授になった。同じ年、メソジスト派の牧師で後に日本ホーリネス教会を創設した中田重治と共に、きよめ派の機関紙「焔の舌」を創刊した。

28－198　六本木の寄席
明治期から一九一四（大正三）年にかけて六本木で寄席を行っていた福井亭のことか。現在は建物も残らず詳細不

明であるが、この寄席があったために、寄席坂と呼びならわすようになったという坂が東京都港区六本木に残っている。

28－199　伯円　→　松林伯円（しょうりん　はくえん　一八三二－一九〇五）

講釈師。二世。本名若林義行。常陸国下館藩郡奉行手島助之進の四男として生まれる。のち彦根藩画師向谷源治の養子となるが、講釈に熱中のあまり離縁。伯母の夫である幕府作事奉行若林市左衛門に引き取られ、河内山宗春一味や鼠小僧を裁いた筒井伊賀守邸をはじめ武家屋敷に出入りして講釈を行う。伊東潮花の門で花郷、二代宝井馬琴の門で調林を名乗り、初代伯円の養子となって二代を襲名した。鼠小僧など白浪物を得意とし、「泥棒伯円」と称された。一八七三（明治六）年教部省に教導職が置かれて大講義を拝命、浅草寺境内で新聞の重要記事を読む新聞講談を始める。一八九二（明治二五）年には明治天皇への御前講演を行った。

28－200　北白川宮　→　北白川宮能久親王（きたしらかわのみや　よしひさしんのう　一八四八－一八九五）

北白川宮は、明治の初期に伏見宮邦家（ふしみのみや　くにいえ）親王の第一三王子智成親王が創設した宮家。二代能久親王は伏見宮邦家親王の第九王子で、初代智成親王の兄宮に当たる。仁孝天皇の猶子として一一歳で親王宣下し、上野の輪王寺に入寺得度し、公現入道親王と名乗る。戊辰戦争の時、幕府側に付いたため、維新後に蟄居・伏見宮家預りとなった。その後許されて伏見宮に復帰する。ドイツに留学し、一八七二（明治五）年に北白川宮を相続し、一八七七年に帰国した。帰国後は陸軍に勤務。陸軍中将にまで進んだ。日清戦争では近衛師団長として出征。戦後、台湾守備の命令を受け、台湾征討軍の指揮にあたったが、一八九五年一〇月二八日、現地で戦病死した。この時能久親王は病気により帰国すると報道され、日本到着後、陸軍大将への昇進が発表された後に薨去が発表された。

28－201　本郷第一病院

現在の東京大学医学部附属病院（東大病院）。一八七六（明治九）年、明治政府は東京医学校校舎・寄宿舎および病院を本郷本富士町旧加賀藩邸内に新営し移転した。翌年には、東京開成学校と東京医学校を合併し東京大学となり、病院は東京大学医学部附属病院と改称された。一八七八年には神田に附属病院を設立し、第二医院と称し、本

郷の医院を第一医院と称した。一八八六年、東京大学は帝国大学、医学部は医科大学となり、第一医院及び第二医院は、帝国大学医科大学附属第一医院および第二医院と改称され、後に帝国大学医科大学附属医院と改称された。なお二〇〇一（平成一三）年、分院は本院に統合された。

28－202　**福音の道**　→　福音之道

『福音之道　一名・基督教理提要』アーサル・ジェムス・メーソン（Mason, Arthur James.）著、高橋五郎訳、東京三一神学校、一八九四年。原書名は *The faith of the gospel: a manual of christian doctrine.*。

28－203　**福音の大原理**　→　福音之大原理

『福音之大原理』ビート（Beet, Joseph Agar.）著、マクネヤ（MacNair, Theodore Monroe.）・和泉弥六訳、和泉弥六、一八九五年。原書名は *Through Christ to God.*。

28－204　**啓蒙学校**　→『資料集』第一六集、註27－10参照。

28－205　**銀座亭**

あんぱんで有名な木村家は、一八六九（明治二）年、芝の日陰町に文英堂を創業し、一八七四年、銀座四丁目（現在の銀座店の向かい側）に木村家の店舗を完成させた。銀座四丁目の店舗の二階には、銀座亭と名づけられた寄席が設けられていた。

28－206　**ギゾー文明史**　→　欧羅巴文明史・仏蘭西文明史

『欧羅巴文明史』には、『同書』（全一四巻、ギゾー（Guizot, François Pierre Guillaume.）著、永峰秀樹訳、奎章閣、一八七四年）、『同書』（全一四冊、ギゾー原著、ヘンリー（Henry, Caleb Sprague.）訳述、永峰秀樹再訳、一八七六年、原書名は *The history of civilization.*）、『同書』（一冊、ギゾー著、永峰秀樹訳、奎章閣、一八七七年）などがある。また『仏蘭西文明史』二冊には、彼爾魏像氏原著、藤田喜三郎訳述、和楽堂蔵版、嶋林専二郎、一八七九年などがある。なお『仏蘭西文明史』は、原書を一八七三年に維廉波斯利登（英）が英訳したものを翻訳したもの。

28－207　**島田三郎**（しまだ　さぶろう　一八五二－一九二三）

衆議院議員・ジャーナリスト・官僚。幕府御家人鈴木知英の三男として江戸に生まれ、昌平校で漢学を修め、維新

後、ブラウン塾・沼津兵学校・大学南校・大蔵省附属英学校で学んだ。一八七四（明治七）年、『横浜毎日新聞』社員総代の島田豊寛（とよひろ）の養子となり、同紙の主筆となる。翌年、元老院書記官となり、のち文部権大書記官となるが、明治一四年の政変で大隈重信派として諭旨免官となり、『横浜毎日新聞』が改称した『東京横浜毎日新聞』に再び入社した。嚶鳴社幹部として立憲改進党の創立に参加、神奈川県会議長となった。一八八八年、沼間守一から『東京横浜毎日新聞』社長の座を受け継いだ。一八八六年、植村正久から夫婦で洗礼を受け一番町教会（現在の富士見町教会）に所属した。帝国議会開設後は、神奈川県第一区（横浜市）選出の衆議院議員として連続一四回当選し、副議長、議長を務めた。またキリスト教会の諸活動、廃娼運動・足尾鉱毒被害者救済運動・矯風事業・選挙権拡張運動を生涯にわたって支援した。

28－208　石本三十郎君病死の報

当館が所蔵する石本三十郎追悼会当日の「執行順序」（ID: 1201610301）は、『井深梶之助とその時代　第二巻』四〇六頁に掲載されている（解題（三）石本三十郎の死去についての項参照）。

28－209　井深先生説教

井深の当日の説教の内容については、『井深梶之助とその時代　第二巻』四〇三頁から四〇六頁参照。また「［井深梶之助説教講話草稿集］」（ID: 1201610301）に説教の草稿「故石本三十郎氏追悼会ニ臨ミテ」が収められている。

28－210　河野善一（こうの　ぜんいち　生没年未詳）

一八九四（明治二七）年青山学院に入学。卒業後、一八九七年七月から一八九八年まで青森美以教会（現在の青森教会）第五代牧師を務めた。のちに、神奈川教会第一〇代牧師も務めるが、『日本基督教団神奈川教会九十年史』（日本基督教団神奈川教会［編］刊、一九七一年）記載の「第十七回年会記録（一九〇〇年）」によると「該地の伝道に従事しつつある河野氏は病気の故を以て継続するを得ず」とあり、一九〇〇年頃には離任していることが分かる。明治三〇年代前半、メソジスト教会の機関誌『護教』（一八九一年創刊、本多庸一が編集人）に論説・雑録・教報等を寄せている。

28－211　ロバート・バーンズ（Burns, Robert. 一七五九－一七九六）
スコットランドの国民的詩人。スコットランド語を使った詩作で知られ、スコットランド民謡の収集、普及にもつとめた。バーンズが収集し自ら改作した数々のスコットランド民謡は、世界各地で親しまれており、日本でも「蛍の光」・「故郷の空」などが知られている。

28－212　佐々木祐継（ささき　すけつぐ　生没年未詳）
詳細は不明であるが、東京音楽学校に学び、のち渡米。シアトルの百貨店の店員として働く傍ら、趣味として音楽活動も続けた。彼に代わって妻佐々木八重子が編集した著書『讃美歌物語』（新教出版社、一九五四年）の中で、「桜岳」という人物によって佐々木は「楽天的声学者」と評されている。

28－213　下谷（したや）教会
下谷教会は、東京都台東区にある教会（現在の日本基督教団下谷教会）。一八七九（明治一一）年、築地明石町講義所において評議会が開かれ、牛込教会（現在の日本基督教団頌栄教会）会員四名が仲御徒町二丁目に日本家屋を購入し、牛込教会員が移転し日本メソジスト下谷教会が設立された。一九〇三年に台東区東上野三丁目に土地を購入し、のち会堂が建てられた。なお一八八八年、本郷駒込東片町に下谷教会付属の駒込講義所が設置され、翌年駒込教会が成立した。駒込教会は、一八九六年、西片町に移転した（現在の日本基督教団西片町教会）。

28－214　「幸福の生涯」
『幸福の生涯』ハンナ・ホイットヲール・スミス（Smith, Hannah Whitall.）著、山鹿旗之進訳、メソヂスト出版舎、一八九五年、原書名は *The Christian's secret of a happy life.*。

28－215　明治法律学校
一八八一（明治一四）年、人民の「権利自由」に枢要な法学の普及と、それを担うべき法曹の養成を目的として、岸本辰雄・宮城浩蔵・矢代操ら三人が東京府麹町区有楽町に開校した学校。一八八六年、現在地（神田駿河台）に移転し、一九〇三年に明治大学となる。

28－216　**代田村**（だいたむら）

現在の東京都世田谷区の北東部に存在した村で、現在の地名では大原・代田に該当する。一八七一（明治四）年に東京府に編入し、一八七四年、郡制実施に伴い荏原郡に属す。一八八九年の市制町村制施行に伴い、代田村ほか七村が合併し世田ヶ谷村が成立し、旧村の区域は大字となった。幸三が代田に通った時期には、すでに村名としては無かったことになる。

註　明治二八年

主要参考文献一覧

・『群馬県の地名』日本歴史地名大系一〇　平凡社、一九八七年
・『新潟県の地名』日本歴史地名大系一五　平凡社、一九八六年
・『長野県の地名』日本歴史地名大系二〇　平凡社、一九七九年
・『角川日本地名大辞典』一〇　群馬県「角川日本地名大辞典」編集委員会編、角川書店、一九八八年
・『角川日本地名大辞典』一三　東京都「角川日本地名大辞典」編集委員会編、角川書店、一九七八年
・『角川日本地名大辞典』一五　新潟県「角川日本地名大辞典」編集委員会編、角川書店、一九八九年
・『角川日本地名大辞典』二〇　長野県「角川日本地名大辞典」編集委員会編、角川書店、一九九〇年
・『現今日本名家列伝』日本力行会編刊、一九〇三年
・『日本キリスト教歴史大事典』日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、教文館、一九八八年
・『幕末明治海外渡航者総覧』第一～第三巻　手塚晃、国立教育会館編、柏書房、一九九二年
・『長老・改革教会来日宣教師事典』日本キリスト教史双書、中島耕二・辻直人・大西春樹共著、新教出版社、二〇〇三年
・『日本近現代人物履歴事典』第二版　秦郁彦編、東京大学出版会、二〇一三年
・『日本キリスト教歴史人名事典』鈴木範久監修、日本キリスト教歴史大事典編集委員会編、教文館、二〇二〇年
・『千葉市史』第三巻　現代編　千葉市史編纂委員会編、千葉市、一九七四年

・『千葉県の歴史』通史編　近現代一　千葉県史料研究財団編、千葉県、二〇〇二年
・『山武市郷土史料集一七　掛川藩から松尾藩へ―近代編―』　山武市教育委員会編刊、二〇一一年
・『山武市郷土史料集二三　掛川藩から松尾藩へ（補遺）―追加目録―』　山武市教育委員会編刊、二〇一七年
・『山武市郷土史料集二四　山武市松尾町広根　北田定男家文書調査報告書（1）　目録編』　山武市教育委員会編刊、二〇一八年
・『宣教百周年』　日本キリスト教団九十九里教会編刊、一九八一年
・『九十九里教会一二〇年史』　日本基督教団九十九里教会編著、キリスト新聞社、二〇〇三年
・『新潟県史』資料編一九　近代七　社会文化編　新潟県編刊、一九八三年
・『新潟県史』通史編六　近代一　新潟県編刊、一九八七年
・『新潟県史』通史編七　近代二　新潟県編刊、一九八八年
・『高田市史』　新潟県高田市教育会編刊、一九一四年
・『上越市史』通史編四　近世二　上越市史編さん委員会編、上越市刊、二〇〇四年
・『上越市史』通史編五　近代　上越市史編さん委員会編、上越市刊、二〇〇四年
・『新潟県教育百年史』明治編　新潟県教育百年史編さん委員会編、新潟県教育庁、一九七〇年
・『新潟県教育史夜話』頸城編　新潟県教育史研究会編、東京法令出版、一九七三年
・『ふるさとの想い出　四四　写真集〈明治 大正 昭和〉高田・直江津』　上越郷土研究会編、国書刊行会、一九七九年
・『新潟県キリスト教史』上巻　新潟県プロテスタント史研究会編、新潟日報事業社出版部、一九九三年

主要参考文献一覧

・『鉄道と新潟』新・新潟歴史双書五　新潟市編刊、二〇一〇年
・『長野県史』通史編　第七巻　近代一　長野県編、長野県史刊行会、一九八八年
・『長野市史』　長野市役所編刊、一九二五年
・『長野市誌』第五巻　歴史編　近代一　長野市誌編さん委員会編、長野市、一九九七年
・『長野市誌』第六巻　歴史編　近代二　長野市誌編さん委員会編、長野市、二〇〇〇年
・『上田市史』下　藤沢直枝著、上田市編、信濃毎日新聞社刊、一九四〇年
・『上田近代史』　上田市史編さん委員会編、上田市、一九七〇年
・『長野県町教会百年史』　塩入隆［著］、日本基督教団長野県町教会、一九九二年
・『回想の加藤勝弥　クリスチャン民権家の肖像』地方の宣教叢書一　本井康博編、キリスト新聞社、一九八一年
・『信州教育とキリスト教』地方の宣教叢書三　塩入隆著、キリスト新聞社編刊、一九八三年
・『風雪の日溜り 北陸のキリスト教』地方の宣教叢書四　大隅啓三著、キリスト新聞社、一九八三年
・『日本基督新栄教会六十年史』　山本秀煌著、藤原鉤次郎、一九三三年
・『百年の恵み―日本キリスト教団新栄教会史―』　日本基督教団新栄教会編刊、一九七三年
・『女子学院八十年史』　田村光編、女子学院、一九五一年
・『女子学院の歴史』　大濱徹也著、女子学院史編纂委員会編、女子学院、一九八五年
・『女たちの約束　M・T・ツルーと日本最初の看護婦学校』　亀山美知子著、人文書院、一九九〇年
・『大風のように生きて　日本最初の看護婦大関和物語』　亀山美知子著、ドメス出版、一九九二年

・『日本につくした宣教師たち　明治から昭和初期のアメリカ・バプテスト』　大島良雄著、ヨルダン社、一九九七年
・『本多庸一　信仰と生涯』　気賀健生著、青山学院『本多庸一』編集委員会編、教文館、二〇一二年
・『RCA伝道局報告書に見るフェリス』　フェリス女学院一五〇年史資料集　第三集　フェリス女学院一五〇年史編集委員会編、フェリス女学院、二〇一五年

2021年3月31日発行

明治学院歴史資料館資料集【第17集】

編集代表　長谷川　一
発行者　小暮　修也
発行所　明治学院歴史資料館
東京都港区白金台1-2-37
電話（03）5421-5170
印刷所　株式会社白峰社
東京都豊島区東池袋5-49-6
電話（03）3983-2312